

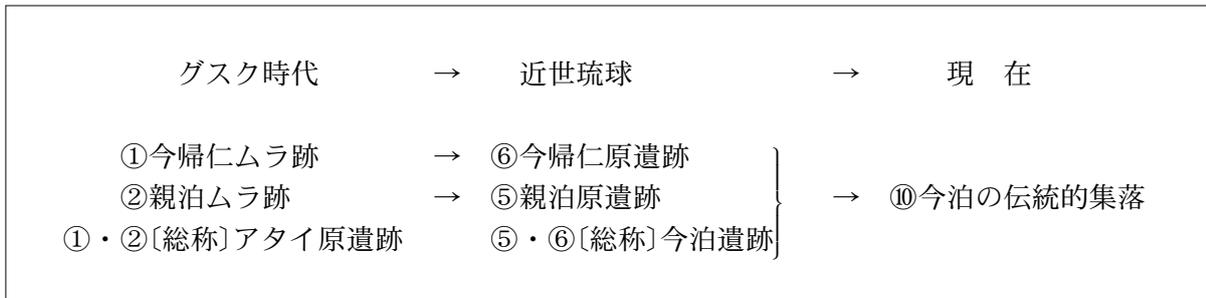
第V章 報 告

今帰仁城跡周辺遺跡は遺跡の性格、あるいは文化財種別などを考慮して本報告では下記の10の資産及びその他に分けて報告する。

①今帰仁ムラ跡、②親泊ムラ跡、③志慶真ムラ跡、④大川原遺跡、⑤親泊原遺跡（旧称アカン墓遺物散布地）、⑥今帰仁原遺跡、⑦今泊海岸陶磁器散布地、⑧石積遺構群、⑨道跡、⑩今泊の伝統的集落、⑪その他・拝所・墓ほか

これらの資産は、今帰仁城跡を中心に分布しており（第2図）、それぞれが不可分の関係で構成されるものである。資産価値の核心的な時代は今帰仁城が機能していたグスク時代の同時代遺跡にある。このため①～⑩を総称する名称として「今帰仁城跡周辺遺跡」を用いている。特に今帰仁城と集落は「城」とその城下の「集落」になることから不可分の関係にあることが予測される。なかでも①今帰仁ムラ跡・②親泊ムラ跡は最も中心的な集落と考えられ、周辺遺跡全体を語る上で根幹を成す遺跡となる。また①・②はそれぞれが接しているため区分にあたっては様々な検討が必要である。そこで両遺跡の接した地域を調査するとき、あるいは広く両遺跡から採集された遺物の採集地点を包括する遺跡名称として、総称「アタイ原遺跡」の名称を新しく設けた。名称設定に際しては、アタイ原に所在するという以外に、平成2年度に策定した『今帰仁城跡公園総合整備計画』（今帰仁村教育委員会1992）などに出てくる遺跡名称であること、重要な祭祀施設としてのアタイ原ウーニーの存在の3点を考察して設定している。

更にこの集落遺跡はグスク時代から近世琉球期に移動し、その近世琉球期を主体とする近世集落遺跡が地下に所在する。これが、⑤・⑥であるが、両者の総称として「今泊遺跡」を設定した。この地下の今泊遺跡と地上⑩の景観はそれぞれが連続した関係にあることは言うまでもない。以上の集落については下図のような歴史的な変遷をたどることになる。



第10図 今帰仁城の集落跡の変遷模式図

一方、各時代各集落を取りまく地理的な環境として、複数の遺跡が立地している。④は今帰仁グスクと同時代の集落遺跡で、場合によっては散村的な集落であったとされる親泊ムラ跡と一つのムラであったと捉えることが妥当かもしれない。また、今泊海岸陶磁器採集地は上流からの流れ込みとも考えることができるが、一方で海岸での活動や港の存在、あるいは沈没船等の発見の契機になる遺物散布事例と考えられ、今後注視していく必要がある。

時代不詳ではあるが、⑧石積遺構群はその遺跡名称や立地、石造建造物である点などから考えて今帰仁城跡とは深い関係のある遺構として捉えられるだろう。さらにこれら点在する遺跡群を結ぶ道跡はそれぞれ重要であるが、中でもメインの登城道と考えられる「ハンタ道」は個々の遺跡や事績を繋ぐ働きを持っており、点と点を結び遺跡群を面として捉えるのに重要な役割を担っている。これ以外にも今回は簡単に紹介するに留まった、⑪拝所・墓・その他について

は主として近世琉球から現代に受け継がれた民俗文化財であると考えられる。しかし、祭祀空間や各集落個々の家々が持つ意識、重要な歴史事象として語り継がれる内容はいずれも「今帰仁城」に収斂されており、今帰仁城跡と一体となった文化財ということが言える。このような事実は、遺跡の立地する土地やその周辺において語り継がれてきた伝説の中にも根付いており、例えば今帰仁城主あるいは、これに仕えた重臣「本部大原」に関わる事績を伝えるという石や土地が現在も点在する。しかし言うまでもなくその内容は超人的、超自然的であるため過去に起こった事績とは考えられない。このような遺跡について、近年歴史的な事象とは乖離しているものの、民間伝承としての伝説や史話として語り継がれる遺跡の意味で、「伝説遺跡」として捉え歴史的景観の一つとして捉える試みが見られる（伊平屋村2001）。今帰仁城跡及び周辺遺跡でいえば、今帰仁ムラ跡に所在する馬の蹄の残る石「マーヌピサ」、重臣本部大原が寝た石の跡「本部大原の寝た跡」、馬が抜けたことを伝える「仲原門中のガマ」があげられる。

また、今回紹介していないものとして重要な文化的な要素4点をあげておく。これは今回の遺跡調査からははずしたが、今後の課題としてあげておきたい。一点目は、その他にあげた、近世墓である。この墓の中には、調査によってグスク時代に遡る可能性もあると考えられ、詳細な調査が今後望まれる。二点目は畑である。図版32に紹介するように、親川（エーガー）の北側一帯はかつて美田地帯として整備されていた地域であり、微高地には畑が広がっていた。残念ながら現在は土地改良によって改変され、見ることはできない。しかし、地下にはその水田遺構が埋没している可能性があり、グスク時代に遡って耕地空間である畑や水田を発掘し把握することが課題としてあげられる。三点目は生活誌の復元的把握である。現集落は近年急速に近代化しており、かつて見られた伝統的な生活は失われてきた。4点目は今泊史の再構築で、これは各戸各門中を詳細に調べ、調査を行うことで個人史の束を総じて今帰仁城の時代に遡及していくことで民衆史を再構築する必要があると考えるからである。以上にあげた、今帰仁城跡を中心とした集落遺跡・道・石積遺構・拝所・祭祀・土地の記憶としての伝説遺跡・水系・港・墓・畑・伝統的生活誌などが重層的に重なり合い今帰仁城跡を中心とした歴史的空間として形成されている点が「今帰仁城跡周辺遺跡」の最大の特徴である。また、この史跡を取りまく景観は、本来は遺跡に限り復元されるべきではなく、その情景的景観、自然的景観も含めて総合的に、戦略的に取り込まれるべきである。この点では上述する①～⑩の資産区分は便宜的に遺跡あるいは埋蔵文化財としての価値を優先させて区分したものであり、地下に包含層や遺構を残さない、景観、自然、無形の民俗文化財も含めて重要な遺跡の要件であることを付言しておきたい。

《参考文献》

- 今帰仁村教育委員会（編） 1992年『今帰仁城跡公園基本構想・基本計画書』
伊平屋村教育委員会（編） 2001年『伊平屋村伝説遺跡・伊平屋村民話集』

第1節 今帰仁ムラ跡

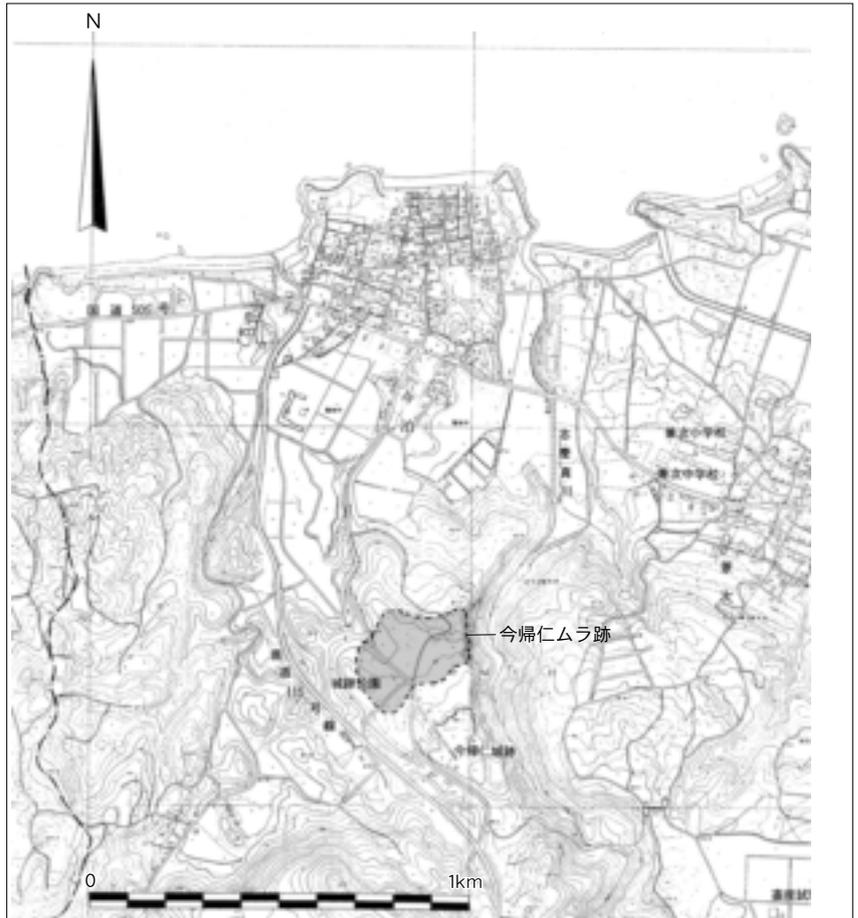
所在地：今帰仁村字今泊
5087番地・ほか
小字名：アタイ原
立地(標高)：台地縁辺部(約75m)
区分：遺跡
現状：畑・原野・拝所
保存状況：石積みが残り、一部
現在も拝所として機能している火之神の祠が残る。遺跡全体の保存状態は良好。

今帰仁城跡の北側緩斜面に立地する集落遺跡である。現在の字今泊の故地で、城下町的な集落として展開していたことが伝承されている。面積は広く約4haほどが今帰仁ムラ跡に比定されると考えられ、その中心的地域では石積み遺構が確認され、「今帰仁ノロ殿内」「阿応理屋恵(オーレ)殿内」「供のかねノロ殿内」の各「火之神の祠」などの祠(拝所)が点在している。これらの現存する火之神の祠は、それぞれの祠の名前の各ノロ殿内の故地と考えられている。現地形や現道、石積みの有無、調査実績などを考慮して概略的に西区、東区、南区の3つの地区に分けることができる。

西区は県道115号線に分断される集落遺跡の西側一帯の地域である。東は県道115号線、南は今帰仁城跡の外郭の防御ラインまで、西側はハラクブの崖斜面を本地区の範囲とする。なお、北側端は不明だが北端の丘陵の頂部や裾では遺物の採集などが無く岩盤が露頭するので、地区の北側に開口するアタイ原のガマまでが範囲と考えられる。現在当該地域は屋敷地1から屋敷地5までの調査が行われており、この他にも屋敷地4に隣接した平坦地(4797番地)がある。ここは未調査であるが、屋敷として利用可能と考えられる。

東区は県道115号線から東側の地域で、石積み遺構が地表面に観察される地域である。今帰仁ムラ跡でも最も核心的な地域となると考えられ、これまでも多くの遺物が表面採集されている。拝所旧道に隣接する地域で「阿応理屋恵ノロ殿内の火の神の祠」が立地している。石積み囲いが16区画あり、1～16区に区画される。また、これより北東側にも石積み区画や平坦地が幾つか確認できるがジャングルとなっており詳細は不詳である。

南区は旧道から東南側に位置する地域で、今帰仁ノロ火之神、供のかねノロ火之神の祠が立地する。更に東南には今帰仁城跡の外郭防御ラインが、東は志慶真川の崖斜面が広がり、西側は西区、東区が接している。この地域一帯は特に樹木が鬱そうとしており、踏査が困難であるため、目視として幾つかの平坦地を確認するに留まる。指定地にも隣接することから過度の伐採等は行っていない。今後詳細調査の望まれる地域である。



第11図 今帰仁ムラ跡位置図

1. 表採資料

今帰仁城跡周辺地域、特に今帰仁ムラ跡の一带では、これまで今帰仁村教育委員会によって継続的に調査が行われている。ここで紹介する遺物は、主に教育委員会に持ち込まれた表面採集の遺物である。採集者は教育委員会の担当者や、地元の方からの持ち込みなどがある。採集された年度や地点もバラバラで、地域的には後述する親泊ムラ跡で採集された遺物も含む可能性がある。この点では、アタイ原遺跡採集資料とするべきと考えるが、概ね今帰仁ムラとして比定する4haの範囲で採集された資料なので、本節で紹介する。

(1) 採集資料の概要

第Ⅲ章第2節で紹介したように、今帰仁城の北側一帯のアタイ原では、当該地域を踏査した島袋源一郎によって1919年に「陶器石臼等の古器物を発掘すること多し」として遺物が散布し採集が容易であることが紹介されている。教育委員会でも遺跡分布調査や、不時発見の持ち込みとして遺物が持ち込まれる例が少なからずあった。

このため、簡単なメモを残した採集遺物が遺物収納ケースに袋詰めされ、採集時そのままの状態で長く保管されてきた。そこで、これまで実施してきた今帰仁ムラ跡の調査について大系的に報告するにあたって、これまで採集されてきた遺物についても、表採遺物として扱い紹介する。資料の採集年で最も古い記載は1978年で、以後82年、86年に特に多く採集されている。2003年以後は、現在教育委員会に在籍する担当者が畑の開墾や、季節や時期を見て踏査を実施している。また、記載に年月が記されていない物も多く、これらについては既に詳細を知ることが困難である。80年代の採集品には畑の耕作主もしくは地主名が記されている資料があるので、追調査によっては採集地点を絞り込むことも可能であると考えられる。

(2) 人工遺物

1) 陶磁器

1. **土器** 第12図-1は貝塚時代後期の土器で、いわゆるくびれ平底土器の底部資料である。
2. **瓦質土器** 第12図-2は瓦質土器の頸胴部資料で、器内外面とも灰白色で混和材に粗い石英粒を混ぜる、在地製と考えられる。
3. **青磁** 第12図-3は胴部小片資料だが、内面に劃花文を描く。劃花文碗胴部資料。第12図-4は青磁無文外反碗で、口縁部で端反りとなる（A窯系）。第12図-5も無文外反碗の口縁部小片（B窯系）。第12図-6は雷文帯碗a。口縁部の雷文が篋彫りによって描かれる。第12図-7は細蓮弁文碗cで、蓮弁文を雑に描き、弁頭が省略されている。第12図-8・9は無文直口碗で、8は口縁直下に圈線が廻りA窯系、9は粗造で薄釉を施釉するB窯系。第12図-10・11、第13図-12は体部無文の碗底部資料で、施釉の厚さや素地、あるいは高台の釉の施釉・釉剥ぎ方法が異なっている。10については、雷文帯碗や蓮弁文碗の資料の可能性を考慮する。12・13は細蓮弁文碗の底部資料で、前者が細蓮弁文碗a、後者が同bに分類される。14・15は体部無文の底部資料で、14は施釉は高台脇まで、焼成不良で素地は赤褐色になる。15は見込を蛇の目状釉剥ぎする標品で円の中に「天」の字と推定される字をスタンプする資料で、外面の施釉は畳付脇までを施釉し内底は露胎となる。

第13図-16～25は青磁皿。16は同安窯系の青磁櫛描文皿で、小片のためか見込に櫛描は見られない。17・18は蓮弁口折皿で無鎬の蓮弁口折皿dに近いが、17は二本線の蓮弁が描かれるタイプで、18は鏝縁の折れが強く屈曲するタイプの資料である。19・20は腰折皿で19は図上復

元することのできる破片資料で、外面が無文となる腰折皿d。20も同じ体部無文と考えられる資料で見込に印花文が押印される資料。いずれも釉を厚く施釉するタイプである。21は内面に蓮弁文を描く資料で、腰折皿aに近い資料と考えられる。22は内外面に草花文を描く腰折皿bの資料。23は口縁部を刻み稜花とする資料で腰折皿cの資料。24も腰折皿の資料で、見込は印花文を押印後釉剥し露胎とする。25は青磁皿の底部資料で外面に細蓮弁文を描く資料で、今帰仁城跡主郭の出土資料を参考にすると菊花皿となる資料と考えられる。

26は小片だが、青磁の置物等の底部資料と考えられる。内面は型取りしたとみられ粗造な仕上げとなる。27は粗製の青磁小皿もしくは小碗の資料で口縁部がハの字形に開き、外面の轆轤痕が明瞭に残る点に特徴がある。見込は釉剥ぎされ露胎となる。同様に外面轆轤痕が明瞭な第14図-28も外側に大きく開く口縁部の資料で同様の資料と考えられる。29・30は青磁酒会壺の底部で同一地点から採集された2個体と考えられる資料である。当該資料は仲村渠智氏によれば、地元の方が阿応理屋恵ノ口殿内火の神の祠の裏側でミニユンボで耕作している時に不時発見されたものとされる。29は特に割れ口も新しく、破片も大型であることから推察すると、もともと包含層や遺構に埋蔵されていたと考えられる。類似の酒会壺片が採集された事例として、久米島伊敷索城の事例が知られており比較検討する事例として興味深い(仲村1994)。

4. 白磁 第14図-31~37は白磁で、31は白磁外反碗、素地は灰白色で釉はやや青みを帯びた乳白色を呈する。32は粗製の浅碗で直口碗の資料である。33は直口碗の底部資料と考えられる資料である。34は白磁皿で外反皿の底部資料である。35は筒形の杯で胴部に隆帯文が廻る。34・35は森田分類E群と考えられ

第5表 表採遺物一覧表

種別	分類	器種・分類	個体数	百分率	百分率	百分率	
陶磁器	在地	土器	鍋・鉢・壺・等	3	2.42%	2.42%	3.23%
		カムイヤキ	壺・鉢・甕・等				
		瓦質土器	蓋・不明	1	0.81%	0.81%	
		沖縄産陶器	壺	4			
	中国	青磁	碗	40	32.26%	53.23%	92.74%
			皿	20	16.13%		
			盤	2	1.61%		
			杯	2	1.61%		
			香炉				
			瓶				
		白磁	器台				
			酒会壺(身・蓋)	2	1.61%		
			置物				
			碗	4	3.23%		
	青花	皿	3	2.42%	25.00%		
		杯	5	4.03%			
		燈明皿					
		壺	1	0.81%			
		瓶					
		元・元様式	2	1.61%			
		碗	14	11.29%			
		皿	12	9.68%			
		大皿					
		杯・小杯	3	2.42%			
	青白磁	壺			1.61%		
瓶							
鉢							
合子(身・蓋)							
天目		碗					
不明焼き締め陶器		壺					
白濁釉陶器		茶入れ					
褐釉陶器		急須(身・蓋)					
		小型壺					
		大型壺	2	1.61%			
	長胴壺						
	播り鉢						
	深鉢						
五彩・赤絵	碗	2	1.61%	1.61%			
瑠璃釉	碗			0.00%			
	瓶	1	0.81%	0.81%			
	皿						
	壺						
	瓶						
	不明						
タイ	土器	蓋					
	鉄絵	合子(身・蓋)	1	0.81%	0.81%		
	褐釉陶器	大型壺	2	1.61%	1.61%		
		中型壺					
		小型壺					
	瓶						
ベトナム	青磁	碗	1	0.81%	0.81%		
	青磁	碗					
	青花	瓶・その他					
	高麗	青磁	碗				
日本本土	不明	不明陶磁					
	備前焼締め	播り鉢	1	0.81%	0.81%		
	肥前磁器	碗・その他					
近代陶磁器	碗・その他	4					
陶磁器	総計		124	100.00%			
玉類	勾玉						
	丸玉・小玉						
煙管	石製加工(雁首)						
	銅製(雁首・吸い口)						
遊具	I類						
	II類						
銭貨	中国銭(有文)		2	100.00%			
	無文銭						
金属製品	寛永通寶						
	鉄製品	釘					
石製品	刀子						
	鎌						
	鉄						
	釣り針						
	その他・不明						
	推定・近現代						
	銅製品	座金・飾り金物等					
	鋳等						
	管・装飾品						
	その他・不明						
石製品	石斧		3	75.00%			
	砥石		1	25.00%			
	硯						
	錘						
貝製品	不明						
	漁網錘?						
土製品	土彈ほか						
	骨ヘラ						
骨製品	骨ヘラ						
	歯ブラシ						
陶磁器以外の人工遺物			6				

※網掛け部分は12~16世紀以外の近世以降の遺物。
※遺物の比率については中世のものだけを対象としている。

る。36は森田分類D群で、直立する口縁部の小皿（小杯）資料。37は白磁の壺形資料で、素地は灰白色で釉は薄く、やや青みのある発色、体内外面とも轆轤痕を明瞭に残す。

5. **青白磁** 第14図-38は青白磁の梅瓶の腰部あたりの資料で、圏線が二本廻り区画する文様をつくり、胴部の文様は小片のため全体は不明だが渦巻き文もしくは唐草文が描かれるものと考えられる。

6. **青花** 第15図-39・40は元青花の胴部小片で、酒会壺等の破片資料と考えられる。唐草文等の文様の葉と蔓の部分を見ることが出来る資料である。41は玉壺春瓶の胴部資料で、牡丹が大きく描かれる。胴部上半の資料と考えられ、胴継ぎ部分から割れている。42・43は直口碗 a（主郭分類Ⅲ類）で、42は口縁部資料で口縁帯に波濤文を廻らせ、胴部にはアラベスク文を配する。43は見込みに蓮花文を描く資料。44は見込みには人物図を描き、外底には「長命富貴」の字款が書かれる直口碗 d（主郭分類Ⅵ類）の底部資料である。45は主郭分類Ⅶ類の碗底部資料で、胴部には鳳凰文を描き、見込には花文を配する。46は外反皿 a の口縁部小片で、胴部に唐草文を描く。47は外反皿だが、底径は広く大皿に類する資料である。48は碁筭底皿 a の資料。49は小杯の底部資料。50は筒形の直口杯 a で胴部中央に隆帯文を廻らせる資料。

7. **褐釉陶器** 第16図-51は褐釉陶器の底部資料である。

8. **タイ陶磁** 第16図-52～54はタイ産の陶磁器で、52は褐釉陶器大型壺 a、53は褐釉陶器大型壺 b、54は褐釉陶器大型壺の底部資料である。55は鉄絵合子の蓋の小片資料である。

9. **備前焼陶器** 第16図-56は備前の焼き締め陶器で、直立する口縁部下内面に摺り目を入れる播鉢の口縁部小片と考えられる。

10. **赤絵** 第16図-57は赤絵もしくは色絵の底部資料で産地は不詳である。本土産の近世期の資料とも考えられるが紹介する。高台外面に二本圏線を廻らせ、腰部にも一条認められるが、胴上半が欠損するため主文様等については不明である。

2) 石器

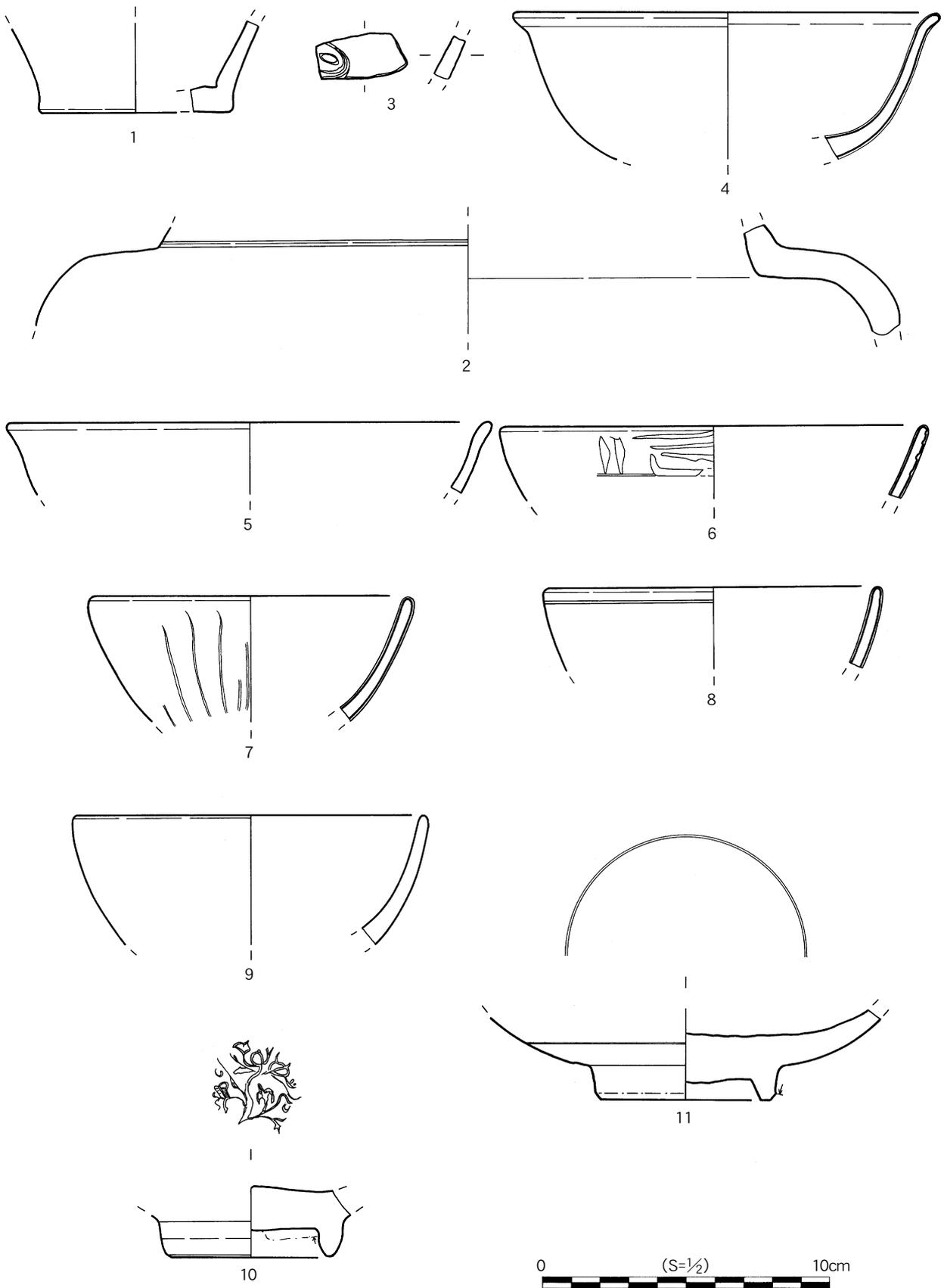
第16図-58は方柱状の砥石と考えられる資料の小破片資料である。59は方形の硯等の製品の破損資料と考えられ、硯であれば、硯の底面と推測する。

3) 銭貨

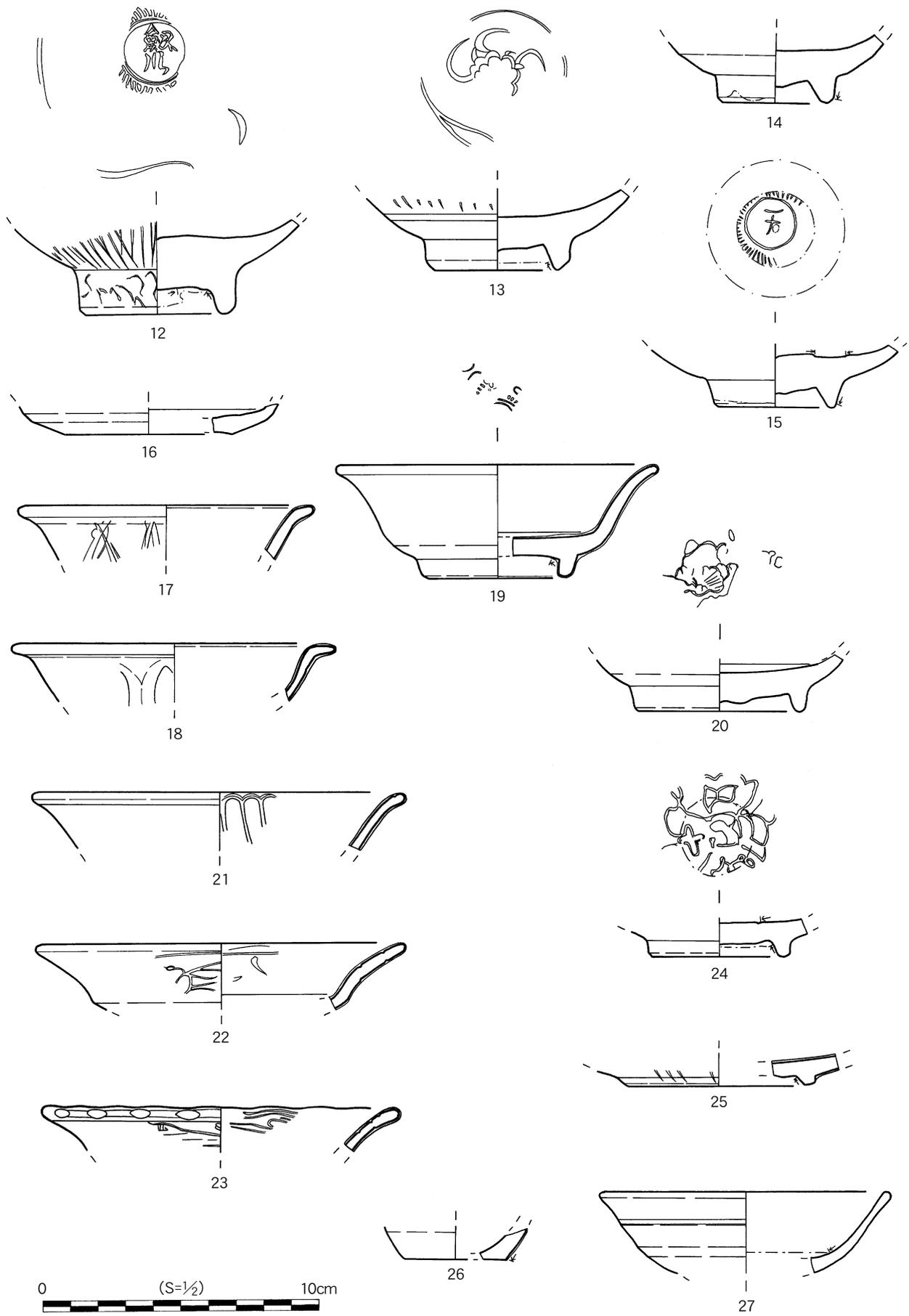
第16図-60は嘉熙重寶（南宋, 1237）当三銭で、61は慶元通寶（南宋, 1195）折二銭で背文字に「二」、62は寛永通寶（銅銭寛永通寶 3 期新寛永1697年～）背文字があるものの腐食が著しく判然としないが「元」と読めるものと推測する。

(3) 自然遺物

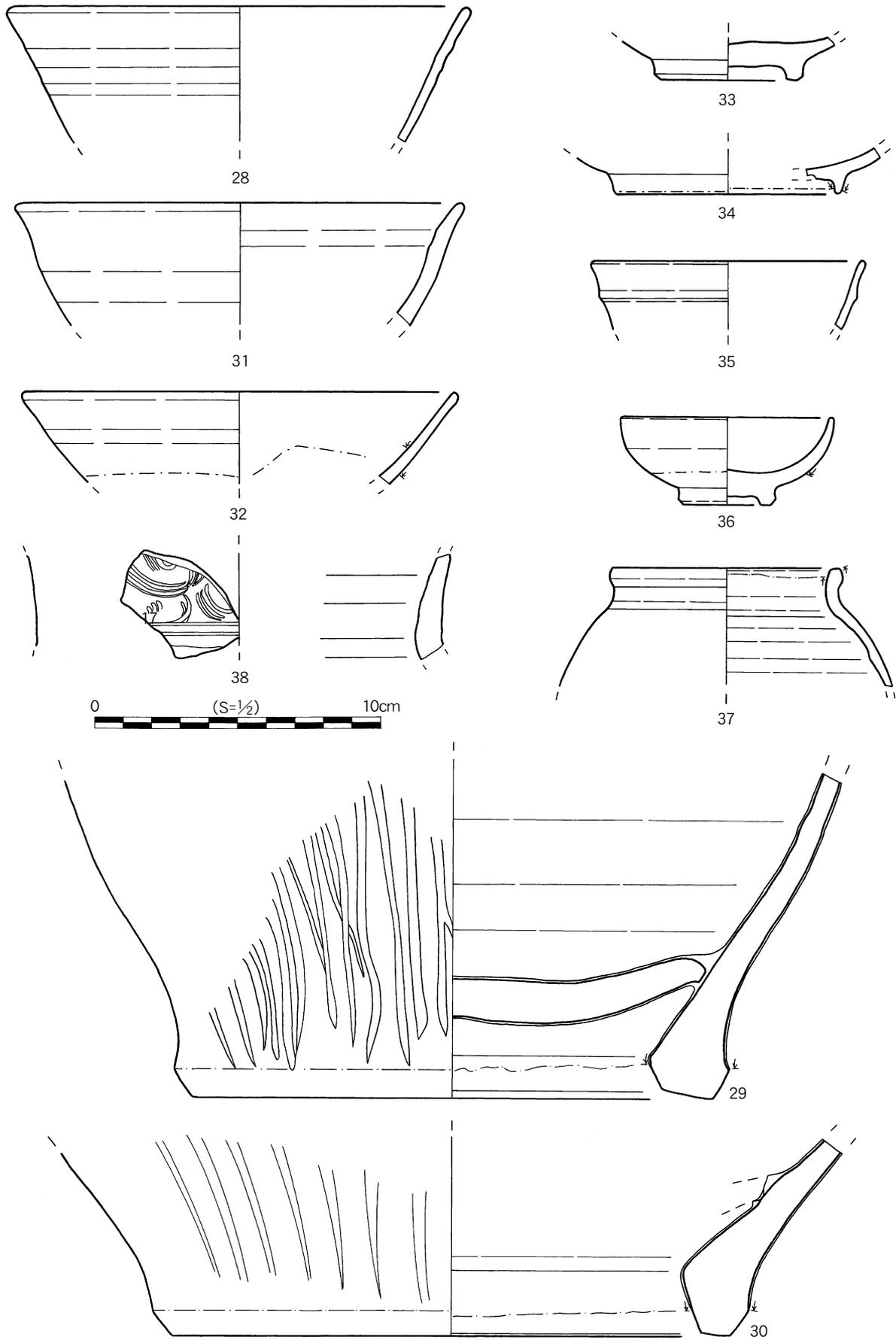
脊椎動物骨、貝類遺体などの採集もあるが、表採資料であることから報告を割愛する。



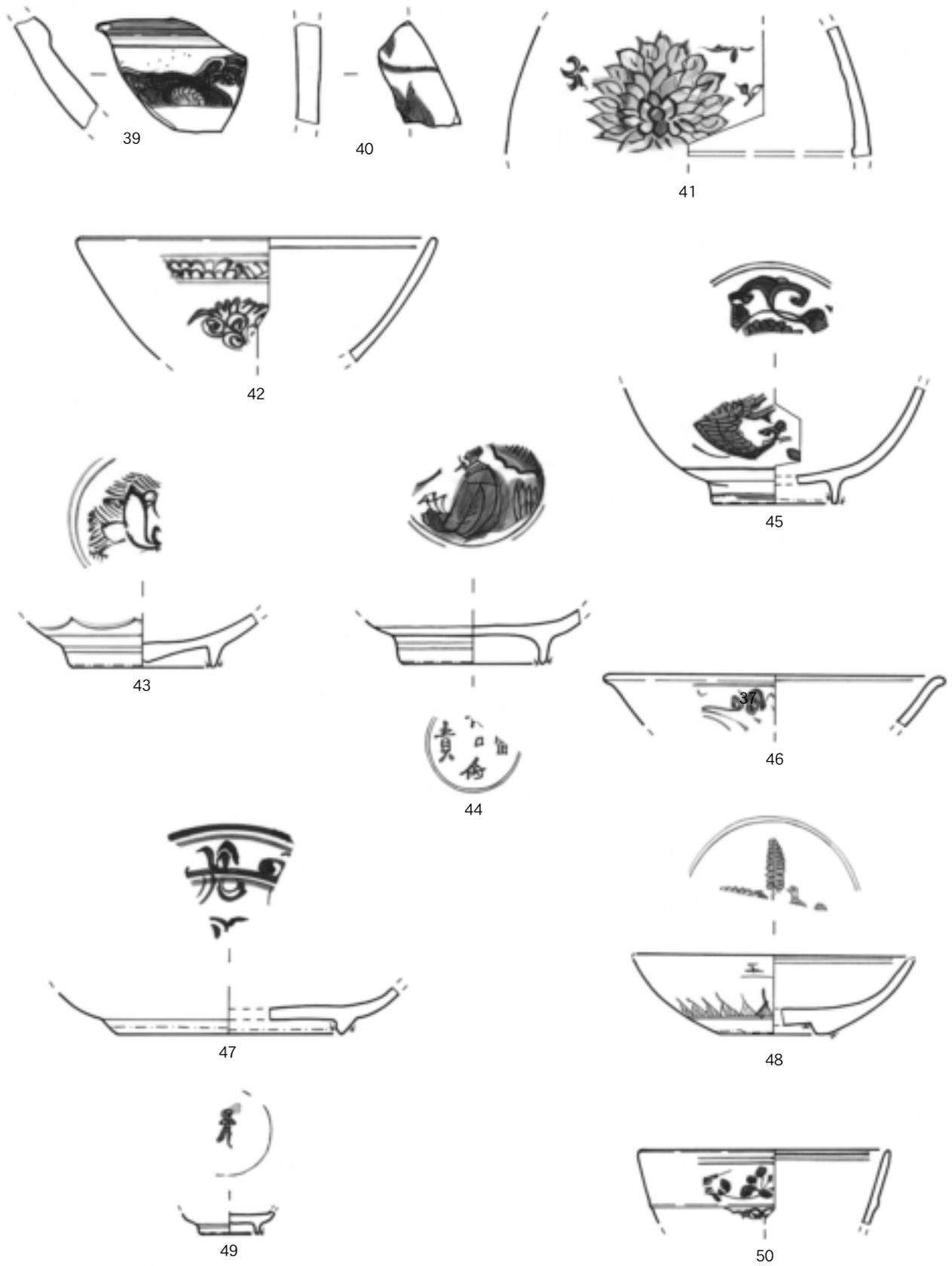
第12図 表採資料(1)



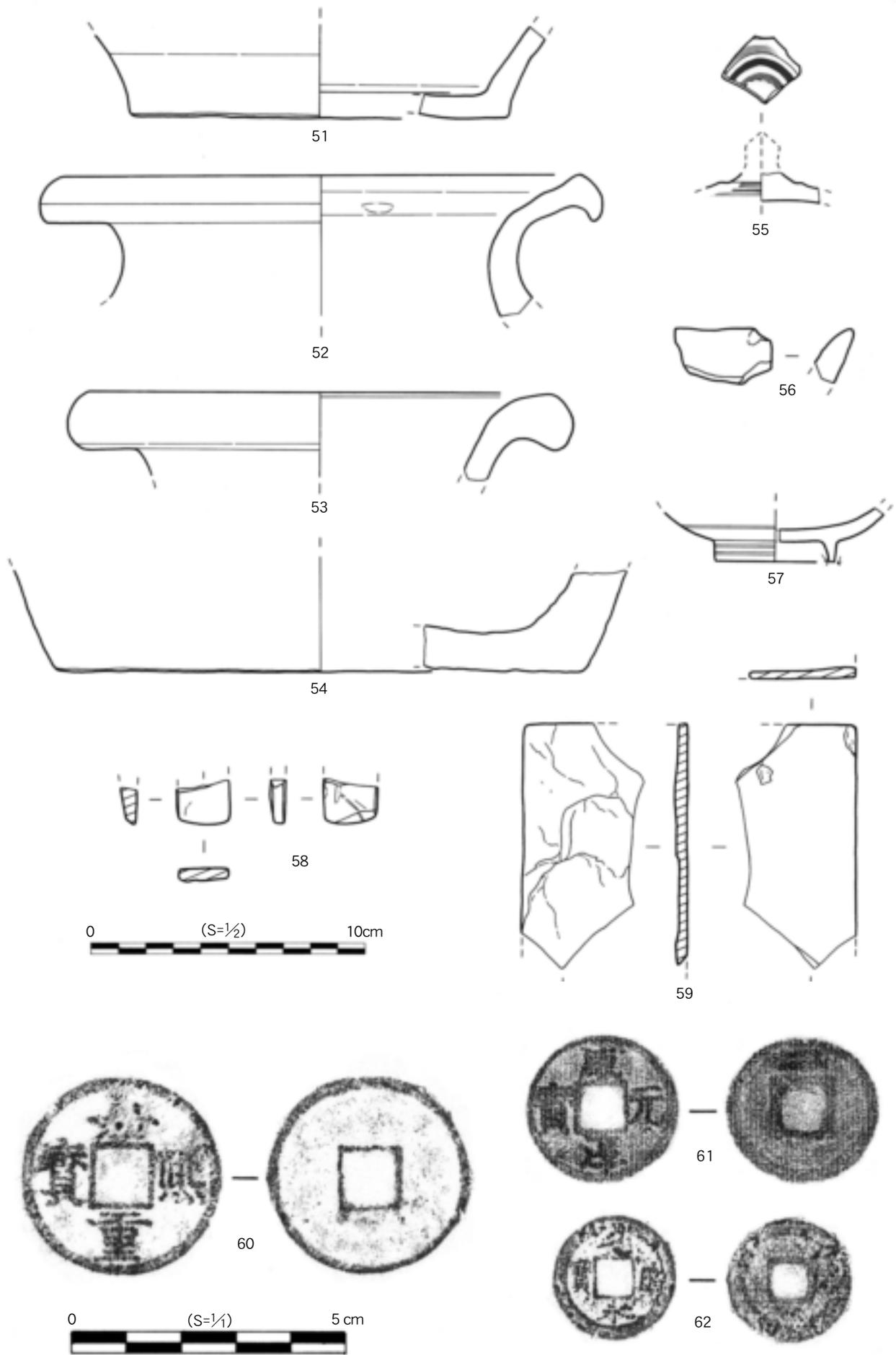
第13図 表採資料(2)



第14図 表採資料(3)



第15図 表採資料(4)



第16図 表採資料(5)

2. 今帰仁ムラ跡西区

西区は県道115号線に分断される集落遺跡の西側一帯の地域である。西区の四囲を概括すると、東は県道115号線、南を今帰仁城跡の外郭の防御ラインまで、西はハラクブの崖斜面、北側端は不明だが北端の丘陵の頂部や裾では遺物の採集などが無く、岩盤が露頭するので、地区の北側に開口するアタイ原のガマまでが範囲と考えられる。

調査区は調査着手以前にⅠ～Ⅴの5つの地区設定を行っている（東区の調査区はⅠ～Ⅴのローマ数字で表記）。なお、当該地域はほとんどの平坦面の調査が完了しており、その成果から5ないし6の屋敷地が埋まっていることが確認できた。このため、報告では遺跡の実態に即し屋敷地1～5の屋敷地区毎に紹介していく。この他にも屋敷地4と道路を挟んだ南側に平坦地（4797番地）がある。当該地域は史跡指定地であるが、外壁防御ラインの外側に位置することから暫定的ではあるが、今帰仁ムラ跡西区に含めて今後調査されるべき地域としてあげておく。西区に所在する拝所として、アタイ原のガマ、サカンケーの拝所がある。当該地区の現況は駐車場下に埋没する形で保存処置が図られているが、今帰仁村グスク交流センターの工事などによって少なからぬ遺構への影響がある地点もある。しかし、全体的には便益施設下に遺跡全体が埋まっており、今後指定される際には当該地域を含めて遺跡地域とするべきである。



第17図 今帰仁ムラ跡西区 (S=1/2,000)

①西区 屋敷地 1

(Ⅱ区)の調査概要

屋敷地 1 はⅡ区を中心とした地域である。Ⅱ区は今泊5076・5102・5015・5052 (1,876㎡) と5071・5072・5073 (791㎡) からなり、前者を a、後者を b に小分割される。これまで昭和59年度の第 1 次調査によって試掘調査が行われ、平成15年の 2 次調査及び平成16～17年の10次調査によって本調査が行われている。試掘調査及び2次調査は既に報告書が刊行されているので参照にされたい(今帰仁村教委1986・今帰仁村教委2005)。

当該地区の遺構の分布中心は、グリッドで示すとK-15・16、L-15・16グリッドにあると想定される。遺跡全体の約75%が発掘されてお

り、残りは未調査のまま埋め戻し駐車場等の施設下に現在も保存されている。未調査の部分の中にはL-17・M-17など、おそらく屋敷地 1 の中でも比較的遺構の分布密度が高い部分と考えられる地域も含まれている。

今回は未報告分である、10次調査分の調査報告を行う。



第18図 屋敷地 1 位置図

(1) 層序

遺跡の層序を理解する上でL-18グリッド内側東西南北それぞれの壁面を図化した。それぞれ東西南北壁と略して詳述する。

I 層 A：客土層。Hue2～5YR赤褐色4/6。既存施設造成に伴う堆積土。このため既存施設周辺で認められる。遺物は含まれない。(ナンバーリング I 層)

II 層：Hue7.5YR暗褐色3/3～3/4。約5～20cmの堆積。耕作土。赤土がブロック状に含まれ、炭を含む土層。(ナンバーリング I 層)

III 層：Hue7.5YR黒褐色3/2。約10～45cmの堆積層で、グスク時代の遺物包含層と思われる。炭化物を僅かに含み、粘性がほとんど無い土層。(ナンバーリング II 層)

地山：所々岩盤が露頭し、遺物を全く含まない自然堆積層で、粘板岩を含む堆積層と、含まず粘性のある締まった土層の層相の異なる地山からなる。

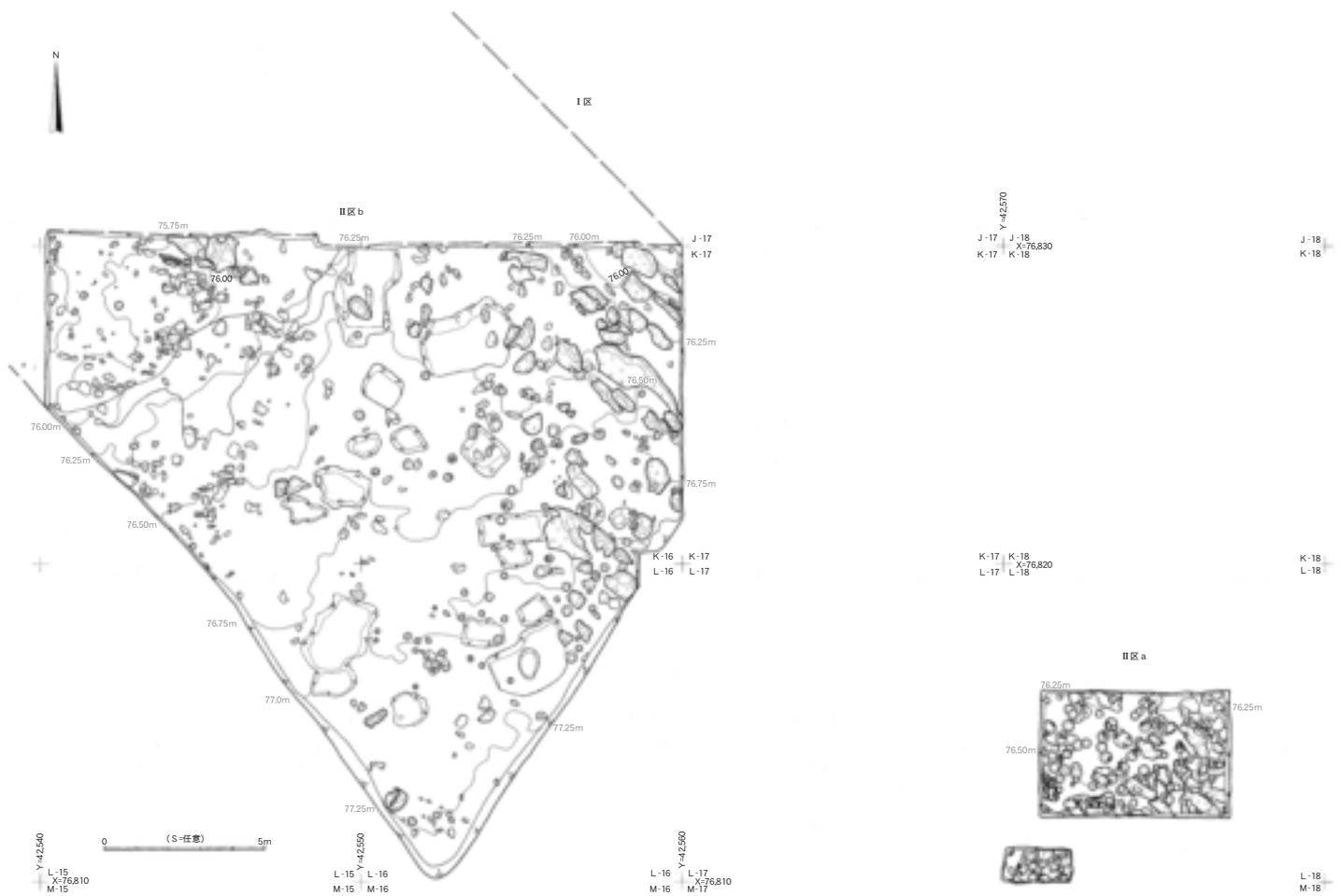
①Hue10YR黄褐色5/4。やや粘性があり粘板岩を多く含む固く締まった土層。地山。

②Hue5BG青灰色5/4。古期石灰岩の岩盤。地山。

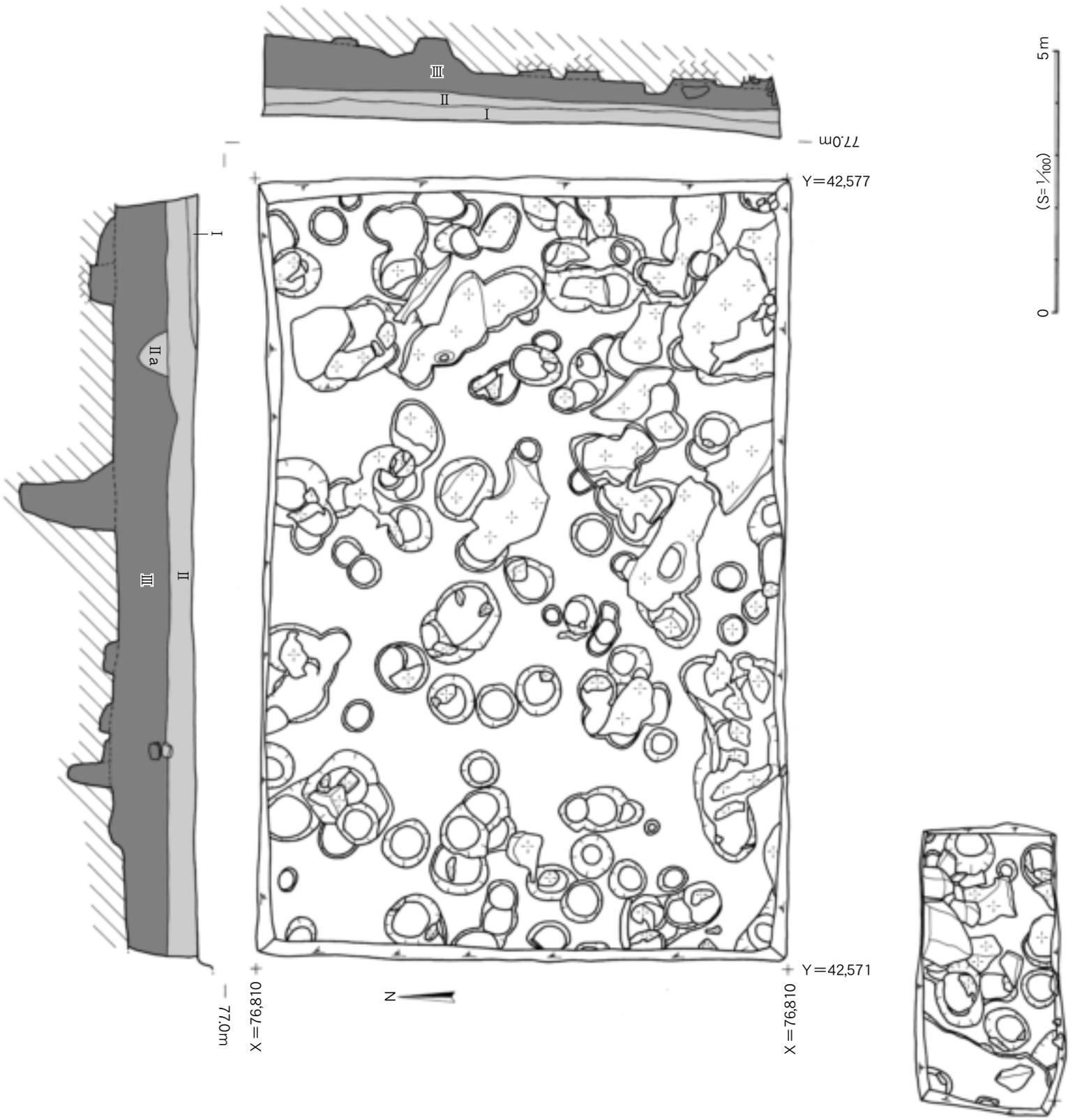
(2) 遺構

10次調査で検出された遺構は柱穴と想定されるピットである。調査面積が狭小であったことから建物跡の推定を行うことはできなかった。遺構は地山面に確認できた柱穴である。

種類	遺構数
柱穴	128基
土坑?	1基
柱穴?	40基
柱穴(要検討)	40基
落ち込み	5基



第19図 屋敷地1 遺構平面図



第20図 第10次調査遺構平面・層序詳細図

(3) 人工遺物

1) 陶磁器

1. 土器 第21図-1はグスク土器の底部資料である。器種は不明。今帰仁城跡で最も一般的な胎土である、粘板岩を混和材として利用する薄手の土器。

2. 青磁 第21図-2・3は鎬蓮弁文碗 a (大宰府分類Ⅱ類) で、2は鎬が明瞭なタイプで、3は篋彫りの資料である。第21図-4は無鎬蓮弁文碗 a で直口口縁のタイプに篋彫りで幅の広い蓮弁文を描く。第21図-5・6は雷文帯碗で、5は篋彫りによって雷文を描くタイプ、6はスタンプによって口縁帯に雷文を配し、内面には人物図を描く資料である。第21図-7は直口する口縁部に細い蓮弁を配する資料で、弁先は剣先状に鋭角となる。第21図-8・9は細蓮弁文碗で8は細蓮弁文碗 a、9は細蓮弁文碗 c のタイプとなる。第21図-10は波状文碗で口縁帯に波状文を施す資料である。第21図-11~14は無文外反碗で、11はやや薄手で端反するタイプで古式の様相をもつ。12・13は厚い釉を施釉し、14は比較的薄く施釉、いずれの資料とも釉の発色は悪い。第21図-15は無文の直口口縁碗である。釉の発色は悪く、焼成も不良。第21図-16は青緑釉無文碗でいわゆる泉州窯系と呼称される群に属するものである。素地に黒色粒を多く混入し、釉は口縁下数cmまで掛かるのみで胴下半は露胎となる。口径の広い端反碗とな

第6表 屋敷地1出土遺物一覧表

種別	分類	器種・分類		屋敷地1		計	百分率		
				(2次)	(10次)				
在 地	土器	鍋・鉢・壺・等		1	1	2	0.18%	0.54%	
	カムイヤキ	壺・鉢・甕・等		1	3	4	0.36%	0.36%	
	瓦質土器	蓋・不明				0	0.00%	0.00%	
	沖繩産陶器	壺	有り	有り		0			
	青磁	碗		494	112	606	54.40%		
中 国		皿		129	40	169	15.17%		
		盤		22	7	29	2.60%		
		杯		5	1	6	0.54%		
		香炉		2	2	4	0.36%		
		瓶			1	1	0.09%		
		器台				0	0.00%		
		酒会壺(身・蓋)		1	1	2	0.18%		
		遺物				0	0.00%		
		白磁	碗		21	8	29	2.60%	
			皿		52	11	63	5.66%	
			杯		7		7	0.63%	
			燈明皿		1	1	2	0.18%	
			壺				0	0.00%	
			瓶			1	1	0.09%	
		青花	元・元様式				0	0.00%	
			碗		60	29	89	7.99%	
			皿		38	8	46	4.13%	
			大皿		1		1	0.09%	
			杯・小杯		3	1	4	0.36%	
			壺				0	0.00%	
			瓶		1	1	2	0.18%	
			鉢				0	0.00%	
			水注		1		1	0.09%	
			合子(身・蓋)		2		2	0.18%	
		青白磁	瓶		1		1	0.09%	
			合子				0	0.00%	
			天目		1		1	0.09%	
	不明焼き締め陶器	碗				0	0.00%		
	白濁釉陶器	壺				0	0.00%		
	褐釉陶器	茶入れ		1		1	0.09%		
		急須(身・蓋)				0	0.00%		
		小型壺		4	4	8	0.72%		
		大型壺		10	2	12	1.08%		
		長胴壺		1		1	0.09%		
		掃り鉢				0	0.00%		
		深鉢				0	0.00%		
		花鉢・ほか		1		1	0.09%		
	五彩・赤絵	碗			1	1	0.09%	0.09%	
	瑠璃釉	碗		1	1	2	0.18%	0.18%	
		瓶				0	0.00%		
	翡翠釉	皿			1	1	0.09%		
		壺				0	0.00%		
		瓶				0	0.00%		
	緑釉	不明				0	0.00%	0.00%	
	三彩	その他・不明				0	0.00%		
		水注		1		1	0.09%	0.09%	
	土器	蓋		2	1	3	0.27%	0.27%	
		壺				0	0.00%		
	鉄絵	合子(身・蓋)				0	0.00%	0.00%	
	褐釉陶器	大型壺		3		3	0.27%		
		中型壺		2	2	4	0.36%		
		小型壺				0	0.00%		
		瓶				0	0.00%		
	青磁					0	0.00%	0.00%	
	白磁	碗		1	1	2	0.18%	0.18%	
	青磁	碗				0	0.00%	0.00%	
	青花	瓶・その他				0	0.00%	0.00%	
	高麗	青磁			1	1	0.09%	0.09%	
	不明	不明陶磁				0	0.00%	0.00%	
	日本本土	備前焼締め			1	1	0.09%	0.09%	
		肥前磁器				0	0.00%	0.00%	
		近代陶磁器			有り	0			
	陶磁器	総計		871	243	1,114			
	玉類	勾玉		1		1	11.11%		
		丸玉・小玉		2	6	8	88.89%		
	煙管	石製加工(雁首)							
		銅製(雁首・吸い口)							
	遊具	I類							
		II類							
	銭貨	中国銭(有文)		2	1	3	100.00%		
		無文銭							
		寛永通寶		1		1			
		釘		9	13	22	81.48%		
	金属製品	鉄製品	刀子						
			鎌						
			釣針		1		1	3.70%	
			その他・不明		3	1	4	14.81%	
		銅製品	推定・近現代		2		2		
			座金・飾り金物等				0		
	鋳等 替・装飾品 その他・不明			1		1	50.00%		
	石製品	石斧							
		砥石		1		1	100.00%		
		硯							
		鏝							
	貝製品	不明							
	土製品	漁網錘?		25		25			
		土彈ほか				0			
	骨製品	骨へら				0			
		歯ブラシ				0			
	陶磁器以外の人工遺物			45	22	67			

※網掛け部分は12~16世紀以外の近世以降の遺物。
※遺物の比率については中世のものだけを対象としている。

る。第21図-17は胴部に蓮弁文を描く資料で、雷文帯碗もしくはラマ式蓮弁文を外面に描く碗の底部資料と類推する。第22図-18～22は細蓮弁文碗もしくは無文直口口縁碗と類推することのできる底部資料である。18～20は素地と釉の断面観察から細蓮弁文碗、21は無文直口口縁碗が類推でき、22は不明である。いずれも焼成不良で釉は薄く施釉される。

第22図-23は同安窯系青磁皿で、無文であるがいわゆる櫛描文皿と同類の口縁部資料である。第22図-24は蓮弁口折皿で口縁部屈曲の稜は不明瞭で、蓮弁の立体感にも欠ける。第22図-25・26は見込に双魚文が描かれる。25は貼り付け浮文で魚文に立体感がある。高台脇までの施釉で内底は露胎となる。26はスタンプで描かれた文様で魚文であるかも判然としない不明瞭な文様である。第22図-27は無文外反皿の口縁部資料。第22図-28は無文直口皿で図上復元で全形を伺うことができる。見込を露胎させ花文を押印する。第22図-29は蓮弁直口皿dで内面に細い蓮弁を密に配する。第22図-30・31は腰折皿で30は口縁部を刻み稜花とする資料で、31は見込を露胎とする焼成不良で釉の発色も悪くなる特徴的な資料である。第22図-32は香炉で、口縁部が凹み寄せ口縁となり、外体面には算木文が廻る口縁部小片資料である。第22図-33は碁笥底になる底部資料で器種は杯と考えられる。第22図-34～36は器種は盤で、34は鏝縁の口縁部資料で体部文様は欠損するため不明。35は鏝縁の口縁端部を刻み稜花とする資料で内体面には幅広の蓮弁文を描く。36は底部資料で見込に花文を描く資料である。

3. 白磁 第23図-37は今帰仁タイプ碗の口縁部小片資料で、口縁端部を平坦とする。第23図-38は口禿碗もしくは皿の口縁部資料で、素地は粒子が粗くいわゆる典型的な口禿とはやや様相が異なる。第23図-39はピロースクタイプの白磁碗に類する資料である。但し、復元径が広く釉調がピロースクタイプと異なる。不明瞭だが口縁帯に雷文帯様の文様が観察され、青磁の波状文碗に分類されるべき資料かとも考えられる。40は直口口縁の粗製碗である。

第23図-41～44はいわゆる森田D群で、41は端反になる小杯、42・43は直口皿、44は灯明皿である。第23図-45・46は森田分類E群に属するタイプで、45は外反皿、46はベタ底で、見込を露胎とする、類例が少ないため判然としないが小皿と思われる。

4. 青花 第23図-47は口折碗（主部分類Ⅳ類）である。口縁部を外側に折り曲げ外面に文様を描く。文様のモチーフは筆致が雑で不明。第23図-48・49は直口口縁碗b（小野分類D群）で、48は口縁部資料で外面口縁帯に波濤文を描く。49は底部資料で外面にアラバスク文、見込に花文を描く資料である。第23図-50は皿、51はサイズの大きい皿である。50は外反皿（小野分類B群）で外面に唐草文を描き、見込は文様不明だが玉取り獅子と考えられる。51はやや底径が広くなることから中・大皿になると考えられる。文様モチーフは不明。

5. 褐釉陶器 第23図-52は褐釉陶器の中小型の壺で白色粒子を混和材として用いる特徴から福建省洪塘窯の製品と推察される。第24図-53は褐釉陶器壺dで、方形の口縁部が付される資料の底部片と考えられる。第23図-54は褐釉陶器の鉢形資料で後述する（第41図-15）に器形的には類する資料と考えられる。第23図-55は褐釉陶器の底部資料である。

6. タイ陶磁 第24図-56は鉄絵合子で、蓋の小片と考えられる。第24図-57は褐釉陶器壺の底部小片である。

7. ベトナム陶磁 第24図-58は白磁碗の小片で復元径は不明である。口縁部を口禿とし不鮮明だが内面には波濤文が描かれる資料と考える。

8. 韓国陶磁 第24図-59は象嵌青磁の胴部小片の資料で内面に丸文、外面には圈線が廻る資料である。

2) 玉

第24図-60～62は、ガラス製の小玉で、大きさは径10～5mm程度の資料である。色調はそれぞれ異なり、60はやや青みのある白色、61は黄色みのある白色、62は青色と推量されるが全体に腐食が著しく白色となっている。

3) 銭貨

第24図-63は口寧通口の字が判読できる。おそらく崇寧通寶(当十銭)の1/2を欠損する資料で、中国北宋(1103年初鑄年)の銭貨である。この他に判読不明の銭が2点得られる。第24図-64の1点を図示した銭名は不明1/2を欠損する。

4) 金属製品

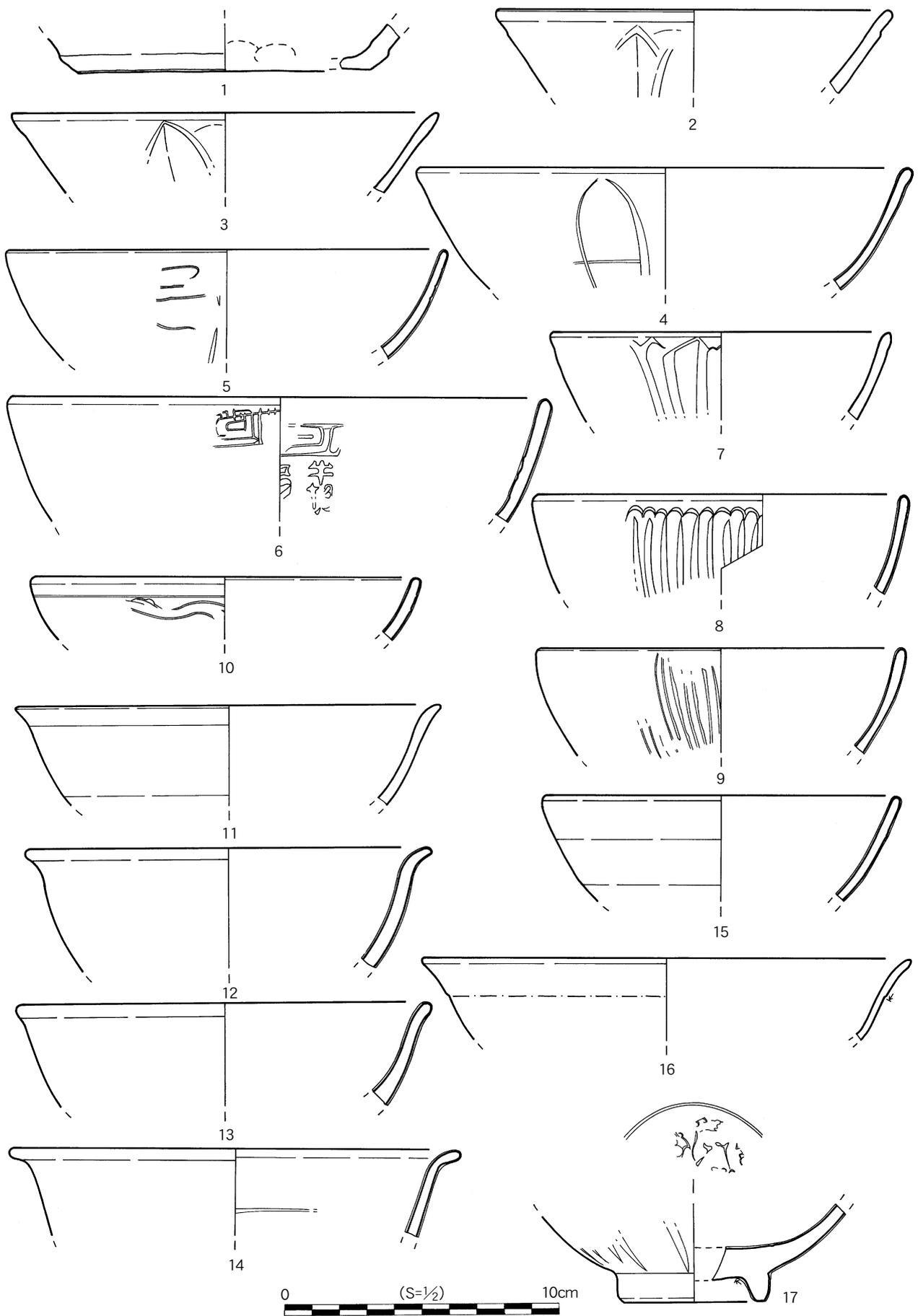
第24図-65は板状の金属製品で材質は銅もしくは銅を含む金属製の資料と思われる。小片であり形態や用途など不明、かつ出土層もI層で帰属する年代がグスク時代のものであるかも判断としないが報告する。

5) 貝製品

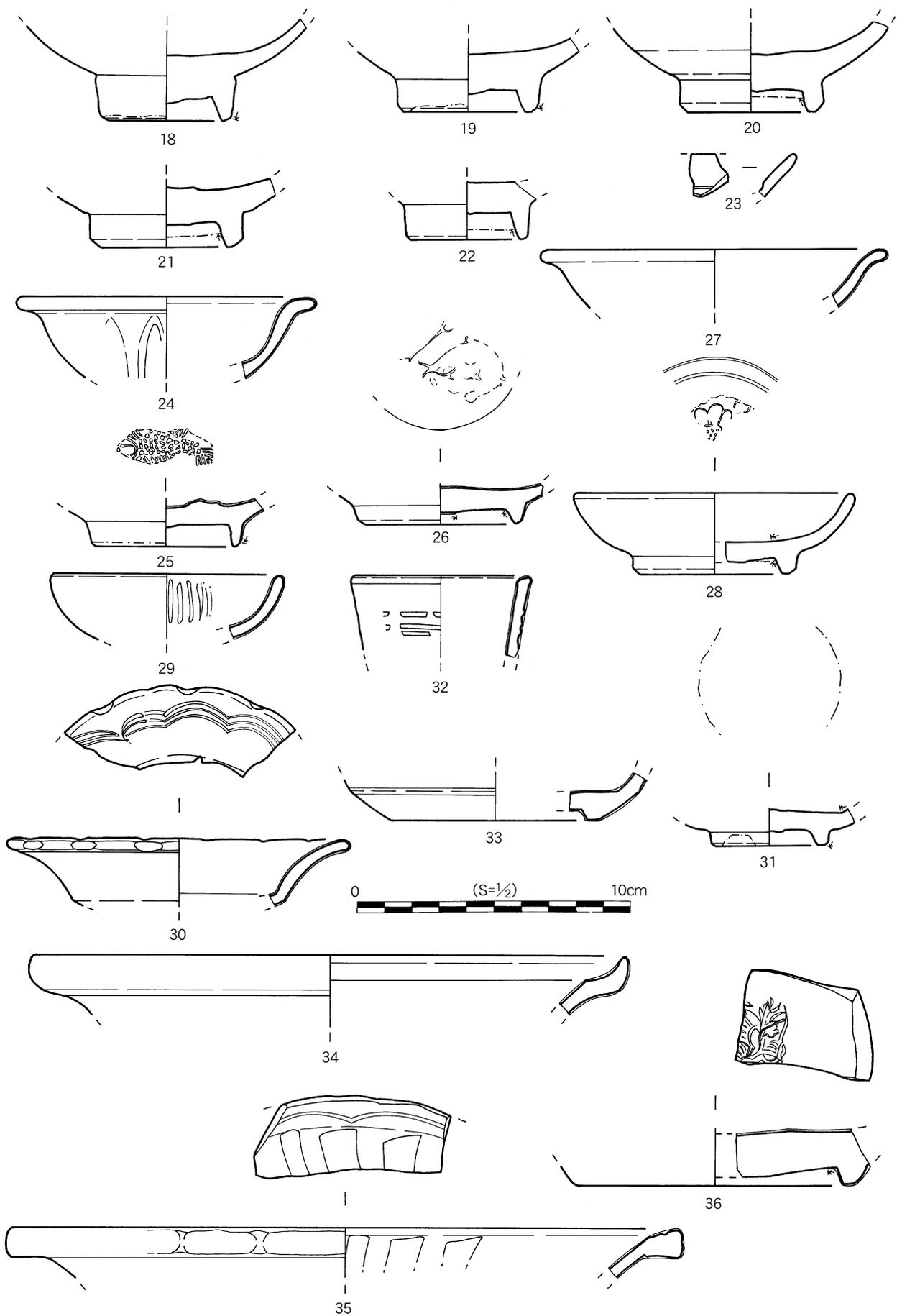
第24図-66～69はタカラガイ(ハナマルユキ?)の殻頂部が割れた標品で、漁網錘の可能性のある資料である。出土した5点のうち4点を図化した。

(4) 自然遺物

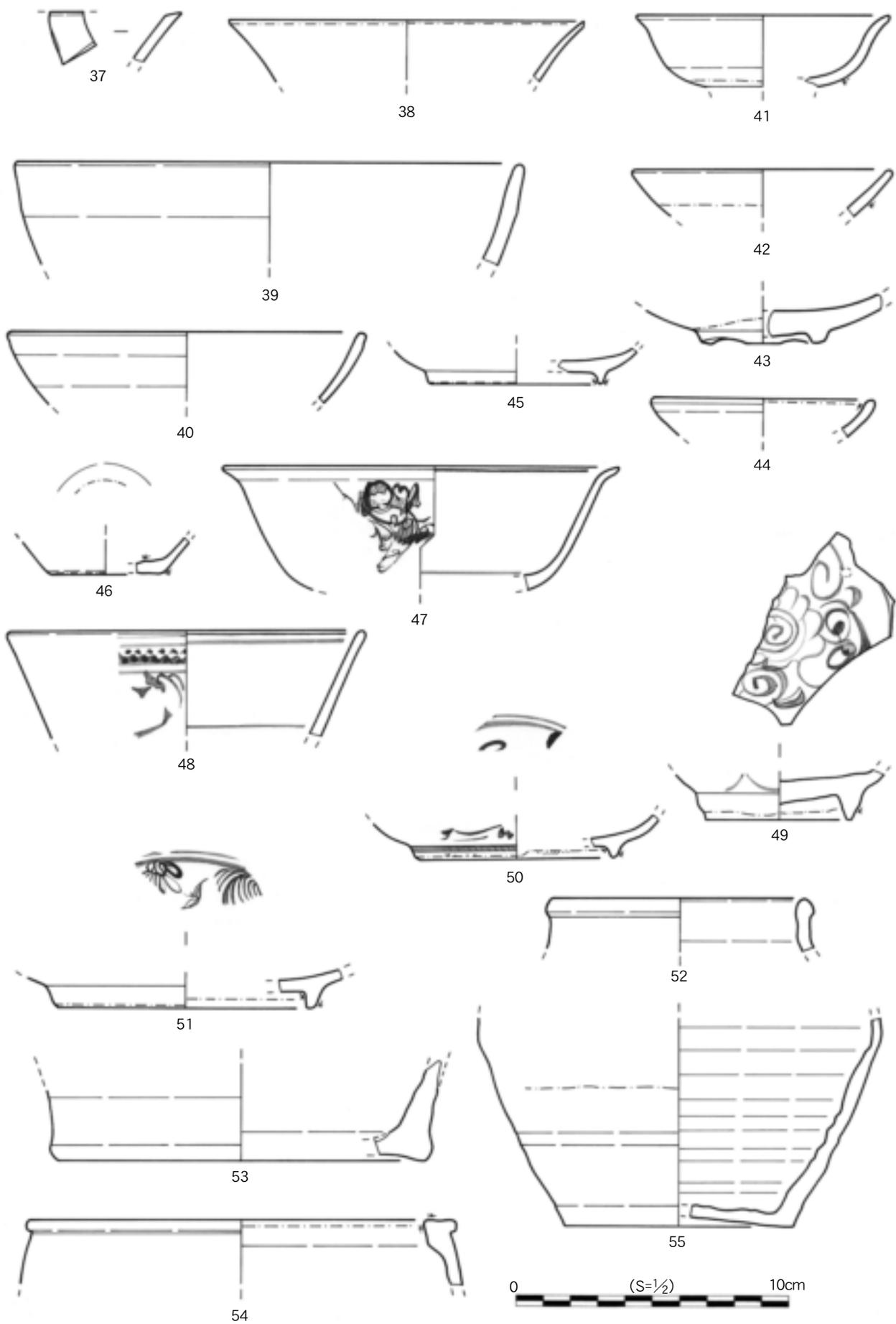
10次調査における脊椎動物骨、貝類遺体、植物遺体の分析については、報告を割愛する。



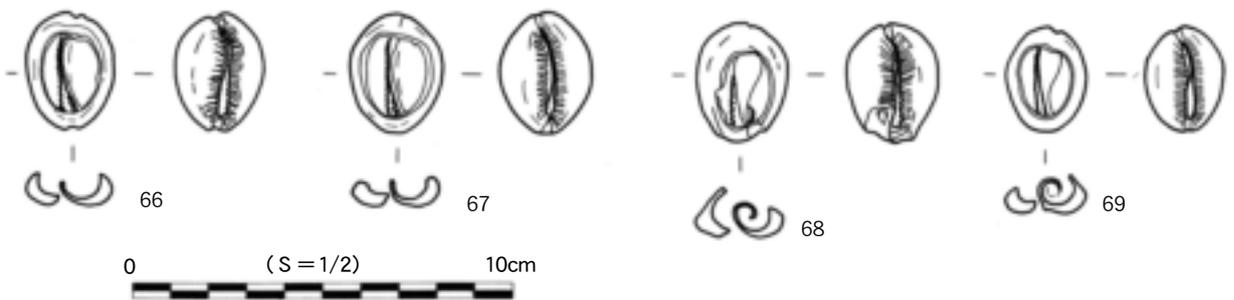
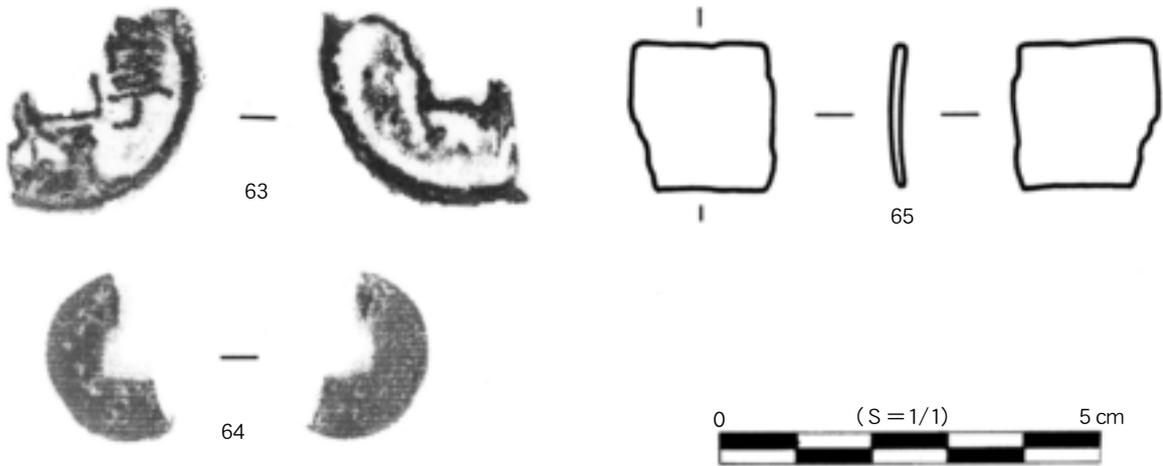
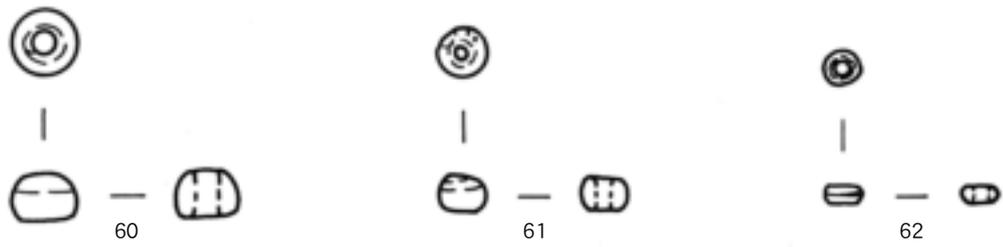
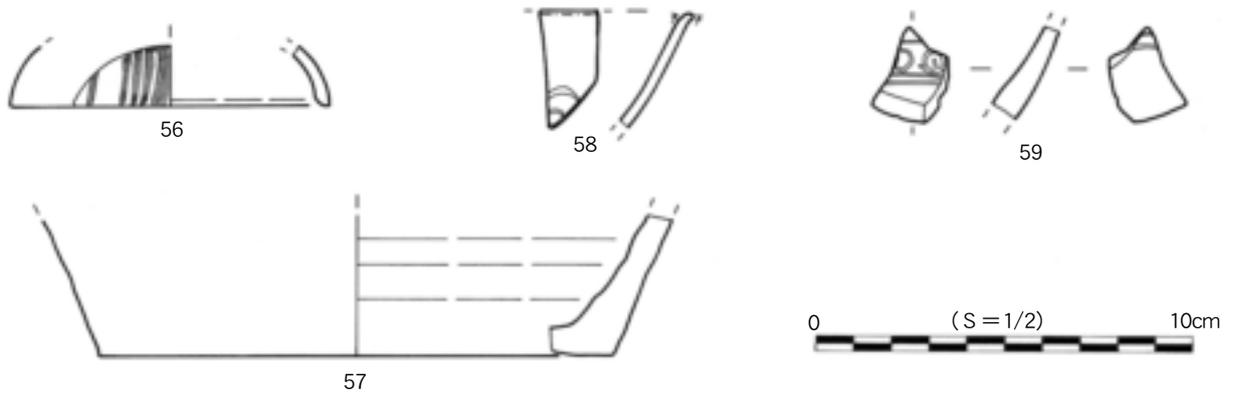
第21図 屋敷地1 出土遺物(1)



第22図 屋敷地1 出土遺物(2)



第23図 屋敷地1 出土遺物(3)



第24図 屋敷地1 出土遺物(4)

②西区 屋敷地2（Ⅲ区b）の調査概要

屋敷地2は西区Ⅲ区の中の小分割されたⅢ区bに該当する地域で5100、5101、5095-1、5095-2番地の地域に属する約1,057㎡である。この南側5096-1、5096-2番地は道路開発によって既存するが、もともとは岩盤が露頭する岩山であったと推定される。

平成16年に実施された9次調査によって遺跡地域のほぼ全域が発掘されている。遺構の分布中心はグリッドではN-20にあり、これは屋敷地2の北側にあたる。基本層序はⅠ層の客土・耕作土層、Ⅱ層の暗褐色層（ナンバーリングⅡ層）のグスク時代の遺物包含層、N-18、19の一部で確認されたⅢ層、地山層であるⅣ層は赤褐色で所々岩盤が露頭し、遺物を全く含まない自然堆積層からなる。



第25図 屋敷地2 位置図

数棟の建物跡の推定を行うことができた。遺構はほとんどが地山面に確認できた柱穴で、かなり密集して確認されている。柱穴や土坑の他にも石積み遺構が調査区北側で確認された。石積みは畑が利用されていた現代まで地表面に露頭していたようで、遺構上層からは新しい時代の遺物も得られている。これは屋敷地1と屋敷地2を区画する石積み遺構（SR6）で、今帰仁城跡志慶真門郭で用いた屋敷区画である土留め石積みと同じ遺構と考えられる。またこの他に溝なども確認されている。前回の報告では本屋敷地2が未報告となっていたので今回の報告書に掲載して責を果たしたい。

（1）層序

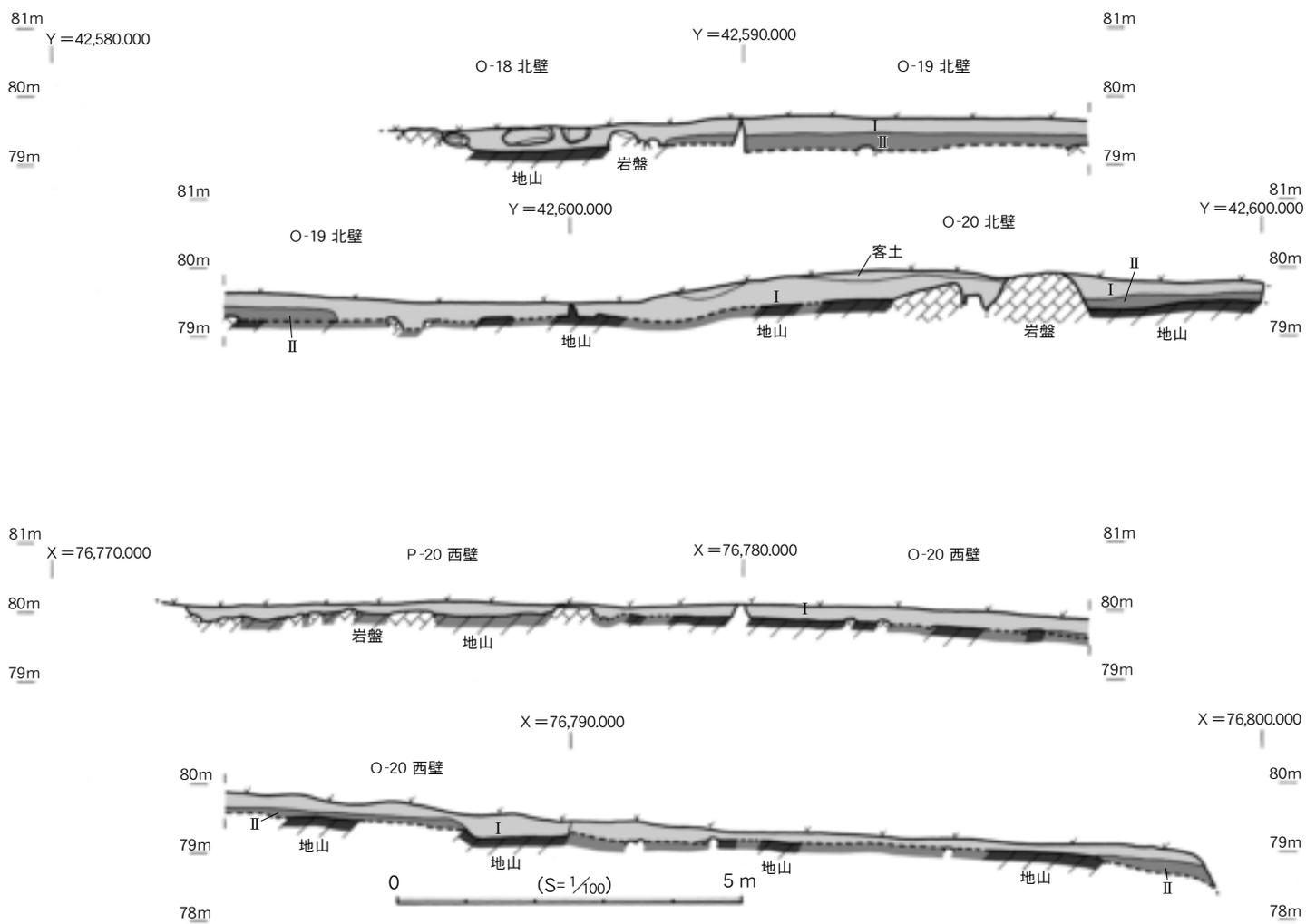
遺跡の層序を理解する上でOライン（O-18、O-19、O-20グリッド）の北壁及び、N-20、O-20、P-20グリッドの西壁を図化した。

Ⅰ層：客土、耕作土層。Hue10YR暗褐色3/4。約20～40の堆積。屋敷地4のⅠ層Bのような着色が認められ、酸化着色と推定される。

Ⅱ層：Hue10YR暗褐色3/3。グスク時代の遺物包含層。調査区の東側では堆積は認められないがピットは検出されているため、かつては南西側の岩場を除く全域に堆積があったと考えられる。厚いところでの堆積は約40cm。

Ⅲ層：Hue10YR暗褐色3/3～3/4。N-18、19の北側で見られた落ち込み。ごく狭い範囲で検出されているため詳細は不明。

Ⅳ層：所々岩盤が露頭し、遺物を全く含まない自然堆積層で、粘板岩を含む堆積層と、含まず粘性のある締まった土層の層相の異なる地山からなる。



第26図 屋敷地2 土層断面図

X=76,770

X=76,780

Q-18 P-18
Q-19 P-19

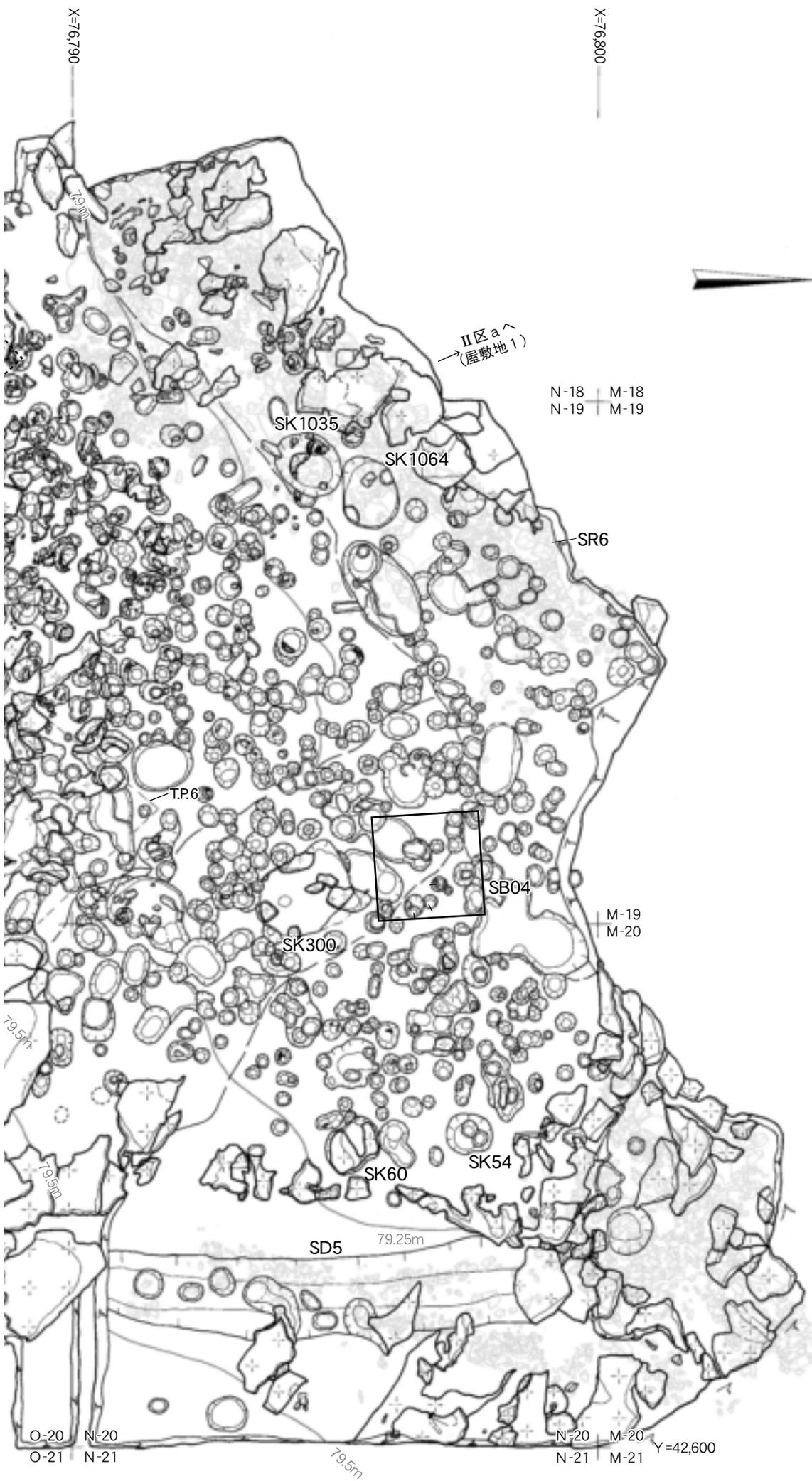
Q-19 P-19
Q-20 P-20

Q-20 P-20
Q-21 P-21

P-20 O-20
P-21 O-21



第27図 屋敷地 2 遺構平面図



II区 a ^
(屋敷地 1)

N-18 | M-18
N-19 | M-19

Y=42,580

M-19
M-20

Y=42,590

O-20 | N-20
O-21 | N-21

N-20 | M-20
N-21 | M-21

Y=42,600

(2) 遺構

最終的に建物跡3棟(要検討1棟含む)を推定することができた。遺構検出面は北側に緩やかに低くなり傾斜している。遺構は柱穴が大多数で、その分布はSX4を境に大きく北側と南側に分けることが可能である。ここでは屋敷地2を小区分して南側を屋敷地2a、北側を屋敷地2bとして紹介する。屋敷地2では屋敷地4で確認されたような柱穴の直径が50前後となる大きな柱穴が集中する地区は存在しないが、屋敷地2bの東側と西側に4本柱の建物跡(SB03・04)がそれぞれ1棟ずつ推定できたことから母屋的建物を中央に配し、東西の柱穴の密度が比較的疎らなところに付帯施設を配していたと推定した。また、特筆すべき点として屋敷地1と2の境界としてのSR6、北側の柱穴密集地域を囲むように展開する東側のSD5・南側のSD4の区画施設を意図したような溝が検出されており、これが屋敷地2とした地区においてどのような意味を有していたか検討する必要がある。また、本地域では40基(土坑の可能性を考慮する土坑?を省く)の土坑が検出されており、他の屋敷地に比してその検出数が多いことも記しておく。また、現場でSB02として建物跡を推定したプランは、その後資料整理で再検討を行い、建物としての可能性は極めて低いと考えられた。このため、遺構番号はそのままとしながら、報告では割愛している。

なお、調査区外となった東南側には溝の延長など遺構が残存すると考えられるが調査の都合で貫徹できなかった部分も一部に残存していると考えられるものの、ほぼ屋敷地全面を発掘することとなった。

種類	遺構数
・掘立柱建物跡	3基(うち要検討:1基) 母屋1棟(うち要検討:1基) 高倉2棟(うち要検討:1基)
・柱穴	842基 ※掘立柱建物跡とした建物の柱も合算集計した柱穴総数である。
・土坑	40基 (SK300,SK883,SK24,SK54,SK60,SK1064,SK1035,ほか33基)
・土坑?	6基
・土留め	1基 (SR6)
・溝状遺構	1基 (SD5)
・不明遺構	1基 (SX824) ※自然洞穴、フィッシャー状の遺構
・不明遺構	5基 (SX4・ほか4基)

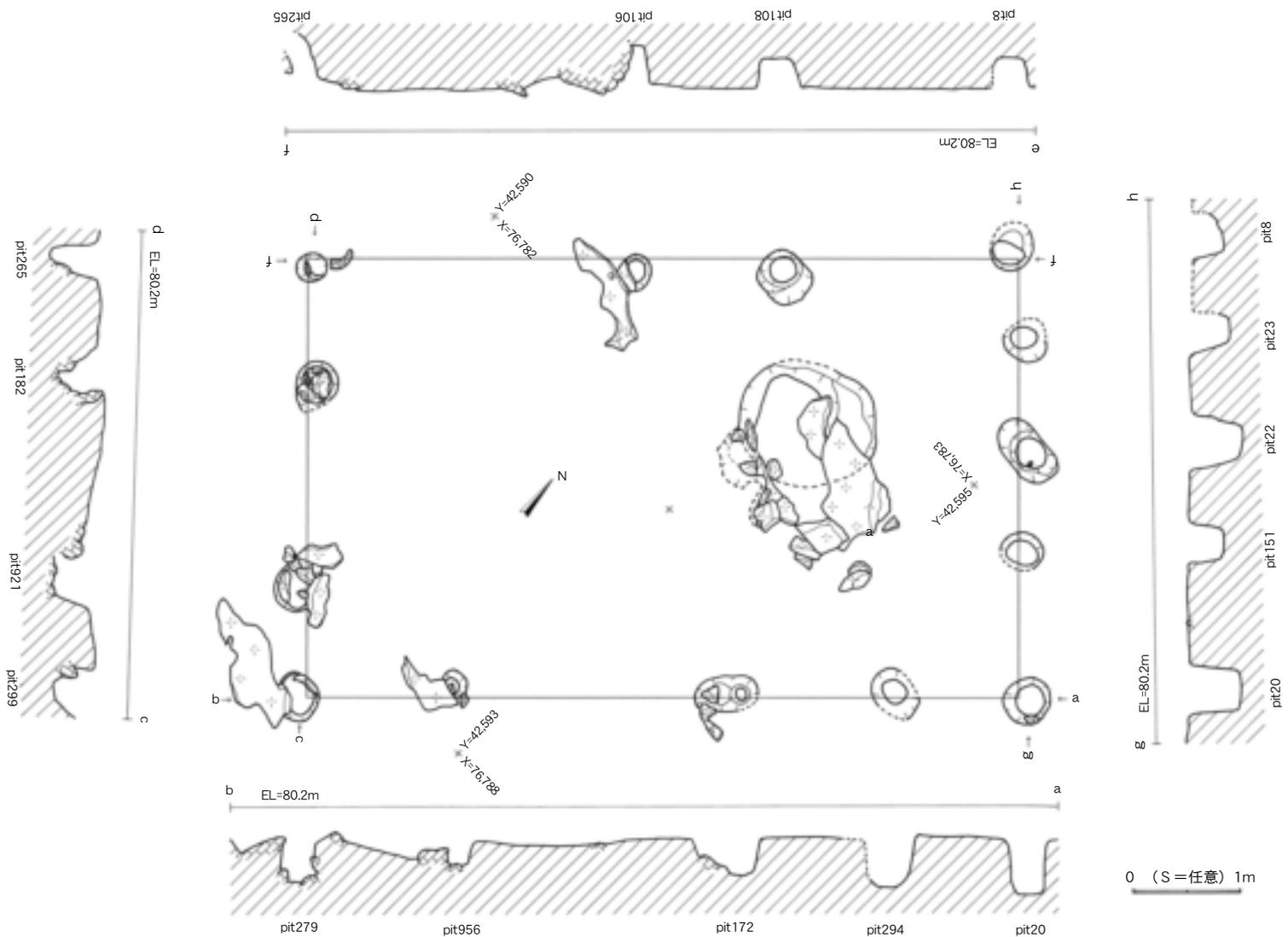
〔名称〕 屋敷地 2 a : SB01

〔位置〕 Ⅲ区 b (P - 19 ・ P - 20 ・ O - 19 ・ O - 20)

〔検出面〕 Ⅳ層 (地山)

〔遺構構成〕 柱穴14基、土坑 1

〔所見〕 Pit299・956・172・244・20・151・22・23・8・108・106・265・182・921、SK24 (後述詳細) で構成される掘立柱建物跡。柱穴は25cm～50cm程度でpit108・151・182・265で柱痕を確認することができた。Pit20・244はGLから50cm以上掘り込んでいるが、



第28図 屋敷地 2 遺構詳細図 (SB01)

Pit108・8は28cm～30cmと前者に比して浅くなっている。建物跡の床面積は長軸660cm×短軸410cmで、I層の旧表土耕作土を除去した段階で確認されており遺構検出面は削平されていると考えられる。また、Pit244は245を切り、243に切られる。pit8・20・22・23・108・151・182・265・921の覆土からは小破片の陶磁器や獣骨等が出土している。

〔土層〕 i層：暗褐色土層で炭混じりの土層柱痕と考えられる。

ii層：褐色土層地山の土塊が混ざる。

ii層：褐色土層地山の土塊が混ざる。砂礫が多く混ざる。

〔名称〕 屋敷地2 b：SB03

〔位置〕 III区 b (O-18・O-19)

〔検出面〕 IV層 (地山)

〔遺構構成〕 柱穴4基

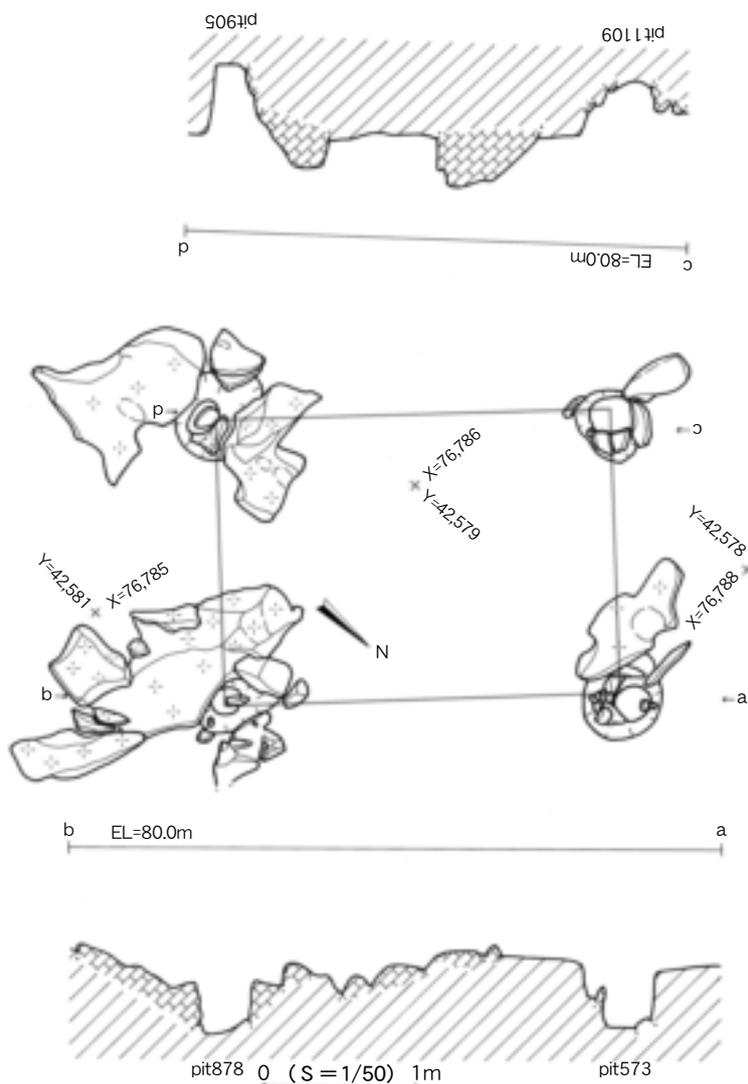
〔所見〕 Pit1109・905・573・878で構成される掘立柱建物跡。柱穴は50cm～60cm程度でそれぞれに柱痕を確認することができる。柱痕は25cm程度である。それぞれのPitはGLから50～40cm程度掘り込んでいる。建物跡の床面積は長軸260cm×短軸190cmである。遺構はII層(包含層)を掘り下げ、地山面から検出した。Pit1109はPit577の床面から検出されている。それぞれのPitからの遺物が出土する。

〔土層〕

i層：暗褐色土層で炭混じりの土層柱痕と考えられる。

ii層：褐色土層地山の土塊が混ざる。

ii層：褐色土層地山の土塊が混ざる。砂礫が多く混ざる。



第29図 屋敷地2 遺構詳細図(SB03)

〔名称〕 屋敷地 2 b : SB04

〔位置〕 Ⅲ区 b (N-19)

〔検出面〕 Ⅳ層 (地山)

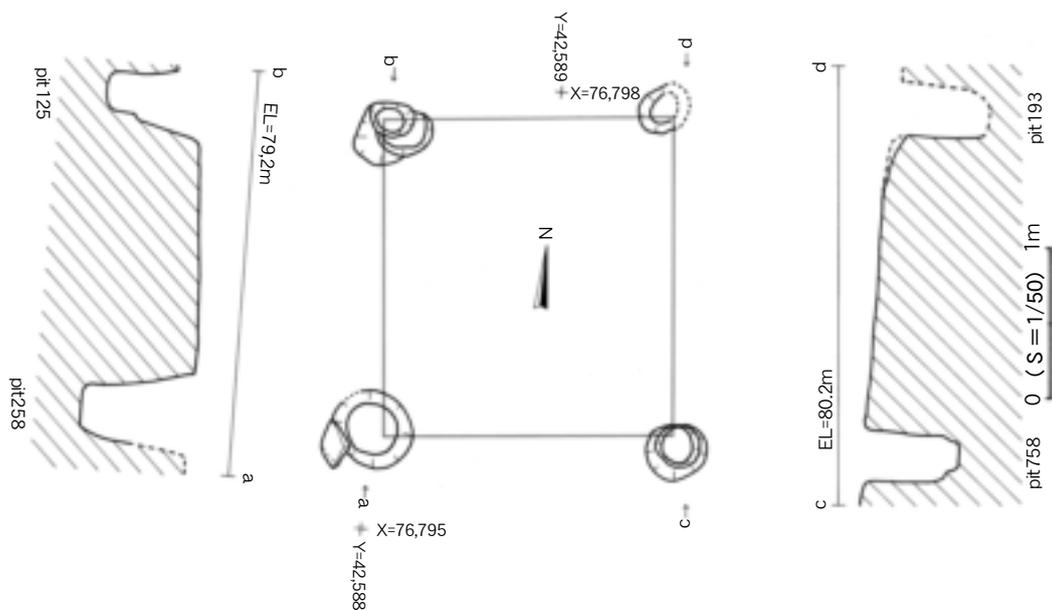
〔遺構構成〕 柱穴 4 基

〔所見〕 Pit758・193・258・125で構成される掘立柱建物跡。柱穴は50cm～40cm程度でそれぞれに柱痕を確認することができる。柱痕は15cm～20cm程度である。各PitはGLから60～70cm掘り込んでいる。建物跡の床面積は長軸210cm×短軸190cmで、Ⅰ層の旧表土耕作土を除去した段階で確認されており遺構検出面は削平されていると考えられる。また、Pit784などによって切られており先後関係を確認することができる。遺物はPit758から染付碗などが出土している。

〔土層〕 i 層：暗褐色土層で炭混じりの土層柱痕と考えられる。

ii 層：褐色土層地山の土塊が混ざる。

ii 層：褐色土層地山の土塊が混ざる。砂礫が多く混ざる。



第30図 屋敷地 2 遺構詳細図 (SB04)

〔名称〕 屋敷地 2 b : SR6 (石積み)

〔位置〕 Ⅲ区 b (N-19)

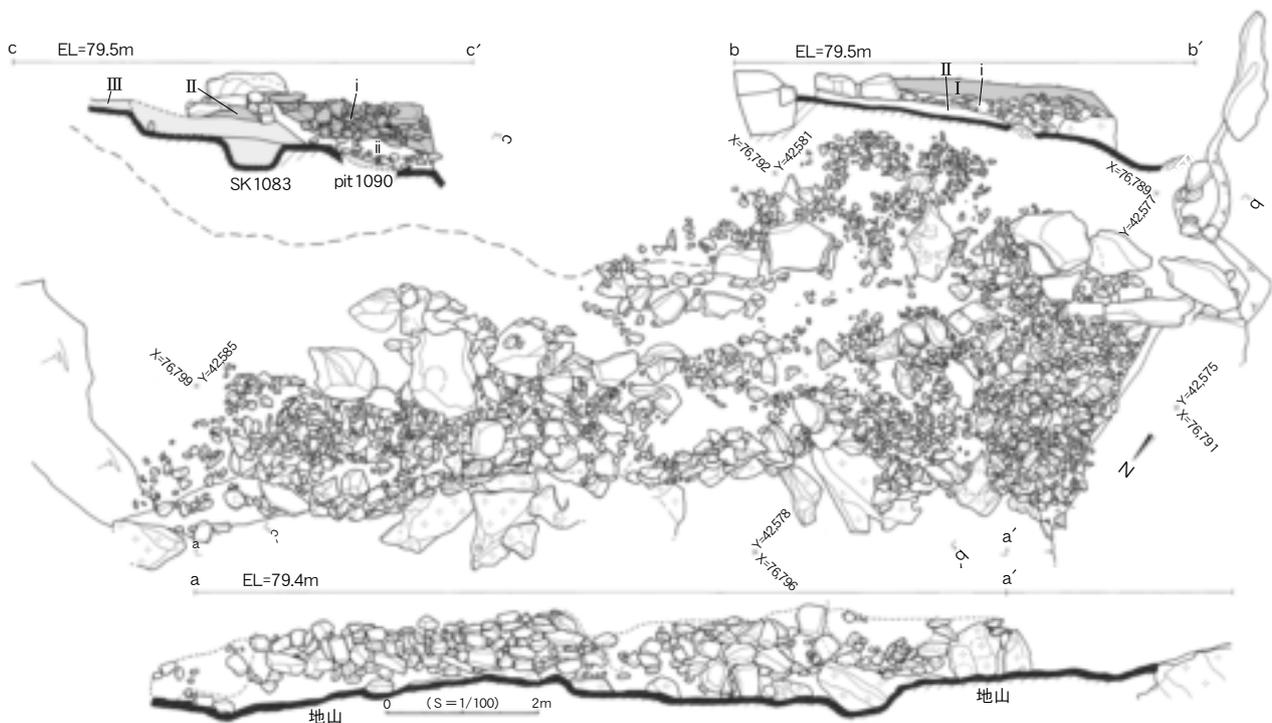
〔検出面〕 Ⅱ層

〔遺構構成〕 区画土留石積 1 基

〔規模〕 東西約13m、南北約3m、高さ約50~80cm

〔所見〕 屋敷地を区画すると同時に土留めの機能も有したと考えられる石積遺構。岩盤から岩盤を繋ぐように東西に約13m残り、石積みは西側調査区外まで延びると考えられるため全体は不明。概略高さは50~80cmで幅は約2mである。石積みは比較的大きい40~50cm大の古期石灰岩を用いて岩盤の上などに積まれ、面石は多少大きいが企画性に乏しく雑に積んだ印象を受ける。石積みは崩落していて残りは良くない。裏込めは一回り小さい石を用い、上層は礫が集中し下層になるにつれて礫の数が減少する。遺構内からは青磁、白磁、青花、褐釉陶器、備前插鉢、石器、鉄製品等が出土している。

〔遺構内堆積層〕 i 層: 暗褐色混礫土層。旧耕作土層と考えられ、粘性に乏しく一部明褐色に着色したように変化し、僅かに砂粒や炭を含む。ii 層: 暗褐色混礫土層。ii 層に比して礫の数が減るが炭化物が増加しやや粘性を帯びる。



第31図 屋敷地 2 遺構詳細図(SR6)

〔遺物〕 第32・33図はSR6から出土した主な遺物である。

1) 陶磁器

1. **カムイヤキ** 第32図-1はカムイヤキ須恵器の底部資料で、粘土接合帯から剥がれ落ちている小片である。器種は不明。

2. **青磁** 第32図-2は雷文帯碗bで口縁外面に雷文を押印し、内面には人物図を配する。第32図-3は青磁底部の資料で、外面の文様が判然としないが、蓮弁文が描かれる資料かと考える。第32図-4・5は青磁碗の底部資料で、4は細蓮弁文碗を胴部に描く資料で、細蓮弁文碗bに該当するものか。5は無文直口口縁碗の底部資料と考えられる。第32図-6・7は青磁皿底部資料で、両者とも外底を無釉とする無文外反皿の底部資料と推察される。なお、7は見込みは釉剥ぎされ露胎とする。第32図-8は口唇部を刻稜花とする腰折皿cである。

3. **白磁** 第32図-9は白磁直口碗の底部資料で、見込みを露胎とする粗製碗である。第32図-10は森田D群の杯（もしくは小碗）の底部資料で見込みは露胎となり、外面も腰部途中までの施釉となっている。

4. **青花** 第32図-11は青花皿の底部資料で、比較的径の大きな皿である。文様のモチーフは大半が失われるため不明だが、麒麟などの獣類の図と考えられる。

5. **褐釉陶器** 第32図-12・13は褐釉陶器壺dとする大型褐釉陶器壺である。12は底部、13は口縁部で、口縁部上面には砂が付着し窯詰め方法をうかがい知ることができる。

6. **備前焼締陶器** 第33図-14は備前焼焼締陶器の挿鉢で口縁部を屈曲させ口縁屈曲帯外面が幅広で、下方が突出することから、比較的新しい型式の特徴を持つものである。

2) 煙管

第33図-15は煙管の雁首で、石を加工して製作したものと考えられる。煤が火皿周辺に付着している。

3) 遊具

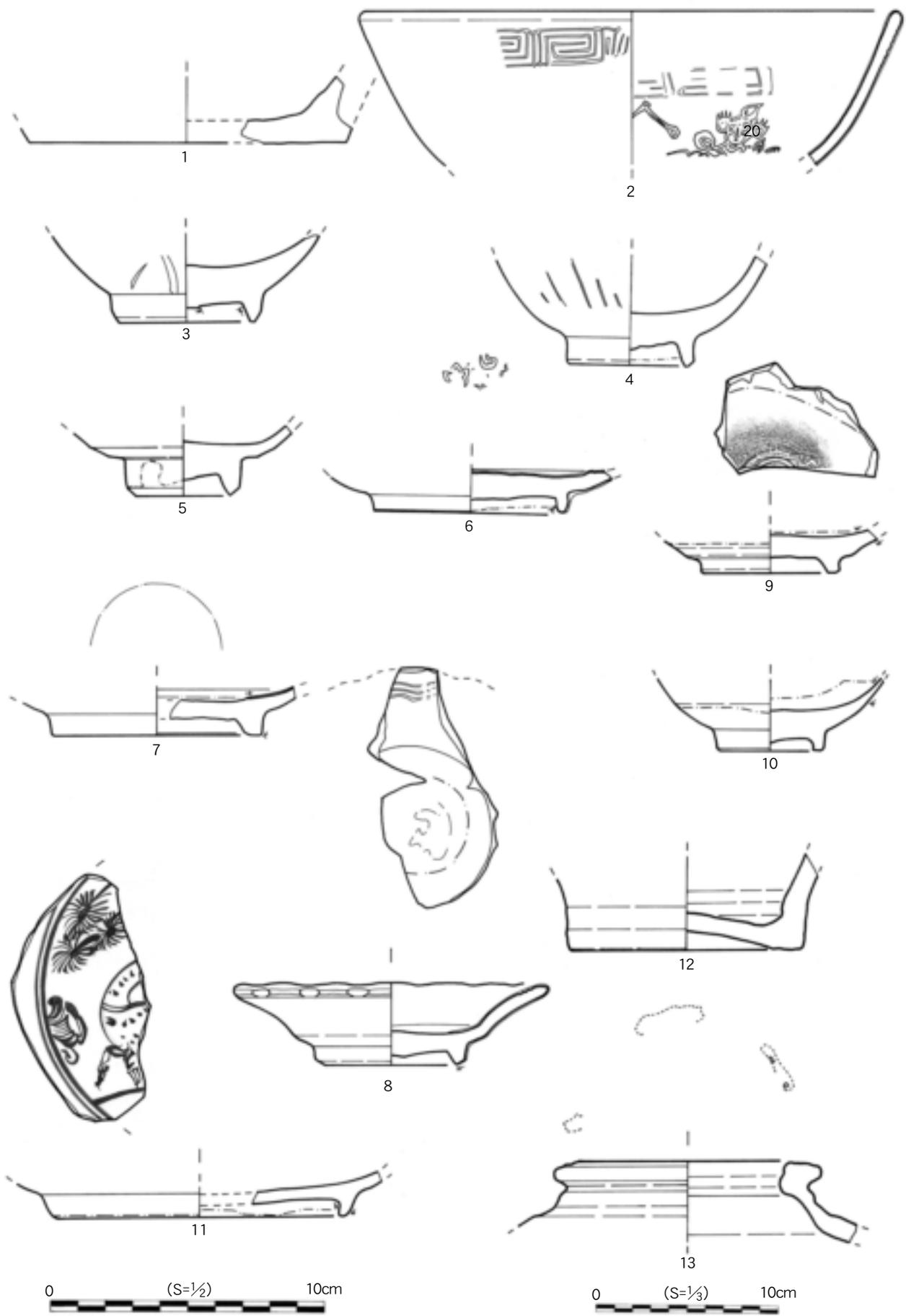
第33図-16は陶器片を敲打して製作したいわゆる円盤状製品で、当該資料は褐釉陶器の胴部片を利用したものである。

4) 石器

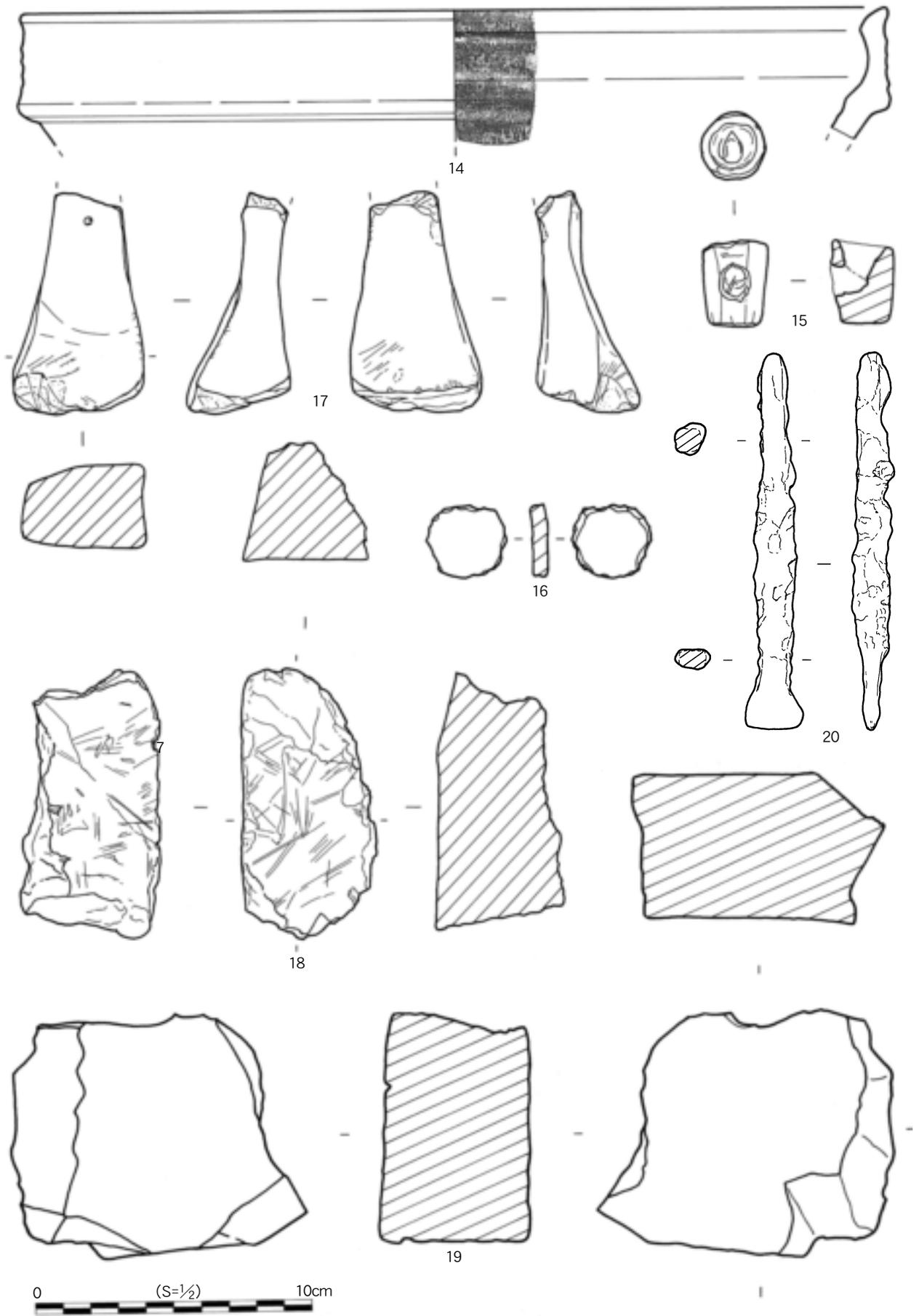
第33図-17～19は砥石で、それぞれ石の材質は、17が安山岩（もしくは玢岩）、18が珪酸頁岩、19が玢岩となっている。

5) 金属製品

第33図-20は鉄製品で錆が著しく付着しているが、全形をうかがい知ることのできる資料と考える。その特徴は図下方にバチ形の刃部をつくり、長さ13.67cmの棒状のノミ状の製品と考えられる。



第32図 屋敷地 2 (SR6)出土遺物(1)



第33図 屋敷地 2 (SR6) 出土遺物(2)

〔名称〕 屋敷地 2b : SD5 (溝状遺構)

〔位置〕 Ⅲ区 b (N-20)

〔検出面〕 Ⅳ層 (地山)

〔遺構構成〕 集積、浅い溝

〔規模〕 幅約 1～3 m、長さ約 7 m

〔所見〕 屋敷地 2b の東側にほぼ南北にのびる溝状の遺構。北側で SR6 につながる集石と重なるため全体は不明。南側では幅 1 m であるがだんだん広くなり北側では約 3 m となる。遺構は I 層 (旧表土・耕作土) を掘り下げた地山面で検出された。検出面からは、拳大の礫が帯状に検出され断ち割った断面で溝状になることが確認された。遺構からの遺物は青磁、白磁、青花、褐釉陶器、貝殻などが出土している。

〔遺構内堆積層〕 暗褐色土 i 層に拳大の礫が混ざる。

〔遺物〕 第 35 図は SD5 から出土した主な出土遺物である。

1) 陶磁器

1. **青磁** 第 35 図-1 は体外面に片切彫りでモチーフ不明の文様を描く外反碗口縁部資料である。第 35 図-2～4 は青磁碗底部資料で、2 は内面に型取りしいわゆる人形手の文様を配する。口縁部は破損し残らないが雷文帯碗 b の底部と考えられる。3 は細蓮弁文碗 b に属する資料である。4 は外面に文様があることは遺物の断面観察によって推察されるが不鮮明であるため不明 (細蓮弁文碗か?)。5 は青磁皿底部資料で、見込を露胎とし外底は無釉、無文外反碗の底部と推察される。

2. **白磁** 第 35 図-6 は抉入り高台の直口皿 (森田 D 群) である。7 は輪花杯と類する資料で、見込は蛇の目釉剥ぎとする小皿である。

3. **青花** 第 35 図-8・9 は直口碗で口縁部端は平坦となる特徴的な資料である。内面には圈線を一条、外面には口縁部に二条の圈線が廻り胴部に文様を描く。8・9 は素地、釉調、文様から同一個体と考えられる。

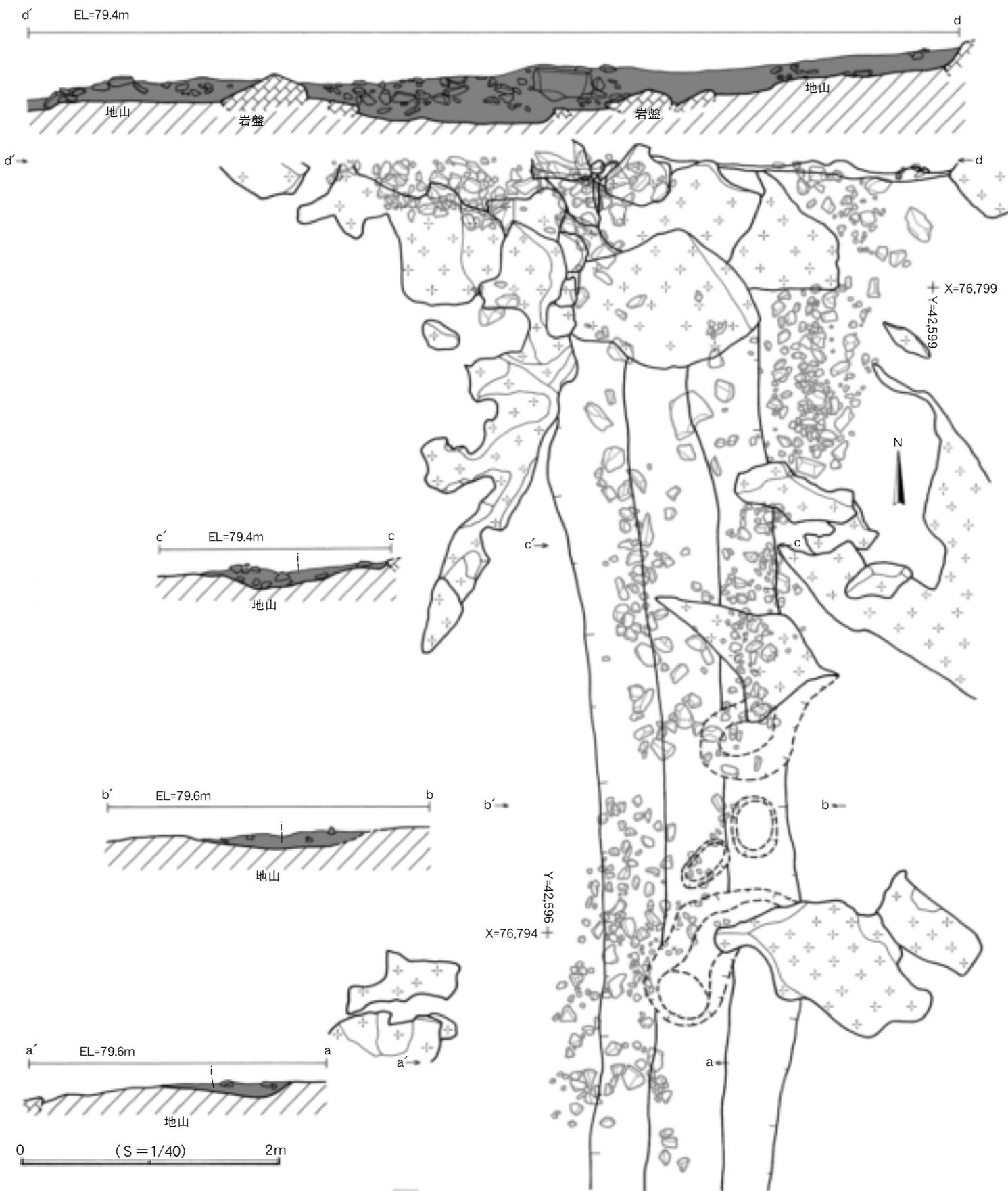
4. **褐釉陶器** 第 35 図-10 は褐釉陶器の小型壺で、内傾し窄まる口縁部資料で、肩は弱く屈曲、口縁部端は外側に張り出すように三角形に肥厚する。第 35 図-11 は口唇部が肥厚するタイプの褐釉陶器で、赤褐色の素地に薄釉を外面に施釉する。第 35 図-12 は褐釉陶器壺の底部資料で赤褐色の素地で底部外面を削り成形する。

5. タイ陶磁

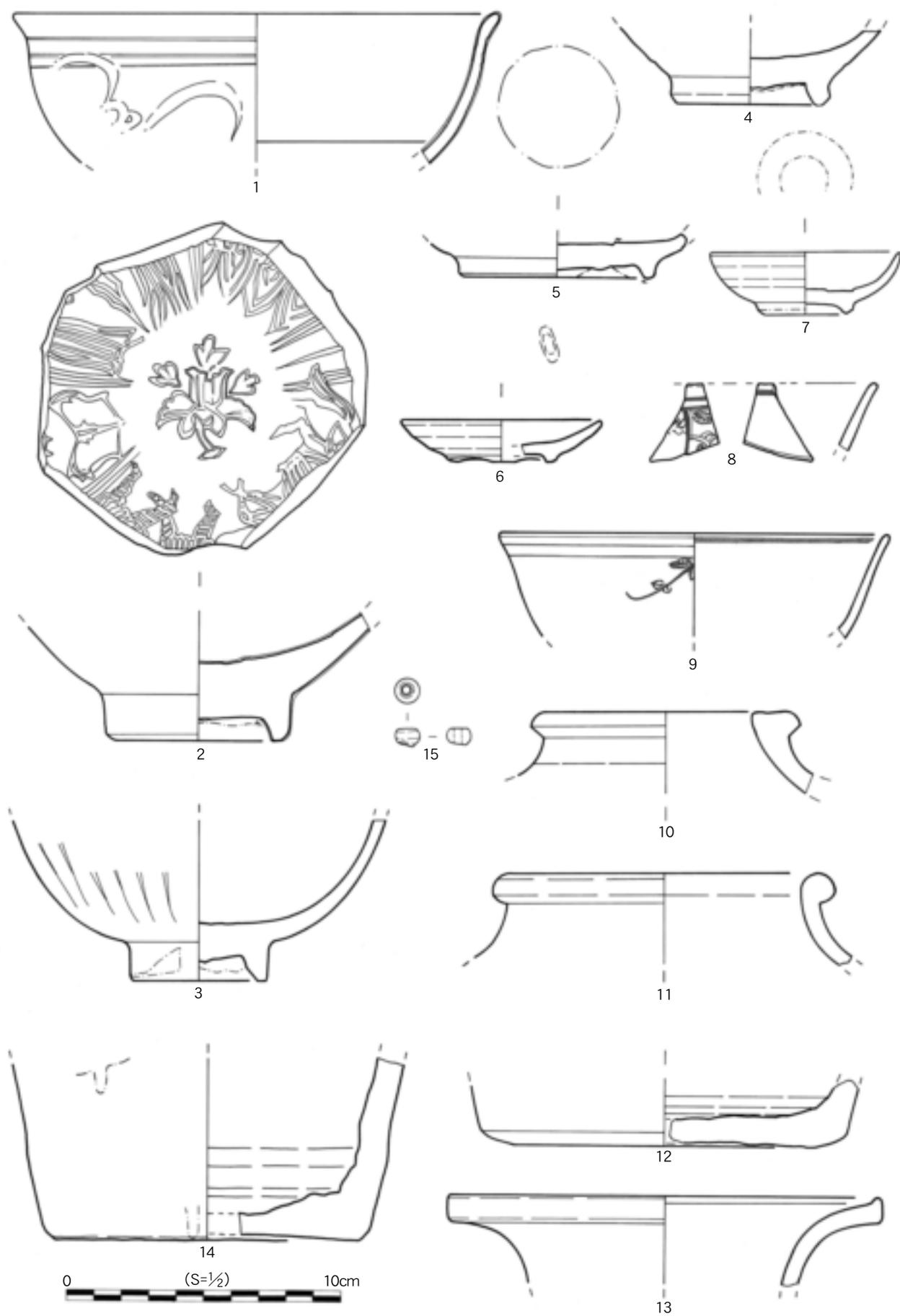
第 35 図-13 は褐釉陶器壺で、大型壺 a に該当する。外側に大きく開く器形で口縁部上端に凹線が廻る。第 35 図-14 は褐釉陶器の中型壺の底部と考えられる。

2) 玉

第 35 図-15 はガラス製の小玉で、サイズは直径約 10 mm、色調は黒色となる。



第34図 屋敷地 2 遺構詳細図SD5



第35図 屋敷地 2 (SD5)出土遺物(3)

〔名称〕 屋敷地 2 a b の境界：SX4（性格不詳の遺構）

〔位置〕 Ⅲ区 b（O-19・O-20）

〔検出面〕 Ⅳ層（地山）及びPit883、918、919の上面

〔遺構構成〕 SX4

〔規模〕 幅約 1 m、長さ約 6 m

〔所見〕 屋敷地 2 のほぼ中央に位置する散在礫の遺構で、検出時にはSD5と同様溝状の遺構と考えられたが、完掘すると柱穴が複数切り合う形で検出された。このため検出時に認識し得た礫の散在状況は、柱穴上面の礫混じりの覆土とも考えられる。一方で屋敷地 2 の北側（屋敷地 2 b）と南側（屋敷地 2 a）では僅かながらだが、SX4を境に高低差が認められる。この事実からSX4については区画施設の可能性の高い遺構として認識し報告する。ただし、遺構の性格については不詳で、区画時には浅い溝や簡単な柵もしくは、植栽のような簡便な施設程度の可能性が考えられる。

〔遺構内堆積層〕

〔遺物〕 第36図はSX4から出土した主な出土遺物である。

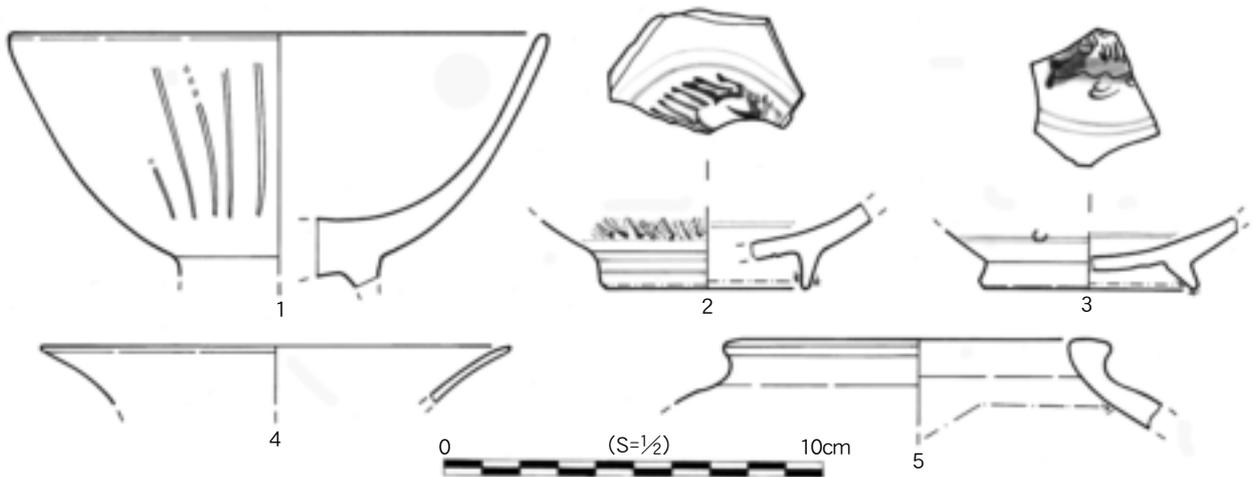
1) 陶磁器

1. 青磁 第36図-1は青磁雷文帯碗bで、畳付け部分を欠損するが図上復元可能な資料である。火受けしたものと考えられ、釉は発色が悪くなり器表面の手触りもザラリとなる。

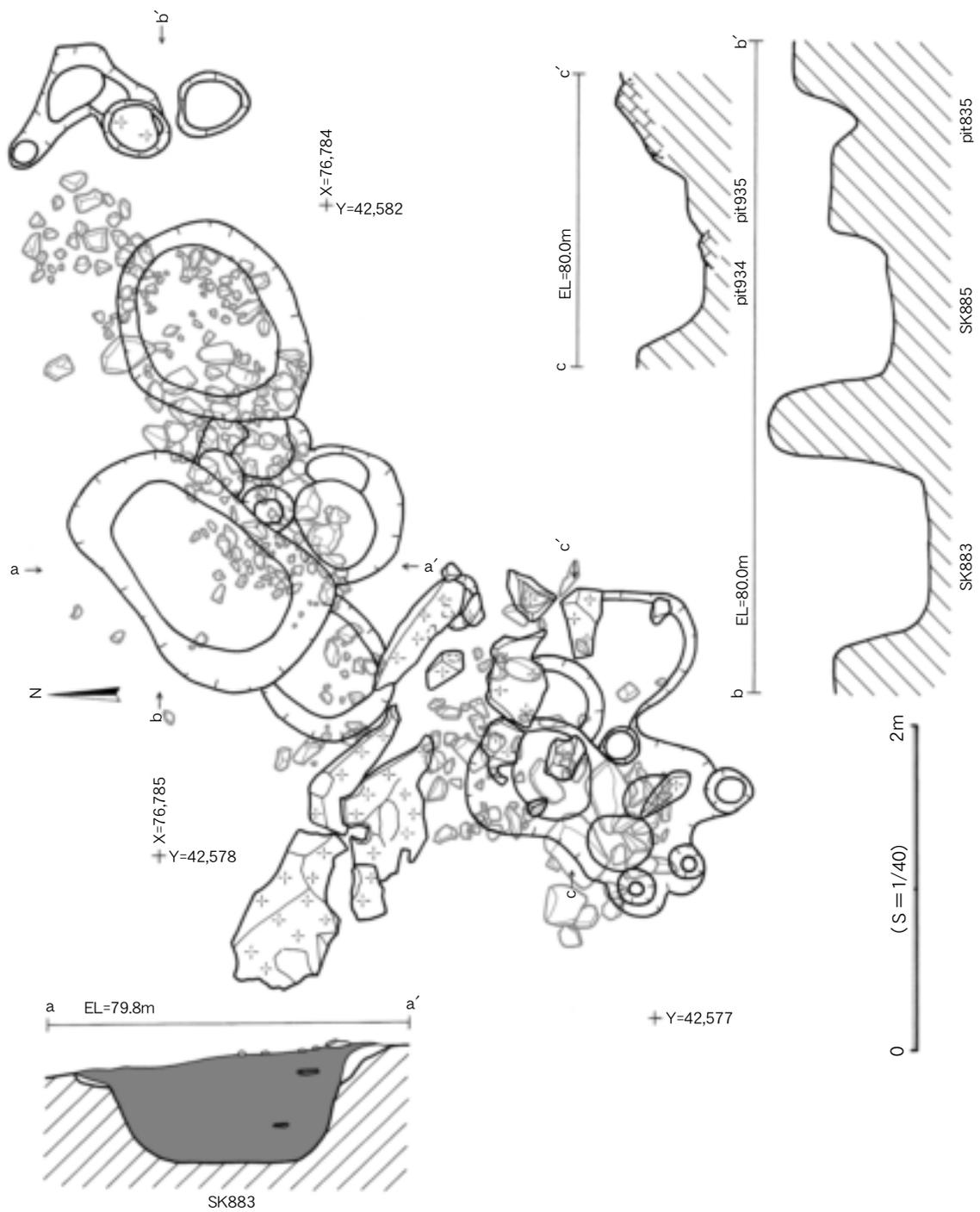
2. 青花 第36図-2は明代の青花碗で、直口碗 a（小野分類C群）の底部である。腰部に蕉葉文、見込に蓮華文を描く。第36図-3は口折碗（主郭分類Ⅳ類）の底部資料で高台はハの字型に外開きとなり、見込は凹む。

3. 白磁 第36図-4は白磁外反皿（森田分類E群）の小片で、大きく外反する薄手の口縁部資料である。

4. 褐釉陶器 第36図-5は内傾する口頸部に、三角形に肥厚する口縁部資料をもつ壺である。



第36図 屋敷地 2 (SX4) 出土遺物(4)



第37図 屋敷地2 遺構詳細図 (SX4)

〔名 称〕 屋敷地 2 の区画遺構の配置について (SR6、SD5、SX4) の概要

〔所 見〕 屋敷地 2 の北側にあるSR6 は土留めの石積と考えられる。これは北側に所在する屋敷地 1 との境界を成す石積み遺構で、屋敷地 1 と屋敷地 2 とでは約 1 m 程度の高低差を有する。他方、SD5 は溝状遺構と考えられ屋敷地 2 の東側に南北に延びる。残念ながら東側については道路の開発によって破壊されており、その東側との関係については詳細は不明である。但しこのSD5 周辺には既に柱穴などが少なくなっていることから、屋敷地でも縁辺部に属すると考えられる。南西側については露頭岩が発達しており区画を示す遺構は存在しない。また、南東側へは屋敷地 3 へ抜けることができる。ここには明確な区画を示す溝や石積みは見られない。

一方、ほぼ中央に位置する散在礫の遺構で、検出時にはSD5と同様溝状の遺構と考えられたSX4は屋敷地 2 の北側 (屋敷地 2 b) と南側 (屋敷地 2 a) を区画する施設と考えた。区画遺構としては堅固ではなく、極めて簡便な施設であるため、実際に屋敷地 2 を a b の二つの屋敷地に区画するほどの施設であったのかは確定的ではない。単に屋敷地内における空間利用の相違によるものの可能性も考慮する必要がある。

以上のように、屋敷地 2 は北側は一段と低くなっていて、土留め石積み (SR6) が屋敷地 1 との区画となり、東側は溝 (SD5)、南西側は自然地形で、南東側には区画が無く屋敷地 3 へ至る空間配置であったものと想定される。



第38図 屋敷地 2 区画遺構の配置

〔名称〕 屋敷地 2 b : SK300 (土坑)

〔位置〕 Ⅲ区 b (N-20)

〔検出面〕 Ⅳ層 (地山)

〔遺構構成〕 土坑 1 基

〔規模〕 長軸約200cm、短軸約150cm、深さ約90cm

〔所見〕 遺構検出当初はSK300とSK301に分かれていたが、調査を行うと同一の遺構と解ったためSK300に統一した。大型の土坑で用途は不明である。規模は長軸200cm、短軸150cmの楕円形の平面で側壁の立ち上がりはほぼ垂直となる。深さはGLより約90cm前後でかなり深い土坑となる。覆土からは青磁碗・皿、白磁杯、天目、ベトナム青花、勾玉、鉄製品等が出土しており、特に銭貨が多く出土する。各層から出土する遺物はそれぞれ接合が可能で、短期間で廃棄された土坑と考えられる。

〔遺構内堆積層〕 土坑覆土は暗褐色で、混入物には小礫を含み、明褐色の土が大小ブロック状に含まれる。また、遺構全体からある程度炭の混入が認められ、特に土坑内の下層 (iii層) からは大量の炭が堆積し炭層となる。

i 層: 暗褐色土にブロック状の明褐色土を含む。a 層: ブロック状の明褐色土を少量含む。b 層: 炭層。粘性は弱い。

ii 層: 暗褐色土にブロック状の明褐色土を混入する。

a層: 細かいブロック状の明褐色土を多く混入。b

層: ブロック状の明褐色土を多く混入する。c 層:

細かいブロック状の明褐色土を多く混入する。

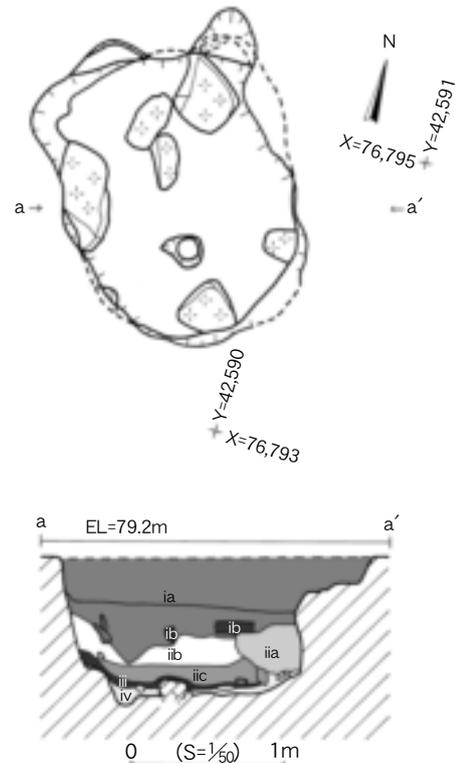
iii 層: 黒色の炭層。

iv 層: 暗褐色土に細かいブロック状の明褐色土を多く混入する。

〔遺物〕 第40～42図はSK300から出土した主な出土遺物である。

1) 陶磁器

1. 青磁 第40図-1～3は青磁無文外反碗で、1は畳付け部分を面取りし底部の厚みもやや厚手となる。口縁部は豊かな腰からあまり広がらずに口縁部へいたり端反りとなる。見込には花文を押印する。第40図-2・3は口縁部の資料。第40図-4は無文外反碗bで素地は灰白色で釉を薄く施釉する特徴をもつ。第40図-5は細蓮弁碗aに類する標品で、細蓮弁碗aの小碗ともいべき資料と考えられる。この資料は既報告 (村文化財調査報告書12集・13図-14) 資料で、1次調査の際に得られた表品と今回調査資料との接合によって高台から口縁部までを得ることによって図上復元できた。外面の細蓮弁文は腰部下まで密に描かれ、弁頭も比較的丁寧に描かれる。外底の様子は不明だが、一旦釉を施釉し釉剥ぎする方法と推定される。第40図-6は青磁口折皿で篋彫りの蓮弁を外面に描き、施釉は薄い。第40図-7は腰折皿dの資料で内外面無文で、見込に花文が押印される。第40図-8は無文外反皿で器形は浅く小さい。第40図-9は碁笥底の杯である。第40図-10は鍔縁の盤で、器壁断面の観察から体内面に篋彫りによって蓮弁を描くも



第39図 屋敷地 2 遺構詳細図 (SK300)

のと考えられる。

2. **白磁** 第41図-11は外反碗（森田C群）底部資料で、見込に花文が押印される。第41図-12～14は森田D群で、12は外反する小杯（小皿）で13の底部と同一個体と目される。14は八角杯で、体部を八角に面取りし口縁部を端反りとする。

3. **褐釉陶器** 第41図-15は鉢形の褐釉陶器で今帰仁城跡を含めて全形を窺える事例は初である。一部欠損するがほぼ全体を保持する資料で、器内面は全面を器外面は口縁下約2 cmまでを施釉し、胴部から底部の外体面は露体となる。素地は白色の鉱物粒を多く含みやや赤味のある特徴を持つ。口縁部の形状は内側には方形、外側には三角形に小さく肥厚する。

4. **ベトナム陶磁** 第41図-16は青花瓶の胴部資料、腰部のラマ式蓮弁文を描く部分と思われる。

2) 玉類

第41図-17は勾玉の破損品で表面は風化し白化するが、断面の発色は青い。ガラス製である。

3) 遊具

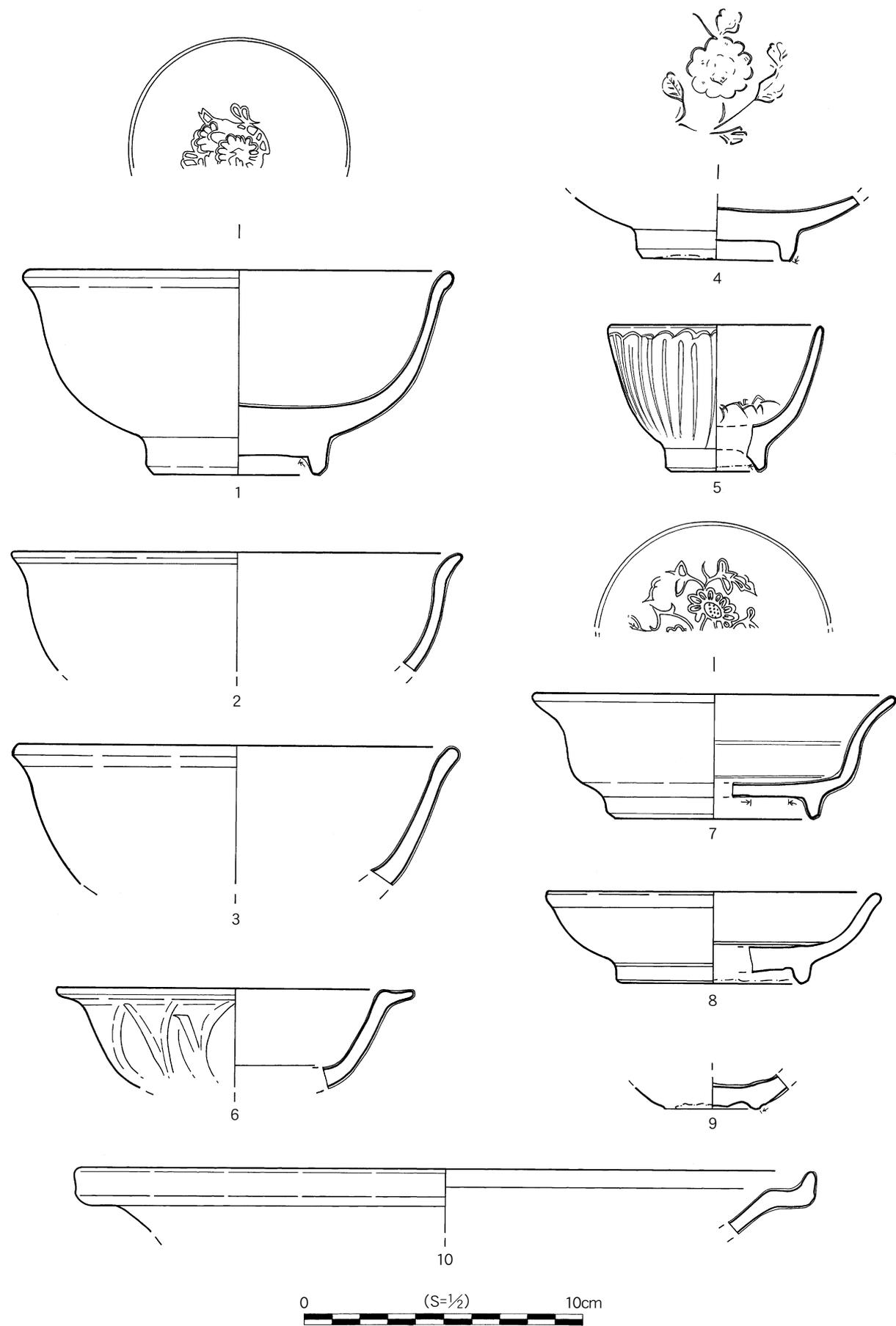
第41図-18・19は石製品で、いわゆる円盤状製品に類すると考えられる。18は直径約4 cmの大きな表品で石質は砂岩、19は直径約1 cmの小さな表品で石質は頁岩となる。

4) 金属製品

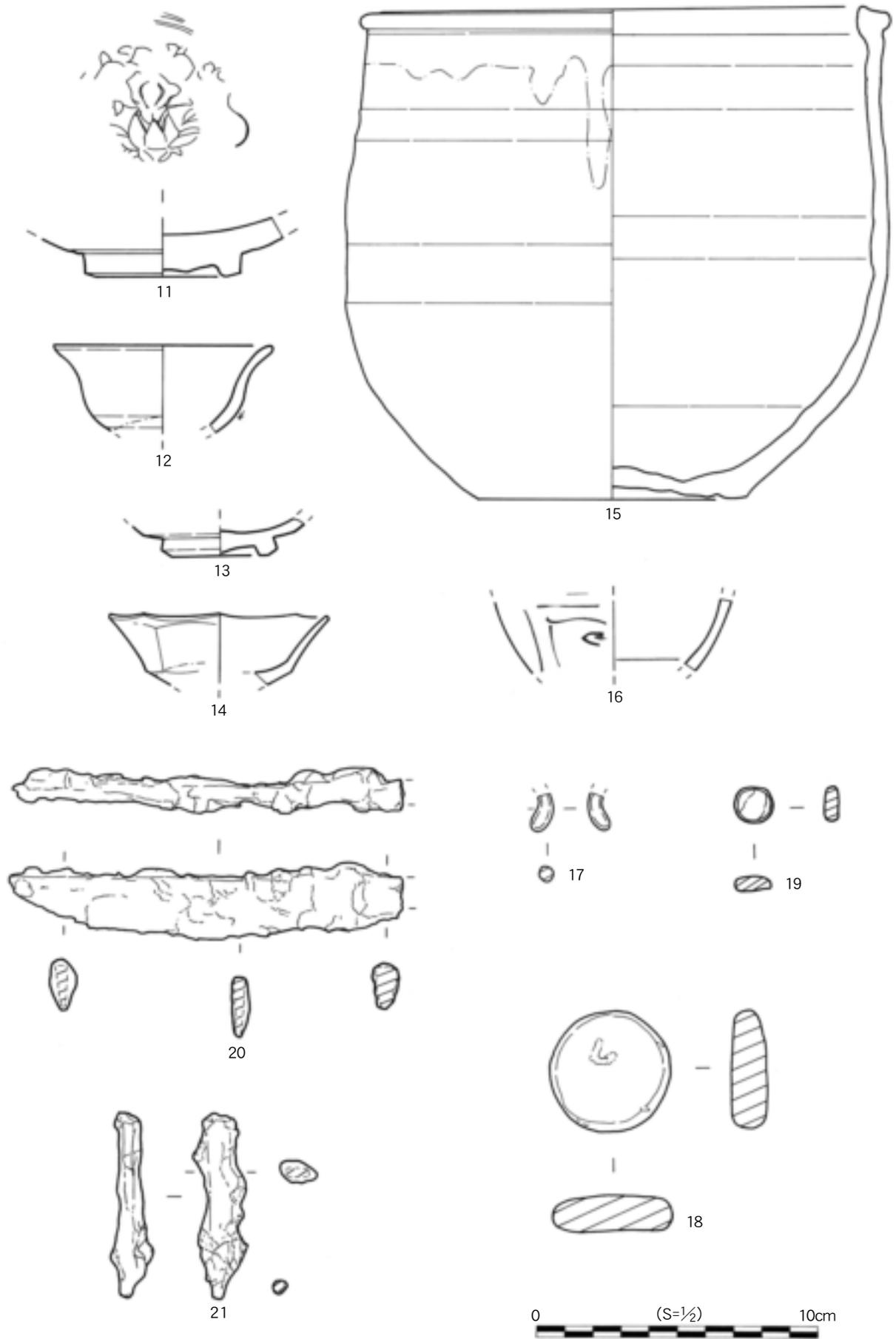
第41図-20・21は鉄製品で、20は刀子で柄の部分が欠損するが、刃部全体を保持する状態良好な資料である。刃先の反りは緩やかで主郭分類I類の形態となる。第41図-21は鏑の付着が著しいが、断面方形で長さ約7 cmの鉄釘と考えられる資料である。

5) 銭貨

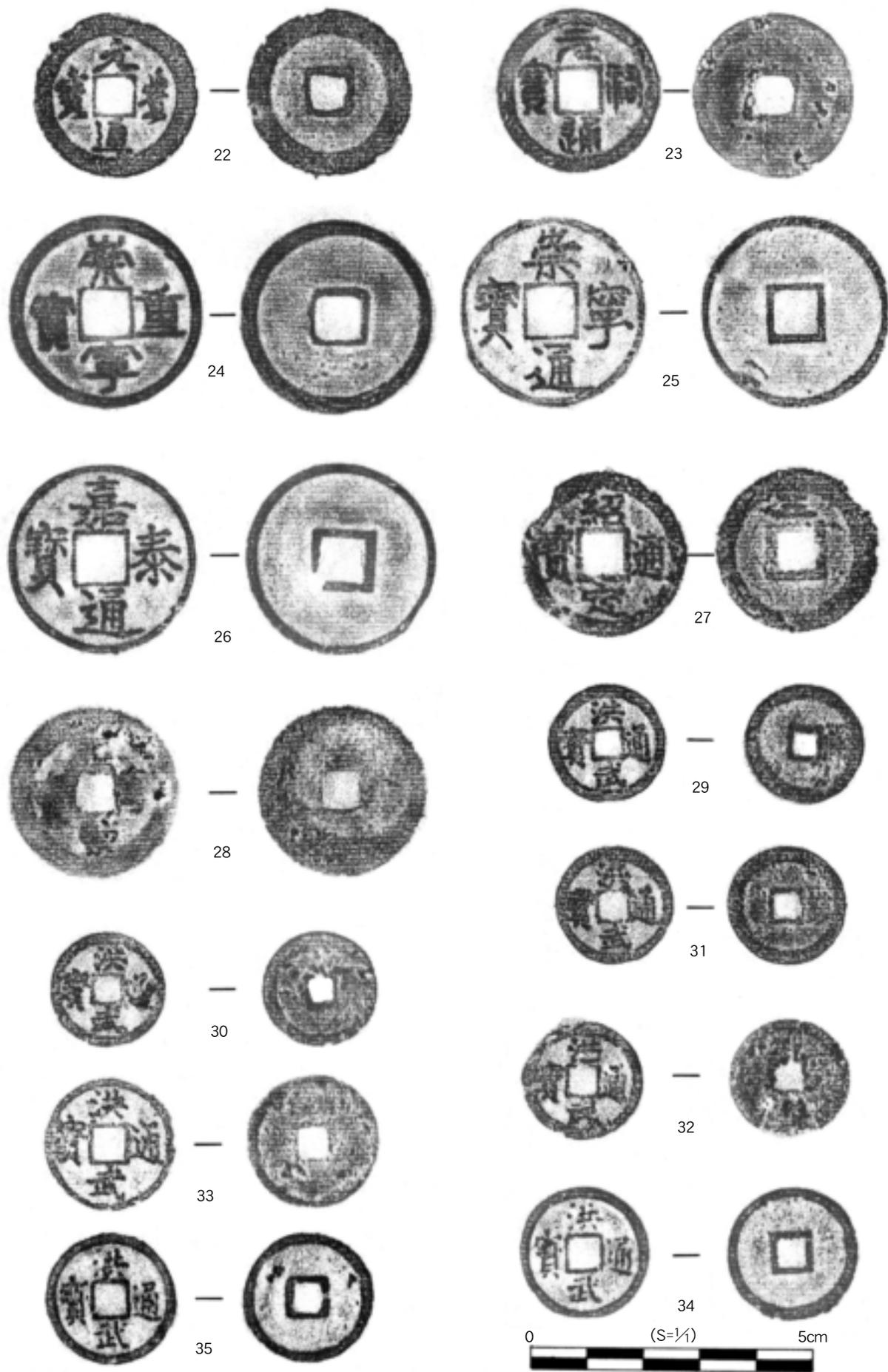
第42図の14点は中国銭で、土坑内の堆積層より出土した資料である。同一地からまとまって出土した状況はないが、大きな土坑内一括として報告する。図番号、銭名、(国名、初鑄年)の順に記載する。22は元豊通寶の折二銭(北宋, 1078)。23は元祐通寶の折二銭(北宋, 1093)。24は崇寧重寶(北宋, 1103)の当十銭。25は崇寧通寶(北宋, 1102)の当十銭。26は嘉泰通寶の当三銭(南宋, 1201)。27は紹定通寶の折二銭で裏文字は「三」と判読できる(南宋, 1228)。28は銭名が判読し難い資料であるが、元□□□から、元豊通寶の可能性が高い。29～35は洪武通寶(明, 1368)である。大きさを大別すると3～3.5cm前後の銭(29～32)と2～2.3cm前後の銭(33～35)に分けられる。なお、29は不鮮明だが裏文字に「一銭」が判読可能である。



第40図 屋敷地 2 (SK300) 出土遺物(5)



第41図 屋敷地 2 (SK300) 出土遺物(6)



第42図 屋敷地2 (SK300) 出土遺物(7)

〔名称〕 屋敷地 2 a : SK24 (炉跡)

〔位置〕 III区 b (O-20)

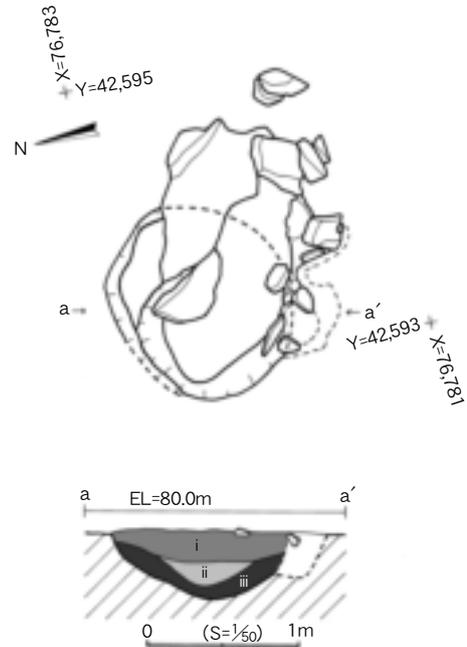
〔検出面〕 IV層 (地山)

〔遺構構成〕 炉跡 1 基

〔規模〕 長軸約145cm、短軸約110cm、深さ約45cm

〔所見〕 柱穴遺構と切り合う形で検出。規模は平面観が約145×110cmの円形状となり、底面からGLまでの深さは45cm前後で、底面はフラットにならず弧状となる。遺構完掘後、地山面から炉跡に切られたと思われる柱穴遺構を検出している (pit355)。dot.228から褐釉陶器などが出土している。

〔遺構内堆積層〕 土坑内覆土は暗褐色である。i層上面には礫が多く含まれるがそれから下はほとんど含まない。i層：暗褐色土にブロック状の赤褐色の土塊を大量に含む。ii層：暗褐色土に褐色土を大量に含む、赤色土と炭は微量に混入する。iii層：暗褐色土に褐色土を少量混入し、炭を微量に混入する。



第43図 屋敷地 2 遺構詳細図 (SK24)

〔名称〕 屋敷地 2 a : SK883 (土坑)

〔位置〕 III区 b (O-19)

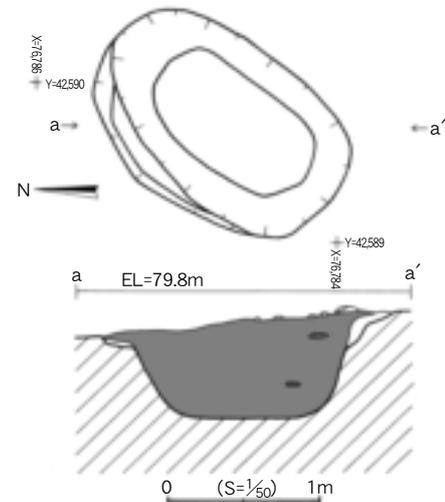
〔検出面〕 IV層 (地山)

〔遺構構成〕 土坑 1 基

〔規模〕 長軸約175cm、短軸約110cm、深さ約65cm

〔所見〕 SX4の集石遺構を撤去後、地山面より用途不明の土坑SK883が柱穴を切り合う形で検出されている。規模は平面観が長軸約175×短軸約110cmの楕円形となり、深さはGLより65cm前後なる。遺物は金属製品 (dot.540) やビーズ (dot.528) などが出土している。

〔遺構内堆積層〕 土坑内の覆土は暗褐色土で、混入物には小礫を含み、炭と明褐色土、赤色土が細かいブロック状に少量混入する。



第44図 屋敷地 2 遺構詳細図 (SK883)

〔名称〕 屋敷地 2 b : SK54 (土坑)

〔位置〕 Ⅲ区 b (N-20)

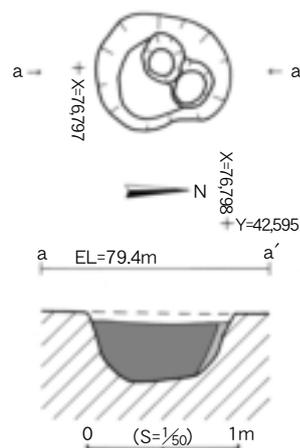
〔検出面〕 Ⅳ層 (地山)

〔遺構構成〕 土坑 1 基

〔規模〕 長軸94cm、短軸83cm、深さ45cm

〔所見〕 SK54単独で構成される土坑で用途は不明である。規模は平面観が長軸94cm×短軸83cmの楕円形となり、深さはGLより45cm前後で浅い土坑となる。覆土からの遺物は白磁杯などである。

〔遺構内堆積層〕 土坑覆土は暗褐色土で、混入物には小礫を含み、炭と明褐色土が細かいブロック状にまざる。



第45図 屋敷地 2 遺構詳細図 (SK54)

〔名称〕 屋敷地 2 b : SK60 (土坑)

〔位置〕 Ⅲ区 b (N-20)

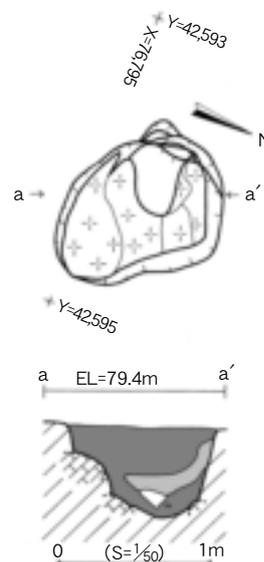
〔検出面〕 Ⅳ層 (地山)

〔遺構構成〕 土坑 1 基

〔規模〕 長軸約150cm、短軸約90cm、深さ約60cm

〔所見〕 SK60単独で構成される土坑で用途は不明である。土坑底面は岩盤となる。規模は平面観が長軸約120cm×短軸約90cmの楕円形となり、深さはGLより約60cm前後の土坑となる。

〔遺構内堆積層〕 土坑内の覆土は暗褐色土で赤色土が細かくブロック状に混入し、やや大きめの炭が少量混入する。また、明褐色土をブロック状に多く含んだ層が間に入る。



第46図 屋敷地 2 遺構詳細図 (SK60)

〔名称〕 屋敷地 2 a : Pit 2 (柱穴)

〔位置〕 Ⅲ区 b (O-20)

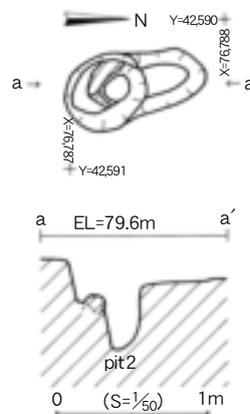
〔検出面〕 Ⅳ層 (地山)

〔遺構構成〕 不明

〔規模〕 長軸93cm、短軸48cm、深さ60cm

〔所見〕 円形の柱穴で、この柱穴を含む建造物のプランは不明。柱穴単体で報告する理由は、当該遺構内から大量の褐釉陶器が出土したためである。柱穴の長軸93cm、短軸48cm、深さ60cmで柱痕の径は約28cm。Ⅱ層 (包含層) を掘り下げた地山面で遺構が検出された。柱痕からは青磁碗と褐釉陶器が、遺構検出面から深さ約50cmにわたって一括出土した。この柱穴は二段掘りによって掘られ、二段目にくさび石が置かれたつくりとなっている。

〔遺構内堆積層〕 柱痕の堆積土は暗褐色土に炭が混ざる。



第47図 屋敷地 2 遺構詳細図 (pit2)

〔名称〕 屋敷地 2 b : SK1064 (土坑)

〔位置〕 Ⅲ区 b (N-19)

〔検出面〕 Ⅳ層 (地山)

〔遺構構成〕 土坑 1 基

〔規模〕 長軸約130cm、短軸約105cm、深さ約60cm

〔所見〕 SK1064単独で構成される土坑で用途は不明である。SR6を撤去後、斜面となった地山層より検出する。規模は平面観が約130×105cmの楕円形状となり、底面からGLまでの深さは60cm前後で、底面はフラットとなる。遺構完掘後、地山面から土坑に切られたと思われる柱穴遺構を検出している。覆土からの遺物は青磁盤 (dot.593) などが出土している。

〔遺構内堆積層〕 土坑内覆土は暗褐色である。 i 層: 暗褐色土にブロック状の明褐色土と炭を少量、赤色の細かいブロック粒を微量に含む。 ii 層: 暗褐色土に褐色土を大量に含み、小さな礫を少量混入する。

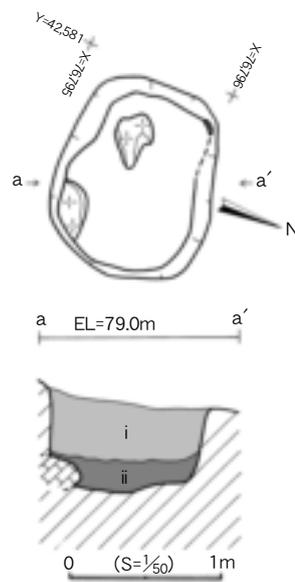
〔名称〕 屋敷地 2 b : SK1035 (土坑)

〔位置〕 Ⅲ区 b (N-19)

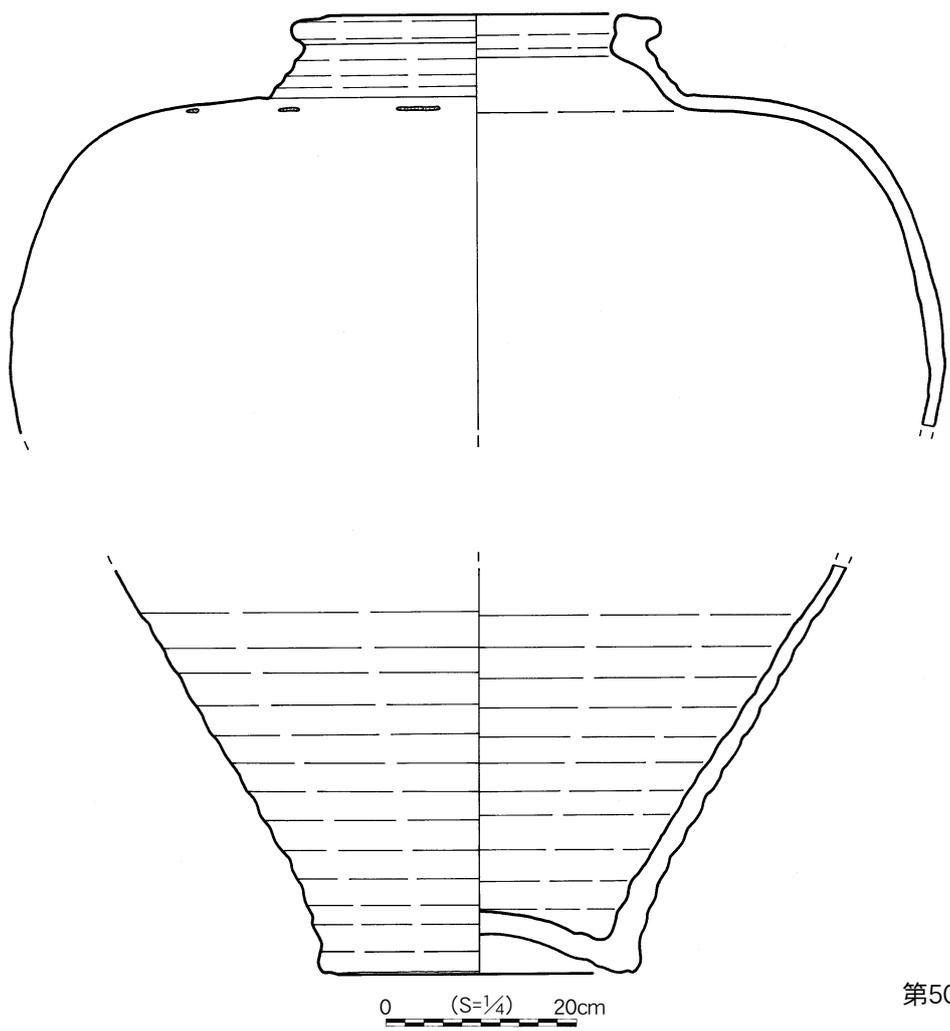
〔検出面〕 Ⅳ層 (地山)

〔遺構構成〕 土坑 1 基

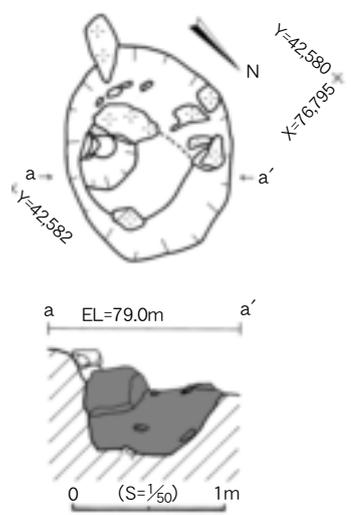
〔規模〕 長軸約140cm、短軸約110cm、深さ約45cm



第49図 屋敷地 2 遺構詳細図 (SK1064)



第48図 屋敷地 2 (pit2) 出土遺物 (8)



第50図 屋敷地 2 遺構詳細図 (SB1035)

〔所見〕SK1035単独で構成される土坑で用途は不明である。SR6を撤去後、斜面となった地山層より検出する。規模は平面観が約140×110cmの楕円形状となり、底面からGLまでの深さは45cm前後で、底面はフラットとなる。遺構完掘後、地山面から土坑に切られたと思われる柱穴遺構を検出している。覆土からの遺物は青磁碗 (dot.583)、腰折外反皿、鉄製品などが出土している。

〔遺構内堆積層〕土坑内覆土は暗褐色で、炭を少量、明褐色のブロック状となった細粒を微量に混入する。大きいもので40cm大の礫から拳大のものまで礫を混入する。

〔名称〕屋敷地2a：SX824（不明遺構）

〔位置〕Ⅲ区b（P-20）

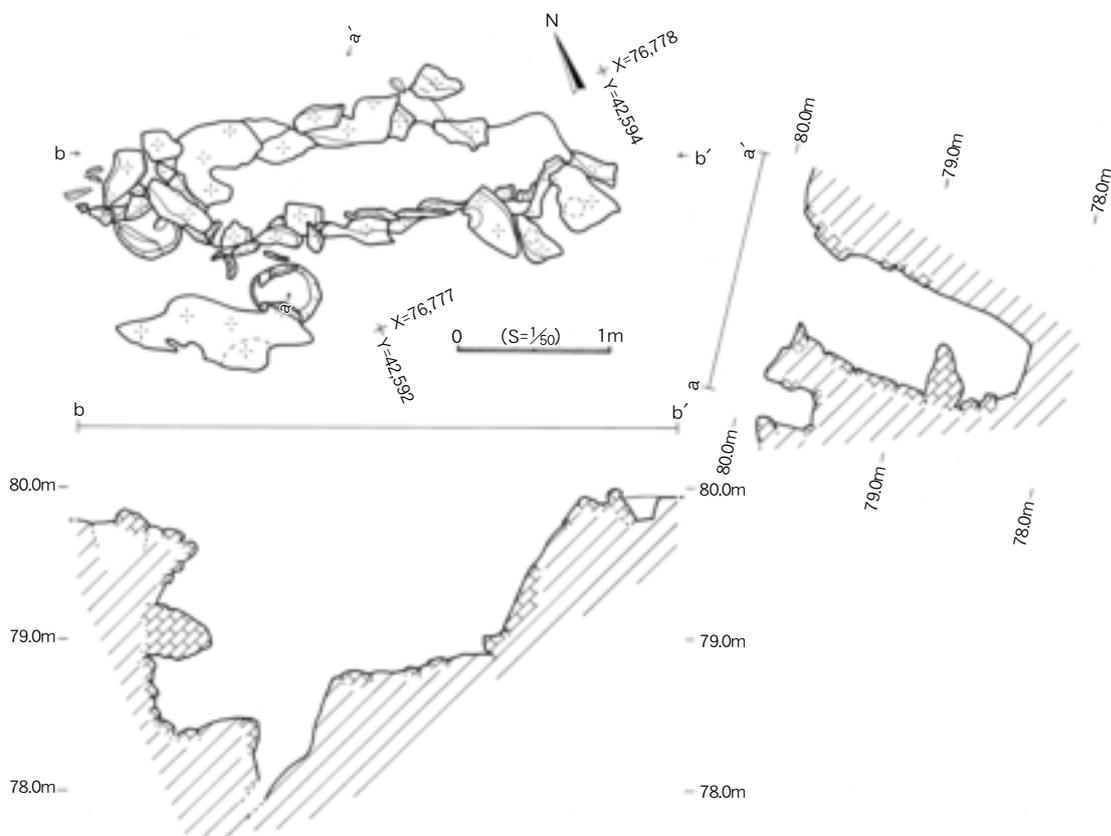
〔検出面〕Ⅳ層（地山）

〔遺構構成〕不明土坑1基

〔規模〕長軸285cm、短軸95cm、深さ不明2m以上

〔所見〕SX824単独で構成される用途不明の落ち込み遺構。自然にできた石灰岩のフィッシャー内に礫が詰め込まれるように堆積する。覆土からの遺物は櫛描文皿 (dot.479)、染付碗 (dot.462) などが出土している。

〔遺構内堆積層〕遺構内覆土には人頭大の礫を雑然と大量に含む。下層の覆土は固く締まらず湿ったシルト質の土塊となって、礫が充填し隙間が大きくなる。



第51図 屋敷地2 遺構詳細図(SX824)

(3) 人工遺物

1) 陶磁器

1. 土器 土器はグスク時代に属するもので、総じて粘板岩を混和材に用いる特徴をもつ。第52図1・2は比較的短頸の壺形土器口縁部資料である。3・4は器種不明で、碗もしくは鍋形土器の口縁部小片である。直立する口縁部で端部は舌状に尖る。5はミニチュア土器の底部資料で、6～9は器種不明の底部資料である。6は底面に木葉痕を残す。

2. 瓦質土器 10は瓦質土器と考えられる口縁部小片資料である。全体的に摩滅し器面保持は不良である。鉢形器形の口縁部と推量され口縁部外面が一端凹むタイプになる。

3. カムイヤキ 11はカムイヤキ胴部の破片資料で、胴部外面に沈線文が線刻される。モチーフは不明。12は壺の頸部破片。

4. 青磁 第53図13～15は劃花文碗(大宰府分類I類)で、13は口縁部資料、14・15は底部資料である。16は鎬蓮弁文碗b(大宰府分類I類)で、素地は白色釉で発色は良い。17は唐草刻文碗で、口縁部に四方櫛文、胴体部内外面に唐草文、腰部外面に蓮弁文を片彫り形で描く良品で、素地は白色、釉の発色も比較的良い。18・19は無文外反碗で焼成不良で釉の発色も悪い標品である。20～22は口縁部が直口する無文碗。23～26は雷文帯碗で、23～25はヘラ彫りによって口縁部に雷文を施文、26はスタンプによって雷文帯を配し、内面は人物図が型取りされる。第54図27～30は碗底部資料で、27～29はヘラ彫りによって腰部下半まで線彫りされる標品で、蓮弁文碗もしくは雷文帯碗等の底部と推察される。30・31は幅広の高台径から推察して無文外反碗の底部資料などと考えられる。32～39は細蓮弁文碗で、32～36は口縁部資料、37～39は底部資料である。40・41はその形状等から無文の直口碗もしくは細蓮

第8表 屋敷地2出土遺物一覧表

種別	分類	器種・分類	個体数	百分率		
在 地	土器	鍋・鉢・壺・等	4	0.30%	0.30%	0.61%
	カムイヤキ	壺・鉢・甕・等	3	0.23%	0.23%	
	瓦質土器	蓋・不明	1	0.08%	0.08%	
	沖繩産陶器	壺	有り			
中国	青磁	碗	626	47.50%	61.84%	97.50%
		皿	150	11.38%		
		盤	31	2.35%		
		杯	2	0.15%		
		香炉	2	0.15%		
		瓶	2	0.15%		
		器台	1	0.08%		
		酒会壺(身・蓋)	1	0.08%		
		置物		0.00%		
		白磁	碗	26		
	皿	63	4.78%			
	杯	10	0.76%			
	燈明皿	4	0.30%			
	壺	5	0.38%			
	青花	元・元様式		0.00%	22.69%	
		碗	159	12.06%		
		皿	122	9.26%		
		大皿	2	0.15%		
		杯・小杯	13	0.99%		
		壺		0.00%		
瓶		1	0.08%			
鉢			0.00%			
水注			0.00%			
合子(身・蓋)		2	0.15%			
青白磁	瓶		0.00%	0.00%		
合子		0.00%				
天目	碗	2	0.15%	0.15%		
不明焼き縮め陶器	碗	1	0.08%	0.08%		
白濁釉陶器	壺		0.00%	0.00%		
褐釉陶器	茶入れ	1	0.08%	3.64%		
	急須(身・蓋)	1	0.08%			
	小型壺	18	1.37%			
	大型壺	27	2.05%			
	長胴壺		0.00%			
	挿り鉢		0.00%			
	深鉢	1	0.08%			
	花鉢・ほか		0.00%			
	五彩・赤絵	碗	2		0.15%	0.15%
	瑠璃釉	碗	1		0.08%	0.15%
瓶	1	0.08%				
翡翠釉	皿	1	0.08%	0.23%		
	壺	1	0.08%			
緑釉	瓶	1	0.08%	0.08%		
	不明	1	0.08%			
三彩	その他・不明	2	0.15%	0.30%		
	水注	2	0.15%			
タイ	土器	蓋	0.00%	0.00%		
	壺		0.00%			
	鉄絵	合子(身・蓋)	2	0.15%	0.15%	
	褐釉陶器	大型壺	10	0.76%		
		中型壺	7	0.53%		
		小型壺		0.00%		
瓶		0.00%				
青磁		0.00%	0.00%			
ベトナム	白磁	碗	1	0.08%	0.15%	
	青磁	碗		0.00%		
	青花	瓶・その他	1	0.08%		
高麗	青磁	碗	1	0.08%	0.00%	
	不明	不明陶磁	1	0.08%		
日本本土	備前焼縮め	挿り鉢	3	0.23%	0.23%	
	肥前磁器	碗・その他	2			
	近代陶磁器	碗・その他	有り			
陶磁器	総計		1,318	100.00%		
玉類	勾玉		4	9.76%		
	丸玉・小玉		37	90.24%		
煙管	石製加工(雁首)		1			
	銅製(雁首・吸い口)		2			
遊具	I類		2	15.38%		
	II類		11	84.62%		
	中国銭(有文)		25	92.59%		
銭貨	無文銭		2	7.41%		
	寛永通寶					
金属製品	鉄製品	釘	55	57.29%		
		刀子	8	8.33%		
		鎌	4	4.17%		
		鉄		0.00%		
		釣り針	1	1.04%		
		その他・不明	28	29.17%		
	銅製品	推定・近現代	1			
		座金・飾り金物等	3	17.65%		
		錠等	2	11.76%		
		簪・装飾品	1	5.88%		
その他・不明	11	64.71%				
石製品	石斧	1	3.33%			
	砥石	10	32.26%			
	硯	1	3.23%			
	錘	1	3.23%			
	不明	17	54.84%			
貝製品	漁網錘?	2				
土製品	土葬ほか	2				
骨製品	骨ヘラ	1				
	歯ブラシ					
陶磁器以外の人工遺物			226			

※網掛け部分は12～16世紀以外の近世以降の遺物。
※遺物の比率については中世のものだけを対象としている。

弁文碗の底部資料と考えられる。第55図42・43は青磁櫛描文皿で小破片を図上復元した。44は底部資料で、外面に蓮弁文を篋彫りする特徴から、蓮弁口折皿の底部資料と考えられる。45・46は蓮弁直口皿で、45は内外面に二本一組の蓮弁を配する事例で、46は外面無文、内面蓮弁文を配する小皿の口縁部である。47～52は腰折皿で、47・48は内外面を無文とする腰折皿d。49は逆に内外面とも有文となる腰折皿b。50～52は口縁部を稜花とする腰折皿cで、いずれも高台径は小さく器高は低くなる。53～55は盤で、53は口縁部を鏝縁とし内面に篋彫りの蓮弁文とする。54・55は底部資料で54は無文、55は見込に篋彫りの文様を描くが不鮮明でモチーフは不明である。56は香炉の口縁部資料である。57は水滴で、ほぼ取っ手や注口、口縁部を欠くものの概ね全形をうかがい知ることができる。上面から見ると花卉のような貼付文が展開しており、凝った装飾が施される標品である。青磁として扱ったが釉調は白色に近くあるいは白磁、青白磁とも分類するべきかと考える。

5. 白磁 第56図は白磁である。58は白磁底部資料だが、形態から口禿碗の底部資料。59・60は今帰仁タイプ碗で、59は口縁部資料、口縁端部に重ね焼きによって釉着したと考えられる痕跡が付着する。60は底部資料で見込の釉を輪状に釉剥ぎする。61・62はピロースクタイプ碗で両者ともピロースクタイプ碗bに属する。63・64は外反碗の口縁部資料である。65は外反碗と同一種の底部資料で、器種は白磁皿と考えられる。66～69は直口碗で見込は露胎にする粗製の資料である。66は口縁部資料、67は全形をうかがえる資料で、見込は拭き取るような形で露胎させる。68・69は底部資料で、69は見込に雷文で描いた円の中央に「堂」の字を押印する。70～75は森田D群の白磁皿、杯である。70～72は直口皿で、70は口径の小さな小皿、71はやや径の大きな口縁部資料。72は皿もしくは小杯の底部資料。73・74は腰部で一端屈曲する杯で、75はやや丸みをもった小杯である。76～78は外反皿（森田分類E群）で、76は全形をうかがえる資料で、図上復元した。79は分類不詳の粗製白磁である。器種は浅く広い皿と推測されるが、碗である可能性もある。80～83は磁胎の白磁杯で、口縁部を輪花状にする80～82、83は口縁部が大きく開く小杯で、同一個体と考えられる底部資料と図上復元した。84は燈明皿で、欠けの無い完形の資料である。

6. 青花 第57図は青花碗である。85・86は外反碗で、前者が主郭分類I類、後者が主郭分類II類に該当する。87～91は見込みの凹む蓮子碗のタイプで、直口碗aに該当する。87～91は主郭分類IIIに該当する。92は口折碗（主郭分類IV類）で本資料は釉や呉須の発色が悪く粗製の資料である。93～96は直口碗d（主郭分類V類）で93は口縁部を波濤文とし胴部にアラバスク文を描く。94は口縁部に波濤文を配し蕉葉文を胴部に描く資料である。但し、94については直立する口縁部から直口碗bとしたが、文様モチーフも同種となる直口碗aの可能性もある。95・96は底部資料でアラバスク文を外面に描き見込に花文・十字文を配する。97は直口碗dで、いわゆる饅頭形に見込みの盛り上がるタイプで主郭分類VI類の底部資料である。見込にはダミ技法によって花文が描かれ、内底には「富貴佳器」の字款が書かれている。98は粗製の碗底部で、見込は釉剥ぎし露胎、外面に圏線が廻る。

第58図99～102は外反皿の資料である。99のように文様を比較的密に描き、呉須の発色も良い外反皿と、100～102のように比較的空白が多く青みの発色の悪い外反皿が認められる。後者の文様は外面に唐草文を描き、見込は十字文か玉取り獅子などが描かれる。103～105は碁笥底皿で、103・104は外面口縁部を波濤文、胴部に蕉葉文が描かれる。105はやや大きい碁笥底皿の底部資料で見込は「寿」の字をモチーフとする文様と考えられる。106は碁笥底皿の資料だが外反する口縁部をもつ小片資料である。107は主郭分類III類の資料で、見込の文様は花鳥図と考えられる。108は大皿の底部資料だが小片のため分類は不詳。109は粗製の皿底部資料と考えられ、見込を蛇の目釉剥ぎし見込中央に染付けで絵付けする。110は菊花状に口縁部

を刻む皿の小片。111は筒形の直口杯 a で、胴中央には隆帯が廻り、文様はダミ技法による絵付けがされる。112・113は小杯で112が口縁部資料、113が底部資料である。114は馬上杯と考えられる小片資料で、坏部分の見込に簡単な文様が描かれ、これに脚が付されているが、口縁や脚部が大きく破損しているため詳細は不明。115は玉壺春瓶の底部資料で胴部の主文様は唐草文、腰部にはラマ式蓮弁文を描く資料である。第59図116は底部資料だが器種不明、瓶等の袋物の底部資料。117は香炉と考えられる資料で、胴上半にモチーフ不詳の三角形の文様が配され、脚が三つ付されると考えるが得られた資料からは1つのみであるため復元径は推算による。また、本資料に金属が溶解し、付着したような形で付着している。118・119は用途不詳の蓋と考えられる資料である。

7. **褐釉陶器** 第59図120～122は褐釉陶器で120はグスク時代遺跡では最も一般的に見られる大型壺で、褐釉壺 d の口縁部資料である。本資料は火受けしたと見られ釉が泡を吹き表面がザラついている。121は褐釉急須の注口部分の資料で灰黄褐色の素地に白色粒（石英）を比較的多く含み、黒褐色の釉を施釉する特徴を持つ。122は瓶で、今帰仁城跡を含めても類例に乏しい資料である。

8. **焼締陶器** 第59図123は釉を掛けない焼締陶器で砂粒を多く含む鉢の口縁部資料である。

9. **黒釉（天目）碗** 第59図124～126は黒釉碗で、124は口縁部資料、125・126は底部資料である。口縁部は外側に直線的に開き口縁下で一端屈曲して直立する器形。底部は高台際を削り屈曲するところと、内底の削りは浅くなる点に特徴がある。126については高台脇部分から胴部全てを欠いており、底部を円盤状製品として利用した資料と考えられる。

10. **瑠璃釉** 第59図127～129は瑠璃釉の磁器で、127は複数個の瑠璃釉磁器小片から同一個体と考えられる口縁部と底部をピックアップして復元した碗である。いわゆる見込みの凹む蓮子形となる資料で、口縁部で大きく端反りとなる。128は瓶の口縁部、129は瓶の底部資料と考えられる資料である。いずれの資料も外面は瑠璃釉を施釉し、内面は白色となる。

11. **色絵** 第59図130は色絵磁器の皿で、同一個体と推定される小片を図上復元した。赤色と緑色の絵付けと考えられるが、赤は消え痕跡のみとなる。文様のモチーフは小片のため不明だが、唐草文等と考えられる。131は1984年の試掘調査で出土した資料（「村報告12集」第19図-8）と接合する。見込中央に赤絵で渦巻きと放射状に細い花卉を描き、釉剥ぎした露胎部分を線彫りで太い花卉を描き緑釉を施釉する。

12. **三彩** 第59図132は人形の製品で胸前で両手を重ねた箇所箇所に小穴を穿ち線香立てに使用する人形線香立てである。類例として『インドネシア・スラウェシ島に渡った三彩』9p（福岡市美術館2001）に紹介される資料に類品が見られる。133は三彩もしくは緑釉の袋物の底部資料である。内底は黄釉を施釉、外面は緑釉を施釉、内体面は露胎となる。

13. **緑釉** 第59図134は緑釉瓶の小片である、唐草文等の文様が線彫りされる。釉は剥落し緑釉もしくは翡翠釉になると思われる。

14. **翡翠釉** 第59図135は翡翠釉の胴部小片で、轆轤成形で外面を篋彫り、瓜形もしくは蓮弁文を描いた資料と考えられる。

15. **不明資料** 第59図136は白化粧後藍色の釉を施釉する胴部小片の資料で、線彫りした圏線に埋まる白土が文様となる。小壺等袋物の肩部資料と考えられるが、産地等不明の標品である。釉も剥落し、胎土等も沖縄産陶器（近世～近代）とも近似することから新しい時代の資料とも考えたが、Ⅱ層出土であるので、詳細不明の資料であるが取り扱った。

16. **タイ陶磁** 第60図137～142はタイ産の陶磁器である。137～140は褐釉陶器壺、141・142は鉄絵合子の資料である。137は褐釉陶器大型四耳壺 c に該当する資料と考えられるが、口縁部の肥厚は三角形状に近く、口縁部が開き大型壺 a とも類似する。138は大型壺 a の資料

で口縁部は外側に大きく開き口縁部上位に凹線が廻る、素地に石英粒を多く含み褐釉は黒色となる。139は褐釉大型壺の底部資料で、焼成は不良で釉も剥落する、二次焼成を受けた資料とも考えられる。140は褐釉中型壺で口縁部は丸く肥厚し外側に開くタイプで、釉は口縁部内面途中まで掛かる。141は鉄絵合子の蓋、142は鉄絵合子の身底部資料と思われる。

17. **ベトナム陶磁** 第60図143は白磁碗の胴部資料で、内面に型押による青海波文が配される。口唇部は口禿とし露胎する。144は青花瓶の胴部資料でまったく同じタイプの資料として今帰仁城跡主郭出土資料（第82図-7）に類品を知ることができる。玉壺春瓶の頸部資料で削りを入れ縦方向に溝を彫り八角状に区画、各区画の窓枠内に草花文と青海波を交互に描いたと考えられる。本資料は草花の葉部分を推定する文様が認められる。なお、主郭資料と本資料とは接合するか試みたが、接合することは無かった。

4) 遊具

第60図145～154・第59図126はいわゆる円盤状製品である。陶磁器を円形に打割、「おはじき」等の遊具として利用されたと考えられる。陶磁器の素材はそれぞれ145～147は青磁、148～152は中国褐釉陶器、153・154はタイ褐釉陶器の胴部片を利用した資料である。正円にはならないが、概略10mm～25mm前後の円形に仕上げ重量は約2g～6gとなる。第59図126は天目碗の底部資料で自然状態での割れ欠けとも考えられるが円形の破片であるため紹介する。

5) 玉

第61図は勾玉やガラスの小玉類である。主郭では玉類を形状から、Ⅰ類（勾玉）・Ⅱ類（管玉）・Ⅲ類（丸玉）とした。ここではその形状から勾玉、白玉、丸玉、小玉として報告する。白玉は前回主郭分類の管玉の一部を形状と材質から分けた。小玉は前回主郭分類の丸玉のⅢcを呼称の変更を行った。165～167は勾玉である。いずれもガラス製となる。168は水晶製と考えられる白玉で、阿応理屋恵勾玉の水晶玉一連（村報告20集）の水晶玉と形状は類似するがサイズはやや小さい。169～173は透明度の高い丸玉で水晶製かガラス製のものが判別は専門の鑑定を得ないと判然としない。174～184は丸玉でガラス製のものである。185～193は小玉とした資料で、溶解したガラスを直径1.5～1.0mmの棒状の道具に2～3回程度巻き付けて製品とする玉である。

6) 銭貨

第62図155は開元通寶（唐、845）である。腐食が著しく不鮮明である。156は至和元寶（北宋、1054）真書体。157は元豊通寶（北宋、1078）篆書体・折二銭。158は嘉定通寶（南宋、1208）折二銭・背文字「七」が読める。159～161は洪武通寶（明、1368）。159は腐食が著しく判然としないものの、背文字「一銭」の資料と考えられる。160は比較的形態も整うが、161は腐食からか全体的に崩れている。162は永樂通寶（明、1408）で、形態も整い腐食のない資料である。163は厚みも無く腐食し銭名の判読できない資料である。164は無文銭で円形方孔の資料で、この他にも拓本が採ることができなかつた資料が3点得られている（銭名不明銭2点、無文銭1点）。本項で紹介した11点（図示していない資料3点を含む）のうち9点が遺構内の覆土からで、4点が包含層出土である。既に遺構の各項で紹介した14点（SK300）の資料を合わせると、遺構内からの出土頻度が高いことが言える。

7) 金属製品

第63図は金属製品で、194～202は銅製（真鍮等の合金を含む）、203～214は鉄製に大きく分けることができる。194は飾り金具の破片資料。195は鉾の頭部分で、文様は不明瞭であるが桐紋と推定される文様が立体感をもって陽刻、鍍金された装飾性の高い飾り鉾頭部の資料である。196は鉾の頭部資料で環状の金具が付いていたものと考えられる。四角形を面取し切子頭とする。腐食が著しく鍍金の有無は不明。197は丸頭の鉾で、鍍金された痕跡を認めることができる。198は縁金具で鍍金有り。199は環状の製品で、貴金物のような製品と考えられ、鍍金有り。200は簪で頭部を欠損する。201は筒状の用途不明品。202は針金状の製品でこれも用途不明である。

203～214は鉄製品である。いずれも錆の付着が著しく、破損しているものについては、その原形を伺うことは困難なものも少なくない。比較的良好な資料から紹介する。203は釣り針で完形品である。サイズは太さ径4mm、軸の長さ3.4mm、ふところの長さが1.5mmで、針先が1.8mmを測る。204・205は刀子でいずれも刃先で反りの入る志慶真分類Ⅰ類に該当する資料である。206は鉄鏃で先端部が平坦となる鑿頭形の資料で鏃身は断面方形、茎は断面円形となる。207～214は鉄釘で大小サイズにバリエーションが認められる。214は断面方形の棒状製品で、鉄釘の破損品とも見られるが不明製品として扱った。

8) 石器

第64図・第65図は石器・石製品である。215は小型の両刃石斧で刃部は刃こぼれする。形態的には志慶真門郭の出土資料（村報告第9集50図-1）などに類似する。グスク時代の遺跡では稀に石斧が出土するが、これらの資料がグスク時代に石斧として利用されたかは不明である。216は小形の硯で、海（墨池）側縁部分のみの残欠である。縁上面には彫刻によって装飾されるが、モチーフ等は不明である。217は石製の錘で、ラグビーボールよりもやや卵形に近い資料で、十字に糸掛かりのための溝を彫る。218は柱状の自然礫と思われるが石の表面が煤を受けたような痕跡が認められるので紹介する。219は扁平の軽石で、形状は角の丸い平行四辺形のようなものであるが、端部を欠損する。用途不明で、製品であるかについても検討を要する。220～222は砥石で、220は方柱状の携帯用砥石とも考えられるが、両端とも欠損するため不明、石質は頁岩。221の石質頁岩の砥石で、砥面を一面のみを確認できる砥石残欠である。222の石質は玢岩で、上面の砥面を一面のみを利用する。原形は円礫であるとかんがえられ、裏側面は使用していない。作業面で何度も研いだものと考えられ、作業面が湾曲する。第65図223～226は用途不明の石製品で、石器としての加工痕や使用痕などは明瞭ではなく、自然礫に近い。遺跡の立地する地点周辺では自然に落ちていることは無いので、持ち込みであることは明らかである。223は断面が蜜柑房状で、図上端面は敲打痕によるものか凹凸する反面、側面は平滑である。224は砂岩で広い面は平滑で、砥石とも考えられる。225・226は砂岩で平坦面は砥石として利用されていたようで、平滑になる。両資料とも火受けしたものか、表面は煤けたように黒く、断面では内側にまで変色が及んでいる。特に226は鉄錆が表面付着しており、金床石のような用途で利用されたことも想定される自然礫である。

9) 土製品

第66図227は球状の土製品である。球状の製品には金属（鉄・銅）、石、そして土製があるが、大小様々あるようである。これらの資料は弾丸であるとする見解があることから、本資料も土弾のような呼称が適当かもしれない。直径1.7cm前後、重量6.69gを測る。228は焼成良好で、陶器質の土製品である。石英などの混和材を多量に含む、ドーナツ状の製品と考えられ、確

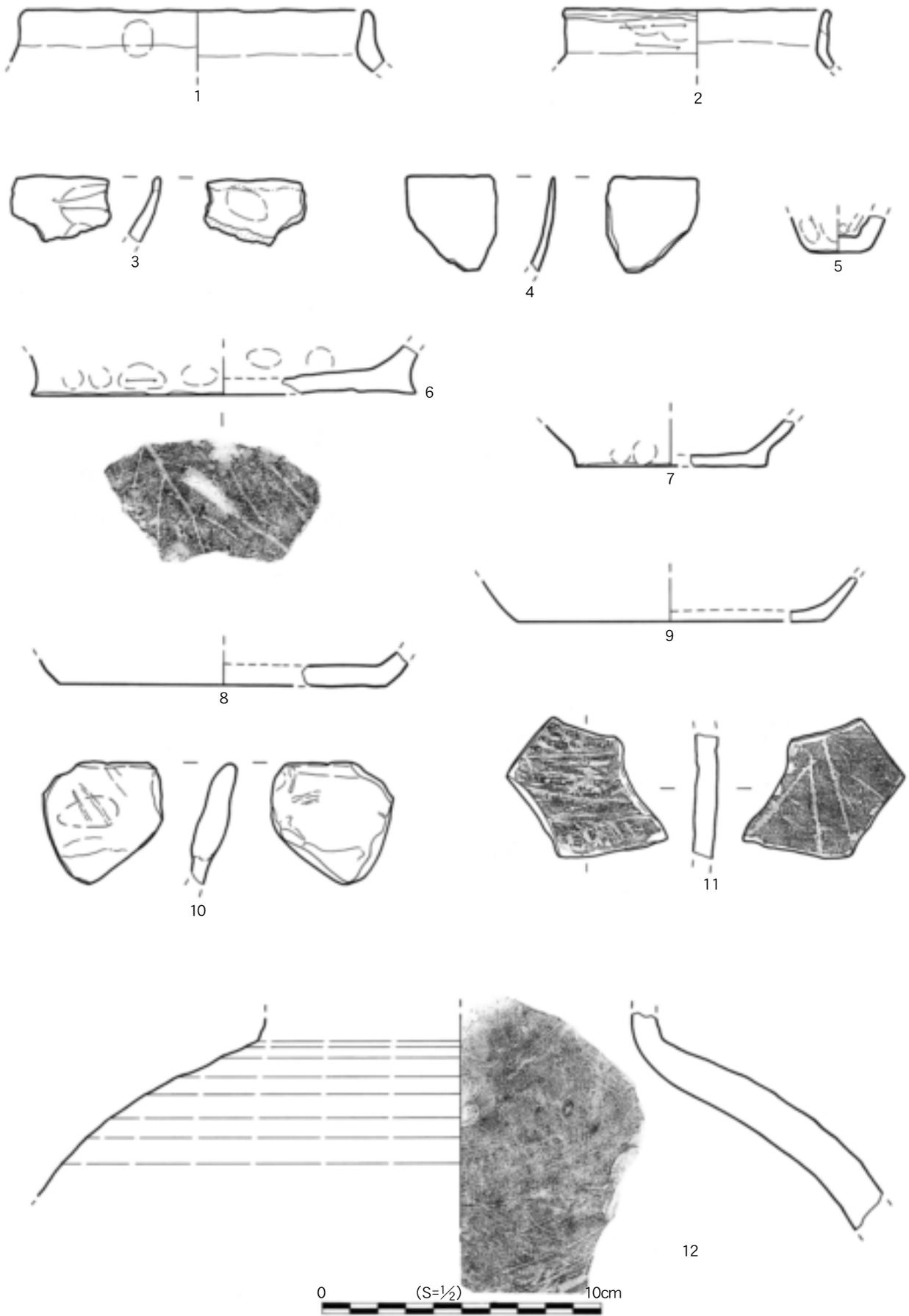
証は無いが陶磁器を焼成するときに用いるドーナツ状焼台（ハマ）が中国陶磁に付いたまま運ばれ、本遺跡で落ちたものではないかと想定する。類例資料として、大里城跡の出土遺物に類例（村報告1集20図）があり、大きさ形状ともよく似ている。これも同様の資料ではないかと考えられる。

10) 骨製品

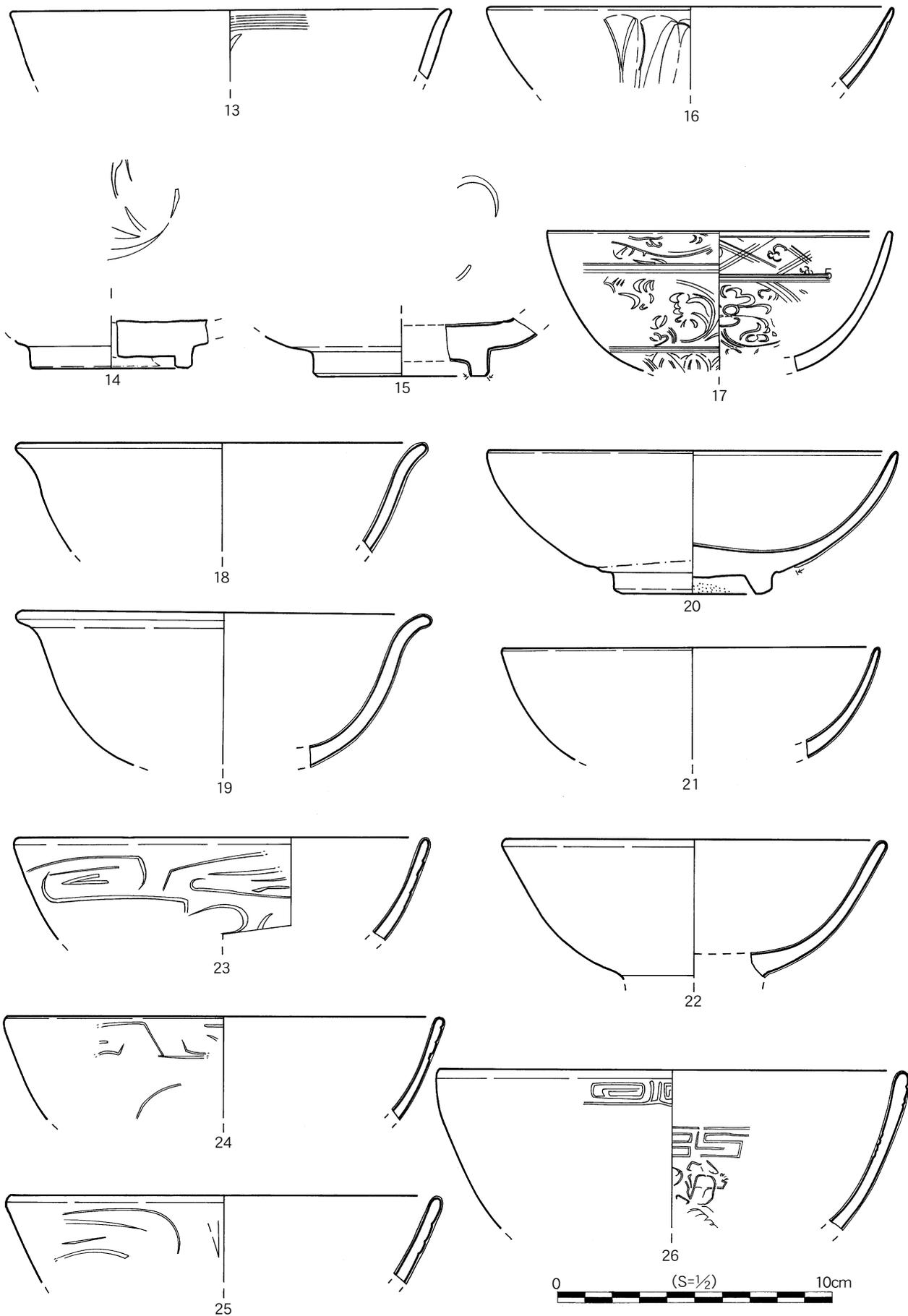
第66図229は骨製ヘラで、正面観が半月状になる今帰仁城跡主郭の報告において、「裁縫用」として紹介するが、実際の用途は不明な点が多い。弧状になる縁を研磨し付刃、直線の縁から3本の溝が彫られている。

11) 貝製品

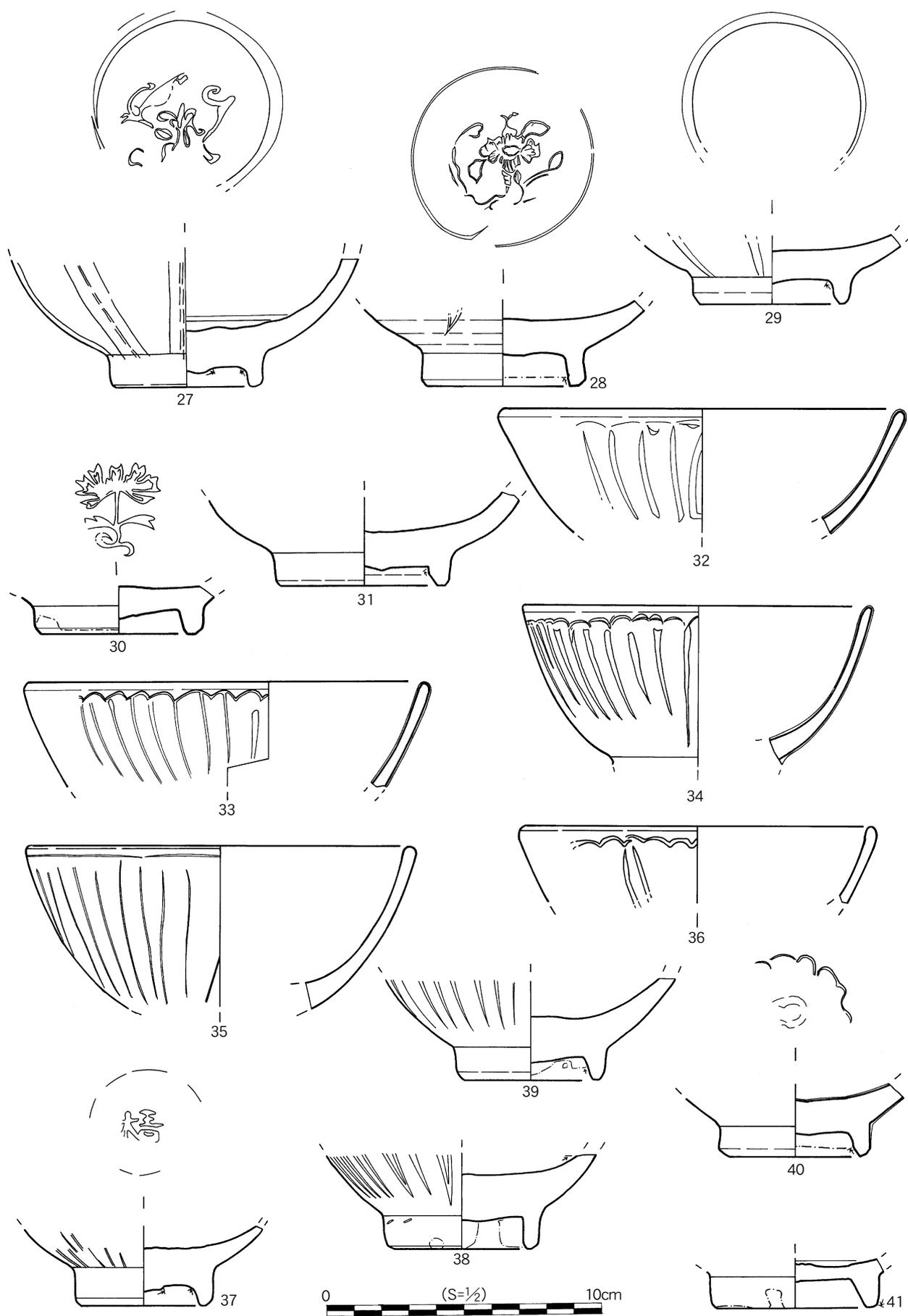
第66図230・231はリュウキュウサルボオを素材とする貝錘で、殻頂部を敲打によって孔を穿つ。本地区から得られた資料で、貝製品として推測される資料は図示した2点に限られる。



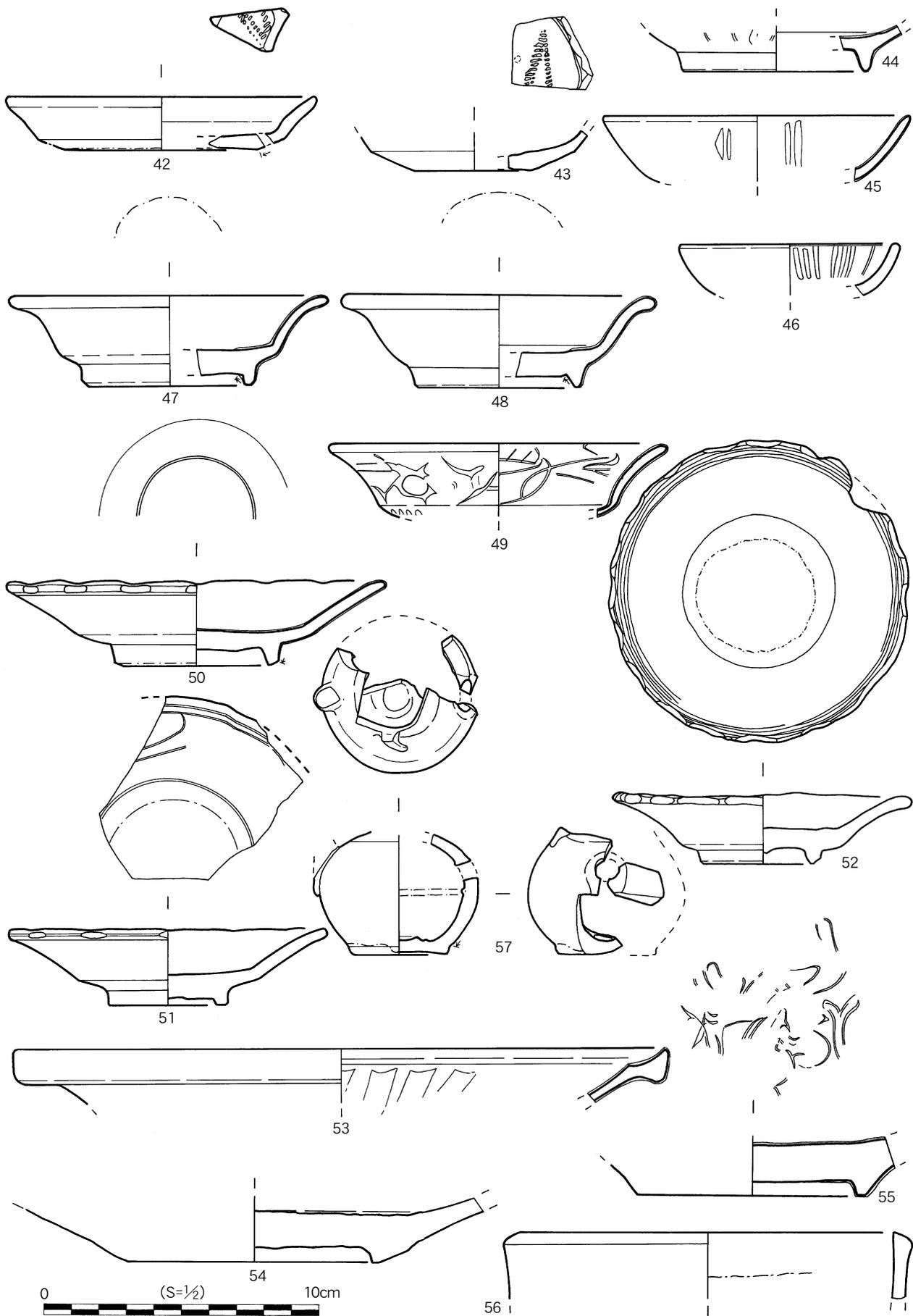
第52図 屋敷地 2 出土遺物(9)



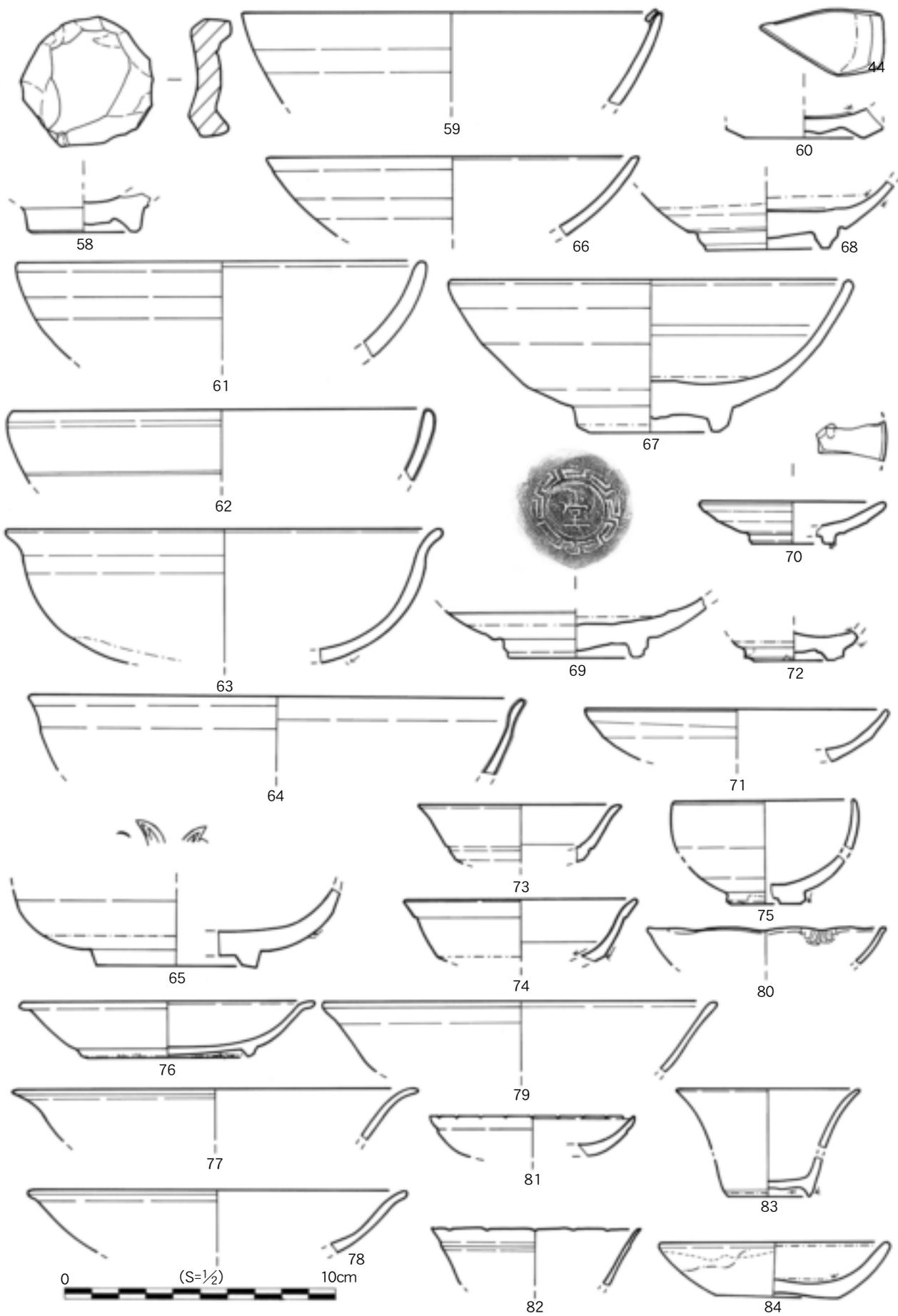
第53図 屋敷地2 出土遺物(10)



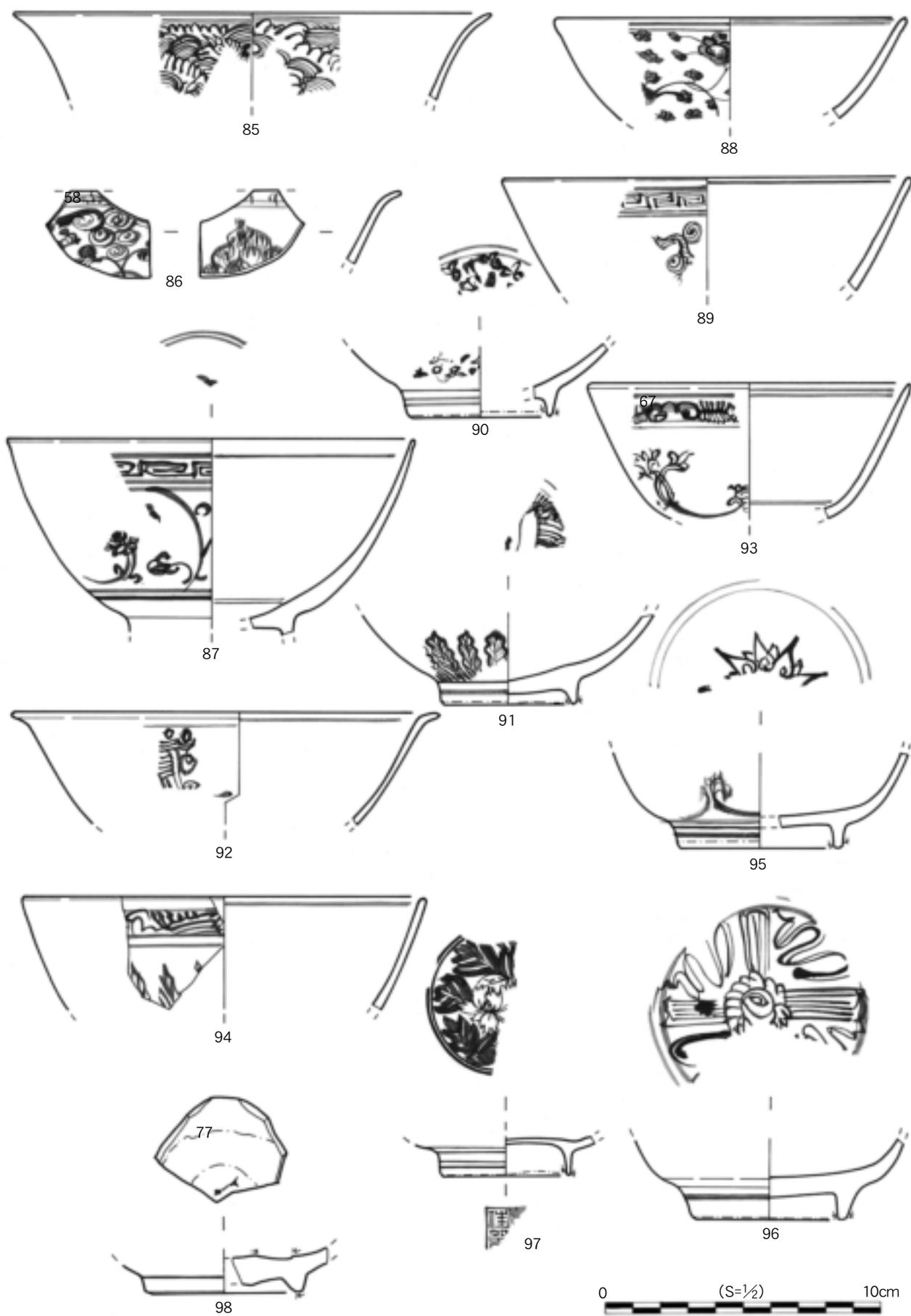
第54図 屋敷地 2 出土遺物(11)



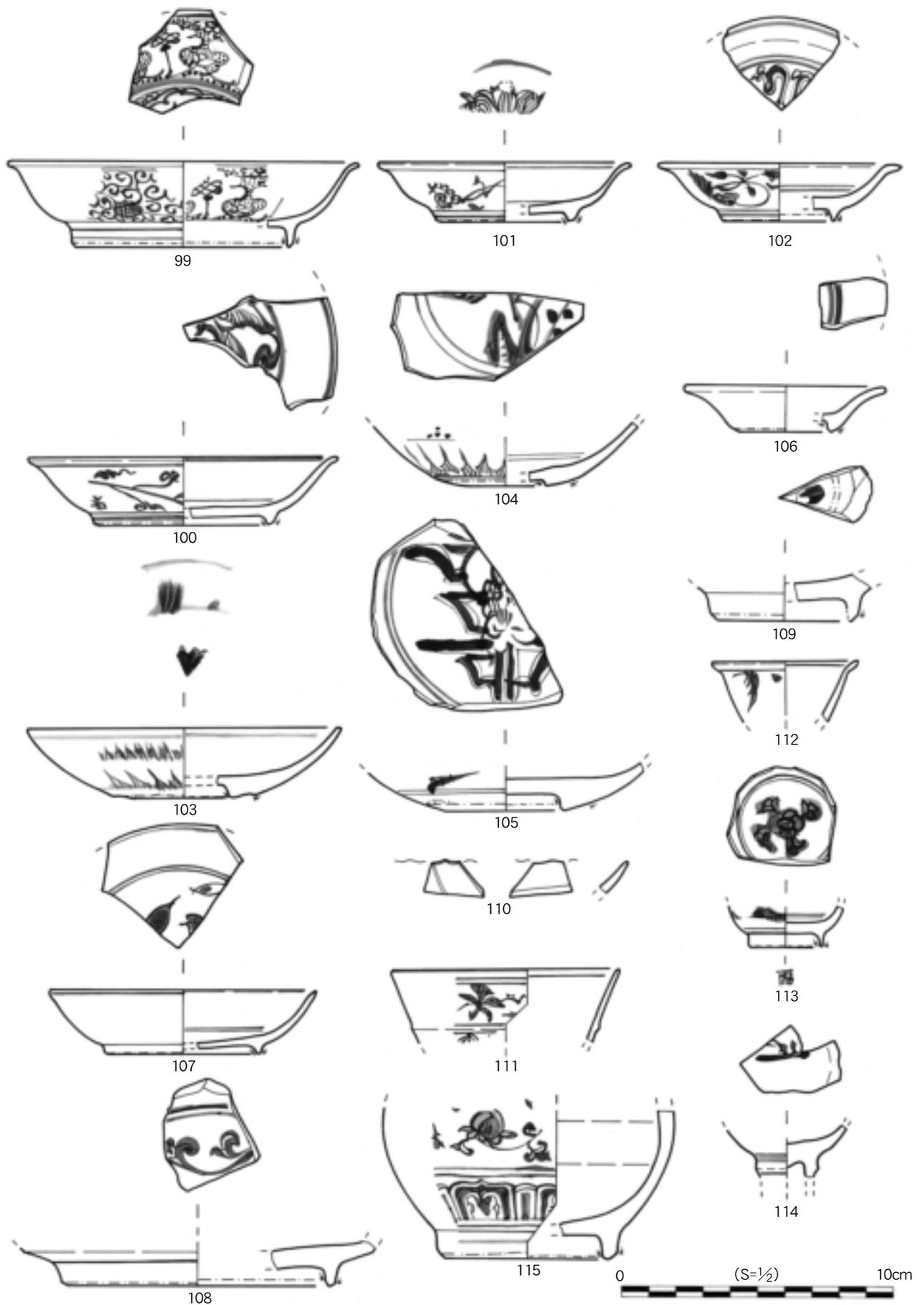
第55図 屋敷地2 出土遺物(12)



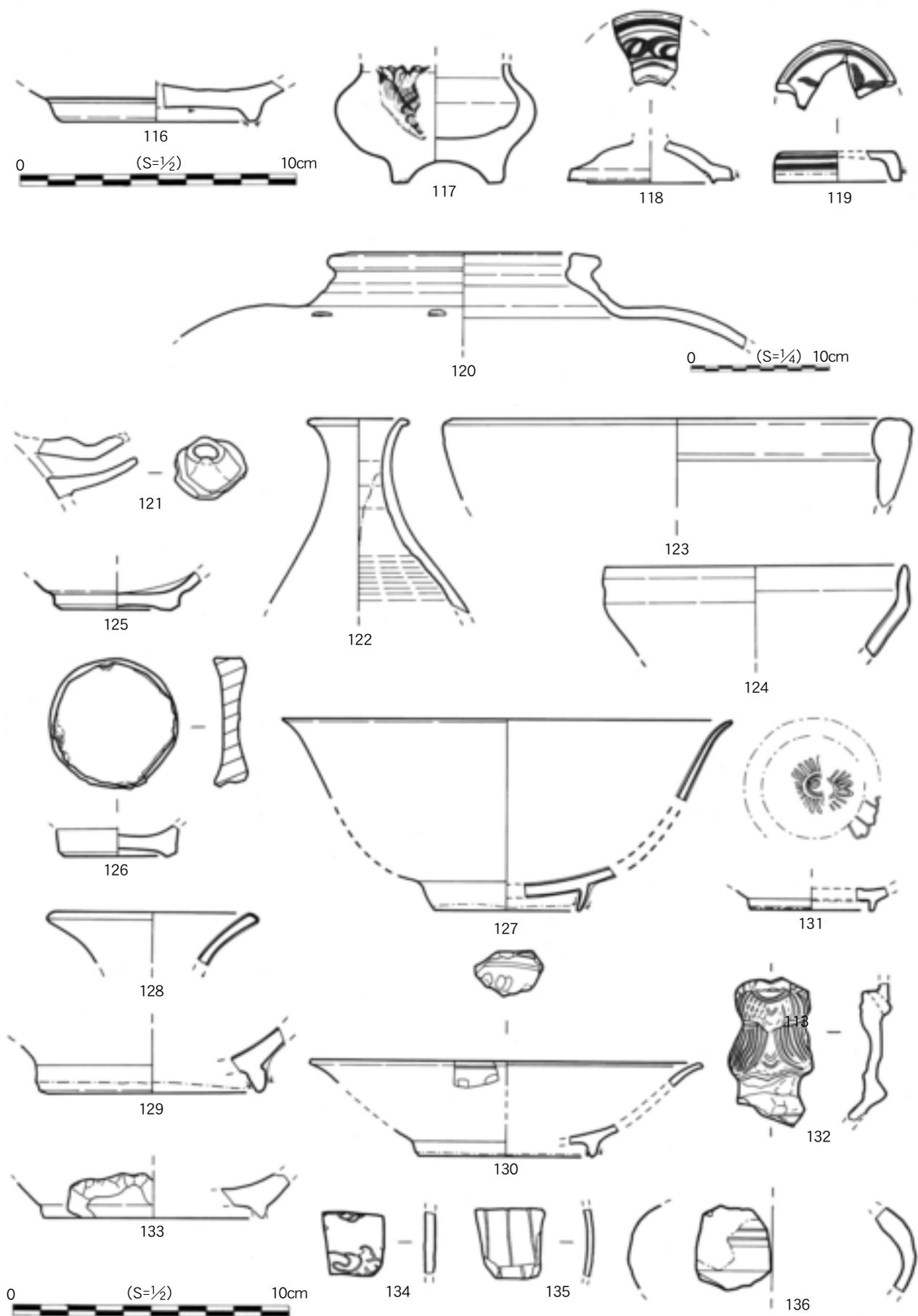
第56図 屋敷地 2 出土遺物(13)



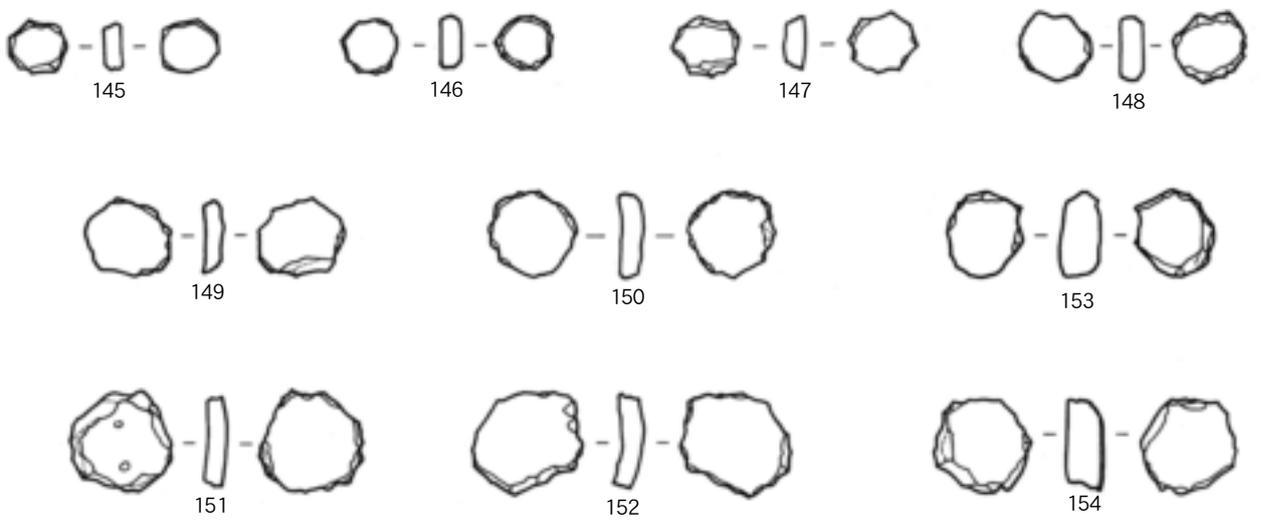
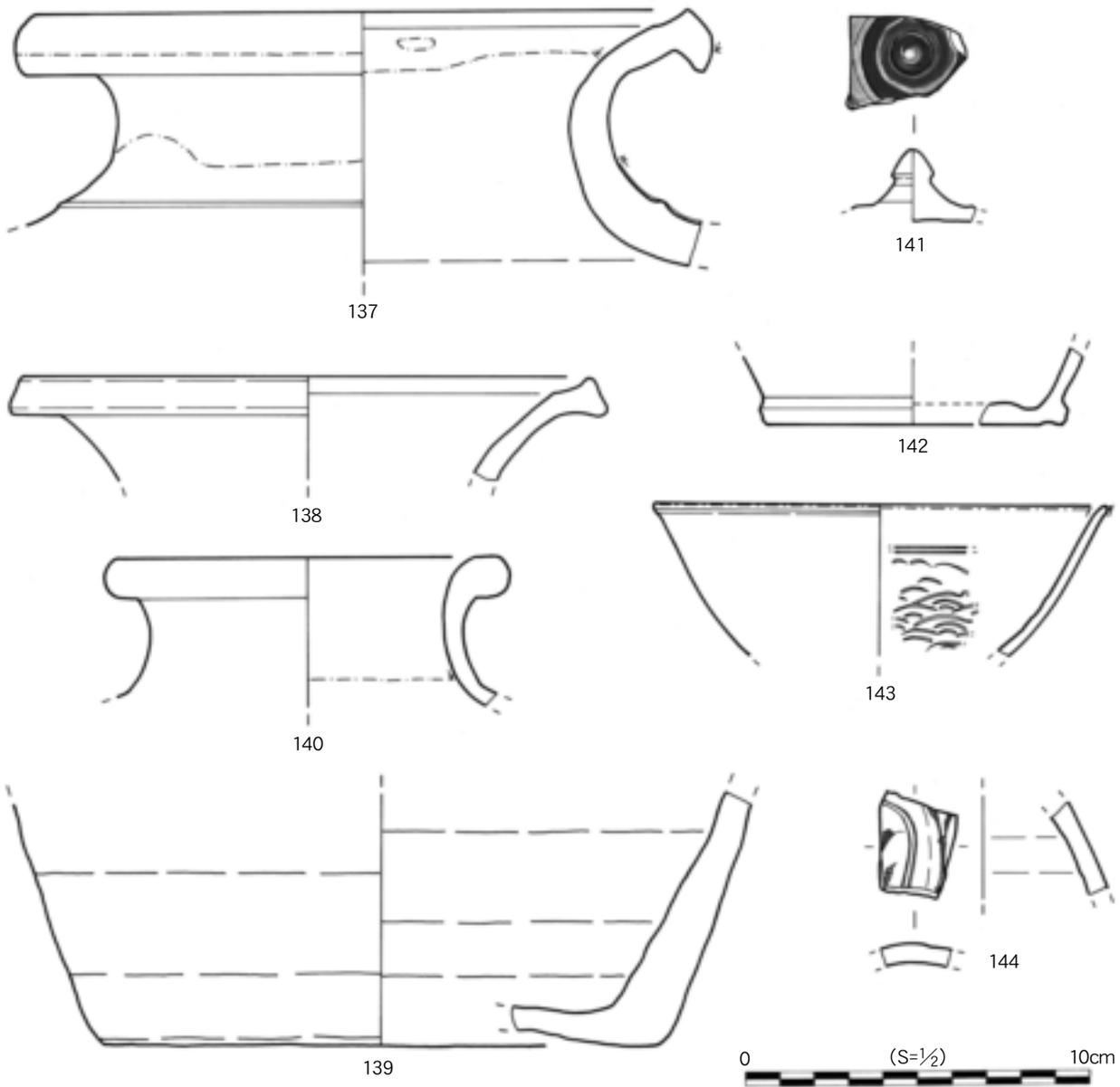
第57図 屋敷地2 出土遺物(14)



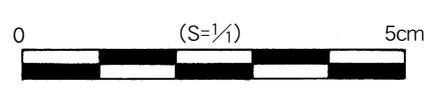
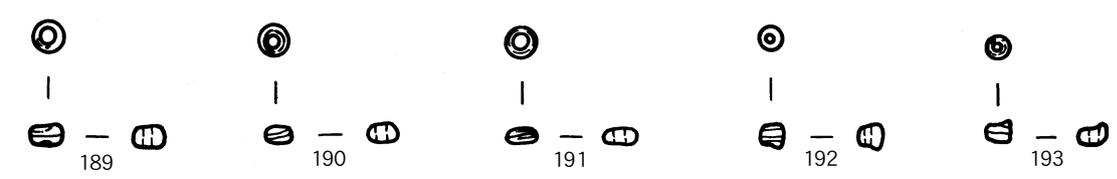
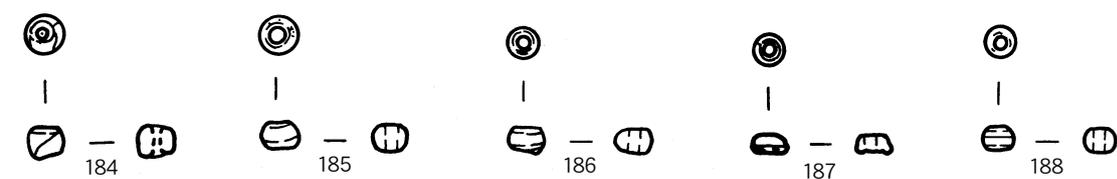
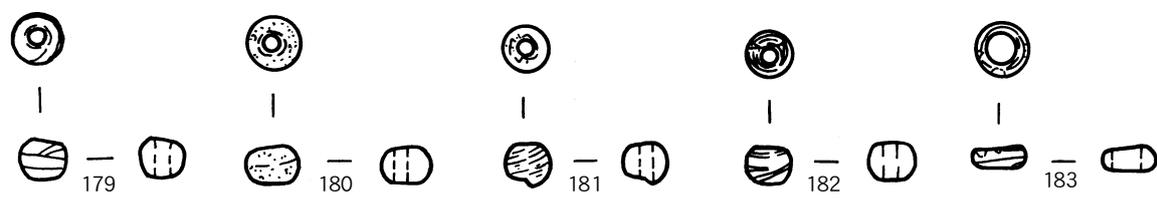
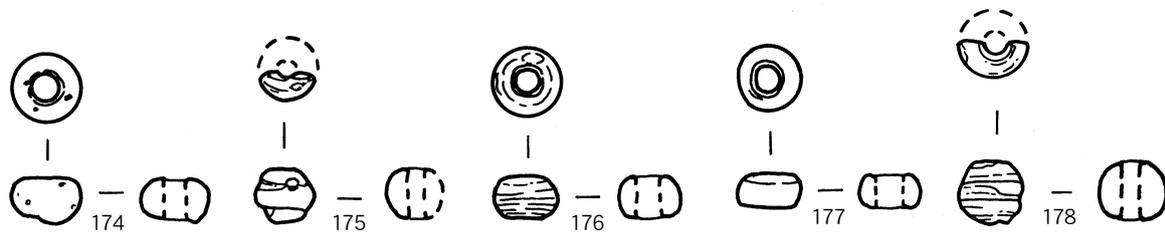
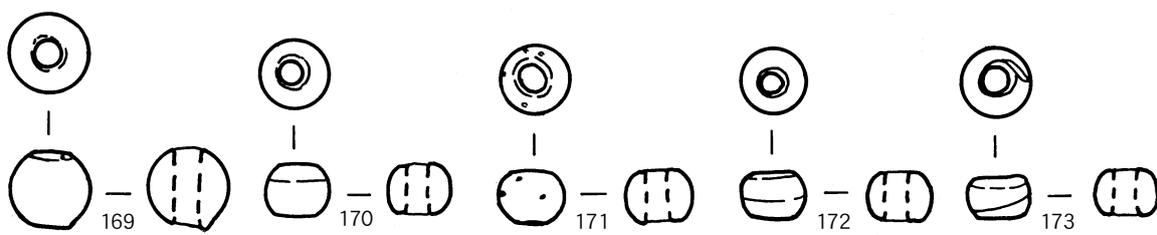
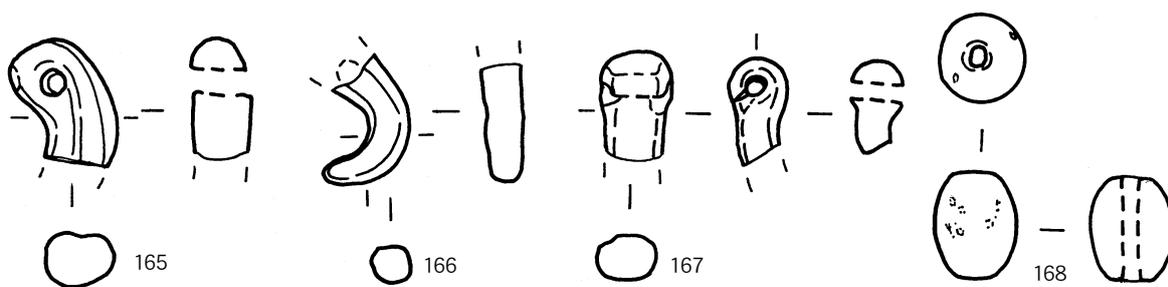
第58図 屋敷地 2 出土遺物(15)



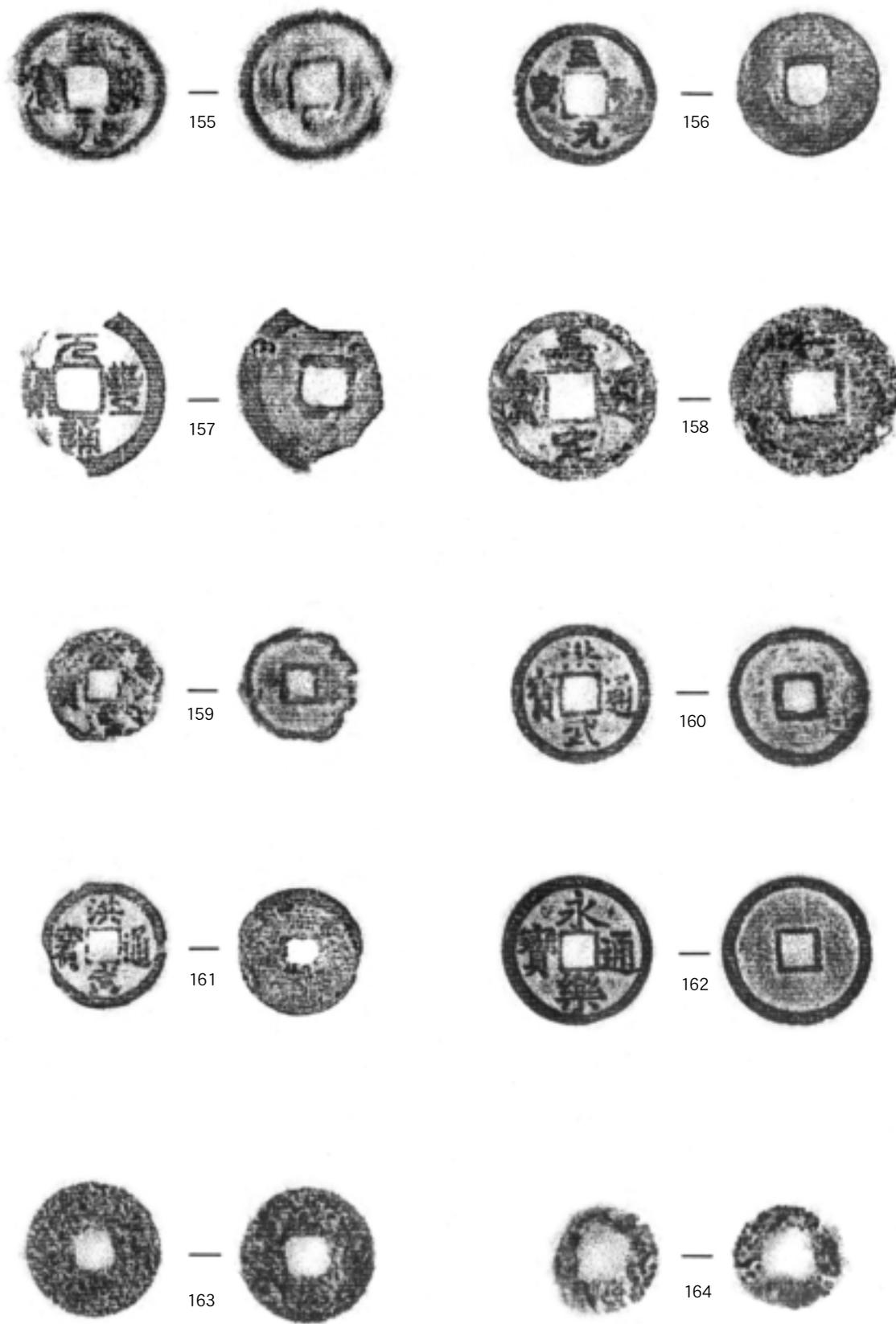
第59図 屋敷地2 出土遺物(16)



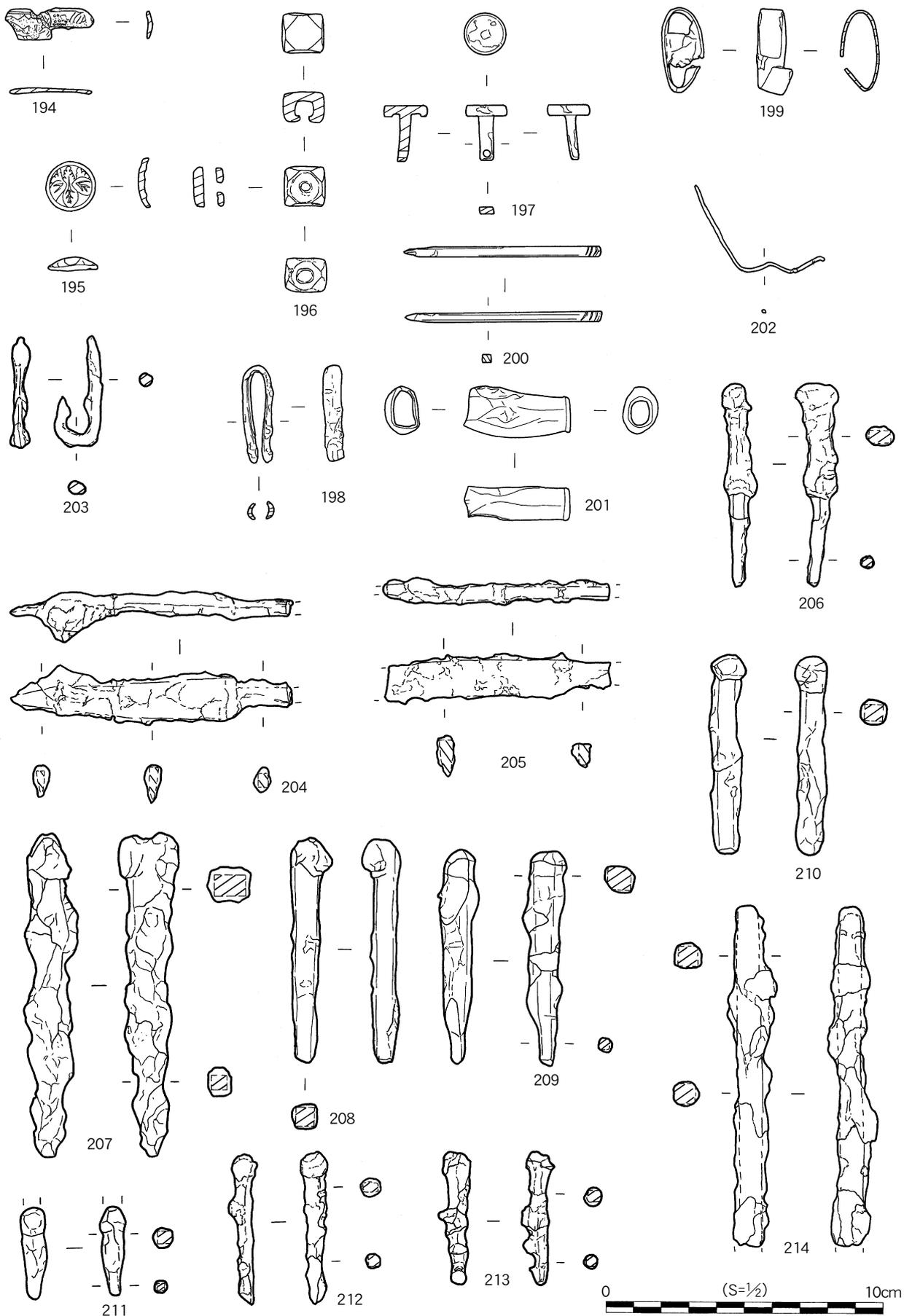
第60図 屋敷地 2 出土遺物(17)



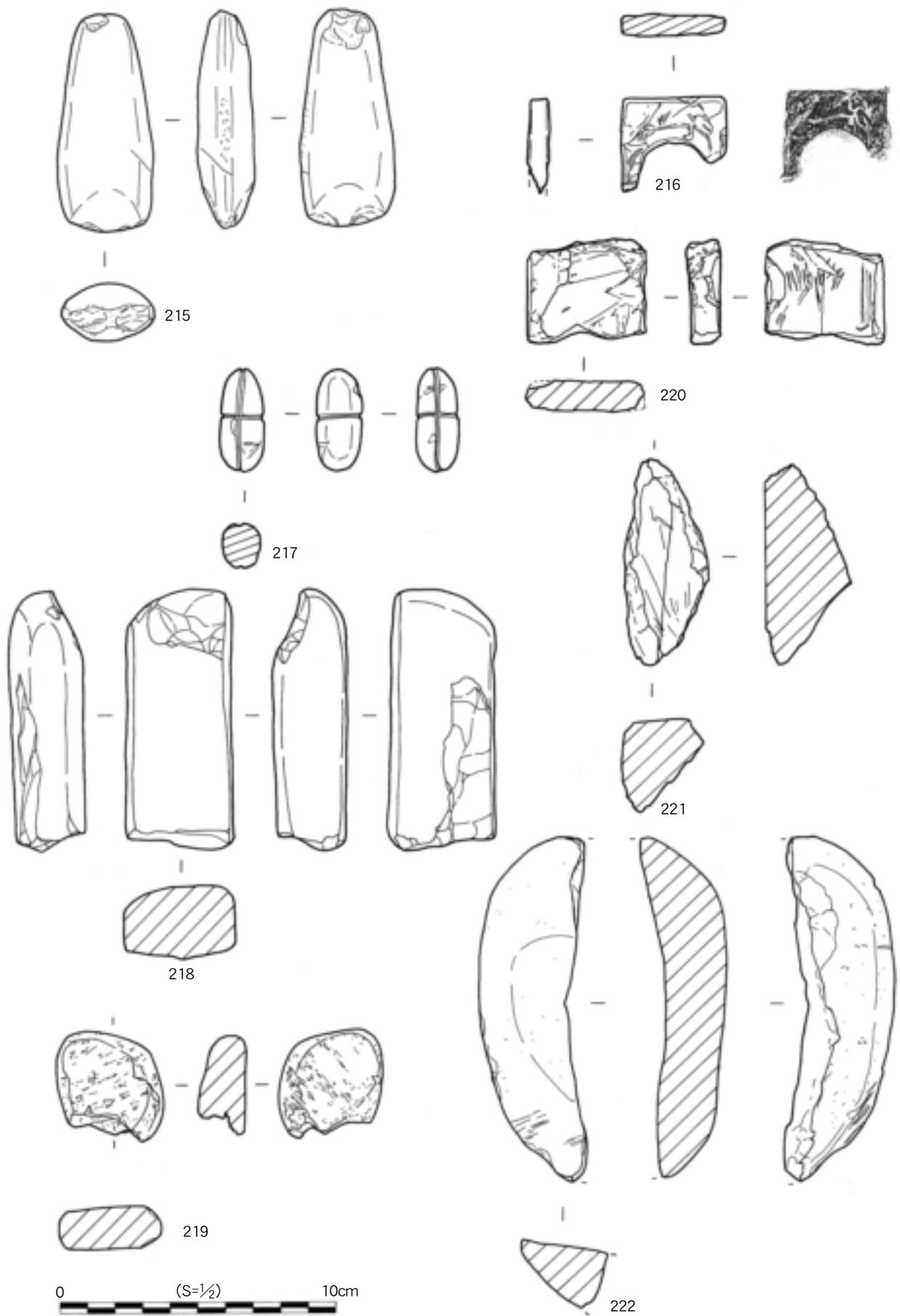
第61图 屋敷地2 出土遺物(18)



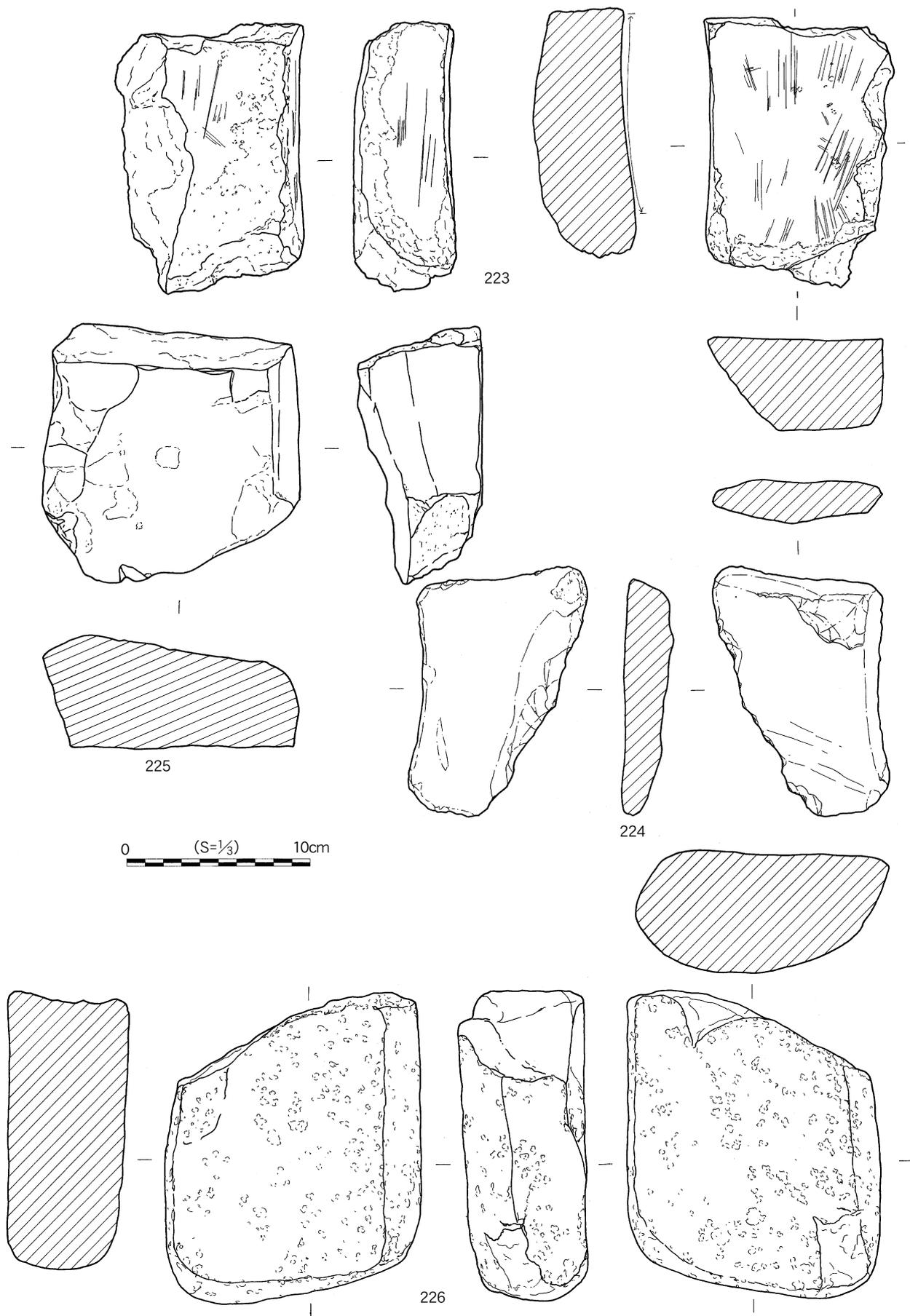
第62図 屋敷地 2 出土遺物(19)



第63图 屋敷地2 出土遺物(20)



第64図 屋敷地 2 出土遺物(21)



第65図 屋敷地2 出土遺物(22)

(4) 自然遺物

西区屋敷地2の発掘調査で得られた植物遺体はSK300、SK1035、SL24から得られた土壌サンプル（113.5リットル）より得られたLF（Light Float）資料を高宮広土氏（札幌大学）に、包含層・遺構などからピックアップ法によって得られた貝類資料を黒住耐二氏（千葉県立中央博物館）に、包含層・遺構などからピックアップ法によって得られた資料及びこれに加え、SK1035の土壌サンプル（9リットル）より得られたHF（Heavy Float）資料の脊椎動物骨資料については樋泉岳二氏（早稲田大学）に同定分析いただいた。

1) 植物遺体

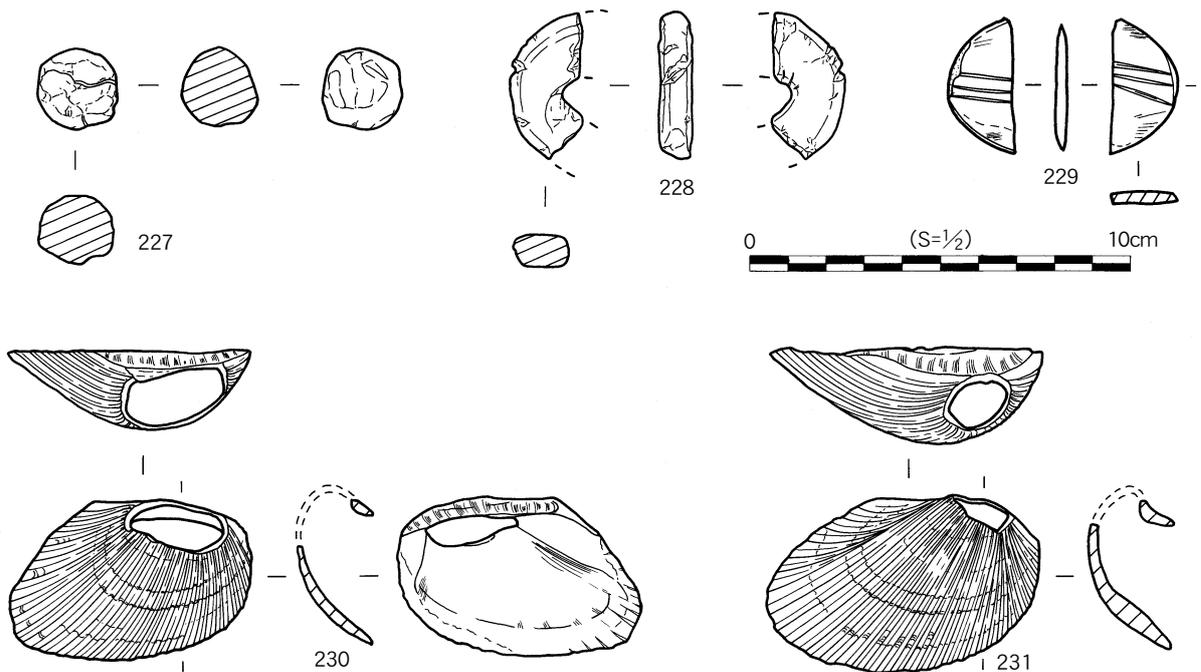
植物遺体については、第9表に同定いただいたデータを掲載する。詳細については、第VI章第6節を参照いただきたい。

2) 脊椎動物遺体

脊椎動物遺体については、第10表に最大個体数（NSIP）と最小個体数（MNI）を示した。所見の詳細については第VI章第4節を参照いただきたい。

3) 貝類遺体

貝類遺体については、第11表に最小個体数（MNI）を示した。所見の詳細については第VI章第5節を参照いただきたい。



第66図 屋敷地2 出土遺物(23)

第9表 植物遺体集計表

グリッド	遺構番号	FL No.	土壌サンプリング量 (g)	イネ (粒/片)	イネ? (片)	イネ(モミ) (片)	イネ(小穂軸) (片)	コムギ (粒/片)	オオムギ (粒/片)	ムギ類 (粒/片)	ムギ類穂軸 (片)	アワ (粒/片)	アワ? (粒/片)	アワ(内/外) (粒/片)	キビ (粒/片)	キビ? (粒/片)	ミレット (片)	Type A Millets (粒/片)	Type B millets (粒/片)	イネ科 (片)	マメ科(粒/片)	マメ科? (片)	キイチゴ属 (粒)	堅果類子葉 (片)	堅果皮 (片)	タデ科? Type A (粒)	タデ科? Type B (粒)	イラクサ科?/コリ科? (粒)	タブノキ? (片)	堅果類子葉? (片)	タブノキ?/堅果類子葉? (片)	不明 (粒)	同定不可能 (片)	計	分布密度(no./litter)	
N-19	SK300	12	13	25	3	6		211	95	132	17	33	3	2		4		2	2		13	3											1	300	854	65.7
N-19	SK300	2	12	17	7	50		3369	104	189	29	50	20	8	1	3		3	2		7	5										1	607	1483	124	
		小計	25	42	10	56		3580	199	321	46	83	23	10	1	7		5	4		20	8			10						2	907	2337	93.5		
N-19	SK1035	16	8.5	6				21	14	33	3	13						16	11				1	1										137	262	30.8
N-19	SK1035	5	9	3	1	5	2	10	14	22	3	31						3	10	13	8	1	1			23		1	2		1	188	342	38		
N-19	SK1035	18	8	2			3	11	9	15	5	29						1		7	2				1	9					1	55	150	18.8		
		小計	26	11	1	5	5	42	37	70	11	73				4	10	36	21	1	2	1	1	38			1	2		2	380	754	29.6			
O-20	SK24	32	14	9	5			110	7	29	1	16				1		6	2							1	1	1			12	7	139	349	24.9	
O-20	SK24	35	13	2				35	1	5		8	3	1	2										2	1	1					3	22	86	6.6	
O-20	SK24	34	13	7			3	17				3				1				4					2		1					1	27	66	5.1	
O-20	SK24	33	11	2			1	10	1	3	1	3	1							4	1									3	4	1	19	54	4.9	
O-20	SK24	36	12		2			5		3		3																					12	25	2.1	
		小計	63	20	7		4	177	9	40	2	17	20	1	2	2		14	3						4	2	3		4	16	12	219	580	9.2		
		計	114	73	18	61	12	799	245	431	59	173	43	11	3	13	10	55	28	1	20	12	1	1	52	2	3	1	4	2	16	16	1,506	3,671	32.3	

第10表 屋敷地?から採集された脊椎動物遺体の組成

種類	遺構						遺構外				総計			百分率(総計)																						
	SD5	SR6	SK300	SK1035	その他	合計	II層	I層	不明	合計	合計	NISP	A	B	NISP	A	B																			
	NISP MNI	NISP	NISP	NISP	NISP	NISP	NISP	MNI	MNI	NISP	MNI	MNI																								
サメ類							2					2	1	1	0.60%	1.52%	2.33%																			
トビエイ科							8					8	1	1	2.42%	1.52%	2.33%																			
ウツボ科				1	1	1	1	1				1	1	1	0.30%	1.52%	2.33%																			
イトヒキアジ属					1	1	1	1				1	1	1	0.30%	1.52%	2.33%																			
ハタ科		3	1	1	1	1	3	1	8	4	1	2	3	1	3.32%	7.58%	4.65%																			
ヨコシマクロダイ							1	1	1	1		1	1	1	0.30%	1.52%	2.33%																			
フエフキダイ科		1	1		1	1	2	1	4	3	5	3	1	9	2	3.93%	7.58%	4.65%																		
クロダイ属							1	1	1	1	1	1	1	1	0.60%	3.03%	2.33%																			
ペラ科(コブダイ型)							1	1	1	1	2	1	1	4	1	1.51%	3.03%	4.65%																		
ペラ科(タキペラ型)							1	1	1	1				1	1	0.30%	1.52%	2.33%																		
ペラ科A							1	1			1	1	2	1	1	0.60%	1.52%	2.33%																		
ペラ科B							2				2	2	2	2	2	0.60%	3.03%	4.65%																		
ペラ科						1	1			3		3		4		1.21%																				
イロブダイ属					1	1	1	1	2	2	1	1	3	1	5	3	1.51%	4.55%	6.98%																	
アオブダイ属	1	1		2	1		4	1	7	3	4	3	6	1	13	4	3.93%	6.06%	6.98%																	
ブダイ科		2	1				3	1			2	1	1	4		7	1	2.11%																		
モンガラカワハギ科					1	1	1	1	2	2	1		1	1	3	3	0.91%	4.55%	6.98%																	
ハリセンボン科					1	1	1	1	1	1	2		2	1	3	2	0.91%	3.03%	4.65%																	
真骨類(同定不可)		1					2		4		2		2		6		1.81%																			
魚類合計	1	1	7	3	3	2	7	5	20	11	38	22	36	13	3	52	14	90	36	27	27.19%	54.55%	62.79%													
ウミガメ													1		1	1	1	0.30%	1.52%	2.33%																
ニワトリ			1	1					1	1					1	1	1	0.30%	1.52%	2.33%																
鳥類(同定不可)																																				
ヒト																																				
ネズミ科																	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0.30%	1.52%	2.33%				
ネコ																																				
イヌ			1	1					1	1	1	1	1	3		4	1	5	2	2																
ウマ	7	1	3	1			5	1	15	3	6	4			10	1	25	4	1																	
イノシシ/ブタ	6	2	9	1			1	1	31	2	47	6	13	8	3	24	2	71	8	5																
ヤギ													1	1		2	1	2	1	1																
ウシ	14	2	14	1			8	1	1	1	28	2	65	7	27	10	1	38	3	103	10	3														
ウシ/ウマ	3		2				3		1		7		16		2	2		4		20																
イルカ			1	1									1	1	1		1	1	2	2	1															
哺乳類(保留)									1				1		1			1		1																
哺乳類(同定不可)	2		2										4		3	1	1	5		9																
哺乳類合計	32	5	32	5	11	1	3	2	72	5	150	18	54	29	6	89	10	239	28	14																
総計	33	6	40	9	14	3	10	7	92	16	189	41	91	42	9	142	25	331	66	43																

総計A:各遺構・包含層別に産出したMNIの合計、総計B:遺構・包含層全資料の合計値に基づいて産出したMNI

第11表 西区屋敷地2 出土貝類遺体の最少個体数

	SX 4	SD 5	SR 6	SK300	包含層	小計	百分率	生息場所 類型
	MNI	MNI	MNI	MNI	MNI			
クワノミカニモリ		3			2	5	0.31%	I-1-b
マダライモ			3			3	0.18%	I-1-a
ハナピラダカラ		2				2	0.12%	I-1-a
テツレイシ		2				2	0.12%	I-1-a
エガイ		1	1			2	0.12%	I-1-a
ツノテツレイシ		1				1	0.06%	I-1-a
コマダライモ					1	1	0.06%	I-1-a
キイロダカラ								I-1-a
アツムシロ								I-1-a
サヤガタイモ								I-1-a
アマオブネ								I-1-b
イソハマグリ								I-1-c
マガキガイ	1	128	128	1	257	515	31.46%	I-2-c
オニノツノ		7	11		14	32	1.95%	I-2-c
イトマキボラ	1	7	13		11	32	1.95%	I-2-a
ヒレジャコ		3	10	2	6	21	1.28%	I-2-c
シラナミ	1	4	9		4	18	1.10%	I-2-a
クモガイ		2	5		6	13	0.79%	I-2-c
ホシダカラ		1	7		1	9	0.55%	I-2-c
アンボンクロザメ	1	1			4	6	0.37%	I-2-c
シャゴウ	1	2	1		2	6	0.37%	I-2-c
ガンゼキボラ		3			2	5	0.31%	I-2-a
スイジガイ			3		2	5	0.31%	I-2-c
ニシキウズ		3			1	4	0.24%	I-2-a
ヤクシマダカラ		2	1		1	4	0.24%	I-2-a
イボシマイモ		2	1		1	4	0.24%	I-2-a
ヒメジャコ		1	1		1	3	0.18%	I-2-a
オオウラウズ		2				2	0.12%	I-2-a
ホシキヌタ		1			1	2	0.12%	I-2-a
キヌカツギイモ			1		1	2	0.12%	I-2-a
チョウセンフデ			1		1	2	0.12%	I-2-c
クロフモドキ			2			2	0.12%	I-2-c
コシダカサザエ		1				1	0.06%	I-2-a
コオニノツノ		1			2	3	0.18%	I-2-a
メンガイ			1			1	0.06%	I-2-a
キクザル類		1				1	0.06%	I-2-a
チトセボラ					1	1	0.06%	I-2-c
ゴマフイモ		1				1	0.06%	I-2-c
加777キ/ア/ボ/シ/ク/ザメ			1			1	0.06%	I-2-c
フタモチヘビカイ								I-2-a
ニシキノキバフデ								I-2-a
サラサミナシ?								I-2-a
ムカシタモト								I-2-b
ネジマガキ								I-2-c
サメザラ								I-2-c
ツノレイシ		110	20		104	234	14.29%	I-3-a
コオニコブシ		59	41		96	196	11.97%	I-3-a
チョウセンサザエ	5	19	39	1	52	116	7.09%	I-3-a
ハナマルユキ		51	15		12	78	4.76%	I-3-a
オキニシ		25	12		25	62	3.79%	I-3-a
シラクモガイ		9	12		18	39	2.38%	I-3-a
アカイガレイシ		3	1		6	10	0.61%	I-3-a
ヤナギシボリイモ		3	1		2	6	0.37%	I-3-a
ミツカドボラ			2		2	4	0.24%	I-3-a
オニコブシ		1	3			4	0.24%	I-3-a
ムラサキイガレイシ		1	1		1	3	0.18%	I-3-a
アラヌノメ		1			1	2	0.12%	I-3-c
サツマボラ					1	1	0.06%	I-3-a
ツノマタモドキ								I-3-a
ヤコウガイ		5	7		13	25	1.53%	I-4-a
サラサバテイラ	1	3	10		6	20	1.22%	I-4-a
ホラガイ	1		2		1	4	0.24%	I-4-a
ギンタカハマ		1	1		2	4	0.24%	I-4-a
ベニシリダカ?		1				1	0.06%	I-4-a
シロナルトボラ								I-4-a
リュウキュウザル		2	2			4	0.24%	II-2-c
カワラガイ			1		3	4	0.24%	II-2-c
ヌノメガイ		1	1		1	3	0.18%	II-2-c
リュウキュウマスオ		1	1			2	0.12%	II-1-c
ホソスジイナミ		1			1	2	0.12%	II-1-c
リュウキュウシラトリ					1	1	0.06%	II-1-c
トラダマ?			1			1	0.06%	II-2-c
クロミナシ					1	1	0.06%	II-2-c
リュウキュウサルボオ					1	1	0.06%	II-2-c
イボヨフバイ								II-1-c
マスオガイ								II-1-c
シレナシジミ		1	6		2	9	0.55%	III-0-c
アラスジケマン		1	2		2	5	0.31%	III-1-c
カノコガイ		3			1	4	0.24%	III-1-e
トウガタカワニナ								IV-5/6
マルタニシ					1	1	0.06%	IV-6
イモガイ類種不明		20	15		43	78	4.76%	
シュリマイマイ								V-8
合計	12	504	396	4	721	1,637	100.00%	

③西区 屋敷地3 (Ⅲ区c・d)

屋敷地3は2003年12月から2004年11月までに6次調査及び8次調査で実施されたⅢ区a (5097-1:248㎡)とⅢ区c (5098:320㎡)の地域がこれに該当する。一部だが11次調査においてSB03の柱穴 (pit1149) の確認調査を実施している。

遺跡を覆う堆積層はⅠ層の耕作土と、Ⅱ層の黒褐色のグスク時代の遺物包含層からなる。ただし、Ⅱ層は調査地点全体を覆わず、南側と北側では被覆は薄く堆積の認められない場所もある。また、この下層はⅢ層とした粘性の無い褐色土層が認められ、これは自然堆積層と考えられ、遺跡形成期の地表面と想定される。基盤は所々岩盤が露頭する自然堆積層で、粘板岩を含む堆積層と、含まず粘性のある締まった赤土土層の二種の層相が異なる地山からなる。

検出された遺構は柱穴522基余、土坑9基、溝2基で不明の遺構が2基認められる。これから復元できた建物跡は5基で、検討を要するものの推定1棟の母屋の住居跡、3棟の4本柱の掘立柱建物跡 (推定高倉) 及び1棟の竪穴建物跡である。

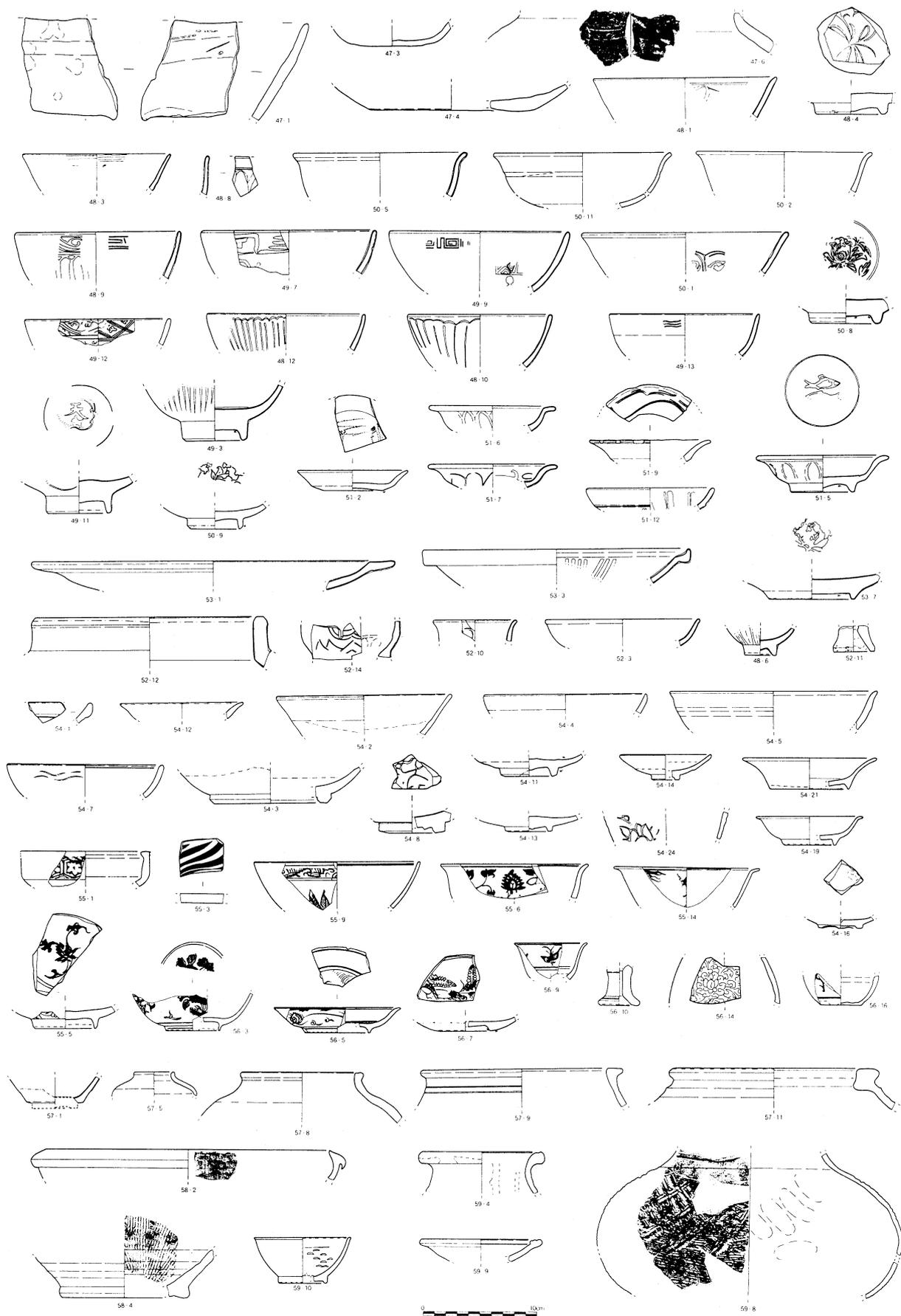
出土した遺物は陶磁器 (推定個体数) 1,489点、玉類22点、銭貨8点、金属製品 (鉄37、銅4) 41点、石製品6点、貝製品5点、骨製品1点である。陶磁器から年代を推察すると14世紀後半から16世紀代と考えられるが、僅かながら12世紀に遡るような遺物も散見される。



第67図 屋敷地3 位置図



第68図 屋敷地3 遺構平面図



第69図 屋敷地3 主要出土陶磁器資料

※図下の番号は今帰仁村教育委員会（編）2005年の図番号と同じ

④西区 屋敷地4 (V区)

屋敷地4は2003年10月～2004年1月までに実施した5次調査のV区が該当する。V区は地積では今泊5107(313㎡)及びその周辺地域がこれに該当する。西側に村歴史文化センターが隣接し、既存の盛土が大きく被るため、西側の一部については未調査のままとなっている。屋敷地4のほとんどの地域が駐車場造成時の造成層(I層A)が覆う。このため造成層の除去を行った。造成層の下は現代の表土旧耕作土と考えられるI層B・II層が覆い、この下にグスク時代の遺物包含層であるIII層が堆積する。さらに下層に堆積していた層は、遺物をほとんど含まない自然堆積層と考えられ、遺跡形成期の地表面と想定される。なお、最下層のV層は所々岩盤が露頭し、遺物を全く含まない自然堆積層で地山となる。

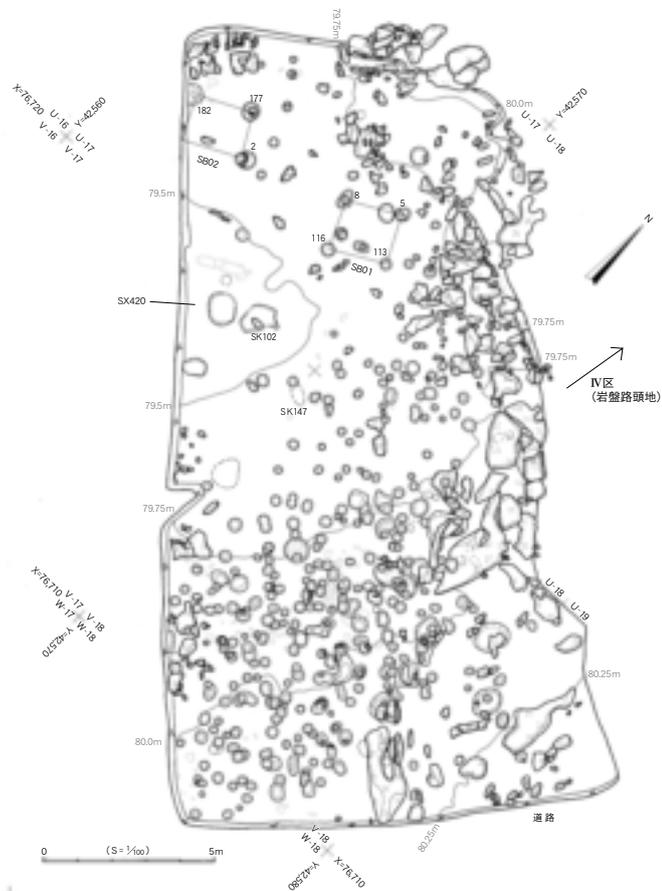


第70図 屋敷地4 位置図

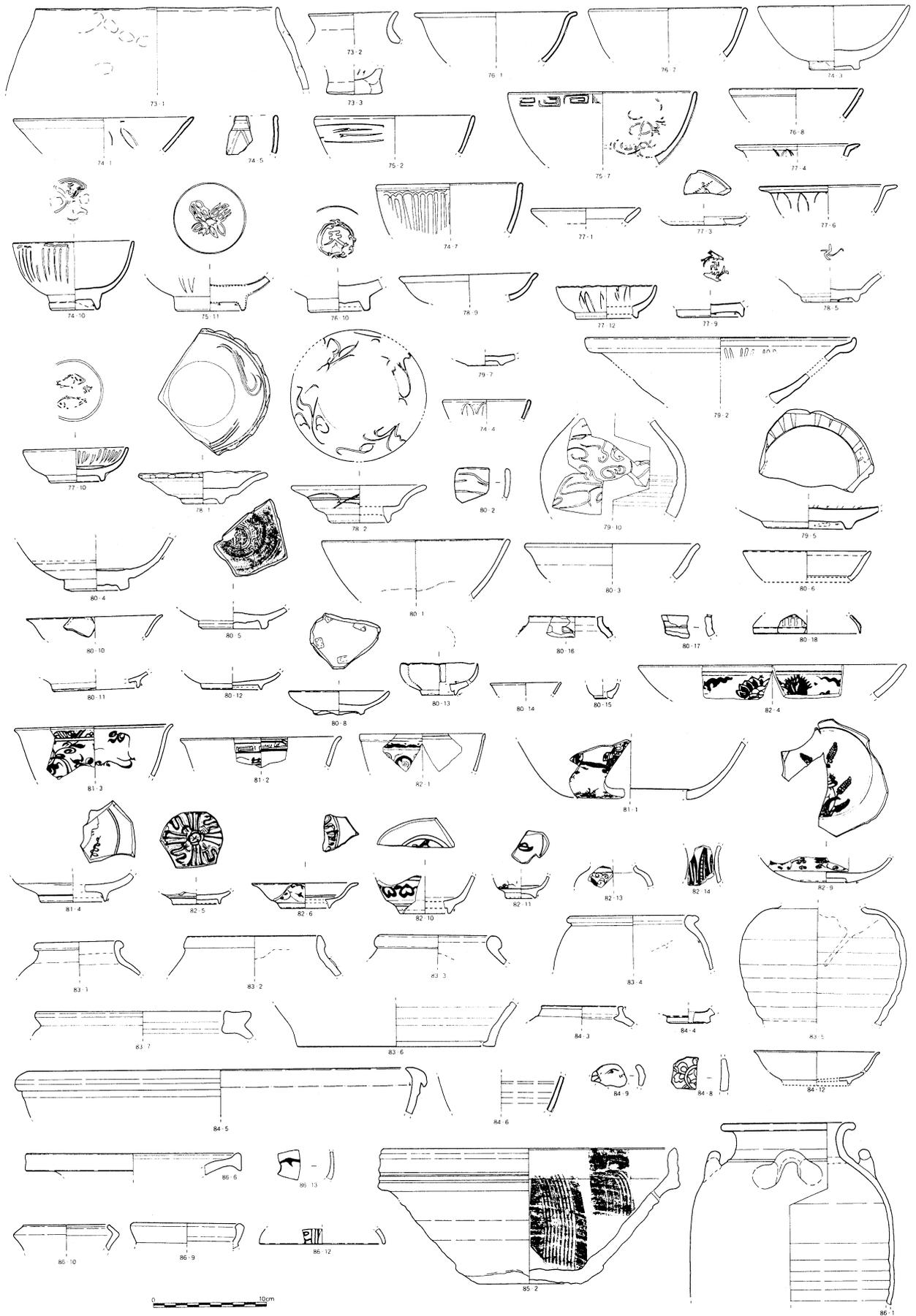
検出された遺構は柱穴299基、土坑5基で不明の土坑が1基が認められる。これから復元できた建物跡は掘立柱建物跡が2基で、検討を要するものが1棟含まれるものの、2棟いずれも4本柱の掘立柱建物跡(推定高倉)である。

調査地域全体を俯瞰すると、柱穴のサイズに大小が認められ、その分布は北西側には柱穴直径が50前後の大きな柱穴が集中。他方30cm前後になる柱穴は南東側で集中している。このような柱穴サイズに見る分布の偏りは、建てられた建物の種類の違いと考えられ、前者柱穴サイズの大きい建物を高倉的な建物を、後者は母屋的な建物と想定される。また、母屋側を推定する柱穴群の周辺には土坑が5基確認されており、母屋周辺で調理や軽作業等を行ったと推定した。

出土した遺物は陶磁器(推定個体数)1,000点、玉類2点、銭貨3点、金属製品(鉄77、銅7)84点、石製品11点、貝製品9点、骨製品1点である。陶磁器から年代を推察すると14世紀後半から16世紀代と考えられるが、僅かながら12世紀に遡るような遺物も散見される。



第71図 屋敷地4 遺構平面図



第72図 屋敷地4 主要出土陶磁器資料

※図下の番号は今帰仁村教育委員会（編）2005年の図番号と同じ

⑤西区 屋敷地5（外郭1次・11次）

屋敷地5は2004年4月～2005年3月までに実施された今帰仁城跡保存修理事業に伴う第1次外郭調査（城外北西区）及び、2005年1月～3月に実施された第11次調査（道路敷下）地域が該当する。地積では今泊4787（984㎡）及びその周辺地域がこれに該当する。大部分が今帰仁城跡の史跡地域に該当するため、報告については機会を改め今帰仁城跡の整備事業内で報告する予定である。本項では概要を紹介する。

屋敷地5の北側半分は道路工事によって大きく破壊を受けている。このため建物復元ができなかった。屋敷地5全体を覆う堆積層は、現代の表土・旧耕作土のⅠ層で、この下にグスク時代の遺物包含層であるⅡ層が堆積する。特徴的なのはⅡ層の下層に堆積するⅢ層が造成層的な堆積層として観察された点である。また、このⅢ層の下部にはもう一枚遺物包含層（Ⅳ層）が認められる。なお、最下層のⅤ層は所々岩盤が露頭し、遺物を全く含まない自然堆積層で地山となる。

検出された遺構は柱穴453基、土坑5基、石積み遺構2基で不明の土坑が5基、集石を含む土杭4基が認められる。これから復元できた建物跡は残念ながら遺構の残りが悪いため判然としない。調査地域全体を俯瞰すると、柱穴の分布はR-24地域に密に分布し、北西側と西側に石積み遺構が配されることから、石積み遺構に区画された居住地が想定される。



第73図 屋敷地5 位置図



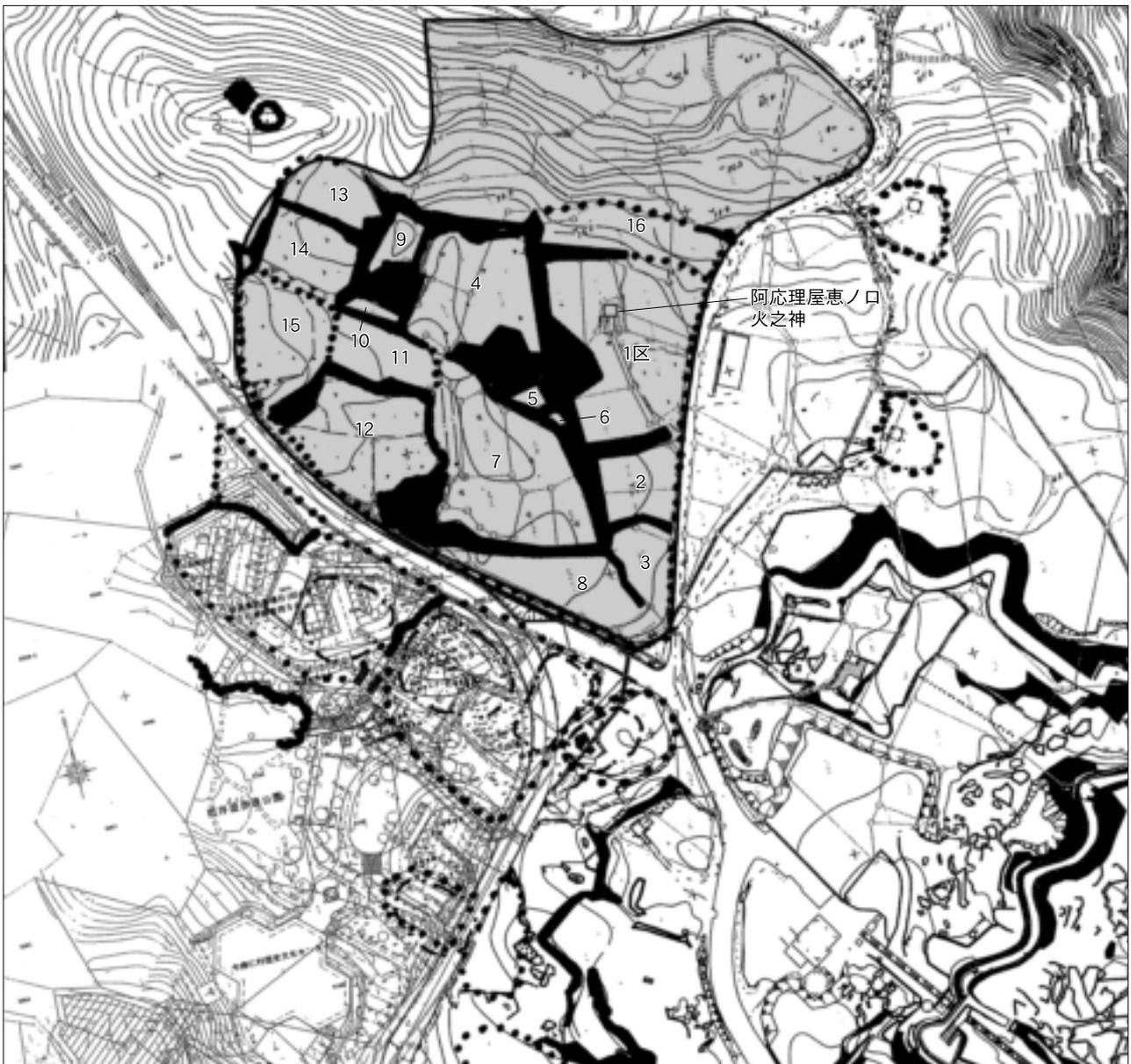


第74図 屋敷地5 遺構平面図

3. 今帰仁ムラ跡東区

東区は県道115号線に分断される集落遺跡の東側一帯の地域である。東区の四囲を概括すると、西は県道115号線、南から東は旧道ラインまで、北は石積み遺構が残る部分、シニグンニの直近までとする。現在地表面で確認される石積みを基に、1～16の16の地区設定を行っている（東区の地区設定は算数字による）。但し、これには東側部分の調査が貫徹していないため、更に草木が鬱蒼とする空間まで確認する必要がある。

当該地域については、ほとんどの地域で発掘は行われていない。一方で表面採集された資料の多くは当該地区からのもので、その量や質には目を見張るものがある。今回の事業で東区のなかでも石垣に囲まれた地域が従来から想定されているとおり、「屋敷区画であるのか？」あるいは「グスク時代に遡るものなのか？」といった点に焦点を絞って調査を実施している。このため屋敷地に想定される石積み囲い地域の中でも1区と7区を対象に調査を行った。それぞれの調査成果について以下に紹介していきたい。



第75図 今帰仁ムラ跡東区 (S = 1/2000)

⑥東区 1区（試掘調査報告）

今帰仁ムラ跡東区1区は最も大きな石積み囲いに囲まれた地域一帯で、その区画のほぼ中央に阿応理屋恵火之神の祠が建立されている。地積では今泊5004・5005・5087・5088・5023～5029（3,802㎡）からなり、前者は地積から小分割が可能である。

「阿応理屋恵」は上級神女三十三君の職名で、今帰仁阿応理屋恵を指す。今帰仁阿応理屋恵は国頭地方の最高位の神女として今帰仁城内における国家的祭祀を司った。現在では形骸化され、祭祀の舞台に登場する機会はほとんどなくなったが、歴代阿応理屋恵が相続する勾玉の付いた首飾り一連を所有している。なお、この勾玉は今帰仁村歴史文化センターに寄託されており、常設展示されている。



第76図 1区 位置図

18世紀以降も今帰仁阿応理屋恵職は継承され、現在海岸部の今泊集落に阿応理屋恵御殿が存在する。1609年に今帰仁ムラ跡がムラ移動されたとされるが、このときに大字今泊小字今帰仁原68番地あたりに移り住んだと想定される。即ち現在の阿応理屋恵ノ口職の居宅が68番地で、その故地として推定される屋敷が5029番地一帯の石積み区画された空間と類推することができる。東区1区は阿応理屋恵火之神の祠が所在する事から考えて、阿応理屋恵ノ口の旧屋敷と想定される。

以上に記した内容から鑑みて、当該地域は今帰仁ムラでも上級神女が居宅する重要な地域であったと想定される。このことから、屋敷の一部を試掘することでその把握を試みた。これまでに試掘調査等は行われていないが、同節①で紹介した表採遺物第14図-29は、阿応理屋恵ノ口火之神の近くで重機による耕作作業中に採集されたということを知った（仲村渠私信）。

遺構の分布中心はグリッドで示すとF-27グリッドにあると想定されるが今回の調査は、現在村有地である5087番地で実施した。当該地域は屋敷全体の約1%の試掘調査で、残りは未調査で保存状態は良好と考えられる。以下は、今回の試掘調査の成果を報告する。第76図に調査地区の位置を示す。

（1）層序

遺跡の層序を理解する上でI-26グリッド内側東壁と南壁の土層断面図を図化した。それぞれ東西南北壁と略して詳述する。

I層：Hue7.5YR暗褐色土3／3～3／4。腐植土・耕作土で20～40cm堆積、赤土がブロック状に含まれており、炭を微量に含む土層。（ナンバーリングI層）

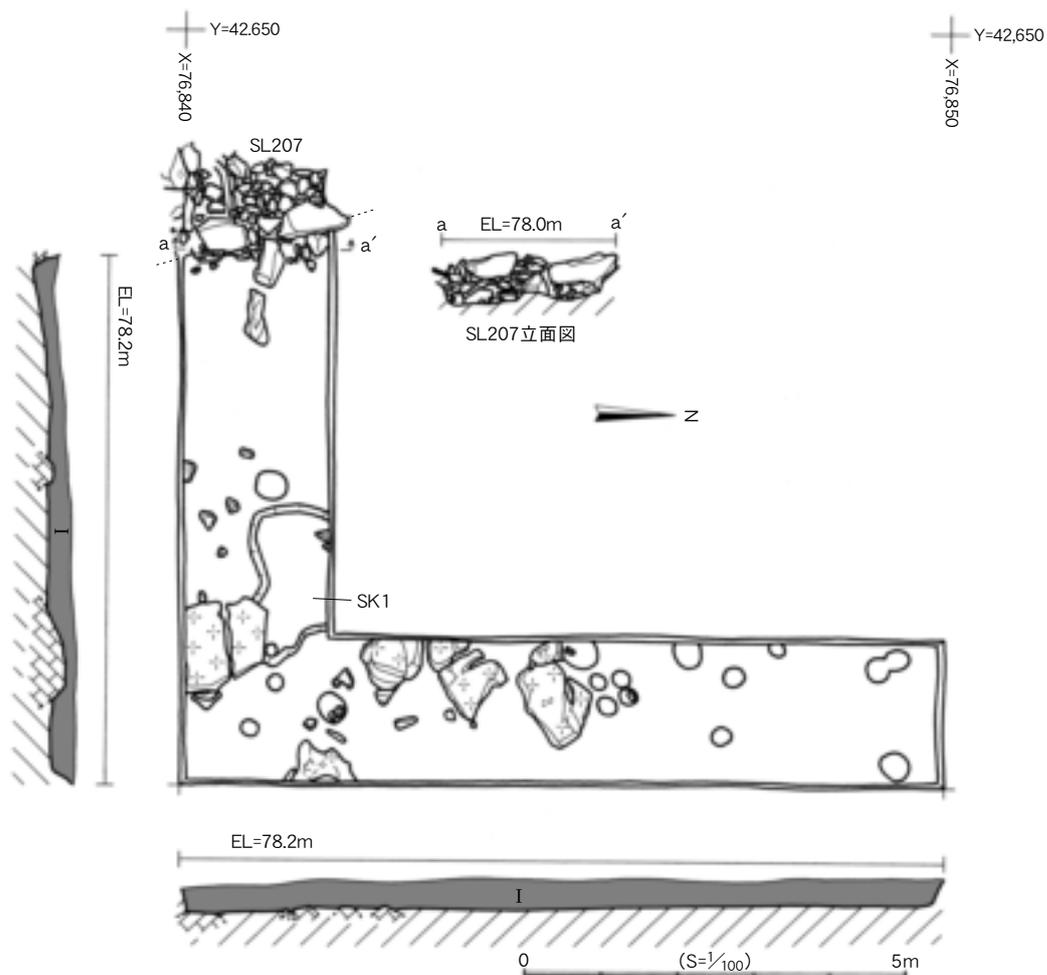
地山：所々岩盤が露頭し、遺物を全く含まない自然堆積層で、粘板岩を含む堆積層と、含まず粘性のある締まった土層の層相の異なる地山からなる。

- ・黄褐色5／4。やや粘性があり粘板岩を多く含む固く締まった土層。地山。
- ・青灰色5／4。古期石灰岩の岩盤。地山。

(2) 遺構

検出された遺構は柱穴と想定されるピットである。調査面積が狭小であったことから建物跡の推定を行うことはできなかった。遺構は地山面に確認できた柱穴である。また西側の石積み遺構は調査着手以前より地表面に露出し、確認することができたものである。これらの石積み遺構がグスク時代に構築されたものかを確認するために調査を実施した。

種類	遺構数
柱穴	17基 (※柱穴? 1基を含む)
落ち込み	1基 (SK1)
石積み遺構	1基 (SL207)



第77図 東区1区(4次調査)遺構平面・層序詳細図

(3) 人工遺物

1) 陶磁器

東区1区の試掘調査で得られた遺物は91点(推定個体数)を数える。

1. **カムイヤキ** 第78図-1は小さな頸部をもった壺形のカムイヤキである。新里(2005)のB群に属する。

2. **青磁** 第78図-2は青磁碗の玉縁状口縁碗の口縁部資料で、直線的に開く口縁部で口唇部を僅かに肥厚させる。第78図-3～6は青磁碗底部資料で、3は比較的釉を厚く施釉、外体面に蓮弁を施すと考えられるが破片資料のため不明である。雷文帯碗の底部資料と推察される。4は外体面に細蓮弁文碗を描く資料で、見込に印花を有する。5は外表面の蓮弁は判然としないが、4同様の標品と考えられる。6は高台脇までの施釉で釉の発色は褐色を呈し悪く薄い。外表面無文の碗底部資料である。第78図-7～9は青磁皿底部資料で、7は口折皿もしくは外反皿の底部資料、8は直口皿もしくは外反皿の底部資料で見込を釉剥ぎし露胎とする。9は内外面に蓮弁文を施す資料である。10は束口碗の口縁部資料で外面には文様(蓮弁文か?)が描かれるようであるが、判然としない。

3. **白磁** 第78図-11は口縁部を肥厚するいわゆる玉縁口縁碗(大宰府白磁Ⅳ類)の口縁部資料で、今帰仁城跡を含めて今帰仁城跡周辺遺跡などでは西区屋敷地3に続く2例目で、出土例の少ない標品である。第78図-12は直口皿(森田D群)と考えられる資料である。第78図-13輪花杯の底部資料で見込を釉剥ぎし露胎とする。14は直口碗と考えられる底部資料で、陶胎粗製の標品である。

4. **青花** 第79図-16・17は直口碗d(小野E群)で、いわゆる饅頭心形の底部となる資料である。16は見込に花文を配置し、17は見込に人物図、高台内に「長命富貴」の吉祥文字を書く。第79図-18・19は青花皿資料である。18は外反皿(小野B1群)で外面に唐草文を描く小片、19は碁笥底皿(小野C群)の口縁部資料で、口縁外面に波濤文帯が廻る。第78図-20は青花瓶の口縁部小片資料で外反する口縁部端でわずかながら、外面に蕉葉文が描かれるのが分かる。

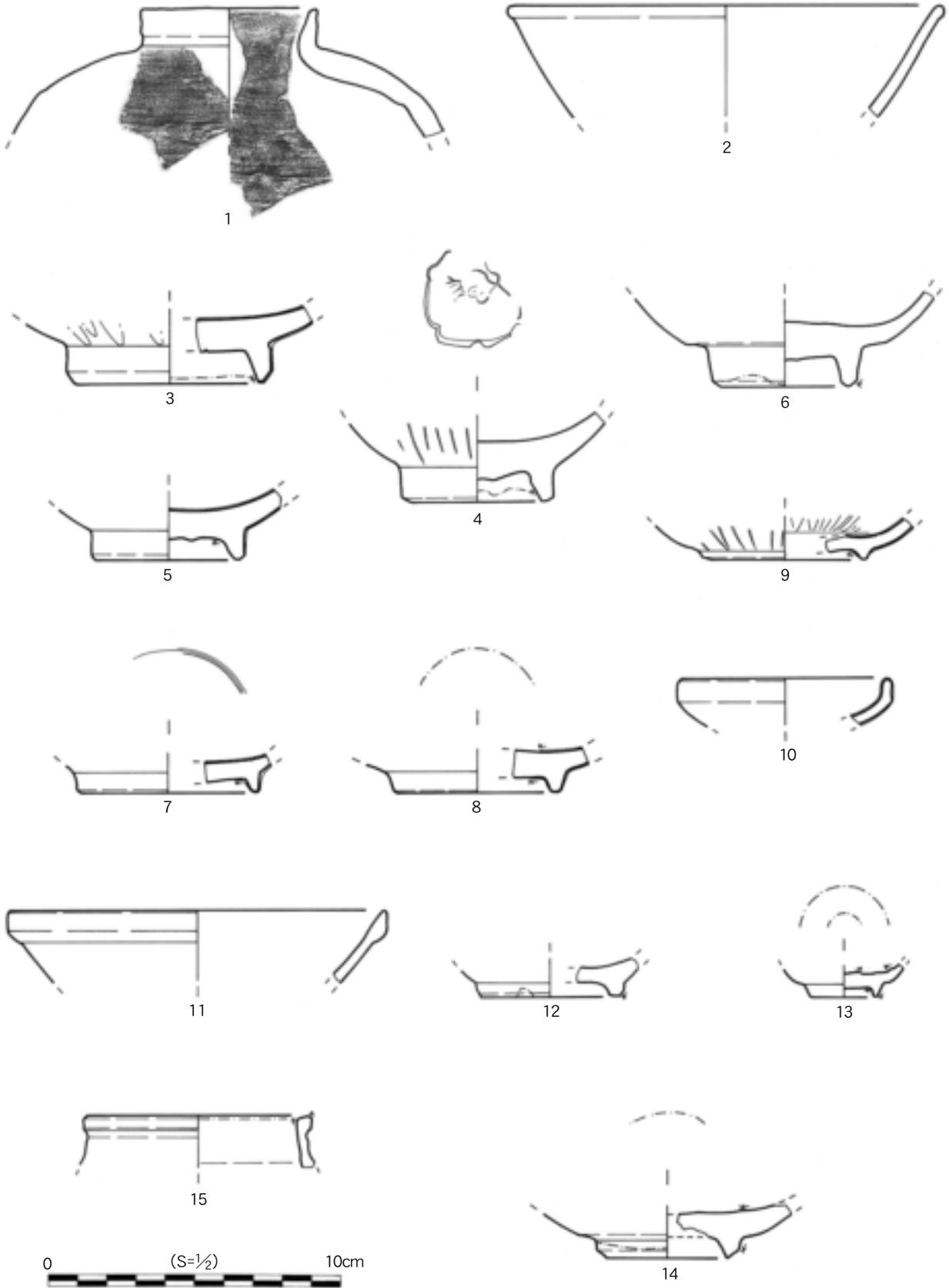
5. **瑠璃釉** 第79図-21は瑠璃釉碗の底部資料で高台内は白色、体内外面に瑠璃釉を施す良品である。

6. **褐釉陶器** 第79図-22・23は褐釉壺dで、方形を成す口縁部を持つ大型壺である。

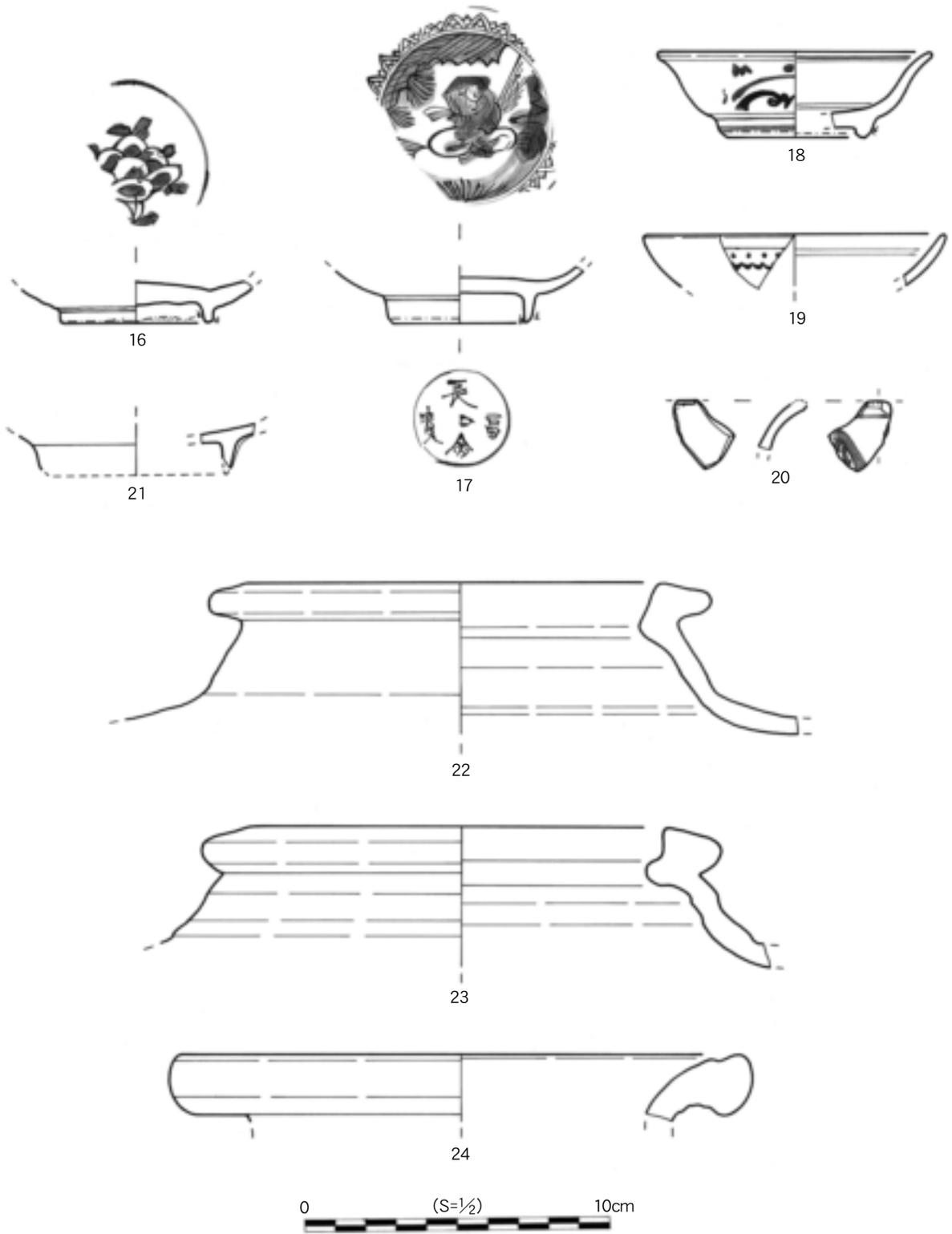
7. **タイ陶磁** 第79図-24はノイ川窯系の資料で大型壺の口縁部資料である。

(4) 自然遺物

当該調査は全体的に、表土層の除去と表採である。脊椎動物骨や貝類などが集収されたが、今回は資料的価値を鑑みて報告から割愛する。



第78図 東区1区出土遺物(1)



第79图 東区1区出土遺物(2)

⑦東区 7区（試掘調査報告）

今帰仁ムラ跡東区7区は石積みの保存状態が最も良い地域の一つで、東西南を石積み遺構によって囲まれている。その区画の北側は私有地であるが、今回調査した南側地域一帯は既に村有地となっていることから、当該地域について発掘調査を実施した。調査の目的が遺構確認を目的としているため、今回は遺構検出面までの発掘に留めている。また石積みの構築時期を確認することを目的に石積み基部の試掘を実施した。

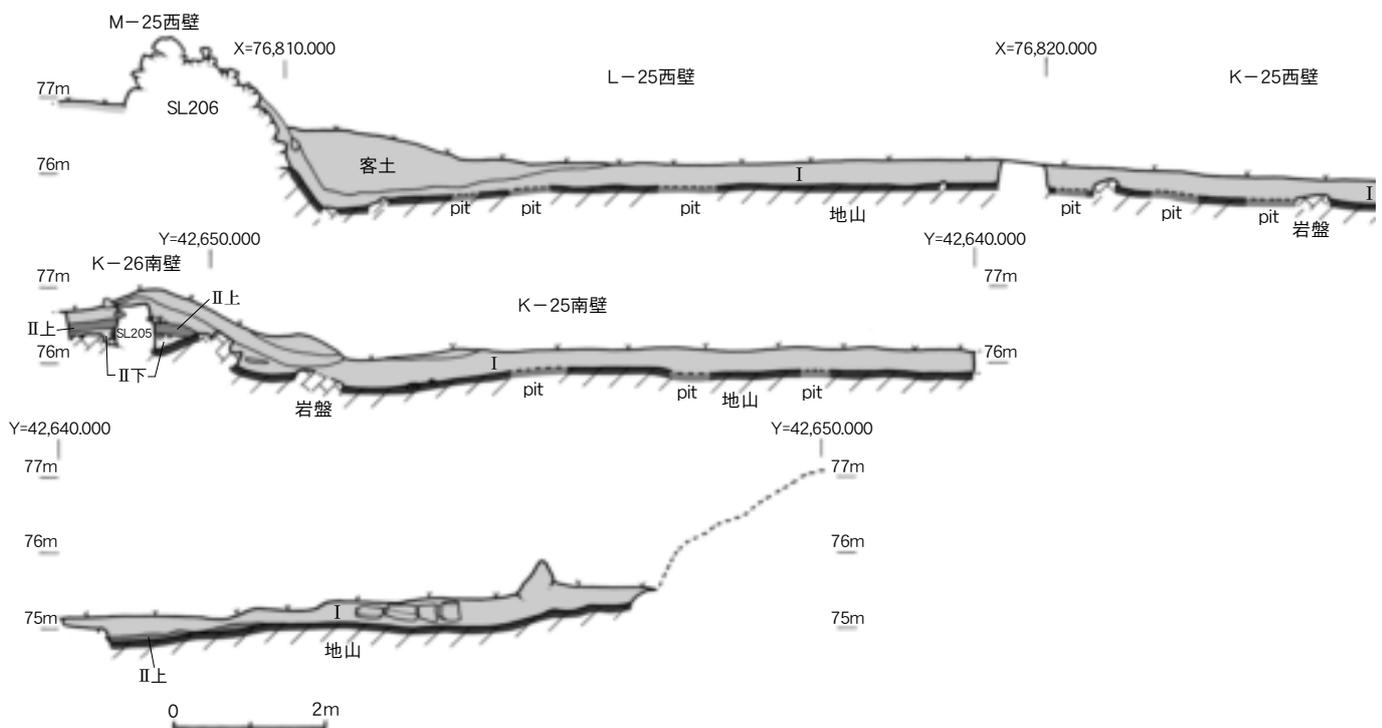


第80図 7区 位置図

(1) 層序

遺跡の層序を理解する上でK-25・L-25グリッド内側北壁・西壁の土層断面図を図化した。それぞれ東西南北壁と略して詳述する。

I層：Hue7.5YR暗褐色土 3／3～3／4。腐植土・耕作土で20～40cm堆積、赤土がブロック状に含まれており、炭を微量に含む土層。（ナンバーリング I層）



第81図 東区7区調査区層序

Ⅱ層：Hue7.5YR黒褐色3/2。遺物包含層。5～10cmの堆積でK-26南壁のⅡ区とⅦ区をつなぐ石積み箇所では上層と下層があって、下層には礫が大量に含まれる。(ナンバーリングⅠ層)

Ⅲ層：Hue10YR暗褐色土層3/3～3/4。遺構検出面のため発掘は行っていないため詳細は不明。

Ⅳ層：所々岩盤が露頭し、遺物を全く含まない自然堆積層で、粘板岩を含む堆積層と、含まず粘性のある締まった土層の層相の異なる地山からなる。

①Hue10YR黄褐色5/4。やや粘性があり粘板岩を多く含む固く締まった土層。地山。

②Hue7.5YR明褐色5/8。やや粘性があり粘板岩を多く含む固く締まった土層。地山。

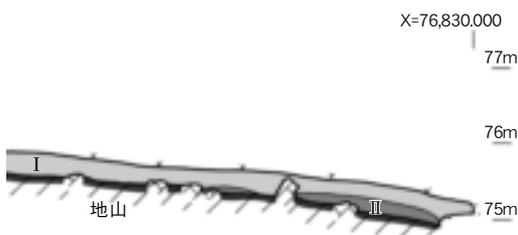
③Hue5BG青灰色5/4。古生代石灰岩の岩盤。地山。

(2) 遺構

検出された遺構は柱穴と想定されるピット・土坑である。遺構は地山面に確認できた柱穴である。また南側(SL206)と東側(SL205)の石積み遺構は調査着手以前より地表面に露出し、確認することができたものである。これらの石積みがグスク時代に構築されたものかを確認するために調査を実施した。

種類	遺構数
・掘立柱建物跡(要検討)	2基(内訳：主屋1棟、高倉1棟)
・柱穴	186基(内訳：柱穴165基、柱穴? 20基、要検討柱穴1基)
※掘立柱の柱穴も総数に含まれる。	
・土坑	6基(備考：土坑? 4基を含む)
・石積み遺構	2基

※各遺構は遺構の検出面における評価であり、詳細な遺構の内容については実際に発掘を行わない限り、判断を変更することも予測される。





第82図 東区7区遺構平面図

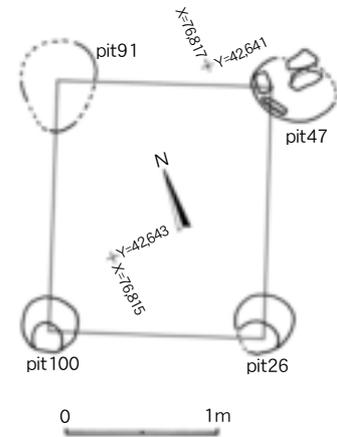
〔名称〕 東区7区：SB01

〔位置〕 7区（L-25）

〔検出面〕 IV層（地山）

〔遺構構成〕 柱穴4基

〔所見〕 Pit91・47・100・26で構成される要検討掘立柱建物跡。柱穴はいずれも遺構精査は行っておらず、遺構検出面での確認に留めている。柱穴は直径が35～55cm程度でpit26と100で柱痕を確認することができる。柱痕の直径は20cm程度である。Pit47がpit48を切っており、SB01と後述するSB02は先後関係にあることがわかる。即ちSB01がSB02に比して新しい。建物跡の床面積は長軸166cm×短軸144cmで、I層の旧表土耕作土を除去した段階で確認されており遺構検出面は削平されていると考えられる。覆土からの遺物などは、精査していないため不明である。



第83図 東区7区遺構詳細図(SB01)

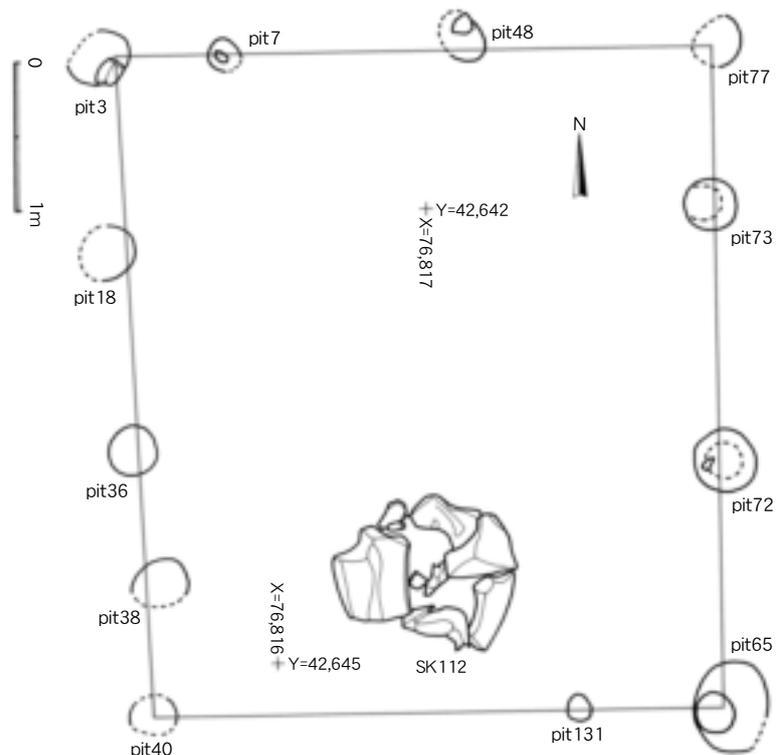
〔名称〕 東区7区：SB02

〔位置〕 7区（L-25）

〔検出面〕 IV層（地山）

〔遺構構成〕 柱穴 12基、土坑 1基

〔所見〕 Pit3・7・48・77・73・72・65・131・40・38・36・18及びSK112で構成される要検討掘立柱建物跡。柱穴はいずれも遺構精査は行っておらず、遺構検出面での確認に留めている。柱穴は直径19～60cm程度で、Pit73とpit72で柱痕を確認することができる。柱痕は25cm程度である。SB01で記したとおり、pit48とpit47は切り合っており、SB01がSB02に比して新しいことが分かる。建物跡の床面積は長軸440cm×短軸390cmで、I層の旧表土耕作土を除去した段階で確認されており遺構検出面は削平されていると考えられる。覆土からの遺物などは、精査していないため不明である。



第84図 東区7区遺構詳細図(SB02)

(3) 人工遺物

東区7区の試掘調査で得られた遺物は272点(推定個体数)を数える。

1) 陶磁器

1. 土器 第85図-1・2は貝塚時代後期系の土器である。いわゆるくびれ平底の底部資料である。第85図-3はグスク土器もしくは本土産の瓦質土器などと推定される標品である。底面には糸切と判断される痕跡がみられる。今帰仁城跡及び周辺で出土する土器は一般的に粘板岩などの混和材を大量に混入するが当該資料にはそれは見られない。このため、別系譜の土器と考えられるが、産地については不詳である。

2. カムイヤキ 第85図-4は小さな壺の口縁部資料である。新里(2005)のB群に属する資料で、内外面に横方向のナデ調整の条線が見られる。第85図-5は底部資料で、内面に当て具の痕跡が僅かに残る。

3. 青磁 第85図-6は青磁碗の口縁部資料で、体部に立体的な蓮弁文を描く。口縁部は比較的直線的に開き、鎬蓮弁文碗a(大宰府分類Ⅱ類)に属する。第85図-7~10は無鎬蓮弁文碗である。7は無鎬蓮弁文碗a、8は無鎬蓮弁文碗で外面に蓮弁、内面には刻花文を描くようであるが、判然としない。9は口縁部の小片なので、詳細は不明である。第85図-8は外面に蓮弁文を配する資料で、内面にも文様が描かれるが判然としない。第85図-9は外面に蓮弁文が描かれる蓮弁文碗だが、口唇部の釉が剥がれており特徴的な資料である。第85図-10は外面に蓮弁文を描く底部資料である。口縁部が欠落しているためいわゆる蓮弁文碗なのか、口縁部を持つ資料の胴下半に蓮弁文を描く資料なのかは判然としない。第85図-11~14は口縁部に雷文を描く資料で、11~13は篋彫りにより雷文を、14はスタンプによって雷文を描くものである。第

第12表 西区7区出土遺物一覧表

種別	分類	器種・分類	個体数	百分率		
在 地	土器	鍋・鉢・壺・等	5	1.84%	1.84%	2.57%
	カムイヤキ	壺・鉢・甕・等	1	0.37%	0.37%	
	瓦質土器	蓋・不明	1	0.37%	0.37%	
陶磁器	沖縄産陶器	壺				
	青磁	碗	133	48.90%	64.34%	93.75%
		皿	23	8.46%		
		盤	13	4.78%		
		杯	1	0.37%		
		香炉	1	0.37%		
		瓶	2	0.74%		
		器台				
	酒会壺(身・蓋)	2	0.74%			
	置物					
	白磁	碗	9	3.31%	7.72%	
		皿	11	4.04%		
		杯	1	0.37%		
	青花	燈明皿			11.40%	
		壺				
		瓶				
		元・元様式	2	0.74%		
		碗	14	5.15%		
		皿	7	2.57%		
		大皿	1	0.37%		
		杯・小杯	3	1.10%		
		壺				
		瓶	3	1.10%		
	青白磁	鉢			0.74%	
		合子	1	0.37%		
	天目	碗	2	0.74%	0.74%	
	不明焼き締め陶器					
褐釉陶器	壺			8.09%		
	茶入れ	1	0.37%			
	急須(身・蓋)					
	小型壺	6	2.21%			
	大型壺	13	4.78%			
	長胴壺					
	掃り鉢	1	0.37%			
五彩・赤絵	花鉢・ほか	1	0.37%	0.37%		
	碗	1	0.37%			
瑠璃釉	瓶	1	0.37%	0.37%		
	皿					
翡翠釉	壺	1	0.37%	0.37%		
	瓶					
緑釉	不明			0.37%		
三彩	その他・不明					
タイ	水注	1	0.37%	2.57%		
	土器	1	0.37%			
	鉄絵	合子(身・蓋)	1		0.37%	
		大型壺	4		1.47%	
		中型壺	1		0.37%	
		小型壺				
瓶						
青磁	1	0.37%	0.37%			
ベトナム	白磁	碗		0.74%		
	青磁	碗	1		0.37%	
高麗	青花	瓶・その他	1	0.37%	0.37%	
	青磁	碗				
日本本土	不明	不明陶磁				
	備前焼締め	掃り鉢				
	肥前磁器	碗・その他				
近代陶磁器	碗・その他					
陶磁器	総計		272	100.00%		
玉類	勾玉					
	丸玉・小玉	1	100.00%			
煙管	石製加工(雁首)					
	銅製(雁首・吸い口)					
遊具	I類					
	II類					
銭貨	中国銭(有文)	1	50.00%			
	無文銭	1	50.00%			
	寛永通寶					
金属製品	鉄製品	釘	10	52.63%		
		刀子				
		鎌	1	5.26%		
		鉄				
		釣り針				
	その他・不明	8	42.11%			
	推定・近現代	2				
銅製品	座金・飾り金物等					
	鉸等					
	簪・装飾品					
	その他・不明	6	100.00%			
石製品	石斧					
	砥石	2	40.00%			
	硯	1	20.00%			
	錘	1	20.00%			
	不明	1	20.00%			
貝製品	漁網錘?					
土製品	土彈ほか					
	骨ヘラ	4	100.00%			
骨製品	歯ブラシ					

※網掛け部分は12~16世紀以外の近世以降の遺物。
※遺物の比率については中世のものだけを対象としている。

85図-15はラマ式蓮弁文を描く有文外反碗の資料である。第85図-16は底部資料でラマ式蓮弁文を体部に描く資料と考えられる。口縁部は篋彫りの雷文帯もしくは、体部全体にラマ式蓮弁文を描く資料と推察される。第86図は細蓮弁文碗の資料である。17は細蓮弁文碗 a、18～21は細蓮弁文碗 b、22は細蓮弁文碗 c の口縁部資料である。23・24は細蓮弁文碗 a、25～28は細蓮弁文碗 b の底部資料である。29は細蓮弁文碗 a に類する小碗の底部資料である。第87図-30～32は無文外反碗 b で焼成不良で釉の発色は悪い。33～34は無文の直口口縁碗。35も無文直口口縁碗だが、口縁帯に不明瞭だが文様もしくは圏線が廻る口縁部資料で、素地釉調から推察して、第87図-36と同一個体である可能性が考えられる。第87図-37～42は青磁碗の底部資料である。37・38は外底無釉の青磁碗底部資料で37は見込が凹む特徴的な資料で、古式の様相を保持する。39～42は底径がほぼ同じサイズになるやや器壁の厚い資料である。41は内面の文様などから判断して雷文帯碗 b（いわゆる人形手）の底部資料と推察される。42は見込を釉剥ぎして露胎とする大振りの碗底部資料である。

第88図-43は櫛描文皿の口縁部資料と推察されるが、底部が欠損するので文様の有無は不明である。第88図-44～47は蓮弁口折皿で、44・45は口縁部、46・47見込に双魚文を押印する底部資料である。48・49は腰折皿で48は無文、見込は釉剥ぎし露胎となる。49は口縁部を刻み稜花とする資料で内面に刻花文を描く。第88図-50は無文直口皿の口縁部小片資料。第88図-51は蓮弁直口皿の口縁部資料で外面隆帯文の上下に文様を描くと考えられるが、小片のため判然としない。第88図-52は小型の壺もしくは瓶などの口縁部資料であると考えられる。第88図-54～57・第89図-58～60は盤で、54は罌縁の口縁を刻み稜花とする資料、55は縁上面に文様を描く資料、56は内面に篋彫りによって蓮弁を描き、57は櫛描によって蓮弁を配する資料である。58は口縁部が直立する資料で内面には篋彫りによって蓮弁文を描く。59・60は底部資料で59は濃緑色の釉を施釉し、サイズの大きな盤の底部と推察される。60は櫛描きの蓮弁を体内面に描く。第89図-61・62は酒会壺で、61は蓋の小片、62は底部で外面に篋彫りによる蓮弁文を描く資料である。

4. 白磁 第89図-63は白磁口禿碗の底部資料と考えられる。第89図-64～66は今帰仁タイプ碗で、64は口縁部資料の小片、65は底部で見込は露胎とならず施釉される資料、66は逆に見込全体を露胎とする資料である。67は見込を蛇の目状に釉剥ぎし露胎とするタイプの資料で、68も同様の特徴を持つ。67・68は素地や底部の成形など今帰仁タイプに類する標品であるが、高台に白泥が付着し外底面の成形などで今帰仁タイプとは異なる特徴を持つ資料である（主郭分類内底無釉碗 d に該当）。第89図-69は見込が凹む特徴などからピロースクタイプ碗の底部資料と目される。第89図-70は外反碗の底部資料で、広い見込に印花文を押印する。71～74はいわゆる森田分類D群で、71は直口皿の資料で、72は直口する口縁の小片で小皿、小杯の破片資料と考えられる。73は小杯もしくは小皿の底部資料で見込は蛇の目釉剥ぎとする。74は燈明皿の口縁部資料である。第90図-75は外反皿。第90図-76～78は直口碗の資料である。76は小片のため判然としないが、直口碗の口縁部資料と考えられる。77・78は底部資料で77は陶胎、78は磁胎の資料でいずれも見込は施釉されず露胎となる。76は見込露胎の直口碗の底部資料である。

5. 青花 第90図-79・80は元様式青花の胴部小片で79は主郭報告資料（第62図-1.p210）の白抜龍文酒会壺の胴部小片と酷似する資料である。あるいはこの標品と同一と思われるもので、仮に同一個体の破片資料であれば、直線距離で300mも離れる本調査区でなぜ採集されたのか不可解な点も多い。80は碗や杯などの胴部小片で、外面にラマ式蓮弁を配している。第90図-81は直口碗 a（小野分類C群）に類する資料で外面腰部に如意頭文を配し、見込には花文？が描かれている。第90図-82は直口碗 c（小野分類D群）で腰部には略したラマ式蓮弁文を配し、

見込には十字文を描く。第90図-83は外反皿で見込に玉取り獅子、外面には唐草文を描く。第90図-84・85は基筥底皿で、84は口縁部に波濤文を描く口縁部資料、85は底部資料で、外面に略した蕉葉文を描き、見込に花文を描く。第90図-86は大皿bで、外面に篋彫りによる蓮弁を配し、見込に文様が描かれるが小片のためモチーフは不明である。第90図-87は小杯の底部資料小片。第90図-88は玉壺春瓶の頸部資料で頸部の圏線上下に唐草文を配する。第90図-89は合子の身と考えられる資料で、外面に如意頭文?が描かれる。

6. **三彩** 第90図-90・91は三彩の小片で、内面に施釉されないことから、いずれも器種は袋物と推察される。90は壺などの頸部部分の小片を、91は水注などの取っ手もしくは注ぎ口部分の継ぎ足したと考えられる部分が小さく付いている。

7. **天目茶碗** 第91図-92・93は天目茶碗で、92は口縁部小片資料、93は底部資料である。

8. **褐釉陶器** 第91図-94は口縁部を内傾させ、肥厚する資料で小型壺で褐釉壺c dに類する標品と考えられる。第91図-95は瓶の口縁部資料と考えられるが類例の少ない資料で詳細は不明。第91図-96は褐釉陶器壺の底部資料で黄褐色の素地に飴釉を薄く施釉する。第91図-97・98は褐釉壺dで最も一般的な大型の褐釉陶器壺である。97は口縁部資料、98は底部資料である。99は大形の褐釉陶器壺と考えられる口縁部資料で、屈曲する口頸部に外側に三角形に肥厚する素地は灰白色で、混和材に白色・黒色の鉱物粒を多く含む。第91図-100は褐釉播鉢の底部資料である。釉が認められないため焼き締め陶器である可能性も否定できない。

9. **タイ陶磁** 第91図-101は半練の蓋の小片である。第91図-102は鉄絵合子蓋の資料でやはり小片である。第91図-103は今帰仁城跡及び周辺遺跡では初出の資料で青磁の袋物胴部小片と考えられる資料である。弧状の文様を連続的に配し破片の上下に圏線を廻らせている。第91図-104・105は褐釉陶器壺で、104は大型壺の口縁部資料で丸く肥厚し口縁上位に凹帯が廻る資料である。105は褐釉中型壺の底部資料である。

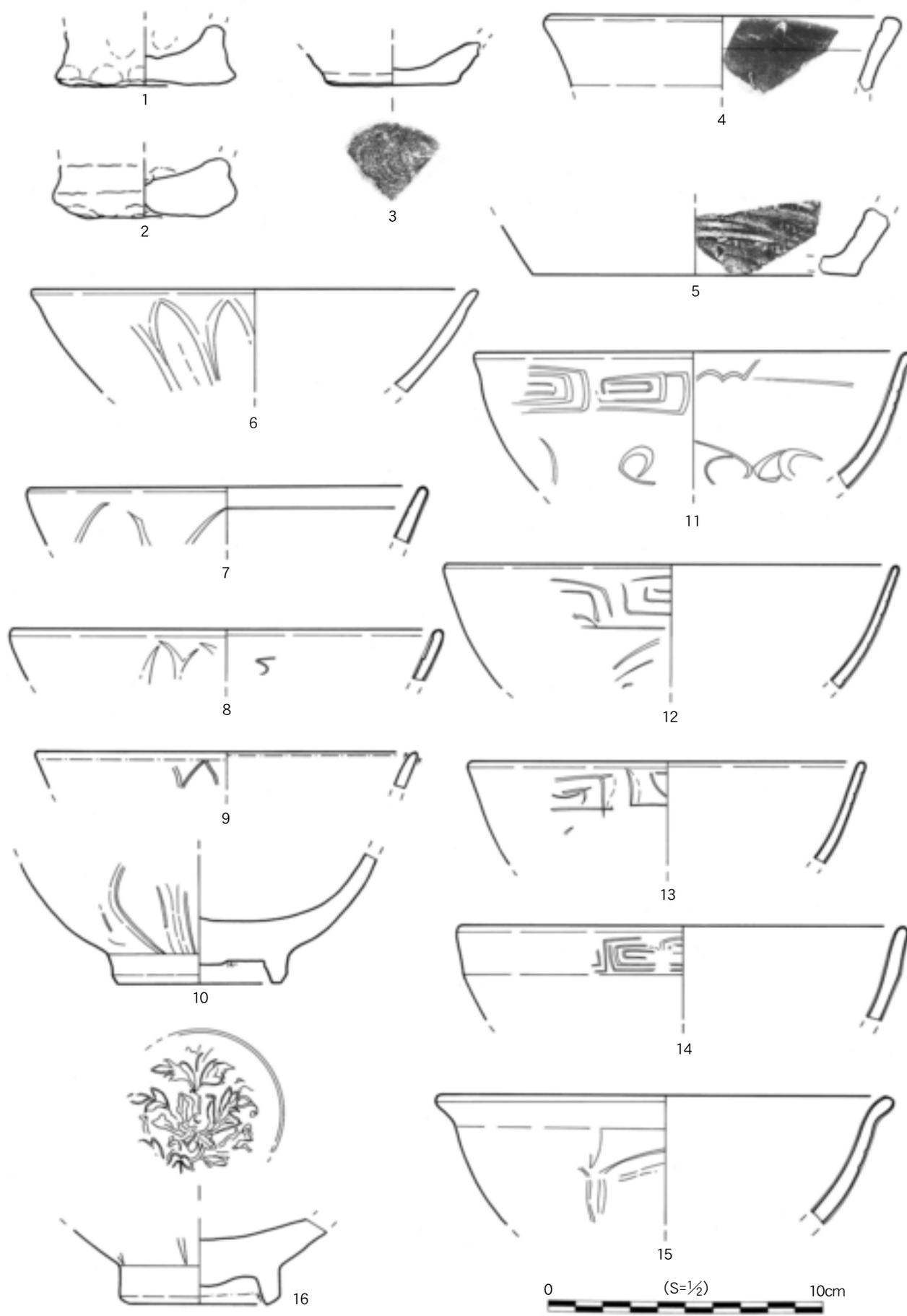
10. **ベトナム陶磁** 第91図-106は青花の玉壺春瓶の底部資料と考えられる。内面にも釉を施釉、外面の腰部にラマ式蓮弁文を描く。

2) **玉** 第92図-107は径約7.2mm、厚さ5.42mm、重量0.52gの丸玉で、黄色の資料である。

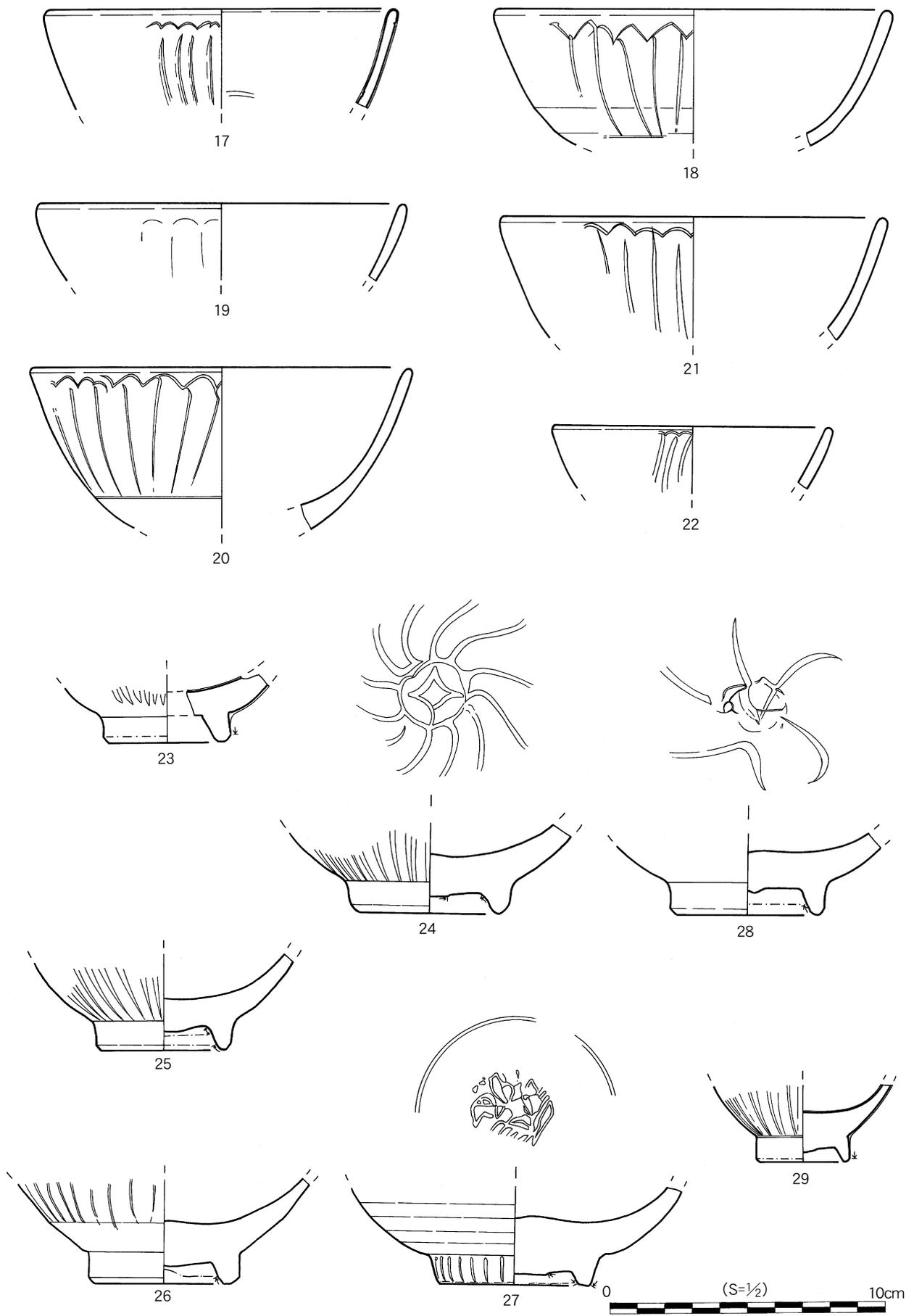
3) **銭貨** 第92図-108・109は銭貨で、108は永楽通寶の字が判読できることから、明永楽(1409年初鑄年)の銭であることが解る。109は無文銭で方孔は広く、銭厚は薄い粗造の銭である。

4) **煙管** 第92図-110は煙管の火皿で、板状の金属を筒状にして繋ぎ製作する。I層出土であるので、グスク時代に相当する資料ではないものと判断されるが紹介する。

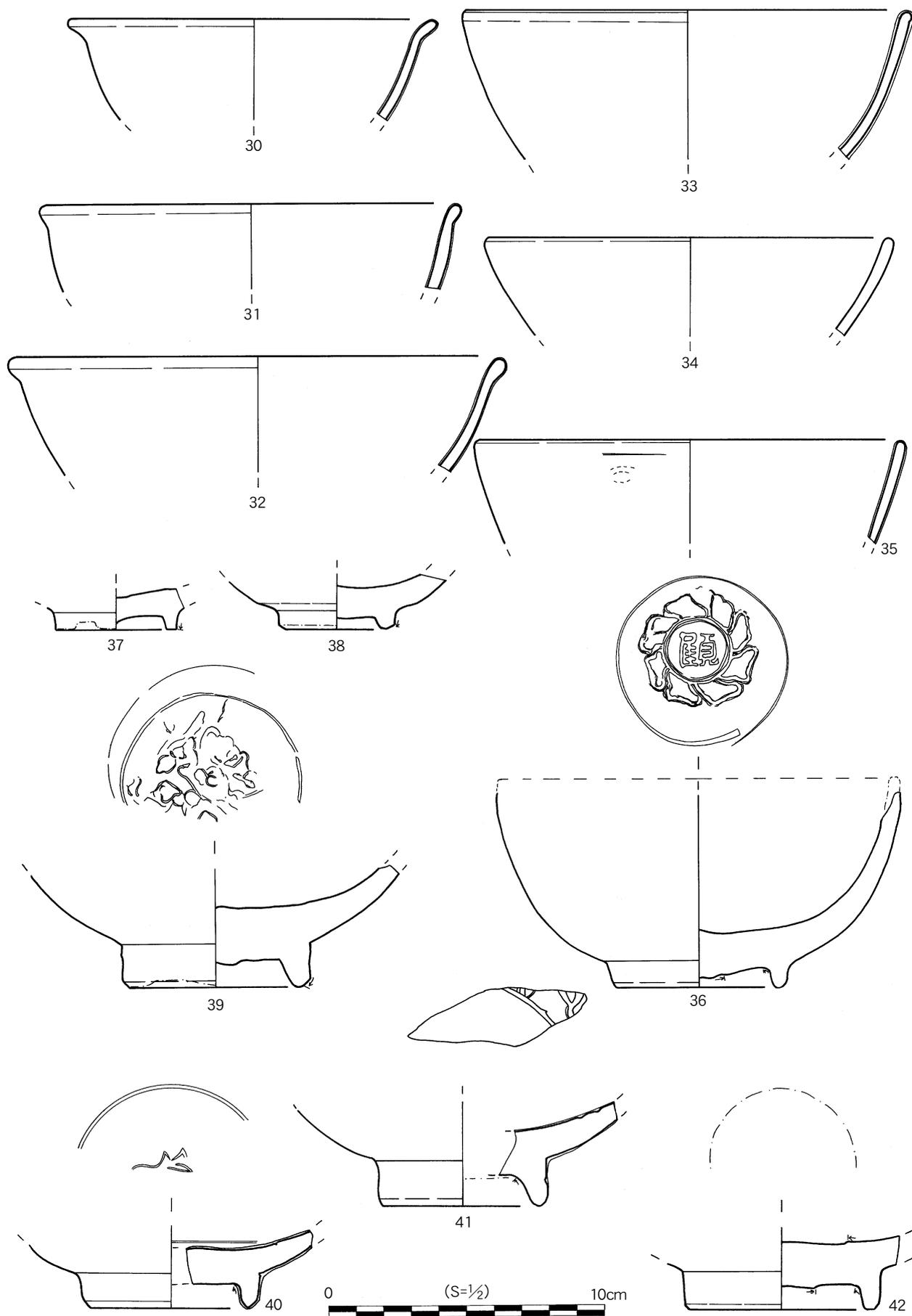
5) **金属製品** 第92図-111~115は銅製品である。111は大輪の菊花をモチーフとする円盤状の製品で、略正円の一部に刻みを入れホゾをつくる。製品の機能は不明であるが引手の座金と想定した。112は環状の製品でもととは正円の資料と考えられるが曲がっていて歪む。松竹梅の文様が表裏面に陽刻されている。同様の資料が今帰仁城跡主郭東側斜面(未報告)や円覚寺(埋文報告書第10集68図-20・21)などでも出土する。吊り金具等の用途が考えられるが不明。113は環状の金具で、略方形ではあるが接合部がある切れ目側端部はやや丸みをもち、逆側はやや鋭角となる。114は薄い板状の製品で用途は不明、端部に円孔を穿ち、反対側は破損し欠失したと思われる。115は中空の棒状製品で両端部とも欠失しているため長さは不明、残存長16.20cmを測る。



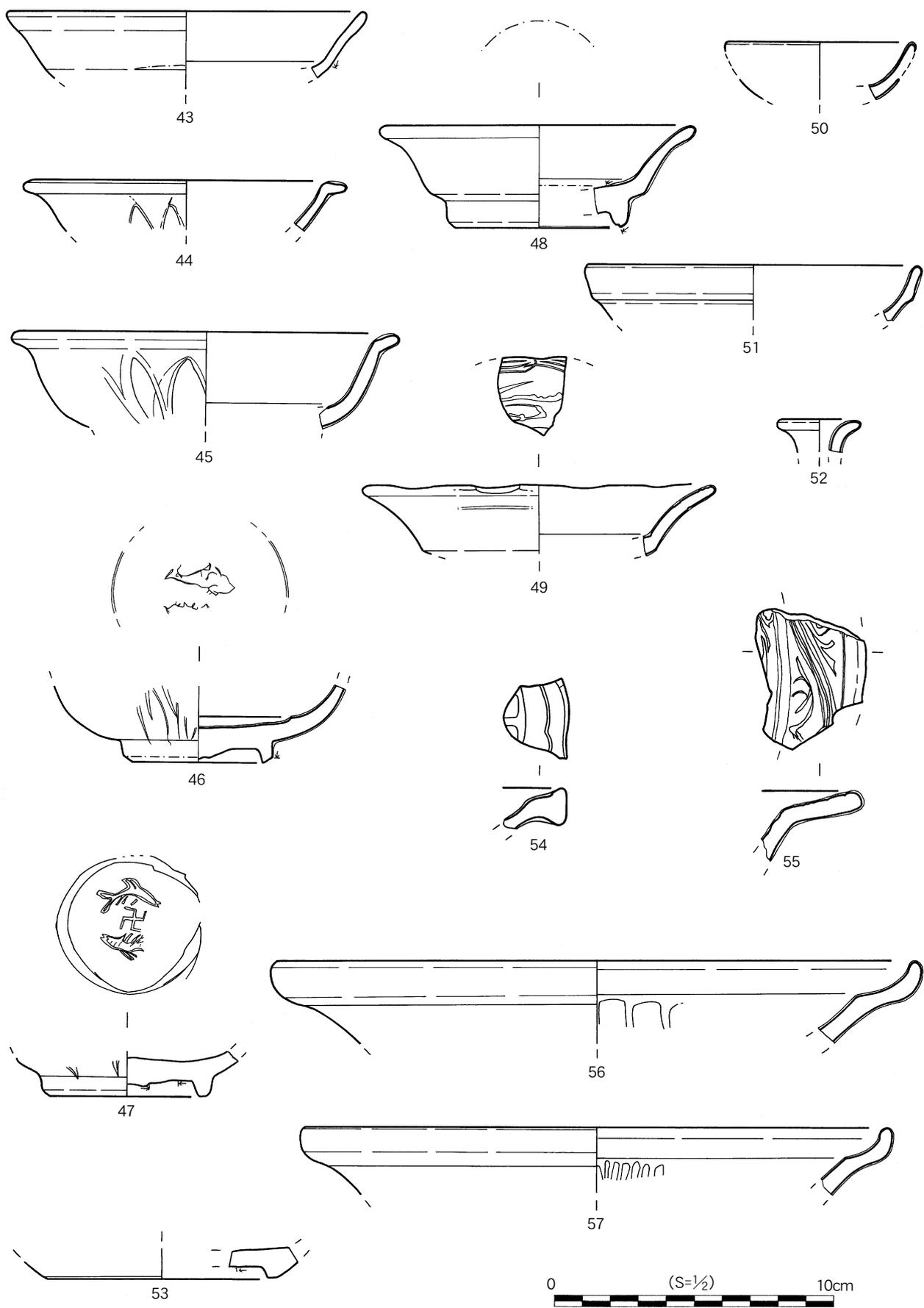
第85図 東区7区出土遺物(1)



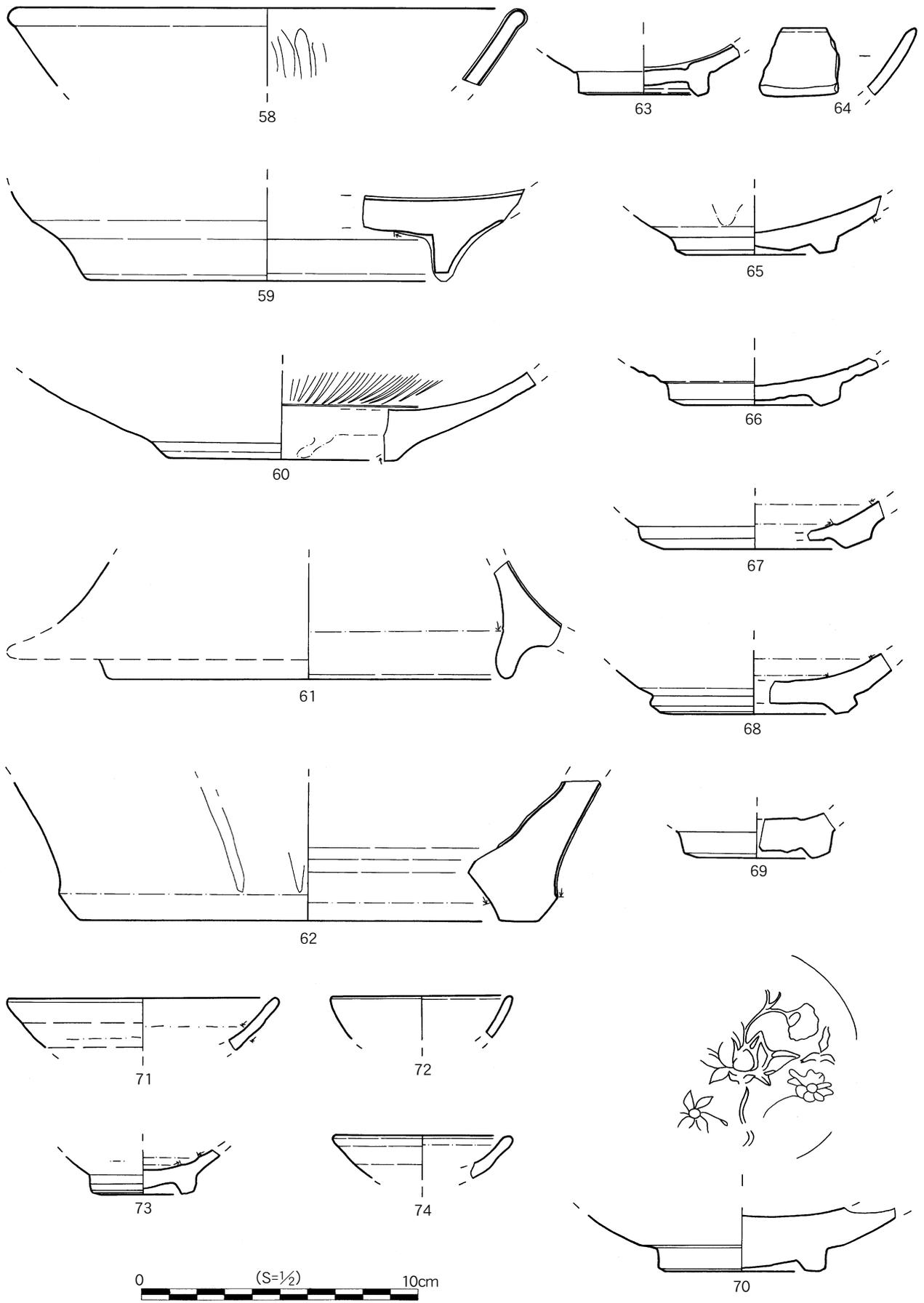
第86図 東区7区出土遺物(2)



第87図 東区7区出土遺物(3)



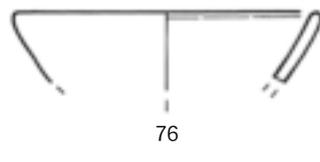
第88図 東区7区出土遺物(4)



第89図 東区7区出土遺物(5)



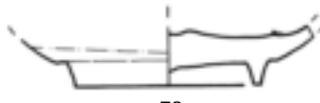
75



76



77



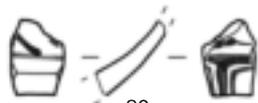
78



79



81



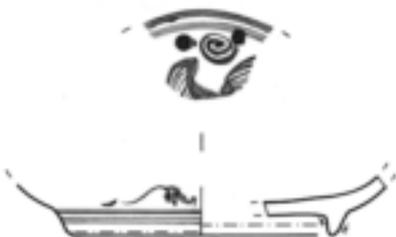
80



84



82



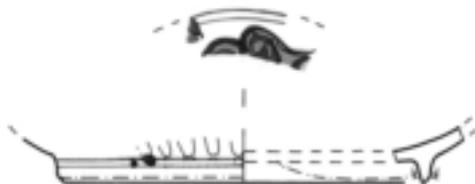
83



85



87



86



88



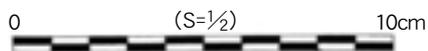
89



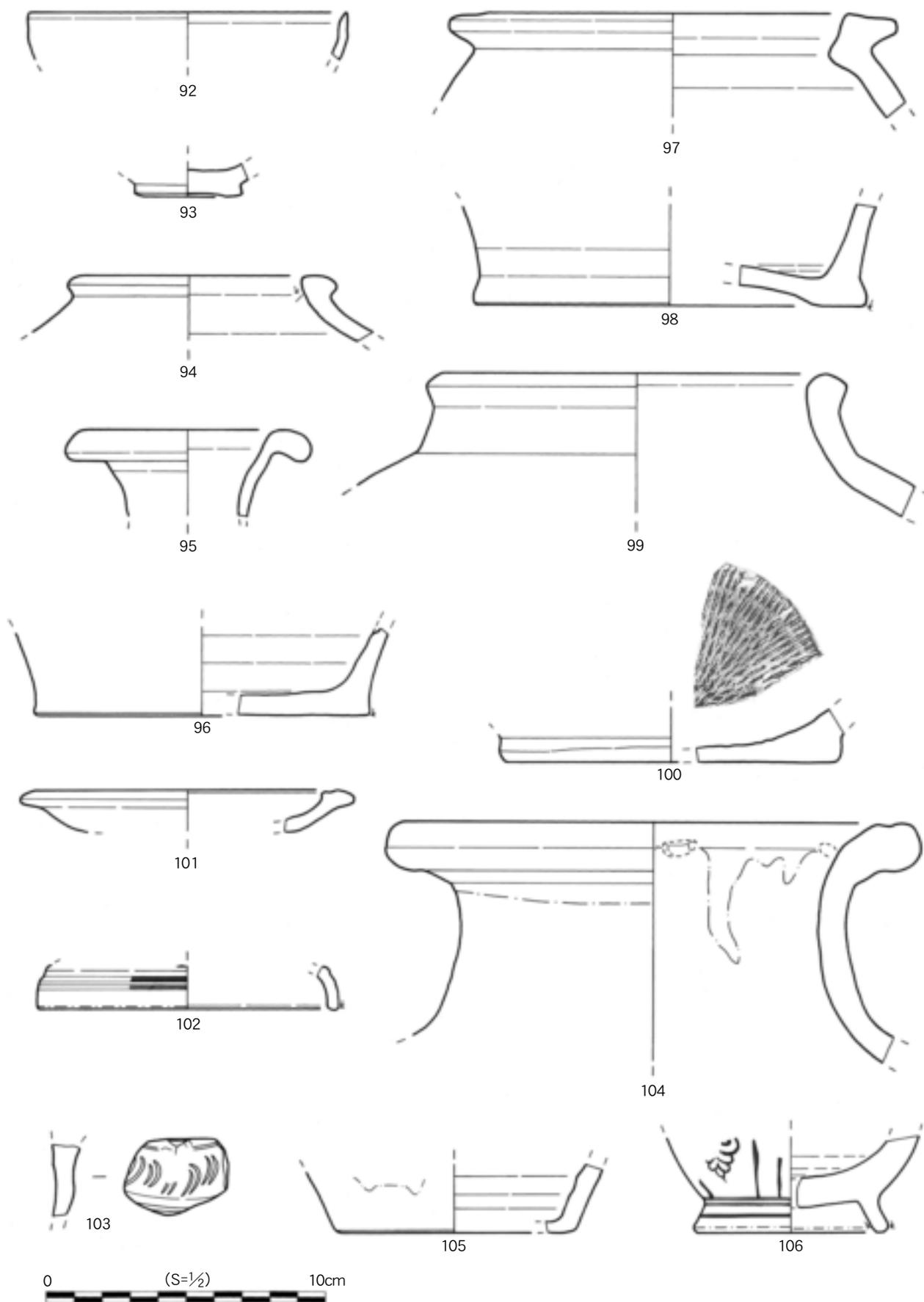
90



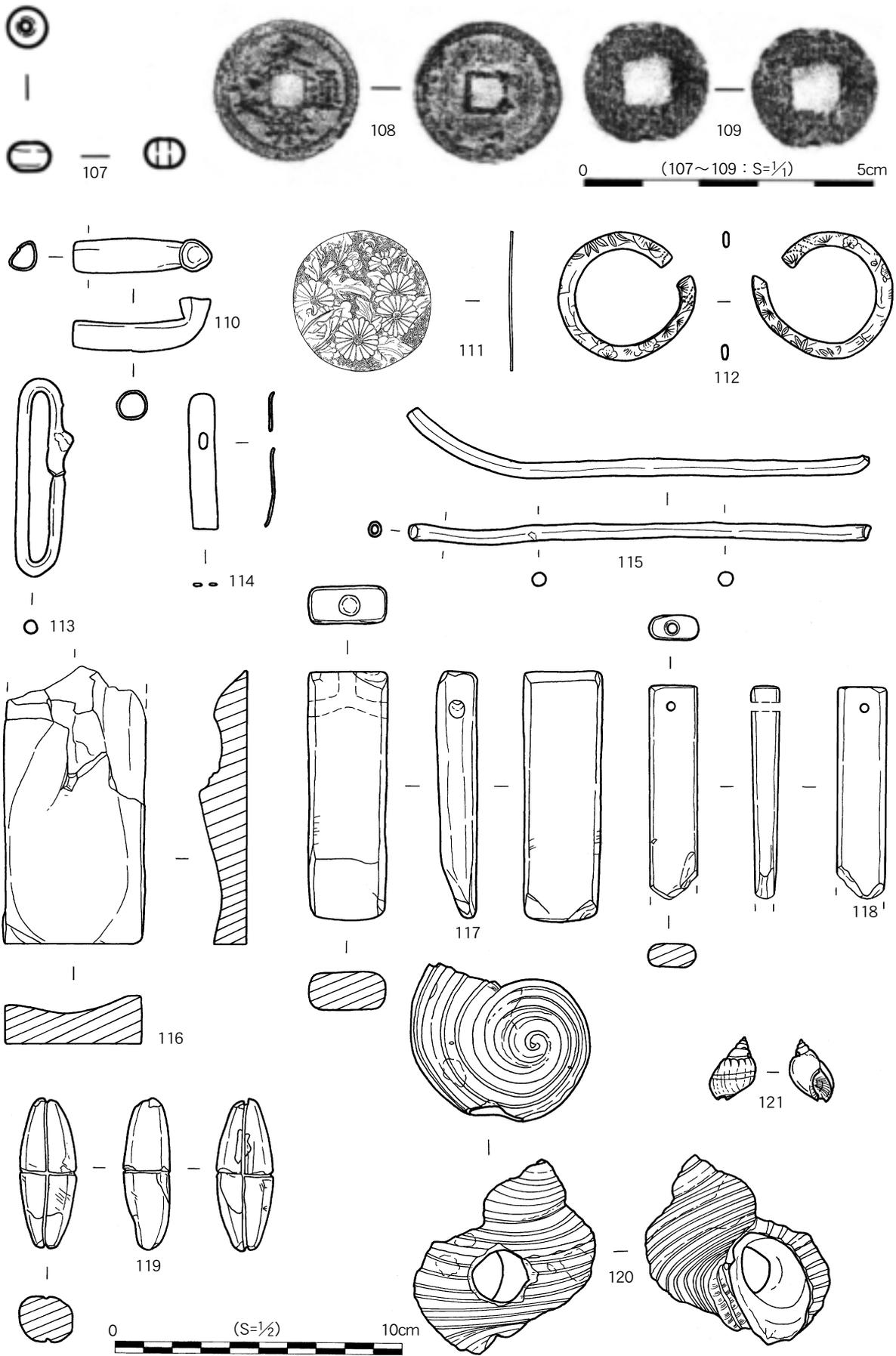
91



第90図 東区7区出土遺物(6)



第91図 東区7区出土遺物(7)



第92図 東区7区出土遺物(8)

6) 石器 第92図-116は硯と考えられる石製品で、海（墨池）側は浅く凹み、陸（墨堂）側は破損し欠失する。硯側は縦方向に連続的に溝が彫られている。裏面は平滑となることから、全体的に表面も剥落しているものと考えられる。117・118は方柱状の石製品で、砥石（提砥）である。上端部に三方から孔を穿つが、孔の方向は117は側部分が厚手方向から穿ち上端部からの孔と結合するのに対し、118は薄手方向から貫通させ、上部の孔と繋がる形態となる。石質は両者とも頁岩である。119はラグビーボール形の錘で、十字に糸掛かりのための溝を彫る。

7) 貝製品 第92図-120はチョウセンサザエの有孔製品で、体層部に孔を穿つ資料である。孔の加工にはバリエーションも認められるが、同様製品が数点得られており興味深い。121はイモヨウバイ（オリレヨウバイ科）の貝殻完形品で、この個体は自身が「おはじき」として利用されたとする可能性は低いものの、あまり食用には用いられずなおかつ遊具としての民俗例が見られ、貝殻が完形であり外観が綺麗な貝については、今後注目していく必要がある（黒住2006年私信）との指摘から図示しておく。取り上げた貝製品はいずれも、製品であるかどうかの可否については不明だが紹介しておく。

(3) 自然遺物

東区7区の試掘調査で得られた貝類（第14表）については黒住耐二氏（千葉県立中央博物館）、脊椎動物骨（第13表）については樋泉岳二（早稲田大学非常勤講師）に依頼し同定いただいた。植物遺体については本調査区では行っていない。

第13表 東区7区から採集された脊椎動物遺体の組成

種類	SL205		その他		総計			百分率（総計）		
	NISP	MNI	NISP	MNI	NISP	A MNI	B MNI	NISP	A MNI	B MNI
サメ類										
トビエイ科										
ウツボ科										
イトヒキアジ属										
ハタ科										
ヨコシマクロダイ										
フエフキダイ科			1	1	1	1	1	1.49%	6.67%	7.69%
クロダイ属										
ベラ科（コブダイ型）			1	1	1	1	1	1.49%	6.67%	7.69%
ベラ科（タキベラ型）										
ベラ科A										
ベラ科B										
ベラ科			1		1			1.49%		
イロブダイ属			1	1	1	1	1	1.49%	6.67%	7.69%
アオブダイ属										
ブダイ科										
モンガラカワハギ科										
ハリセンボン科										
真骨類（同定不可）										
魚類合計	0	0	4	3	4	3	3	5.97%	20.00%	23.08%
ウミガメ										
ニワトリ										
鳥類（同定不可）			1	1	1	1	1	1.49%	6.67%	7.69%
ヒト	1	1			1	1	1	1.49%	6.67%	7.69%
ネズミ科										
ネコ			1	1	1	1	1	1.49%	6.67%	7.69%
イヌ			3	1	3	1	1	4.48%	6.67%	7.69%
ウマ	6	1	2	1	8	2	1	11.94%	13.33%	7.69%
イノシシ/ブタ	4	1	8	1	12	2	1	17.91%	13.33%	7.69%
ヤギ			2	1	2	1	1	2.99%	6.67%	7.69%
ウシ	12	2	15	1	27	3	3	40.30%	20.00%	23.08%
ウシ/ウマ	2				2			2.99%		
イルカ										
哺乳類（保留）			2		2			2.99%		
哺乳類（同定不可）			4		4			5.97%		
哺乳類合計	25	5	37	6	62	11	9	92.54%	73.33%	69.23%
総計	25	5	42	10	67	15	13	100.00%	100.00%	100.00%

総計A：各遺構・包含層別に産出したMNIの合計、総計B：遺構・包含層全資料の合計値に基づいて産出したMNI

第14表 東区7区出土貝類遺体の最少個体数

	SL205	SL206	包含層	包含層	小計	生息場所 類型	
	(石積み遺構)	(石積み遺構)	(I層)	(II・III層)			
	MNI	MNI	MNI	MNI			
クワノミカニモリ			1		1	0.12%	I-1-b
マダライモ	1		1		2	0.25%	I-1-a
ハナピラダカラ			1		1	0.12%	I-1-a
テツレイシ							I-1-a
エガイ							I-1-a
ツノテツレイシ							I-1-a
コマダライモ							I-1-a
キイロダカラ			1		1	0.12%	I-1-a
アツムシロ			1		1	0.12%	I-1-a
サヤガタイモ			1		1	0.12%	I-1-a
アマオブネ			1		1	0.12%	I-1-b
イソハマグリ			3		3	0.37%	I-1-c
マガキガイ	294	3	83	2	382	47.39%	I-2-c
オニノツノ	15	1	7		23	2.85%	I-2-c
イトマキボラ	10	1	12		23	2.85%	I-2-a
ヒレジャコ	5	1	6		12	1.49%	I-2-c
シラナミ	4	1	5		10	1.24%	I-2-a
クモガイ	10	2	4	1	17	2.11%	I-2-c
ホシダカラ	1		1		2	0.25%	I-2-c
アンボンクロザメ	1				1	0.12%	I-2-c
シャゴウ	1		4		5	0.62%	I-2-c
ガンゼキボラ	1				1	0.12%	I-2-a
スイジガイ	3	1	1		5	0.62%	I-2-c
ニシキウズ			1		1	0.12%	I-2-a
ヤクシマダカラ	1		1		2	0.25%	I-2-a
イボシマイモ	2		8		10	1.24%	I-2-a
ヒメジャコ	1		3		4	0.50%	I-2-a
オオウラウズ							I-2-a
ホシキヌタ			2		2	0.25%	I-2-a
キヌカツギイモ	2		3		5	0.62%	I-2-a
チョウセンフデ							I-2-c
クロフモドキ	1		2		3	0.37%	I-2-c
コシダカサザエ			1		1	0.12%	I-2-a
コオニノツノ							I-2-a
メンガイ							I-2-a
キクザル類							I-2-a
チトセボラ	1				1	0.12%	I-2-c
ゴマフイモ							I-2-c
加7種'キア'ボ'カ'サ'メ							I-2-c
フタモチヘビガイ			1		1	0.12%	I-2-a
ニシキノキバフデ			1		1	0.12%	I-2-a
サラサミナシ?			1		1	0.12%	I-2-a
ムカシタモト			4		4	0.50%	I-2-b
ネジマガキ	1		1		2	0.25%	I-2-c
サメザラ			1		1	0.12%	I-2-c
ツノレイシ	12	3	11		26	3.23%	I-3-a
コオニコブシ	16	1	17	3	37	4.59%	I-3-a
チョウセンサザエ	27	2	30	4	63	7.82%	I-3-a
ハナマルユキ	2	1	29	1	33	4.09%	I-3-a
オキニシ	9		10	2	21	2.61%	I-3-a
シラクモガイ	16	2	5		23	2.85%	I-3-a
アカイガレイシ	1		3		4	0.50%	I-3-a
ヤナギシボリイモ	4		1		5	0.62%	I-3-a
ミツカドボラ	1		2		3	0.37%	I-3-a
オニコブシ							I-3-a
ムラサキイガレイシ	2		1		3	0.37%	I-3-a
アラヌノメ			1		1	0.12%	I-3-c
サツマボラ							I-3-a
ツノマタモドキ	1				1	0.12%	I-3-a
ヤコウガイ	5		4		9	1.12%	I-4-a
サラサバテイラ	5		6		11	1.36%	I-4-a
ホラガイ			1		1	0.12%	I-4-a
ギンタカハマ	1				1	0.12%	I-4-a
ベニシリダカ?							I-4-a
シロナルトボラ			1		1	0.12%	I-4-a
リュウキュウザル							II-2-c
カワラガイ	1		2		3	0.37%	II-2-c
ヌノメガイ	1		3		4	0.50%	II-2-c
リュウキュウマスオ							II-1-c
ホソスジイナミ			1		1	0.12%	II-1-c
リュウキュウシラトリ							II-1-c
トラダマ?							II-2-c
クロミナシ							II-2-c
リュウキュウサルボオ	2	1	1		4	0.50%	II-2-c
イボヨフバイ	1				1	0.12%	II-1-c
マスオガイ			1		1	0.12%	II-1-c
シレナジミ	1				1	0.12%	III-0-c
アラスジケマン	1		1		2	0.25%	III-1-c
カノコガイ							III-1-e
トウガタカワニナ			1		1	0.12%	IV-5/6
マルタニシ							IV-6
イモガイ類種不明	3		9		12	1.49%	
シュリマイマイ			2		2	0.25%	V-8
合計	467	20	306	13	806	100.00%	

4. 今帰仁ムラ跡南区

南区は東区と旧道ラインに分断される集落遺跡一帯で、正確には東区の南東側にあたる地域に所在する。今帰仁城跡の史跡地域と接しており、その大部分が既に指定地となっている。このため保護された地域であることから詳細な調査は行っていない。ほぼ南区の全体が森林に覆われており、鬱蒼とした森の中に入って踏査すると小さな平坦地が幾つかあることが確認される。今後はこれらの平坦地が把握されるよう測量を実施し、それぞれの地区に遺構が分布するかを確認することが重要である。

南区の四囲を概括すると、東側は志慶真川、北側は旧道ラインまで、南側は今帰仁城跡の東側城壁の防御ラインとする。北東側端はシニグンニの直近まで、供のかねノロ火の神の祠を想定しておく。これより南区の北側及び東区の東側については、従前より指摘されてきた人文地理学的知見や民俗学的所見としての「親泊」の旧集落所在地域と考えられ、次節の紹介に譲る。現在地表面で確認される平坦地を基に、幾つかの地区設定が可能であるが、ここでは一・二区の二つの地区設定のみとした（南区の地区設定は漢数字の標記とする）。但し、これには東側部分の調査が貫徹していないため、草木が鬱蒼する空間まで確認する必要があるためであり、一・二区とした地域はいずれも現在祭祀を行う重要な地点として利用されるため、両地区のみ地区設定を優先して行った。

当該地域については、全く発掘は行われていない。また、ほとんどの地域が手つかずであり、史跡地域内にあるため採集された資料も無い。今回の事業で南区にはたして屋敷が所在するかどうか、発掘を行っていない現時点では確実ではないものの、概ね史跡指定を受け保護されているので、文化財保護上問題はない。但し里道沿いの幾つかの土地については、畑の耕作を重機で実施、あるいは農作業小屋の設置や造成などで大きく毀損を受けているところも少なくない。既に遺跡としての価値を逸している地域については、その保存のあり方や、再生の方策などについてどのように実施するべきものなのかについては、今後の課題となる。以下、一区と二区のそれぞれの地域の概要について紹介する。



第93図 今帰仁ムラ跡南区 (S=1/2,000)

⑧南区 一区（概要報告）

今帰仁ムラ跡南区一区は史跡指定地内に所在する。概ね方形の屋敷地平坦の中央に今帰仁ノロ火之神の祠が建立されている。地積では今泊4759 (1178㎡)・4760 (307㎡) からなり、地積から前者をa・bの小分割が可能である。祠は両者の境界に位置し、平坦地の面積は約500㎡程度と考えられる。

「今帰仁ノロ」は地方ノロの職名で、今帰仁・親泊・志慶真の三ヶ村の祭祀を司る。現在でも今帰仁ノロは健在で、仲尾次家が継いでおり、今帰仁上りのシーズンである旧暦8月になると多くの人々が仲尾次家を訪れる。現在の今帰仁ノロ家のある仲尾次家は今泊（親泊原）3315番地に所在し、地元では「ノロ殿内（ヌンドゥルチ・ヌルドゥンチ）」と呼称され、集落の祭祀の重要な役割を果たしている。今帰仁ノロも阿



第94図 南区一区位置図

応理屋恵ノロ同様、勾玉の付いた首飾り一連を所有しており、この他にも簪と馬の鞍が大切に保管されている。

現在も今帰仁ノロは継承されているが、いつ頃から今帰仁ノロ職が仲尾次家によって継承されてきたかなどの詳細は不明である。いずれにせよ、現在海岸部の今泊集落内によって引き継がれた今帰仁ノロ殿内の故地が、南区一区の今帰仁ノロ殿内火之神の祠所在地域であると考えられる。阿応理屋恵ノロと同様1609年に今帰仁ムラがムラ移動したことによって、現在の地へ移動し、その先が大字今泊小字親泊原3315番地の仲尾次家であったのであろう（※但し、1609年から仲尾次家が代々継いでいるとする資料に乏しいので、この点について新資料等が見つかり、その先代のノロ屋敷が当該地域とは別の地域にあった可能性のあることを考慮する必要がある）。

以上に記した内容から鑑みて、当該地域は今帰仁ムラ跡内でも集落の祭祀を司る重要な神女が居宅する重要な地域であったと想定される。

遺構の分布中心は不明であるが、グリッドで示すとL-35グリッドに既に地表面に縁石らしき石列が認められるので、注意する必要がある。なお、当該地域は、現在字有地であるとともに、今帰仁城跡の史跡指定地内に所在している。

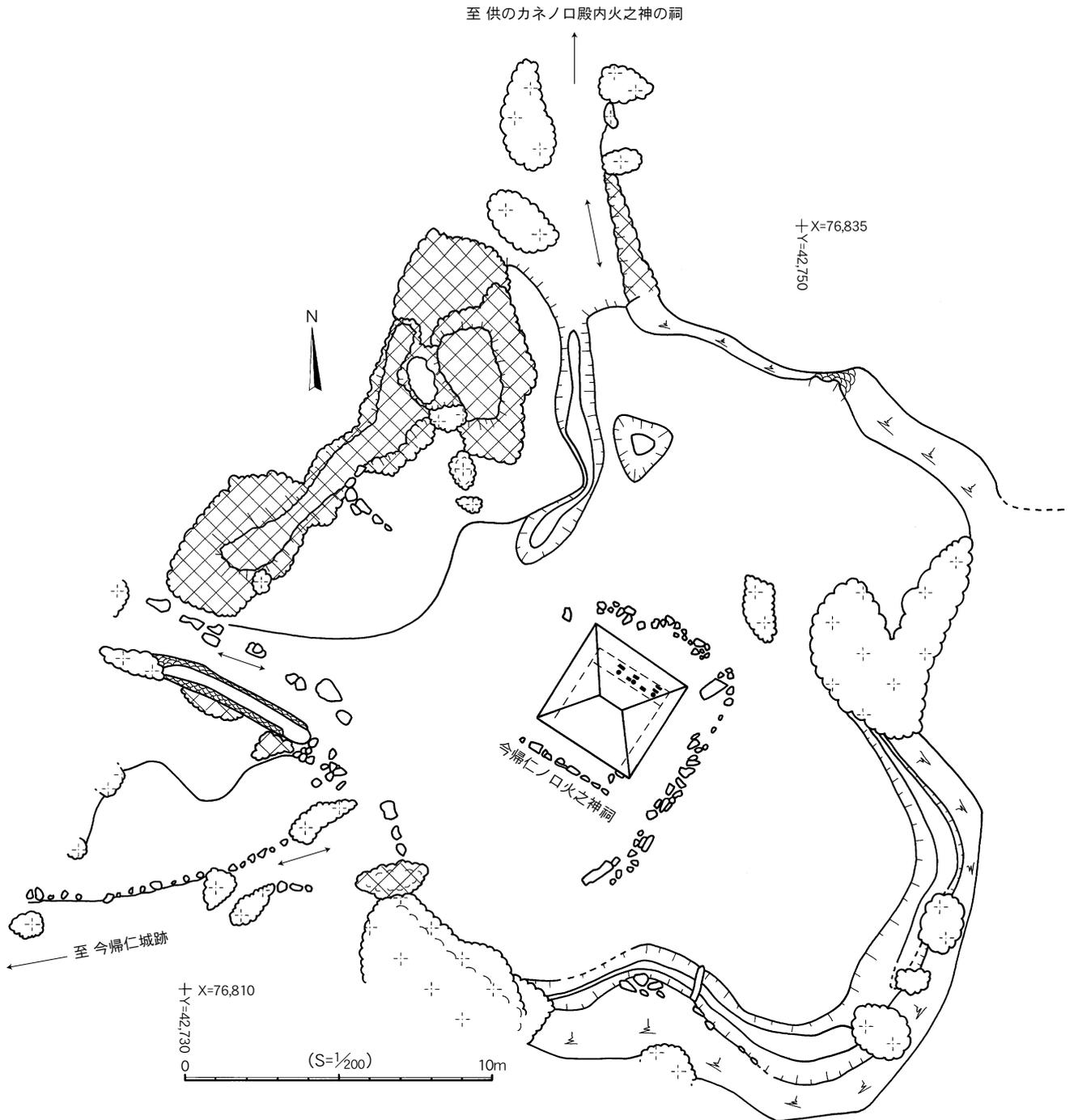
以下は、平敷1979年より今帰仁ノロに関する部分を転載する。

今帰仁巫火神 アタイ原の今帰仁村旧地に今帰仁ノロ殿内跡がある。そこに『琉球国由来記』巻十五に今帰仁巫火神と記されている火神の祠がある。俗にグシクヌンドゥルチ(城ノロ殿内)またはウイヌトゥヌ(上の殿)と呼ばれている。大正の末頃はウイヌドゥンチ(上の殿内)とも言ったらしい(『鎌倉芳太郎先生ノート』)。この祠の修復には旧今帰仁村のシマ人が当ることになっている。近年に改築された祠の中に香炉が8個置かれている。火神を象徴する三つ石は置かれていない。拝む方角は北東である。庭に香炉が一つ置かれ、南南西に向けられている。この香炉はウタンカー(御手向け、すなわち遥拝の意)香炉と呼ばれ、クボーヌ御嶽へのお通し(遥拝)をする拝所とされる。

今帰仁ノロ 近世の今帰仁ノロは今帰仁間切の他のノロ(中城・玉城・岸本・天底・勢理客・

古宇利の各ノロ)と同じく、「儀保の大あむしられ」(三平等の大あむしられの中の1人)の配下で。ノロ就任に際しては首里の儀保殿内に赴き、「儀保大あむしられ」から王府の御印判(辞令書)を交付された。ノロも役俸を与えられる地方女官であった。今帰仁ノロは今帰仁村・親泊村・志慶真村の神役を統率して今帰仁城内及び城周辺の聖地で年中祭祀を司祭したのであるが、近世の祭祀組織について『琉球国由来記』巻十五にノロの他トモノカネノロ・居神が記されているだけで、詳細は不明である。

昭和初年までに御印判が失われ、近世歴代のノロの名前は不明である。今帰仁ノロの継承は明治以降はヌンドゥルチ(ノロ殿内)の娘継ぎである。



第95図 一区 詳細図

⑨南区 二区（概要報告）

今帰仁ムラ跡南区二区は史跡指定地外に所在する。概ね方形の屋敷地平坦の中央に供のかねノロ火之神の祠が建立されている。地積では今泊4736 (723㎡) からなる。

「供のかねノロ」は地方ノロの従者のノロ職と考えられ、現在では継承者はいない。今帰仁・親泊・志慶真の三ヶ村の祭祀を司る今帰仁ノロのサポート役を務めたノロと考えられている。現在では供のかねノロは引き継がれていないため、詳細は不明であるが、1970年代の記録では「上間家」がこれにあたったとされる（平敷1979）。「上間家」は現在の今泊（親泊原）3311番地所在し、地元では「テーヌメー」の屋号で呼ばれている。



第96図 南区二区位置図

残念ながら供のかねノロはノロ職を離れ時間を経過しているため、所有する祭具等はないようである。（※但し、1609年から上間家が代々継いでいるとする資料は皆無である。この点について新資料等が見つかり、その先代々のノロ屋敷が当該地域とは別の地域にあった可能性を考慮する必要がある。）

今帰仁ノロ同様、いつ頃から供のかねノロ職が上間家によって継承されてきたかなどの詳細は不明である。いずれにせよ、現在海岸部の今泊集落内の家によって引き継がれたのであろう。そして、供のかねノロも阿応理屋恵ノロと同様1609年に今帰仁ムラがムラ移動したことによって、現在の地へ移動したと考えられる。その先が、大字今泊小字親泊原3311番地の上間家であったのであろう。

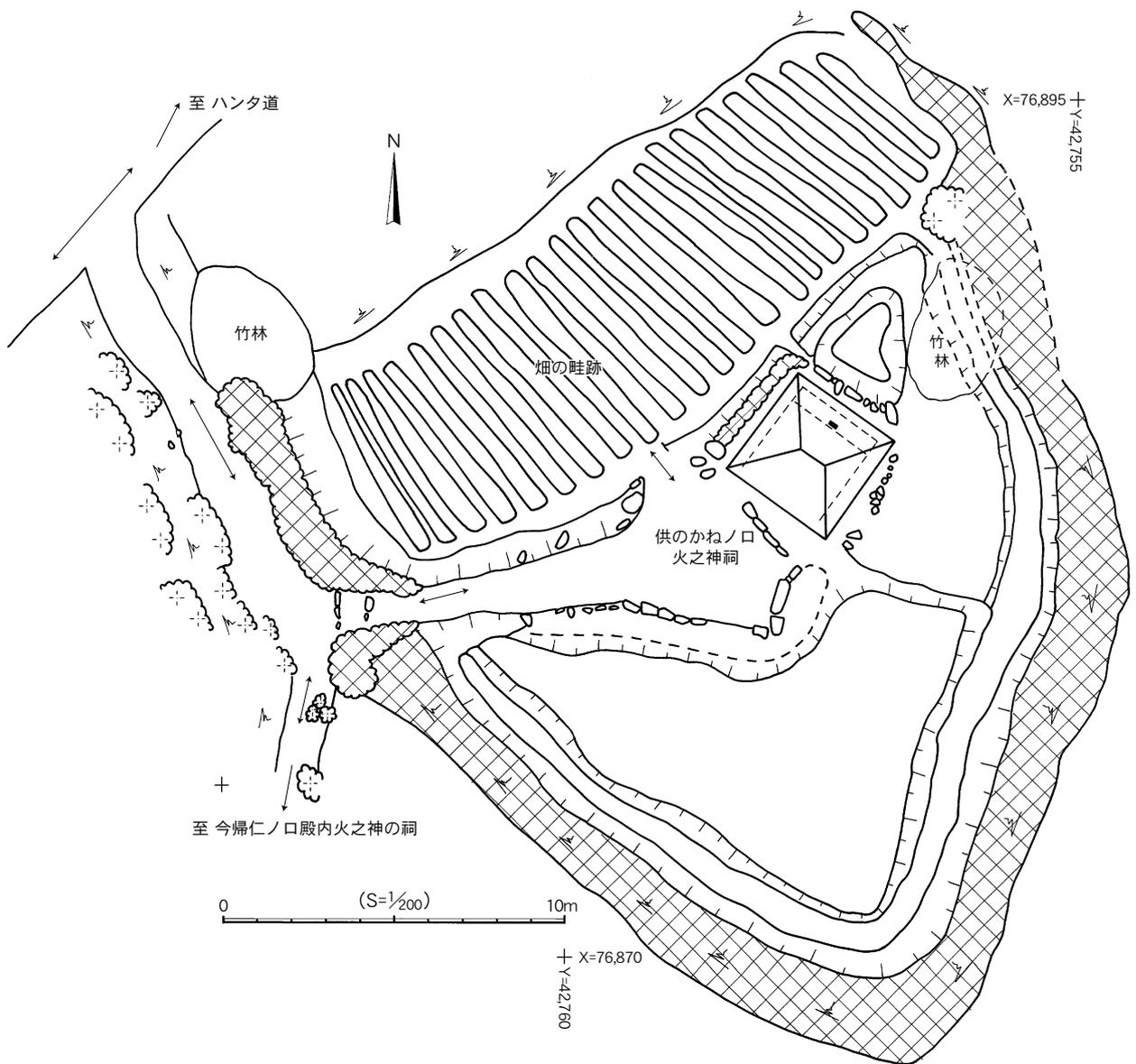
遺構の分布中心は不明である。一区同様石列や屋敷地内の起伏があり、注意する必要がある。なお、当該地域は現在字有地である。

以下は、平敷1979年より供のかねノロに関する部分を転載する。

トモノカネ巫火神 今帰仁巫火神の下方、見物城の近くに火神の祠があり、トゥムナハーニドゥンチ（トモノカネ殿内）またはシチャヌトゥヌ（下の殿）と呼ばれる。『琉球国由来記』巻十五では今帰仁ノロに次ぐ神役としてトモノカネ巫を挙げているが、トモノカネノロ火神には言及していない。この祠の所在地がトモノカネノロの旧宅跡であるとすれば、今帰仁ノロ火神の祠とほぼ同じ頃に創建されたのであろう。この祠も近年になって改築されたか、修復や改築には1日親泊村の人が当るといふ。現在祠の中に香炉が1個置かれている。やはり三つ石は置かれていない。拝む方角は東北である。この祠での司祭者はトモノカネノロである。

トモノカネノロ トモノカネノロという神役名は例が少ない。『琉球国由来記』には今帰仁間切と羽地間切に各1例だけ記録されている。それは今帰仁間切今帰仁ノロの次位としてのトモノカネノロと羽地間切仲尾村の仲尾ノロの次位としての同間切谷田村のトモノカネノロである。谷田村のトモノカネノロは1882年(明治15年)の「社寺調査原書」(鳥越, 1965:335所収)には川上ノロクモイと記され、今でも川上ノロと呼ばれている。また、「琉球国由来記」に登場する今帰仁間切玉城ノロは明治末以降の記録には玉城カネイと記され、岸本ノロ・天底ノロ・古宇利ノロの場合は大正の記録にそれぞれ岸本ノカネイ・天底ノカネイ・古宇利ノカネイと記されている

(鳥越, 1965 : 600-608 ; 島袋, 1919 : 281)。これらの用語例から, カネ(またはカネイ)はノロに類する言葉であったことがわかる。「トモノ」は「供の」すなわち従者の意であろう。トモノカネノロはノロの次位神役とされる大宜味村や国頭村などの若ノロに相当すると考えてよい。今ではトモノカネノロを訛ってトゥムヌハー二(またはトゥムナハー二)と言う。明治末以降三代を数え,現職は上間明子さんである。先代と上間さんは共に上間門中の出であるが,先代は出自門中を異にすると言う。



第97図 二区 詳細図

⑩まとめ

今帰仁ムラ跡はこれまで紹介したように、今帰仁城跡の城下に存在する集落遺跡である。城下町という用語を用いることについては、様々な議論が必要と考えるが、今帰仁ムラ跡はグスクにとっての城下にある巨大集落であることは自明の事実であり、いわば城下町と言い換えても大過ないと考えられる。

これまで今帰仁ムラ跡を概略的に紹介してきた。先ず既に数回の表面採集調査で得られてきた遺物を紹介した。次に西・東・南の3つのブロックに分け集落遺跡を紹介してきた。特に発掘調査が進んでいる西区は発掘調査の内容を盛り込んでおり、かなり具体的に建物の配置や土地利用の仔細を把握することができる。次に東区については試掘調査によって得られたデータを紹介し、今後の当該地域の重要性の理解を深めていただきたい。最後に南区についてはそのほとんどが史跡指定地域に所在しているものの、重要な地域であることを理解するために、現在地表面で確認できる二つの地区について概説した。

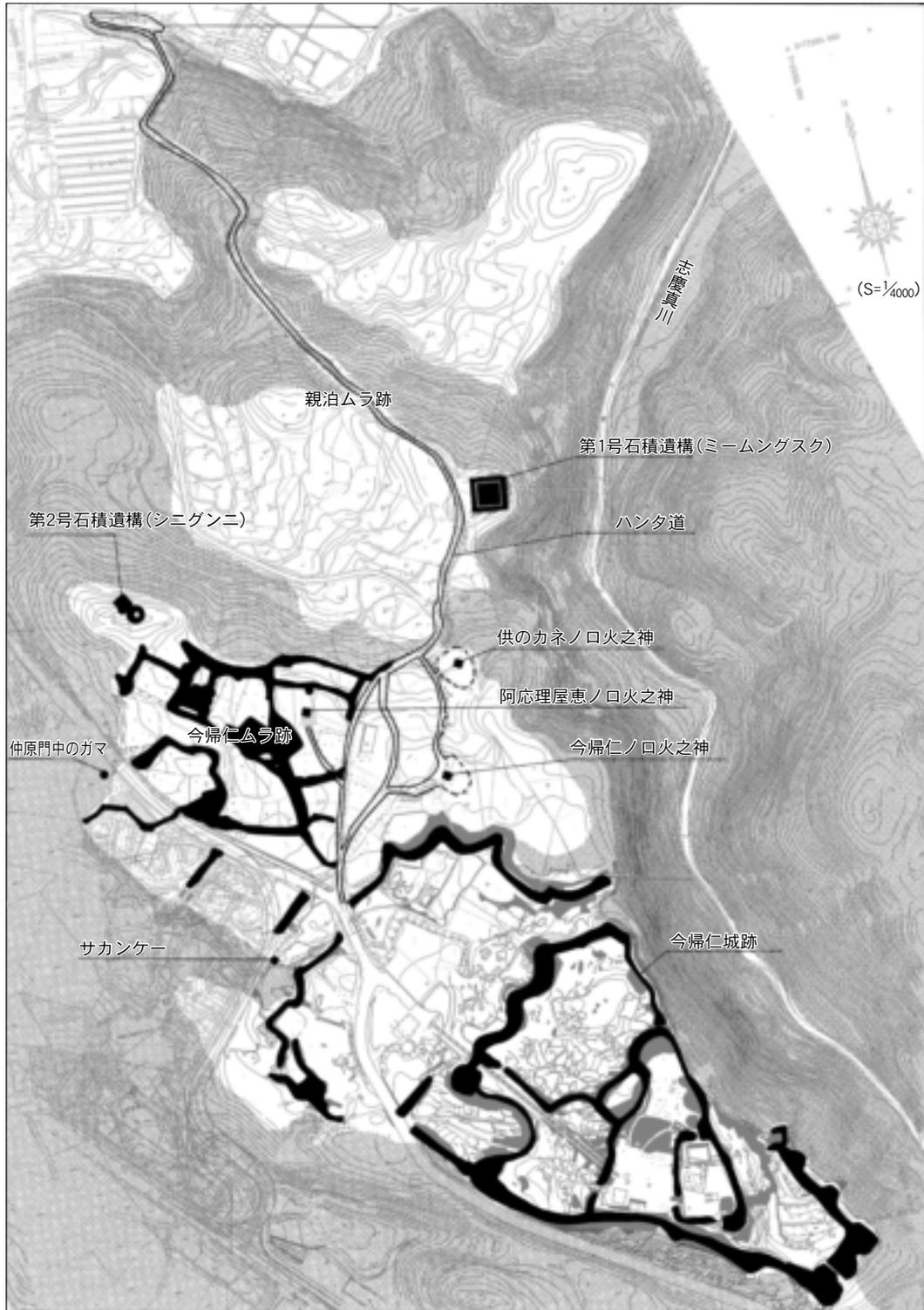
以上のように概略紹介した①～⑨については、調査の精度の違いこそあれど、概ね9つの屋敷地を想定することができるものと考えられる。この他にも石積み囲いや自然地形の起伏などから恒常的生活空間を想定することはできるが、詳細な図面を作成しておらずこの点は今後の課題となる。それでも、遺跡全体の屋敷空間の構成の大枠と、遺跡の年代的把握については概ね本事業において把握することができたものと考えられる。また、既に調査が進むように今帰仁ムラ跡の屋敷地の幾つかについては、具体的な屋敷地内における建物配置や出土遺物からみた生活復元など、各イエ、各戸の性格を把握するに至っている。

上述の調査成果として、今帰仁ムラ跡は当初予想したように、今帰仁城跡の城下に展開した大規模な集落であることが把握された。その出土品は今帰仁城跡と同時代を生きたことを証明する陶磁器であることが理解できる。量質に多少の差があるとしても、概ね今帰仁城跡、特に志慶真門郭に匹敵・準ずるもので、検出された遺構などの保存状況も良好である。このことから、今帰仁ムラ跡とした集落遺跡は今帰仁城跡と一体となる埋蔵文化財であり、今後史跡として追加指定され、保存活用されることが望まれる地域であると言える。中でも今帰仁ムラ跡東区とした地域については、石積み遺構がよく残りこれが屋敷区画として機能した可能性が高く、また発掘調査の成果をみても大量の遺物を包蔵するとともに遺構が良好な状態で残ることが確認されている。なお、南区については既にその大半が今帰仁城跡として指定地域に含まれており、西区については今帰仁村グスク交流センターなどが建設され一部記録保存処置がとられたところがあるものの、駐車場下には良好な状況で遺構が残る。

以上に述べたよう、今帰仁ムラ跡、特に東区は今帰仁ムラ跡の中においても重要な地域であることが再確認された。

〈参考文献〉

- 仲村昌尚 1994年『久米島の按司物語』暁書房
今帰仁村教育委員会 1983年『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅰ』今帰仁村文化財調査報告書第9集
今帰仁村教育委員会 1986年『今帰仁城跡周辺遺跡』今帰仁村文化財調査報告書第12集
今帰仁村教育委員会 1991年『今帰仁城発掘調査報告書Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第14集
今帰仁村教育委員会 2005年『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第20集
平敷令治 1979年「今帰仁城をめぐる祭祀について」『国指定史跡保存管理計画書今帰仁城跡』今帰仁村教育委員会



第98図 今帰仁ムラ・親泊ムラ跡想定図

第2節 親泊ムラ跡

所在地：今帰仁村字今泊5087番地・ほか

小字名：アタイ原

立地(標高)：台地縁辺部(約75m)

区分：遺跡

現状：畑・原野・拝所

保存状況：石積みが残り、一部現在も拝所として機能している火之神の祠が残る。遺跡全体の保存状態は良好。

今帰仁城跡の北側緩斜面には今帰仁ムラと親泊ムラの2つのムラが立地する。今帰仁ムラは前節で紹介したとおりであるが、親泊ムラ跡は発掘調査が行われておらず比定地は不明である。これまでその所在の根拠とされているのが、ハタイ原(アタイ原)ウーニーと呼ばれるウーニーである。ウーニーは今帰仁城跡の外郭地区にも所在しており、それぞれの集落でウーニーを所有していたと考えられることから、レイコーラウーニーの所在する地域一帯を今帰仁ムラの、ハタイ原ウーニーの所在

地域が親泊ムラ跡の故地とされている。このような研究史を重視し、当該地域については親泊ムラ跡として呼称しておきたい。但し、親泊ムラ跡と、今帰仁ムラ跡は隣接しており、暫定的に現在の道路や現況地籍などから地域を分けている。このため限定的にどの地域から今帰仁で、どの地域から親泊なのかといった明確な区分は存在しない。この点では城外北側に展開した集落遺跡の今帰仁・親泊両遺跡を包括する意味で「アタイ原遺跡」の呼称も用いることも、不適當でないものとする。面積は広く約4haほどが親泊ムラ跡の範囲として設定している。これは踏査して遺物が採集される範囲ではなく、地形から想定した緩斜面や地籍から判断される細かい筆を囲ったもので、地理学的な知見を引用している。その中心的な地域では祭祀遺構が確認される、「アタイ原ウーニー」の地域一帯にあると考えられるが、親泊ムラ跡そのものがそもそも散在的な集落であるため、空疎地では遺構や包含層はおろか、遺物の散布が認められないものと考えられる。但しこの場合は生活地としての遺構や遺物に乏しいだけで、実際にはグスク時代において畑地等に利用されていたことも十分に考えられる。比較的集村する今帰仁ムラに対して、親泊ムラのような散村の集落遺跡をどのエリアで捉え、空間の復元を行うかについては、今後発掘調査を実施し議論を深めていくことが肝要である。



第99図 親泊ムラ跡位置図

第3節 志慶真ムラ跡

所在地：字今泊2107番地・ほか

小字名：大首原

立地(標高)：丘陵斜面迫地
(約85m)

区分：遺跡

現状：畑・原野

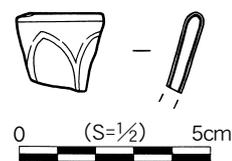
保存状況：迫地部分は耕作地として利用されており、かなりの客土が覆っていると考えられる。遺跡全体の保存状態は良好。

今帰仁城跡の南側の緩斜面、迫地に立地する集落遺跡で、現在の字諸志の故地の一つとされる。現集落の諸志は「諸喜田邑」と「志慶真邑」が合併して現在の字をつくったとされている。もともと諸喜田邑のあった、現集落諸志の場所に志慶真集落がムラ移動し諸志集落となった。現在の諸志は、諸喜田御殿や中城ノロ殿内(ヌウンドゥルチ)、諸志御嶽などが所在しており、また集落の屋敷区画としてのフクギ並木も美しい集落の一つである。この点では、今帰仁ムラと今泊の現集落との関係と同様である。

志慶真ムラ跡は志慶真門郭の門である志慶真門から南に展開している集落であり、方言ではシジマと呼称されている。今泊の行う祭祀グスクウイミ(城拝み)では神道として志慶真川まで降りて禊をすると言われている。この志慶真門から禊ぎをする志慶真川の「アーシジャー」までの道沿いがおよそ志慶真ムラの集落遺跡と考えられる。遺跡の存在は実際には未調査のため不明であるが、踏査した際に畑と畑の境を流れる流水によってV字形に浸食された断面から、地表下1m以上のところに遺物包含層と考えられる黒色層が確認されている(図版20)。地表観察からは、幾つか平坦面があり、またこの地には明治～昭和初期までは人が住んでいたとされるので今後調査が期待される地域の一つである。現在でも遺跡想定地より南側には、上原と呼ばれる小集落が存在している。2004年2月と2005年4月に志慶真ムラ跡の比定地及び周辺の踏査を行った。踏査はサトウキビの収穫が終わった畑地等を対象に行ったので、すべての地域で貫徹しているわけではない。ほとんどが近代の陶磁器類であったが、ここではグスク時代の遺物のみを紹介する。第101図は青磁細蓮弁文碗の口縁部破片資料で、唯一図示できるグスク時代の遺物である。その他には中国陶磁器の胴部片等が得られている。



第100図 志慶真ムラ跡位置図



第101図 志慶真ムラ表採遺物

第4節 大川原遺跡

所在地：今帰仁村字今泊4522番地・ほか

小字名：大川原

立地(標高)：微高地(約8m)

区分：遺跡

現 状：畑・原野・道路

保存状況：道路によって開削されており、切土法面に包含層が露出している。もともとは小高い丘全体が遺跡であったと考えられる。一部損壊する。

今泊の4522番地一帯は標高8mの微高地に立地し、北側に現今泊集落、東側は低地となり、南側が今帰仁城跡の丘陵地となる。このため、低地一帯が親川を給水源とする農地(水田)であった時代には、広大な農地を望む場所であった(図版32-4・5)。あわせて、現今泊集落と今帰仁城跡を結んでいるハンタ道を含んだ旧道沿いにあたる場所に位置することから、広く今帰仁城跡や今泊集落を考える上で重要な遺跡と考えられる。残念ながら土地改良によって、周辺の畑地一帯及び遺跡の一部の原地形が失われているため遺跡の保存状態は良くない。

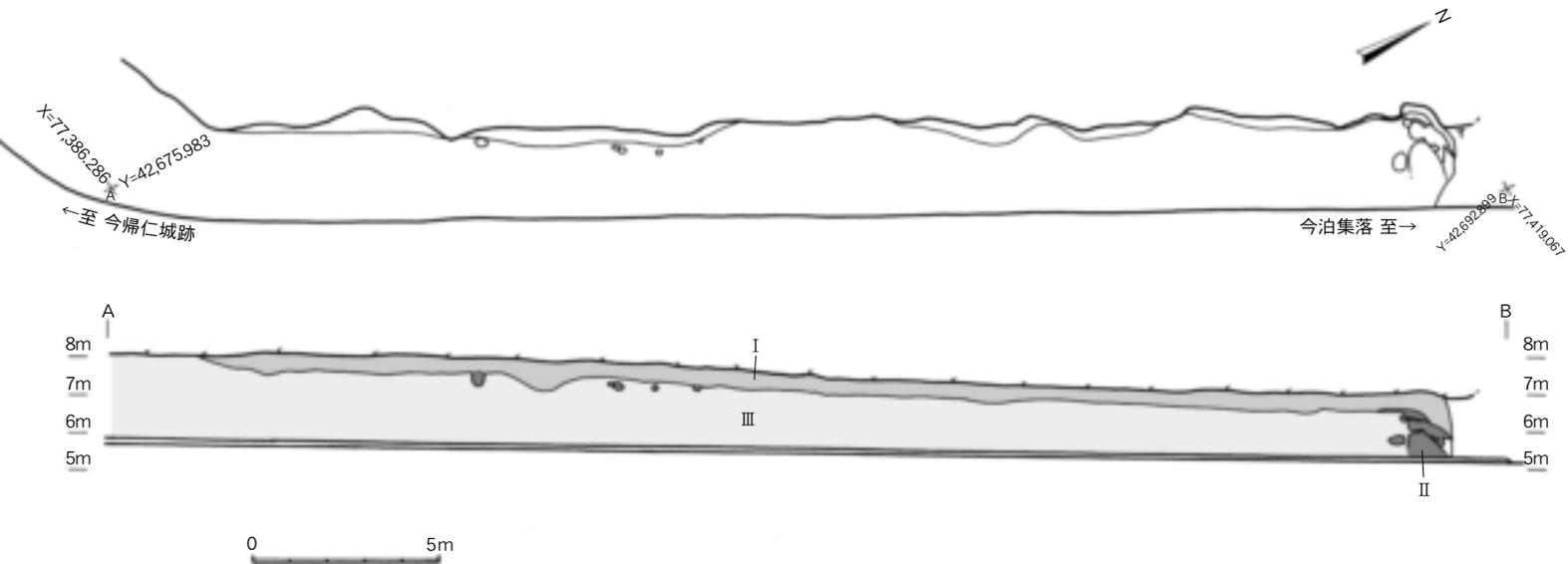
今回は既に道路工事によって破壊されている法面より検出された、壁の断面図を作成し記録保存を実施するとともに、これまでこの地域から表面採集によって得られた遺物について報告する。

(1) 層序

遺跡の層序を理解する上で終点杭B(X=77,419.067 Y=42,692.899)と、起点杭A(X=77,386.286 Y=42,675.983)を結んだラインを基線とする。Bを略北、Aを略南とし、AをOとして左側法面の図化を行った。遺物包蔵地全体は南側から北側に傾斜する丘陵地で、幾つか柱穴と思われるピットが断面で確認できる。南側は大きく傾斜し、現在の畑となる。このことから単純な丘陵地形となる訳ではなく、凹凸のある地形となると考えられる。その中でも断面中央のピットが検出される地域が平坦面となって、恒常的な生活が認められる地域なのであろう。



第102図 大川原遺跡位置図



第103図 大川原遺跡遺構平面・土層断面図

I層：耕作土。

II層：包含層。10YR暗褐色3/4。終点杭附近でわずかに残るため、遺物も未確認である。

III層：2.5Y黄褐色5/4。遺物を全く含まない自然堆積層で、粘板岩を含む堆積層と、含まず粘性のある締まった土層の層相の異なる地山からなる。やや粘性があり粘板岩を多く含む固く締まった土層。地山。

(2) 遺構

一部断面図に柱穴と想定される落ち込みを確認することができるが、面的に発掘を行ったわけではないので不明である。確認できた柱穴と思われる落ち込みは13基確認できた。

(3) 遺物

1) 陶磁器

今回の試掘以外にもこれまでに大川原遺跡で表面採集で得られた遺物は13点（推定個体数）、破片数193点を数える。

1. **青磁** 第104図-1～3は青磁細蓮弁文碗である。1は細蓮弁文碗c、2・3は細蓮弁文碗bに該当する資料と考えられる。1・2口縁部資料はいずれも小片の資料である。3は底部資料で、見込には不鮮明だが花文が押印されるものと見られる。第104図-4は青磁碗の底部資料である。分類は不明だが、細蓮弁文碗もしくは無文の直口碗の底部資料と考えられる。第104図-5は腰折皿cで、口縁部を刻み稜花とする。第104図-6は直口皿の底部資料と考えられるが、胴部を大きく欠損しているため、文様の有無などは不明である。第104図-7は酒会壺もしくは瓶の底部資料で、底部下半及び器上位の形状は不明である。

2. **青花** 第104図-8は口縁部小片の資料で、直立する口縁部で直口碗（小野分類C or D群）と考えられる。第104図-9は口折碗（主郭分類Ⅳ類）の底部資料と考えられ、逆ハの字状に開く底部が特徴的な資料である。

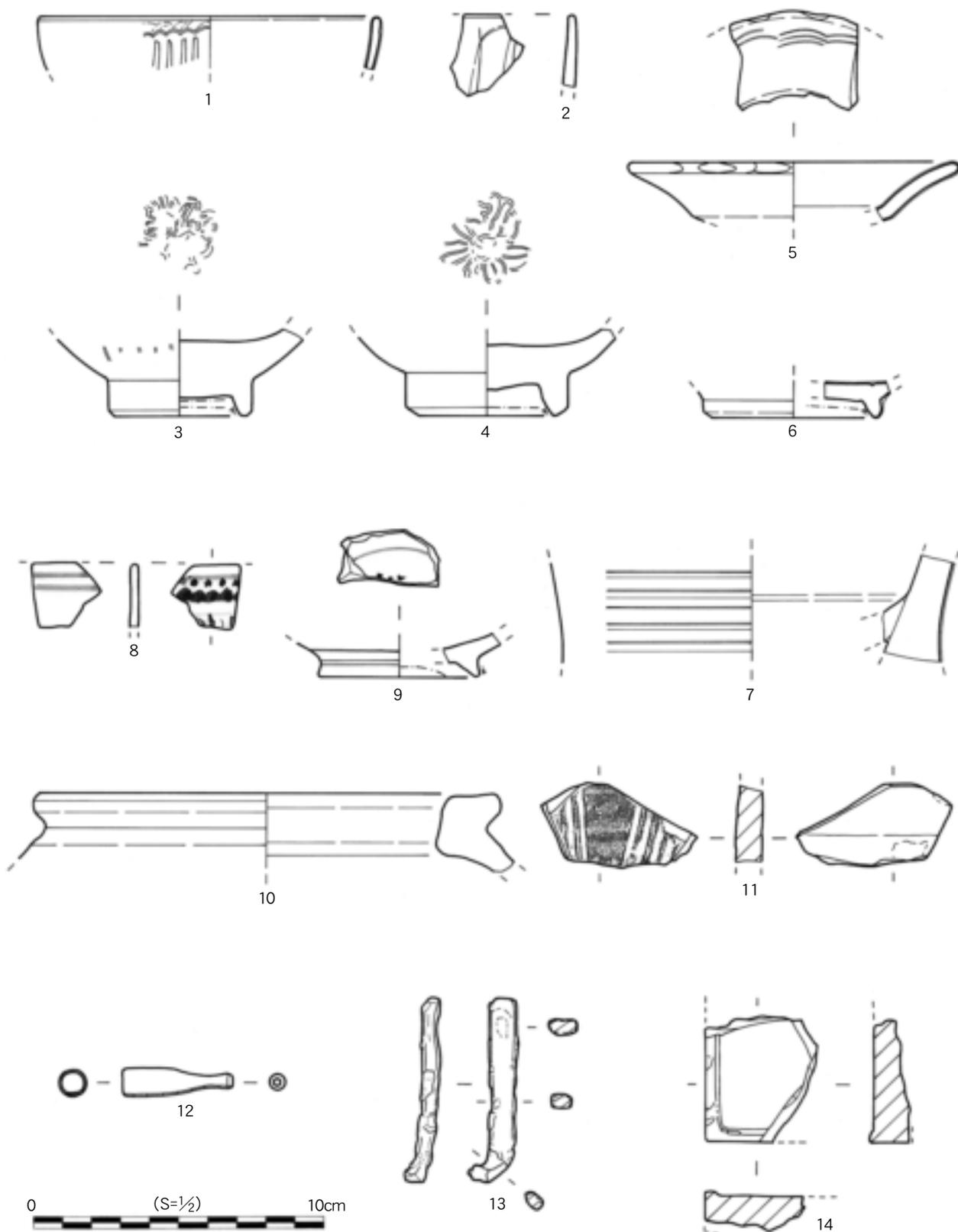
3. **褐釉陶器** 第104図-10は褐釉壺dとする方形口縁部を持つ大型の壺である。

4. **備前焼締陶器** 第104図-11は備前焼の焼締陶器と推察される胴部小片資料で、胴部内面に播目が確認される。

5. 煙管 第104図-12は煙管の吸口部分の資料である。銅もしくは銅を含む金属の製品と考えられ、板状の金属を丸め筒状とすることで製品に仕上げる。

6. 金属製品 第104図-13は鉄製の釘もしくは断面方形の棒状の製品の欠損品と思われる。

7. 石器 第104図-14は砥石で墨を刷る陸側の角部の資料である。裏面剥離し失われるため形状は不明である。



0 (S=1/2) 10cm

第104図 大川原遺跡出土遺物

第5節 親泊原遺跡（旧称アカン墓遺物散布地）

所在地：今帰仁村字今泊3051番地・ほか

小字名：親泊原

立地(標高)：微高地(約3～5m)

区分：集落

現況：宅地・畑・道路

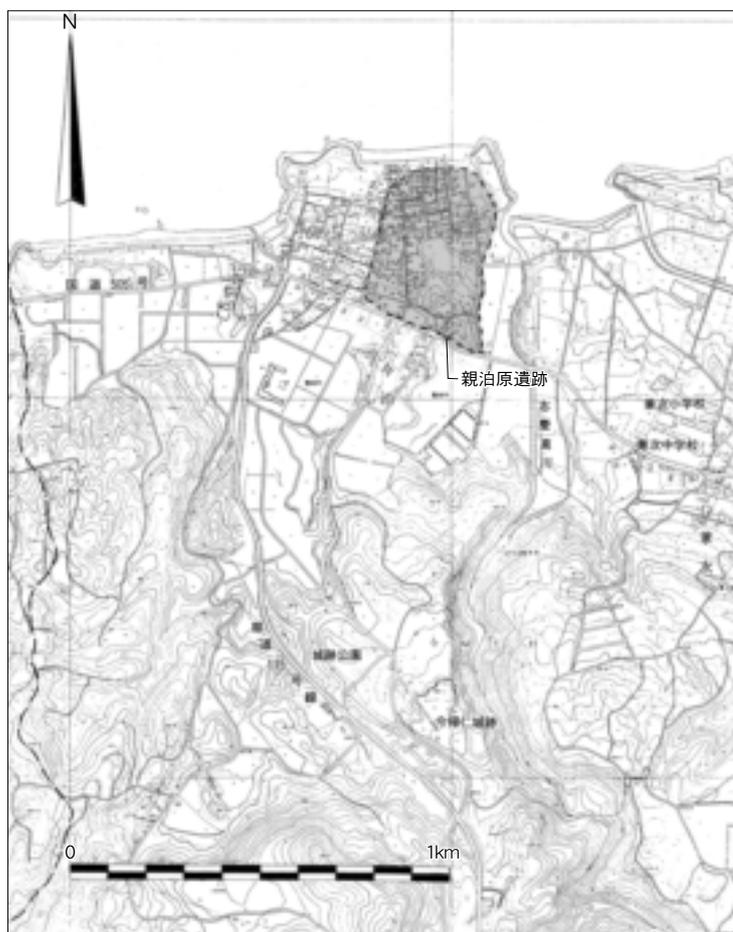
保存状況：住宅地の地下に良好な状態で埋蔵されていると考えられる。一部住宅建設等によって損壊を受けているところも少なくない。

今泊の親泊原一帯は標高3～5mの砂丘地に立地、北側を海に面した集落である。西側の今帰仁原集落と一帯となって、福木（フクギ）の屋敷に囲まれた集落で住宅密集地となっている。現在の戸数は134戸である。遺跡は、1981～83年に実施された分布調査では「アカン墓遺物散布地」として報告されている。その遺跡紹介の中、土器片や青磁器片の小破片が周囲の畑地に散布するとされており遺物の採集が認められる周知の遺跡である。この時の遺跡範囲は墓周辺の限られた地域であるとともに、散布地としての報告となった。

他方、これまで教育委員会で実施してきた踏査や立会あるいは持ち込み資料などから、親泊原地域全体に遺跡が包蔵されている可能性が高いと考えられる。このため、旧称を改め「親泊原遺跡」として遺跡名称を与え報告する。遺跡の主体時期は近世から近代にあるが、採集資料などからこれを遡る16世紀代の遺物も得られており興味深い。このような状況は、まさに現在のフクギ並木の今泊集落の前身の遺跡であり、または初原的な集落遺跡が地下に埋没していると考えられる。

これまでに今帰仁村では水道敷設や道路建設などに伴う小規模の立会調査を実施している。1997年に3115番地沿いを、2005年に3090番地沿いの立会調査を実施しており興味深い遺物が採集されている。また、この他にも、仲村渠氏採集の遺物や、教育委員会に持ち込まれた遺物などが幾つかあり図示した（第108・109図）。これらの遺物を報告し、親泊原一帯の地下に包蔵されていると考えられる集落遺跡把握のための手がかりとしたい。

採集地点① 第108図-1は今泊3025番地周辺から採集された資料で、旧アカン墓遺物散布地としていた地域での表採である。採取者は仲村渠智氏で、教育委員会への持ち込みである。資料は天目碗の口縁部資料である。



第105図 親泊原遺跡位置図

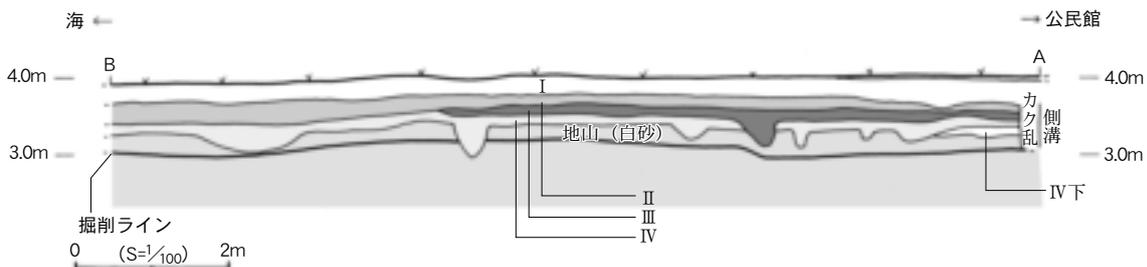
採集地点② 第108図-2は今泊3141番地で採集された資料で、染付肥前磁器碗。この他にも中国産褐釉壺dの胴部片などの資料が得られている。

採集地点③ 第108図-3～7は2005年1月に実施した3090番地西側道路下の立会調査で出土した資料である。調査は工事中の立会調査のため、排水路用に掘削した溝の断面で確認された包含層を図化し、掘削中に得られた資料と、断面を図化する際に壁面を削ったときに資料を採集している。セクションは南側基点杭 A (X=77,949.021 Y=42,777.251) と北側基点杭 B (X=77,960.971 Y=42,776.663) を結んだラインを基線として作成した(第107図)。堆積層は、I～IV層で、V層以下は遺物をまったく含まない白砂層で地山となる。I層は客土(路盤材)バラスを含む灰白色の堆積層。II層(Yue10YR黒褐色3/1)粘性の無い砂層で締まりはよい、肥前磁器(第108図-5)を含む近世～現代の堆積層と思われる。III層(Hue10YR黒色2/1)粘性の無い砂層で締まりは無く遺物も包蔵しないため時期不詳。IV層(Hue7.5YR暗褐色3/3)粘性の無い砂層で締まりは無い。グスク時代の遺物を含む層で今回セクション調査時に数点の遺物が含まれている。褐釉陶器は、IV層より一括で得られた資料である。なお、本褐釉陶器片が水道課職員によって持ち込まれたことが立会調査のきっかけである。3は青磁皿の口縁部資料で、4は底部資料である。7はタイ陶磁褐釉陶器大形壺、四耳壺の肩部資料である、層から多量の胴部片とともに一括して得られた資料と同一個体の資料と考えられ、同一地点から5の資料も得られている。6は砥石と考えられる石製品で捨て土からの採集であるため出土地点を限定することはできない。

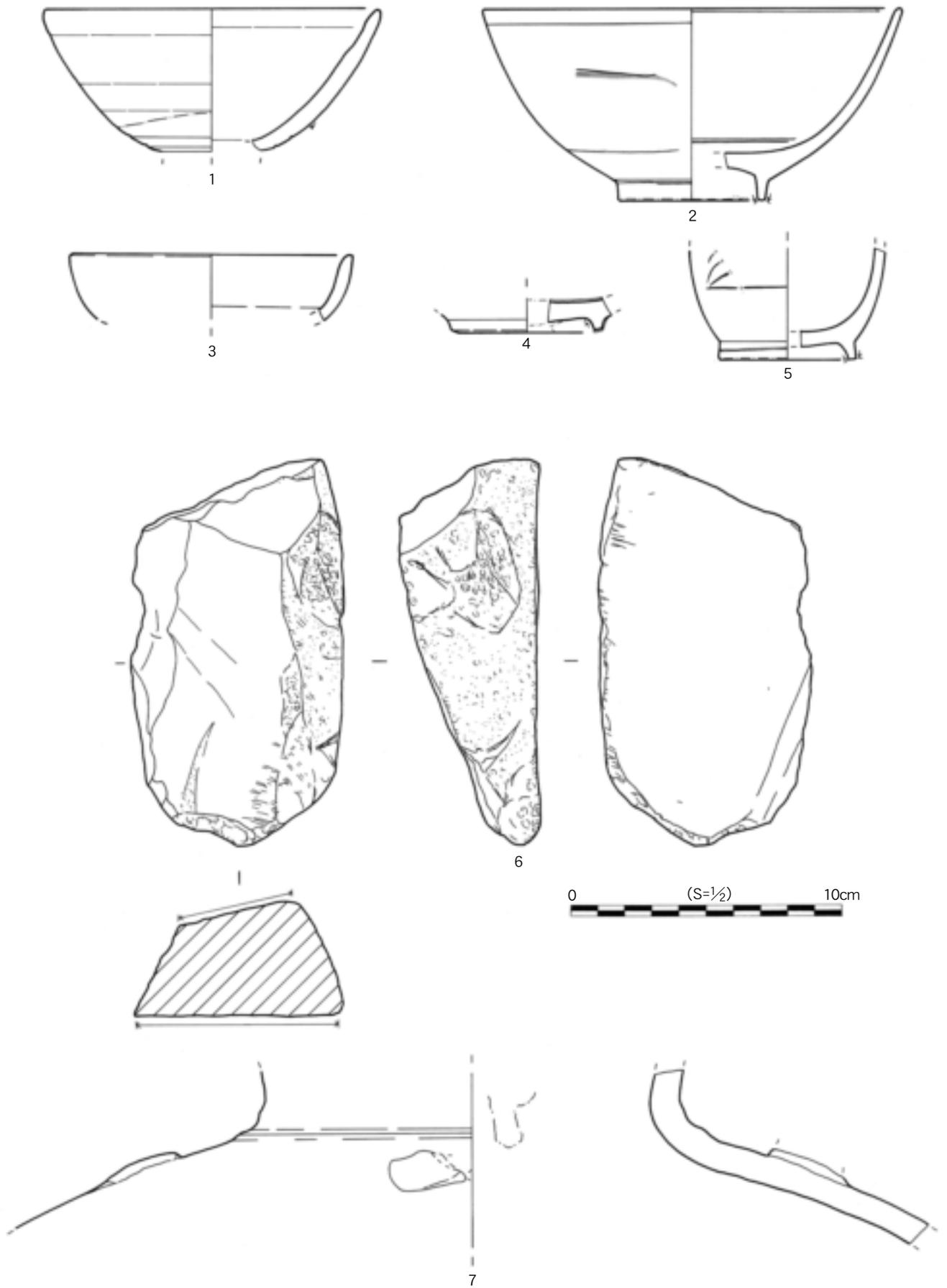
採集地点④ 第109図は1997年に実施した3115番地東側道路下の立会調査で出土した資料である。調査は工事中の立会調査であった。近代頃の資料が中心となり新しいということもあって特に現場断面の図化等は行っていない。掘削中に得られた資料は陶片と多量の貝殻である。8は白磁碗の口縁部資料で、中国産の粗製品と考えられる。9はタイ陶磁褐釉陶器の袋物と考えられる資料で、外面には鉄絵による釉を施釉、内面は轆轤痕が明瞭に残り露胎となる。10は型作りの近代磁器で、コバルトの絵付けと赤絵が器外面に描かれる。口唇部は露胎し口禿とする。11・12は沖縄産陶器で、いわゆる灰釉碗である。13は焼締陶器で内面に播目を持つ播鉢である。14は内側に屈曲する口縁部を持つ沖縄産陶器焼締(荒焼)の香炉である。一部古式



第106図 採集地点②③④



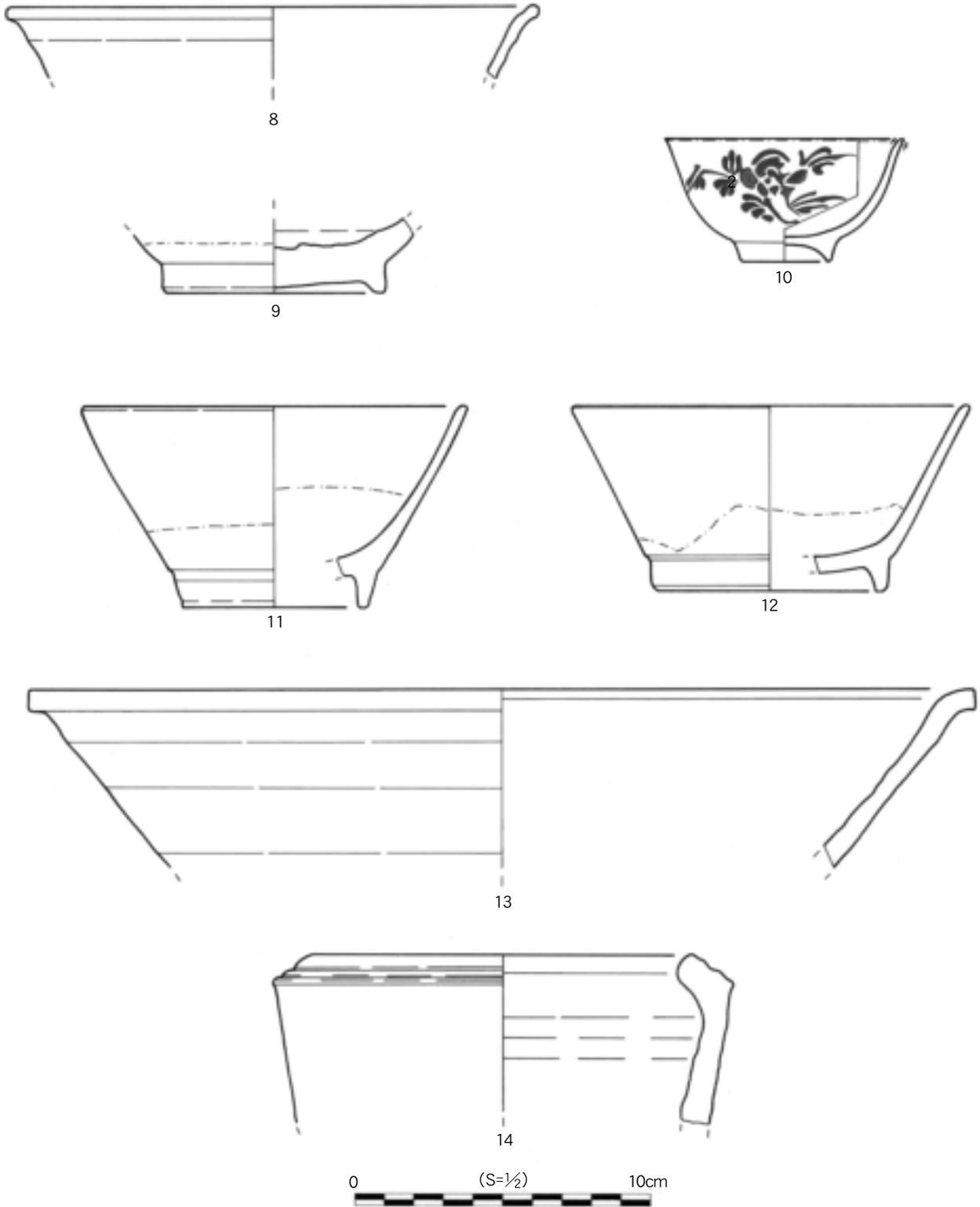
第107図 2005年立会調査土層図



第108図 親泊原遺跡出土遺物(1)

の資料も含まれるが、採集された陶片の多くは近代の資料と推定される。

以上、地下の状況については必ずしも解明されているわけではないが、断片的ながら、16世紀～現代までの陶磁器が採取されている。このことから親泊原遺跡の地下には集落遺跡が包蔵されていると考えられる。一方で第VI章第2節で詳細を述べるが、地上の今泊集落の景観そのものも、伝統的な景観を保持している。



第109図 親泊原遺跡出土遺物(2)

第6節 今帰仁原遺跡

所在地：今帰仁村字今泊71番地・ほか

小字名：今帰仁原

立地(標高)：微高地(約3～5m)

区分：集落

現況：宅地・畑・道路

保存状況：住宅地の地下に良好な状態で埋蔵されていると考えられる。一部住宅建設等によって損壊を受けているところも少ない。

今泊の今帰仁原一帯は標高3～5mの砂丘地に立地し、北側を海に面した現集落である。東側の親泊原集落と一帯となって、福木(フクギ)の屋敷に囲まれた集落、住宅密集地となっている。68番地には阿応理屋恵御殿(オーレウダウン)が所在する。現在は小さな祠のみであるが、かつては隣接地と合わせて大きな屋敷地であったものと想定される。

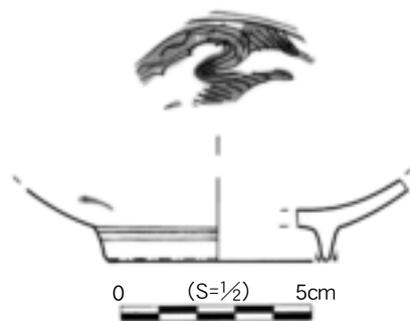
これまで当該地域が、今帰仁ムラ跡の引越し先の地域として指摘されている。また、現今帰仁原所在の阿応理屋恵御殿(今泊68番地)と旧集落今帰仁ムラ跡の阿応理屋恵御殿の火の神の祠(今泊5129番地)は、「火之神」から「殿内」の所在する屋敷地への引越しと理解されている。

これまでに試掘立会の実績は無いが、阿応理屋恵御殿の周辺畑地から、わずかであるが遺物が採集されているので紹介する。その多くは近代のものであるが、近世期に遡ると考えられる資料が得られている。第111図は染付碗の底部資料で、産地は肥前と考えられる。見込と外面に文様が描かれているがモチーフは不明。

阿応理屋恵御殿以外の地域についてはほとんどが未調査で、今後悉皆調査を行い遺物の散布が認められる地域があるのか、あるいは試掘調査を行って地下の状況を確認することによって遺跡の実相を把握することが急務となる。



第110図 今帰仁原遺跡位置図



第111図 今帰仁原遺跡表採遺物

第7節 今泊海岸陶磁器散布地

所在地：今帰仁村字3560番地地先・ほか

小字名：なし

立地(標高)：微高地(0m以下)

区分：海底遺跡

現状：砂浜・海底

保存状況：河口一帯は浚渫などで砂取り作業が行われている。また護岸工事などによって海岸保全が測られるなどの工事によって掘削を受ける箇所もあるが概ね良好な状態で保全される。

ここで紹介する遺物は、主に教育委員会に持ち込まれた表面採集の遺物である。採集者である仲村渠智氏は文化財パトロール員や鳥獣保護員として、現在も今帰仁村の文化財保護に協力しておられる方である。今泊に在住し、休日を利用して写真を撮ることと魚釣りを趣味としていることもあって、今泊区内をフィールドに、出かけた先で遺物を拾ってくる。今帰仁城跡の整備着手時に臨時職員として城跡調査に関わった経験から、陶

磁器等グスク時代の遺物に関する造詣は深く、このため採集品の多くはグスク時代のものに限られる。この点では単なる採集の域を超え調査者として視点を持ち合わせる。

なお採集された陶磁器の多くは今泊の海岸でのものであるため、本節では氏によって今帰仁村教育委員会へ持ち込まれた遺物を紹介したい。

採集資料の概要 今帰仁城から北1kmのところ海岸線がある。この海岸一帯の砂丘地一帯あるいは海底ではしばしば陶磁器の散布が認められている。海岸は西からシバンティナ浜、河川と岩礁を挟んでシルバマ、更に岩礁と河川を挟んでクビリ浜と呼ばれている。持ち込み資料は平成9年から現在までに持ち込まれた物で、これ以前の持ち込み資料もあると推測されるが管理が不行き届きでメモが散逸し不明である。なお、仲村渠氏によればクビリ浜では比較的多くの遺物が採集されるという所見から、一度干潮時に教育委員会のスタッフ数名と海岸の踏査を行ったことがある。この時の調査では近現代の焼き物を大量に採集することはできたが、グスク時代に該当する陶磁器類を得ることはできなかった。その後沖縄県立埋蔵文化財センターが海岸の踏査を行った際にも遺物を得ており、詳細は不明だが当該地域一帯を単なる遺物の散布地として捉えるだけでなく、今後は周知の遺跡として、保護の対象としていくことが検討さ



第112図 今泊海岸陶磁器散布地位置図

れるべき地域と考えられる。以下に採集された遺物について採集地点ごとに個別に紹介する。

1) シバンティナ浜

第113図-1～3は青磁碗の底部資料でいずれもシバンティナ浜で採集された資料である。砂浜からの採集なので、海で洗われ著しく摩滅している。1・2は無文外反碗等の底部、3は細蓮弁文碗等の底部資料と考えられる。

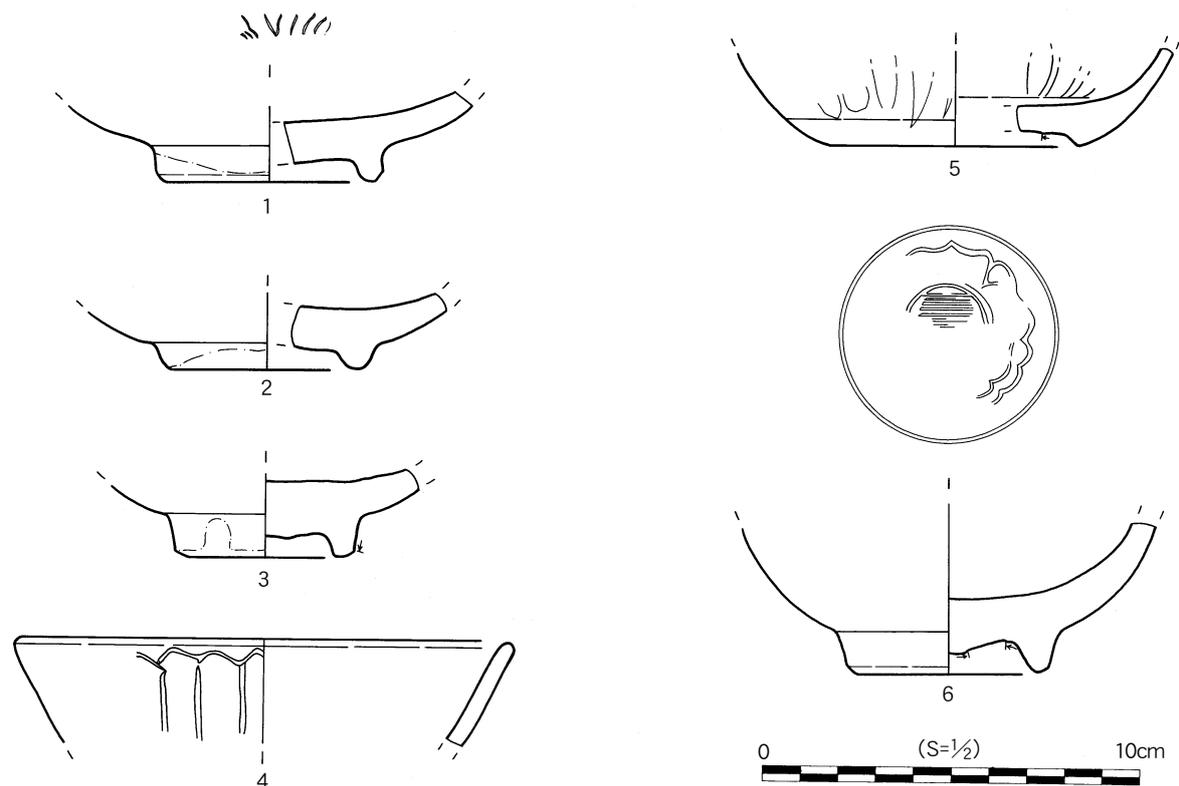
2) シルバマ

第113図-4は細蓮弁文碗の口縁部資料の小片で、海で洗われ著しく摩滅している。砂浜からの採集品である。

3) クビリ浜

第113図-5はクビリ浜の砂浜からの表採品で、碁笥底で体部内外面にヘラ彫りの蓮弁文を描く（主郭分類では蓮弁文杯）杯の底部資料である。

第113図-6は今泊の海底から採集された標品で、碗底部資料である。採集当初は貝の類や石灰分が付着して覆われていた。海底に沈んでいたためか摩滅はほとんど無く断面は角をもっている。無文碗の底部資料と考えられ、見込に印花を押印する。外底は蛇の目釉剥ぎとなる。



第113図 今泊海岸陶磁器散布地表採遺物

第8節 石積遺構群

所在地：今帰仁村字4721-1番地・ほか

小字名：なし

立地(標高)：丘陵(65～85m)

区分：グスク・不明遺構

現状：原野

保存状況：近隣地域まで開発が及んでいるところ、台風などの被災を受け一部石積みが崩落した遺構などがあるが、ほぼ完全な状態で保全される。

今帰仁城跡周辺にはこれまで実施された調査によって諸種の石積遺構が確認されている。ここで言う石積遺構は地表面に確認できる遺構であるためその時代や機能については不明な点が多い。中には畑の境界等として近現代に集積された石塁もあるが、規格性が高く規模も大きい石積み遺構も見られる。用途などは不明だが、言い伝えや地名あるいは表面採集の遺物から、出城、集落の石積み囲い、墓などがグスク時代から近現代まで構築、利用されたことが想定される。中でもミーングスクやシニグンニ、ターラグスクなどは地元では古くから知られている石積み遺構である。

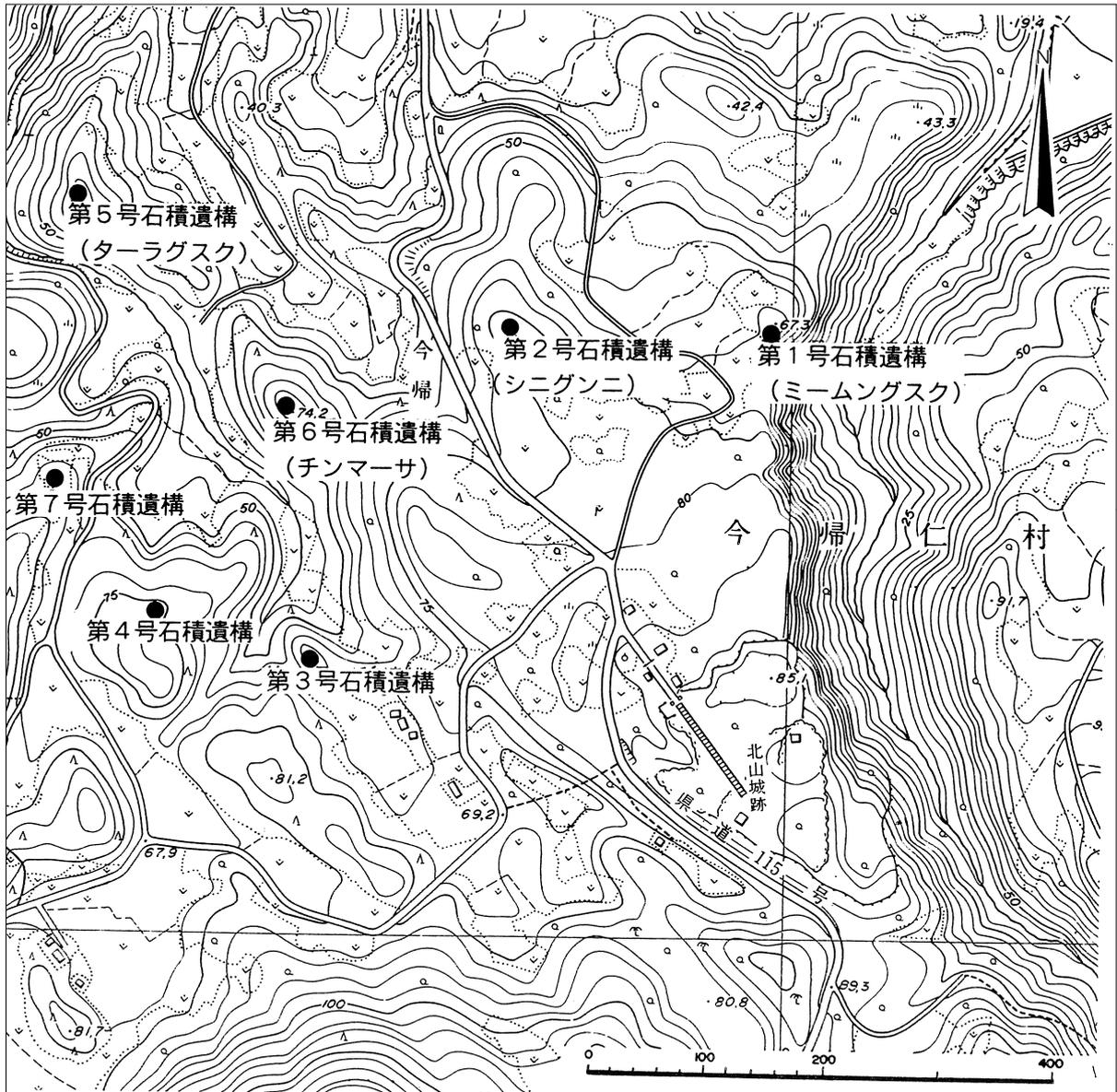
調査の経過をまとめると、最も早い調査は1978年の文化財保護委員会による調査で、この際志慶真川沿いに今帰仁城跡側から張り出すように確認された石垣が見つまっている。これは水揚場の跡として紹介され知られるところである(今帰仁村教育委員会1979)。

次に行われた調査は1980～81年に実施された今帰仁城跡周辺遺跡範囲確認調査である。これによって7地点の石積み群が確認されることとなった。7つの石積み遺構は基本的には方形の石塁であり、丘陵頂上に配されているのが特徴である(今帰仁村教育委員会1986)。

1992年には今帰仁城跡基本構想・基本計画を策定する際に行われた広範囲の現地調査によって見つかった石積み遺構がある。これらの石積みは規格性が高いものは数例でいずれも畑の境界や、簡単な石塁状の遺構であり、近代の遺物も表採されることから時代の新しいものも過分に含まれると考えられる。実施された調査では23の地点から石積み遺構や、拝所の目印となる香炉、竪穴などがみつまっている(今帰仁村教育委員会1992)。

続いて調査が実施されたのは、平成16年度から行われた村内遺跡発掘調査による分布調査及び、今帰仁城跡周辺整備事業に伴う緊急調査で実施された比較資料収集の調査事業によるものである。当該調査によって本報告に掲載する第1号、第2号石積み遺構の遺構図の作成を実施することができた。一部については、レーダ探査を導入し遺構の性格把握に努めている。

今回は、石積み遺構は山頂部に見られる石塁を中心に紹介する。



第114図 石積遺構周辺の地形

遺構名・地名	標高(m)	小字	立地(地籍)	遺構群No	規模(m)			規格	備考	
					長軸	短軸	高さ			
ミーミングスク	67	ハンタ原	4721-1	第1号石積遺構	19.0	18.0	3.0	方形	測量調査完了	
シニグンニ	79	アタイ原	5013	第2号石積遺構	A	6.5	6.0	1.7	方形	測量調査完了
					B	6.0	5.0	0.5	楕円形	
名称不詳	70	長嶽原	1608	第3号石積遺構	4.0	2.5	1.5	長方形		
ナハサーラ	85	長嶽原	1581	第4号石積遺構	A	4.0	3.0	0.5	方形	
					B	4.5	4.0	4.0	方形	樹木倒壊で一部毀損
					C	2.0	2.0	1.0	方形	
ターラグスク	65	波佐間原	2278	第5号石積遺構	—	—	—	方形?	毀損	
チンマーサ	74	波佐間原	2222	第6号石積遺構	A	3.2	3.0	1.5	方形	
					B	2.6	2.1	1.5	方形	墓か?
					C	5.0	4.5	2.0	略方形	
ミーバンガシルシ	70	南大嶽原	1389	第7号石積遺構	5.0	4.0	1.3	長方形		
水揚場跡		ハンタ原	4873番地地先	—	12.0	3.0	2.0	石垣状	10m間隔で構築	

第15表 石積遺構群一覧表

1. 第1号石積遺構（ミームングスク）

①概要

ミームングスクは今帰仁城跡から約50m北側に立地する石積遺構で、遺構頂部の標高は68.5mを計り、南に志慶真門郭、北に志慶真川の河口が見わたせる好位置に立地している。その構造は古期石灰岩の石を積み上げた石塁で、平面形は方形、三段の構造となる。規模は大きく今帰仁城跡周辺に分布する石積遺構の中では最大で、下段は18m×19m、上段は12m×9mを計測する。最上段部には略方形の浅い凹みが認められ、栗石が詰められることから何らかの施設が埋設されているのではないかと想定される。

今回調査を実施するにあたり元興寺文化財研究所へ調査委託を行った。調査内容は現況の測量図作成、地下構造確認のためのレーダ探査及び試掘調査である。調査は平成16年1月18日～平成16年3月31日まで実施した。調査に際しては村教育委員会が元興寺文化財研究所に委託して調査を行った。村の調査担当者は宮城が、受託者の調査担当者は塚本敏夫、橋本英将が行っている。

②測量調査

測量対象としたのは石積遺構の平面及び側面4面の立面である。平面は約400㎡あるためラジコンヘリによる写真測量を実施した。他方立面については3Dレーザー測最を併用し最終的には遣り方測量によって1/20で測量図化を行った（第119図）。

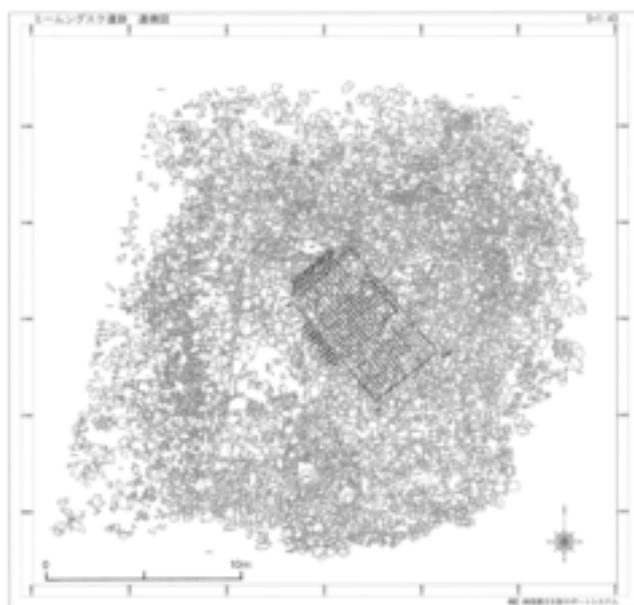
③レーダ探査

レーダ探査は最上段の平坦面中央に認められる凹みの下部構造を非破壊で推定するために実施した。実際の作業には桜小路電機有限会社が実施、分析については東京工業大学亀井研究室に依頼した。探査に使用した機器は下記のとおりである。

- ◆地中レーダ（KSD-3AM） 光電製作所製
- ◆データレコーダ（RD-111T） ティアック製
- ◆パーソナルコンピューター

探査を実施したのは南北約7m×東西4mの28㎡の範囲で、測線数各11測線（測線間隔0.25m）で総走査距離は115.5mとなる（第115図）。ミームングスクは石積遺構である。このため走査にあたってはレーダが浮いてしまったり、正確な走査が行えずに有効なデータが得られないばかりか、遺跡表面の配石を動かしてしまう可能性があった。このため、探査にあたっては、石積み上面に土嚢を敷き、その上にベニヤ板を敷きレーダを走査する方法をとった（図版25-4）。

南北方向のレーダ画像に注目すると、各レーダ画像にM字形の反応が見られる。この部分は周囲の状況から推測すると地山の反射ではないかと推測される

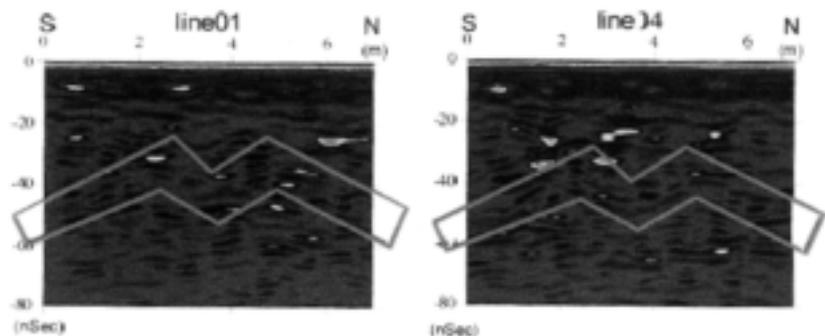


第115図 ミームングスクレーダ探査位置図

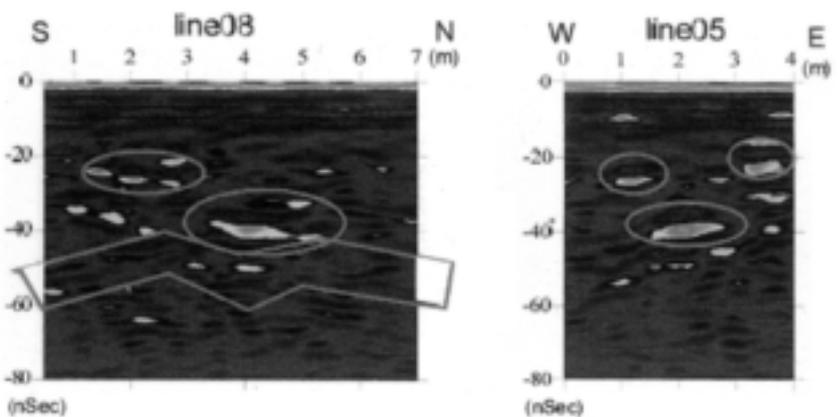
(第116図)。次に領域中央付近を走査している南北方向の第8測線や、東西方向第5測線などにみられるように、先ほどの地山と思われる反射の上部に幅1.5~1.8m程度の強い反射が見られる。この部分に何らかの遺構が存在する可能性が考えられる(第117図)。さらに東西の第5測線にも同様に強い反射がみられる。これらのことから、もともと空洞であった部分が地中で陥没した可能性などが考えられる。

また、各レーダ測線の同一深度を観測平面上にプロットしたタイムスライスを見てみると、東西測線の深度約0.9~1.1mの位置に強い反射を見ることができる。この2つの反射のちょうど挟まれる部分には、さらに深い深度2.9~3.1mの位置で、強い反射を見てとることができる(第118図)。

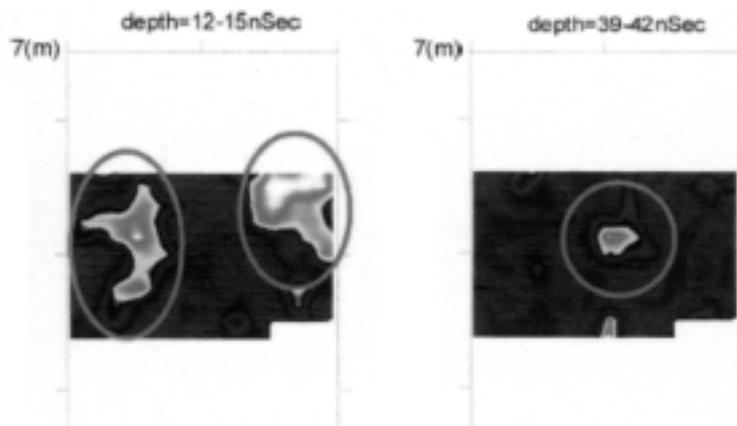
以上、レーダ探査では深さ1.5m下から周囲の石積み反応と異なる反応が捉えられた。あくまでも周囲の石積みとは異なる反応が捉えられたということであり、レーダ探査で示された反応が遺構の存在を示すものであるか今後の調査に期待したい。



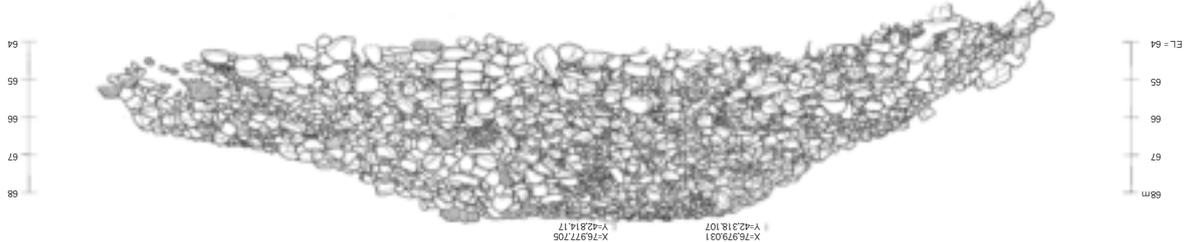
第116図 地山と思しきM字型の反射



第117図 遺構らしき反射の数々

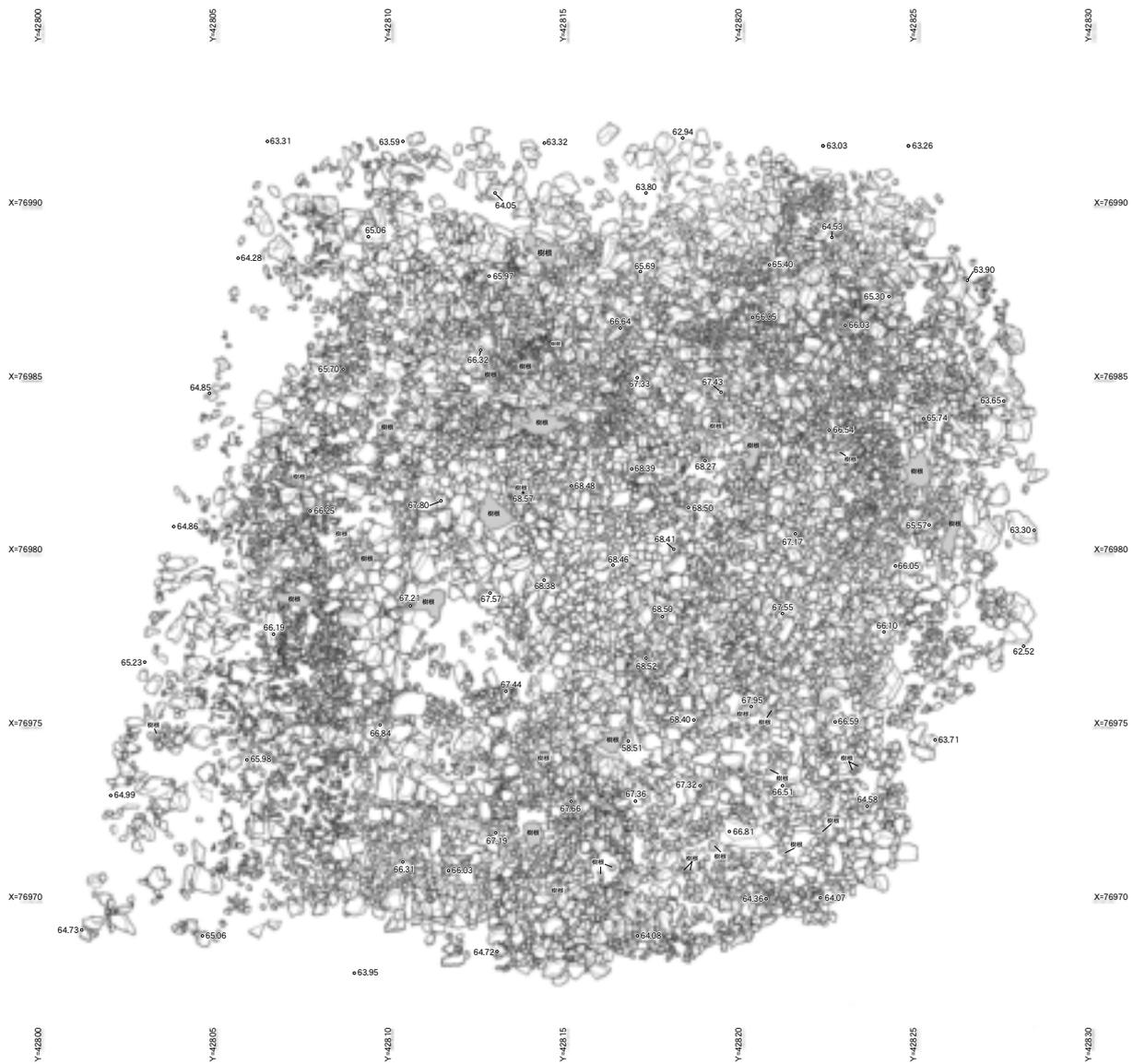


第118図 タイムスライス図(東西方向測線)

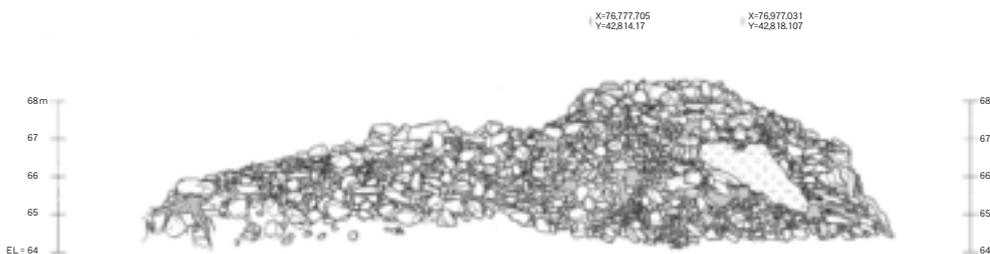


北側立面図

平面図



南側立面図



第119図 ミームングスク遺構詳細図 (S = 1/200)

東側立面図

X:76709031
Y:42318307

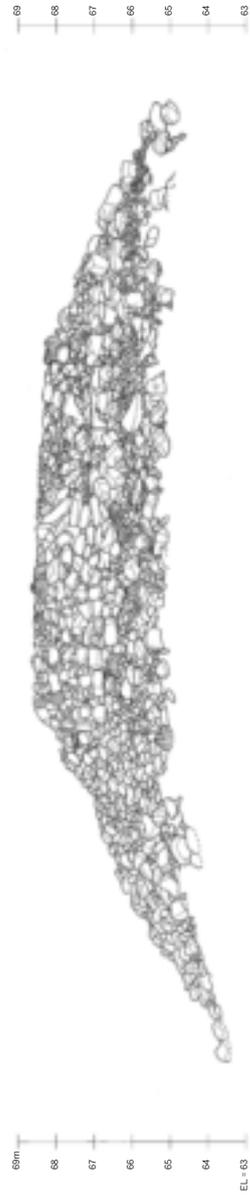
X:76381077
Y:42318348



西側立面図

X:763817533
Y:42318383

X:76377705
Y:42318317



④試掘調査

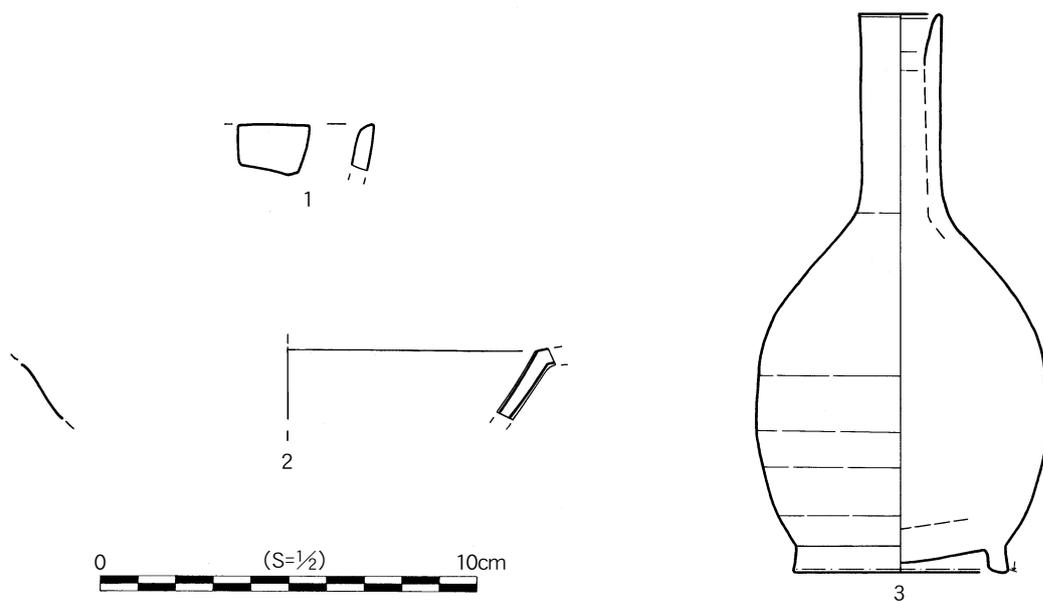
試掘調査の対象としたのは石積遺構の平面凹みのある部分で、レーダ探査によって地下にもともと空洞があった部分が陥没した可能性が高いと考えられる部分において実施した。試掘調査の目的は地下に石室等の施設を証明できるような石列などが確認されるかどうかという点に絞り、発掘を上面の清掃程度とし完掘することの無いように石積み表面の清掃を行うこととした。具体的には約10cm程、栗石を除去し精査を行ったが、思うような結果が得られず途中で調査を終了している。

⑤表採遺物

清掃、調査時においてミームングスク及びその周辺より少量だが遺物が採集されている（第120図）。1は青磁口縁部で、2は青磁口折皿の胴部資料と考えられる。3は石積遺構の上面に露出していた資料で、コバルト釉を施釉する沖縄産陶器細首瓶で、近代以降の製作年と考えられる。

⑥まとめ

ミームングスクの表面観察からは遺構内に何らかの施設が埋没していることが想定され、レーダ探査の結果もこれを追認する結果が得られた。しかし試掘調査の結果では地下施設を確認するまでには至っていない。実際には遺構を更に掘り下げる必要があるが、保存の観点から完掘することなく、先送りにしている。これについては今後の課題点となる。遺構の構築された時代やその性格については確定的な部分はないものの、今帰仁城跡に近接し、これを望む箇所位置することから今帰仁城跡と一体となる遺構であると考えられる。また、時代的には構築年をどこまで遡って考えるかは別として、グスク時代の遺物が小片だが幾つか採集されており、一方で近現代まで何らかの形（例えば祭祀施設等）で継続的に利用されたことをうかがわせるように、細首瓶などが石積遺構上面で採集されている。



第120図 ミームングスク採集遺物

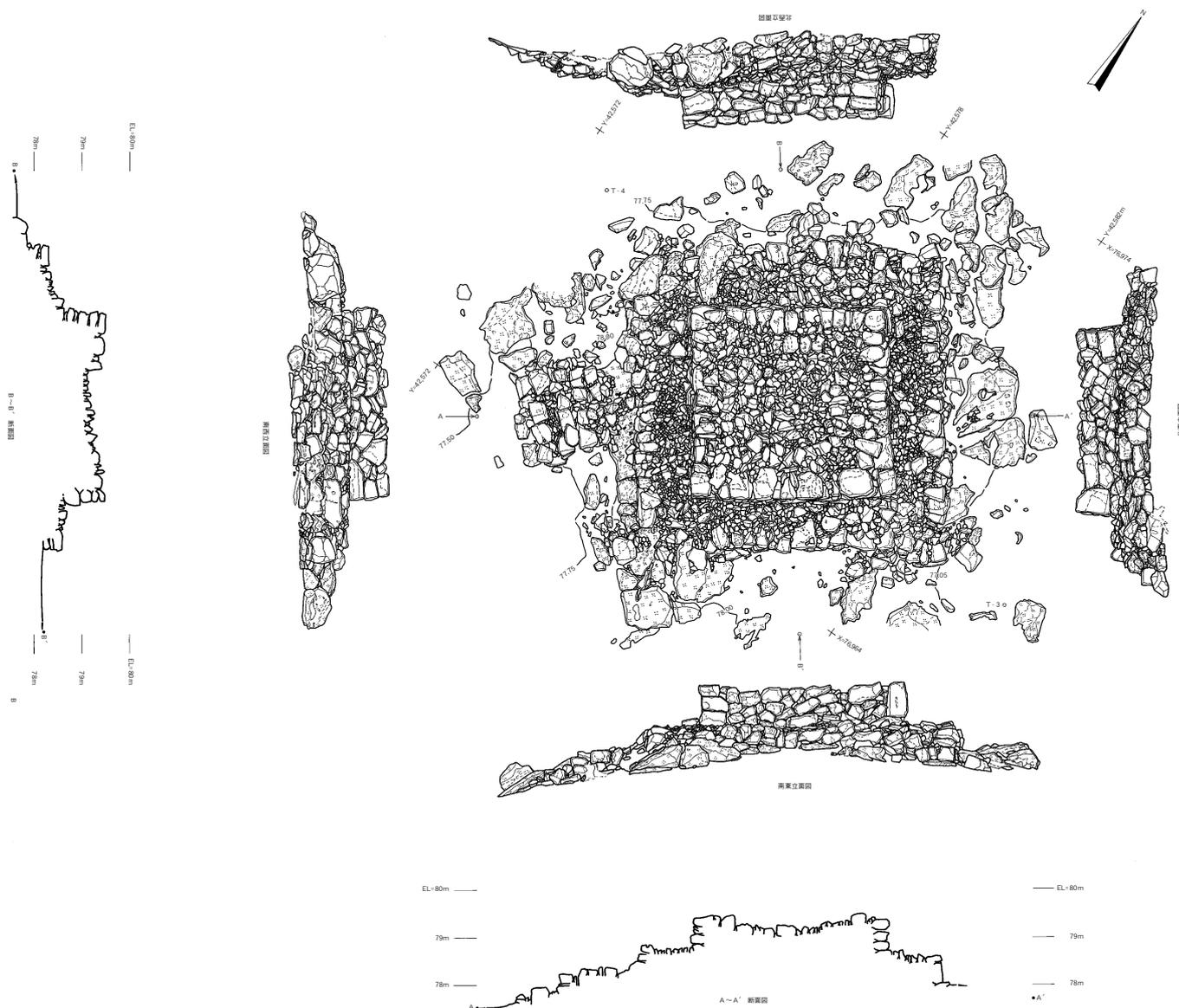
2. 第2号石積遺構（シニグンニ）

第2号石積遺構は通称シニグンニと呼ばれる石積遺構である。所在する丘はヤマグラーと呼ばれていて、今帰仁城跡から約200m北側に位置する。遺構頂部の標高は約79mを計る。四囲は樹木が茂っており視界を妨げるが、南に今帰仁城跡外郭及び今帰仁ムラ跡を望み、北に今泊集落及び海を見渡せる好位置に立地している。山頂部には2基の石積遺構が所在する。一つは方形二段の石積みで、もう一つは楕円形のドーナツ状の石積みからなる。前者の方形規格の石積みをA、後者円形規格の石積みを仮にBとして紹介する。

第2号石積遺構A

その構造は古期石灰岩の石を積み上げた石塁で、前者は平面形は正方形、二段の構造、下段は約6.5m×6.5m、上段は約4m×4m、高さは地表から1.7mを計測する。南西側には階段が取り付けられているのがはっきりと解る。最上段部は円形状に浅く凹む。

今回は当該遺構について、詳細図を作成することを目的として、測量調査を委託して実施した（第121図）。



第121図 シニグンニ（第2号石積遺構A）遺構詳細図

第2号石積遺構B

露頭する岩盤を取り込むような楕円形ドーナツ状の石積みで長軸は約6m、短軸は約5mを計測する。

③表採遺物

清掃、調査時においてシニグンニ及びその周辺より遺物が採集されている。遺物はいずれも年代を判断することが困難な自然遺物のみである。貝殻及び獣骨が石積遺構より採集された。

④まとめ

第2号石積遺構は通称シニグンニと呼ばれる。シニグンニの意味は「シニグ^(註)」の「根」という意味であると理解されており、かつてここを起点として実施された祭りである「トントトトン祭り」（もしくは「トントコトン祭り」）の重要な聖地になると言われている。この祭りは、陰暦7月の盆行事が終わった最初の子の日に行われる。戌の日はウーニフジ、亥の日はウンジャミ、そして翌日の子の日に島ウイミとトントトトン祭りが行われる。この行事は今帰仁ノ口が取り仕切る祭祀ではない。昭和初期までは行われていたとされ、その内容は字史には以下のように紹介されている。

シニグンニを出発して太鼓を打ち鳴らして棒を振りながら下山し、字内の家々の悪霊祓いをしながら、シニグイ道に来て子ども達を集め、子ども達をスク（魚：アイゴ）と見なして網をかぶせて漁撈儀礼を行った後、字民とともにシニグンニ並びに城にむかって礼拝合掌を行うとされる。登場する神役としては、〔男神〕ハータヌペーフ（仲宗根門中）、シマヌペーフ（石嶺門中？）、トントトトン神（上間門中）ほか約10人程度でいわゆるシニグ（シヌグ）祭りと同様の祭祀で、現在でも国頭村安田のシニグや近傍の本部町のシニグは有名である。他にも奄美群島の沖永良部、与論島や沖縄本島のうるま市浜比嘉島などにも分布する行事である。

このような民俗的知見から考えると、石積遺構を祭祀との関連で整理することも考えられる。しかし、古期石灰岩を用い石塁を成すこと、今泊の海岸線を望める好立地である点などを考慮すると、ミーミングスク同様、今帰仁城跡に近接し今帰仁城跡と一体となる遺構であると考えられる。いずれにしても、今後の調査に期待したい。

3. 第3号石積遺構（名称未詳）

本遺構は城跡の西側約100m、標高70mの独立した丘陵上に造られるもので、その所在さえ知られておらず、名称もない。丘陵全体が石山で、遺構は岩盤上に石積みされる。規模は4×2.5m、高さ約1.5mで、長方形を呈し、方向軸は概ね南北に向いている。周囲は北から西側にかけて谷間で、見通しの効く位置にある。本遺構は他に階段や香炉といった施設を伴わず、祭祀等に使われた痕跡も見あたらない。また、本遺構にまつわる伝承や遺物の採取もなく、全く不明の遺構である。

4. 第4号石積遺構（名称未詳）

第4号石積遺構はナハサーラと称される標高85mの岩山に築かれるもので、3基が確認されている。遺構はほぼ東西に連なるように配置される。西側から、順にA、B、Cと仮称しておく。遺構は丘陵頂上部の岩盤上に直接積む簡素なものである。

A遺構は3×4mの雑な石積みで、崩壊が著しく、礫が周りに散在する。石積みの外壁は大型の礫を使用し、内側に人頭大の礫を集めている。

B遺構はA遺構と凹地を挟んだ東側12～13mの距離にあり、岩盤に直接積まれるもので、3

基の中で最も規模の大きいものである。4×4.5m、高さ4m程あり、基部は幅60～70cm、高さ1～1.2mの段を四方に廻らし、補強をなしている。他の2基よりやや北側に位置し、頂部は平場で、南から北へ傾斜している。石積みの保存状況はあまり良くはない。平成15年度に台風が来た際に石積みに付いていた樹木が倒れ、一部石積みが崩落した災害があった。この際に崩落した石積み内から人骨が採集されている。土肥直美氏の所見によると、右大腿骨で比較的しっかりとした特徴などから考えて男性ではないかとコメントいただいた。

C遺構はB遺構の東7mにあり、遺構の東側は急な崖で谷間となる。視界の広がる位置にあって、他の石積遺構や城跡内の展望台も見渡せるところに立地している。遺構は6×2mの岩盤上に積まれ、規模は2×2m、高さ1mほどである。上面は南へ傾斜している。

これら3基の周辺からは遺物は採集されておらず、遺構の機能・年代等については不明である。

5. 第5号石積遺構（ターラグスク）

本遺構は第6号石積遺構から北西へ約200m、標高65m余の丘陵頂上に築かれる方形状のもので、地元では「ターラグスク」と称している。周りには旧日本軍の掘や土堤が築かれ、頂部東側は平坦地で、北および西部は急斜面を呈する。遺構は1辺約10mのもので、崩壊が著しく、原形を留めない状況である。中央部に5m四方の石積跡があり、段上の遺構であったものと思われる。遺構の東側には長さ10m、幅1.2m、高さ50cmの盛土がある。呼称については知られているが、それ以外については不明である。

6. 第6号石積遺構（チンマーサ）

第2号石積遺構の西約200m、標高74.2mの丘陵上に築かれる3基の石積みで、付近はシンミファイと称され、地元ではこれらを総称して「チンマーサ」と呼んでいる。東にシニグンニ、北西にターラグスクを見通し、南北に並ぶように配される。北側から順にA、B、Cと仮称しておく。

A遺構は石灰岩の岩盤を利用して築くもので、規模は3×2.2mの方角を呈し、高さ1.5mを計る。中に90×90cmの方角でやや深い凹みがみられ、人為的な破壊の感じを受ける。南壁に崩れあり、周囲に礫が散在する。

B遺構はA遺構の南15mにあり、規模は2.1×2.6m、高さ1m余りである。本遺構も崩落しているところがあり、人為的に荒らされた感じを受ける。以前には人骨が納められていたようであるが、確認できない状況である。周辺は平坦でテラス状になり、土留め状の縁石を廻らす箇所があり、詳細な調査が必要である。

C遺構はB遺構から連なる幅1m、長さ10mほどの帯状の石塁によって繋がる。3基のうちで最も大きく、4.5m×5mのもので、中央部に1×1.5m、深さ30cmほどの長方形の凹みが見られる。遺構は自然の岩盤上に築かれ、南面は切り立つ岩盤面をそのまま利用し、その上に積み上げている。高いところで2mほどである。また、南側岩盤面に寄り重ねるかたちで、幅60cm、長さ6m、高さ0.7～1mほどの二重積みも確認される。B遺構では納骨がされていたことより、墓として利用されたことも考えられる。

7. 第7号石積遺構（名称未詳）

第6号遺構の南西約300m、標高70mの大きな岩盤上に造られるもので、地元では「ミーパンガーシルシ」と称している。遺構は東西に5m、南北に4mの長方形のもので、壁の最も高いところで1.3mほどである。

積み方は雑で壁面は崩れかかっている。遺構は以前から知られていたようであるが、禁忌な場所(墓)として足を踏み入れなかった、とのことである。東西方向は視界が効くところである。他には遺構がなく、また遺跡周辺からの遺物の採取も得られていない。

いつ頃、何のために造られたかは明らかでなく、今後の調査を待つことにしたい。

8. 水揚場跡

今帰仁城跡の水場については様々な議論があった。一説には、志慶真川から急崖をかつぎあげたといわれ、またある人は綱で吊り上げていたところ対岸の敵からその綱を弓で射切られたという。1978年に今帰仁城跡管理策定委員会策定時に、今帰仁村文化財保存調査委員会では上記のことについて現地踏査を実施した。この調査によって、志慶真川左岸城跡沿い石積みの遺構を発見するところとなる。

場所は今帰仁城跡御内原の東側直下に約10mもある屏風型の大岩があり、さらにこの岩の直下である。川の流れに対して直角に延びる石積みで規模はかなり大きい。野面積み石垣で幅約3m、長さ約12m、高さ約2mのものが、約10m間隔でほぼ平行に構築されている。急傾斜地であり、石垣の脱落崩壊も甚だしいので正確ではないが、現在の川床から約5mあがったところにある。崩壊のせいで、この遺構の基部についてはよくわからないが、ここから急崖をジグザグに左に巻くように登ると志慶真門に到達するといわれている。

9. その他

上記第1～7号石積遺構及び水揚場跡の石積遺構以外にも、今帰仁城跡周辺には性格不詳の石積みが存在する。このような石積遺構の分布について、1990～92年に実施した基本構想・基本計画書作成の中で行われた分布調査によって確認された石積遺構等を含む25地点が調査されている。このうち1件は前述の水揚場と同じもので、その他の24件については規格や規模は前記石積遺構群には及ばないが、屋敷囲いや土留め石積みと思われるものなどが含まれている。今帰仁ムラ跡や親泊ムラ跡、道などと一体となる遺構の可能性も考えられ今後これらについても、詳細な調査が望まれる。

《参考文献》

今帰仁村教育委員会（編） 1979年『今帰仁城跡』今帰仁村の文化財 第1集

今帰仁村教育委員会（編） 1986年『今帰仁城跡周辺遺跡範囲確認調査報告書』今帰仁村文化財調査報告書第12集

今帰仁村教育委員会（編） 1992年『今帰仁城跡公園基本構想・基本計画書』

《注》

シヌグとは収穫がすみ、次の新しい農作に移る前におこなわれる祭り。国頭村の辺戸・奥・安波・安田、名護市汀間、本部町備瀬・具志堅・伊野波・辺名地、伊是名島の仲田・諸見、伊平屋島の我喜屋、平安座、伊計、浜比嘉や奄美諸島の沖永良部島・与論島などに分布する。祭りの期日は旧暦6月と8月もあるが、7月の亥の日というのが多い。源武雄「シヌグ」『沖縄大百科事典』中巻（1983）より。

第9節 ハンタ道

所在地：今帰仁村字4594-1
から4750番地地先

小字名：ハンタ原・アタイ原

立地(標高)：丘陵緩斜面(起点
5.2m/終点83.5m)

区分：道跡

現状：里道

保存状況：良好な状態で維持・
保全されている。ただし現状は
木々が鬱蒼としており道としての
状態は保持していない部分が大半
である。

①概要

ここで紹介する道跡は、現状で
確認できる道跡である。最も残り
が良いルートを紹介する。今帰仁
城跡の北側から、総延長740.1m
(高低差78.2m)を測る。造られ
た時期は不明であるが、昭和初期
頃までは城跡周辺の長嶽集落や志

慶真集落とを繋ぐ重要な生活道として使用されている。また、明治36年地積図(第4図)で確認することができるのを初出とする。旧道はグスク道、ハンタ道、アタイ道などと呼称される。グスク道のグスクは今帰仁城跡を指すもので、ハンタ道、アタイ道は道を界しての小字名の名称から呼ばれるようである。最も知られているハンタ道を道の名称とした。

道幅は2～4mのもので、所々に階段をこしらえる工夫がなされる。土留めの法面壁には人頭大の石を簡単に積み、道の両側に縁石を設ける箇所などがみられる。また、平坦部には径5cm内外の礫が敷かれているのが、1985～86年の試掘調査で確認されている。基本的には自然の岩盤を道として取り入れ、両側には道幅を標示する琉球松が植栽されていたことが、聞き取り調査によって確認されている。また、明治から昭和はじめ頃にかけての文献から、城跡への登城道としてのハンタ道が記録されており、ここには、今帰仁城跡へのルートが曲がりくねりながら続くこと、岩盤の露頭する様子、松並木であったことを知ることができる。代表的なものを引用して紹介する。

『上杉県令日誌』 明治14年(1881)

是ヨリ左ニ折レテ、石坂アリ、輿ヲ捨テ上ル五六丁、左リヲ下シ瞰レハ、千尋ノ谷アリ、水涸レ石露ル、又上ル五六丁、左ニノロクモイノ空室アリ、上ル数百歩、即チ北山王ノ旧城趾ナリ

『南島探検』2 笹森儀助 明治27年(1894)

城跡ニ登ル山道、数町ノ間、皆鏡ノ如キ青色大理石ナリ、石上滑ニシテ、靴行スヘカラス。必



第122図 ハンタ道位置図

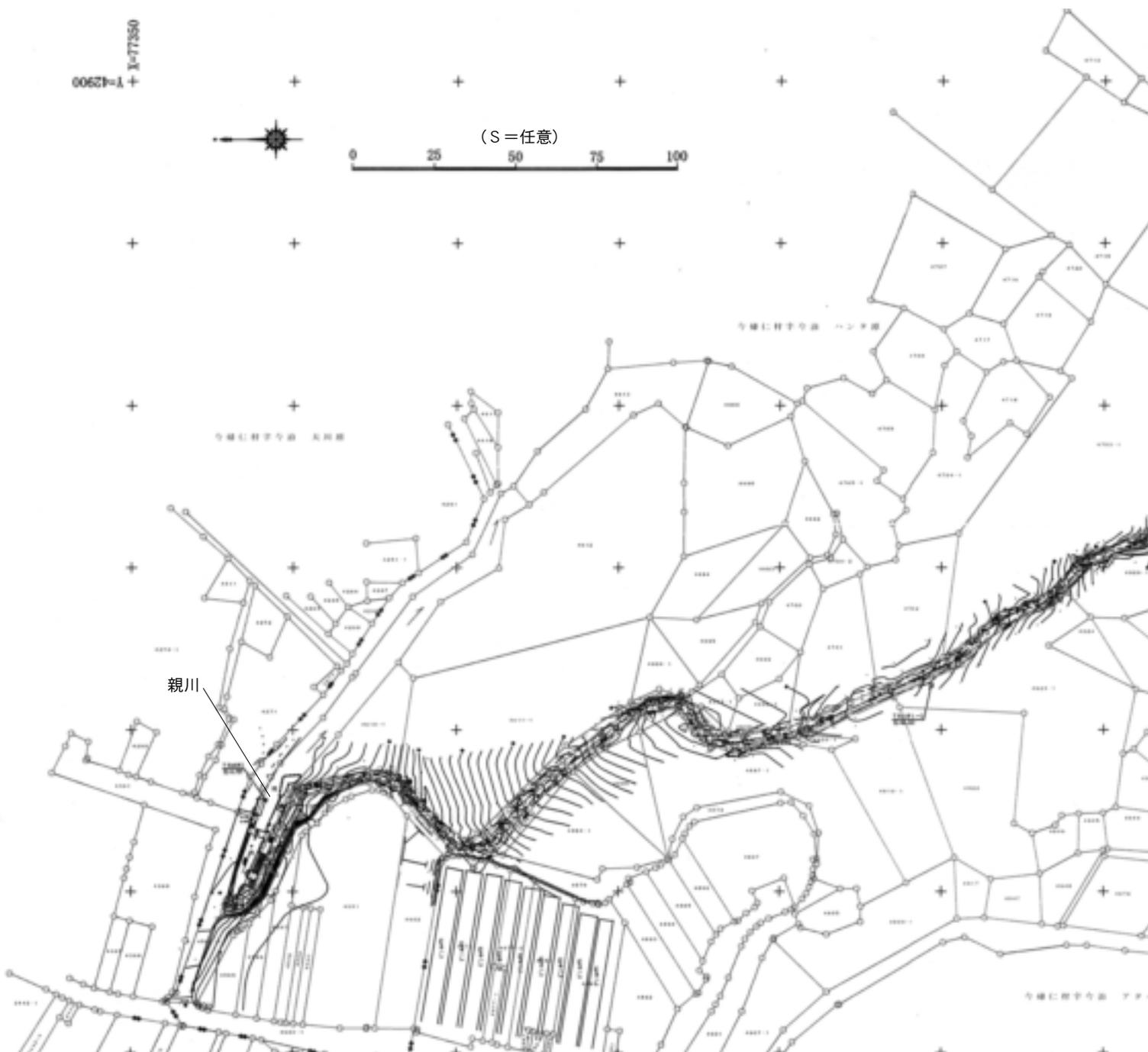
ス草履を用ユ。

『御案内』平敷兼仙 昭和11年（1936）

旧道は此处から始まるのだ。平滑な大理石が無造作に敷きつめられた急坂は九九折に数町続く、あおげば枝振り美しい松並木が自然の日覆となって盛夏の過客を喜ばしめる。

②測量調査

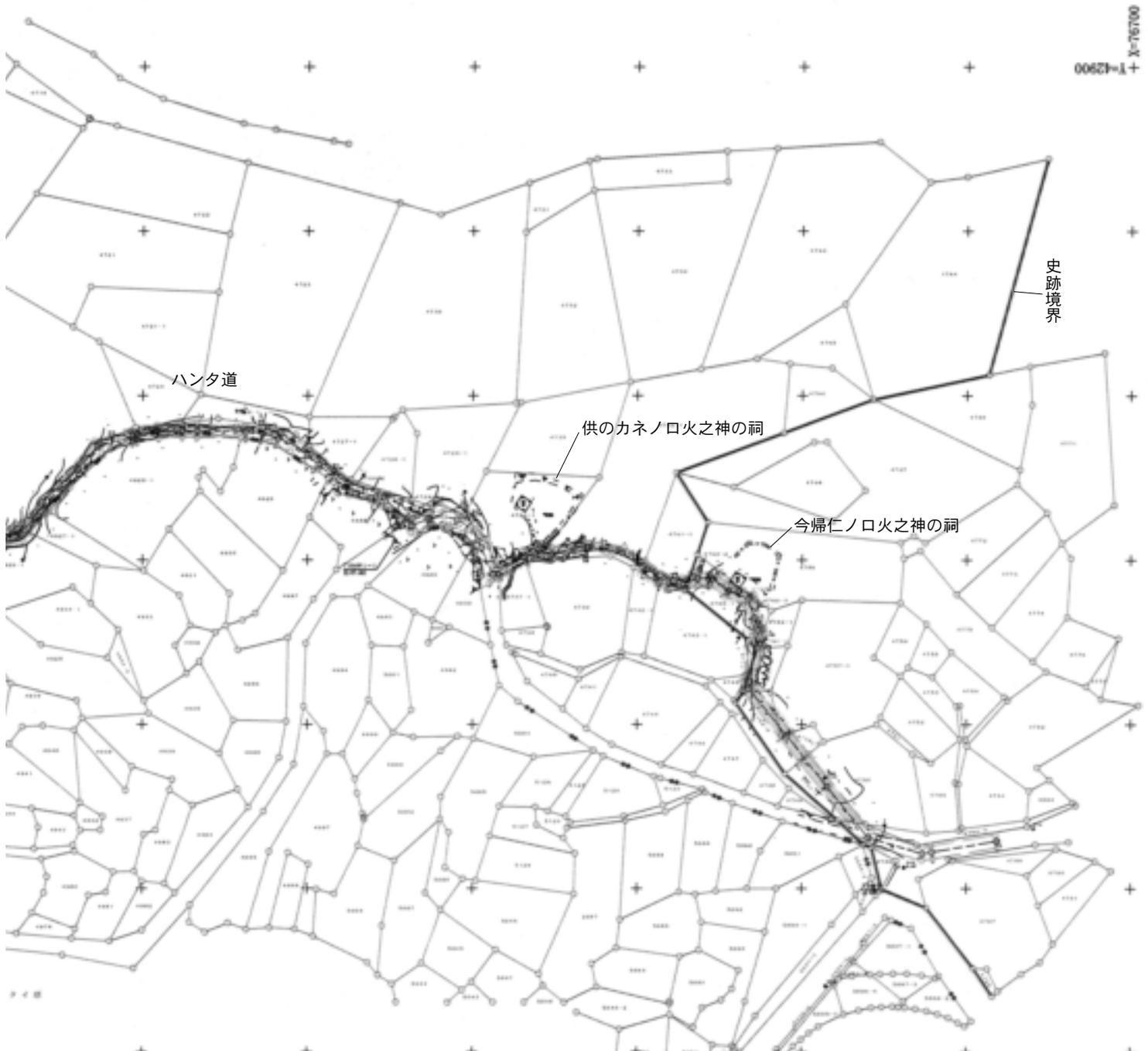
測量対象としたのは親川（エーガー）からミームングスク、供のかねノロ殿内火之神の祠、今帰仁ノロ殿内火之神の祠、そして今帰仁城跡を結んだ道とした。現況地籍でもそのほとんどが里道となっている。測量は平成17・18年度に平板測量を委託して行った。あわせて地籍併合図を作成し、里道の潰れ地を測量現況としての道と地籍を合わせている（第123・124図）。

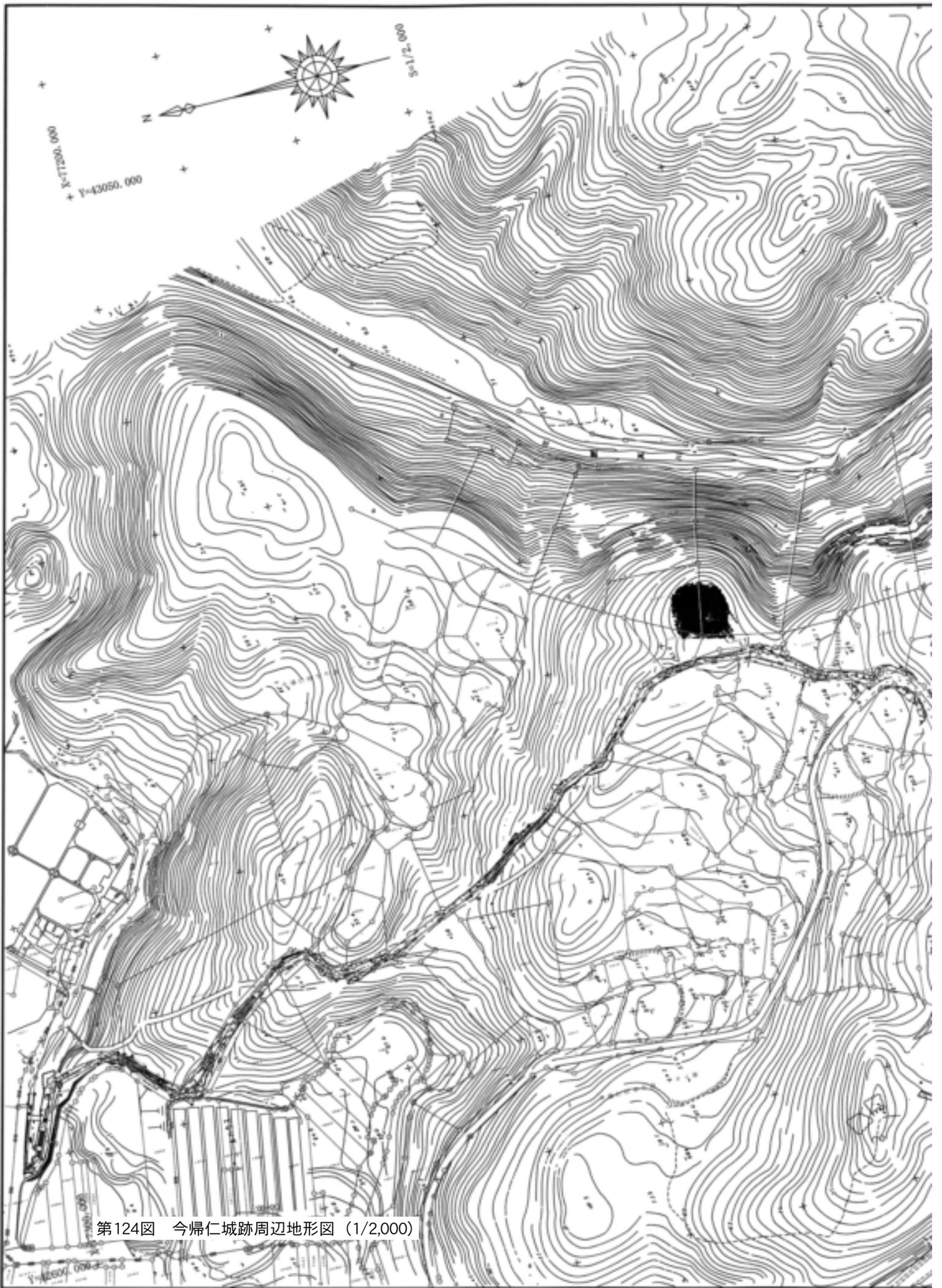


第123図 ハンタ道詳細図（地籍併合図）

③課題

ハンタ道の南側周辺には、ミーミングスクと称される石積遺構があり、西側一帯は今帰仁ムラ・親泊ムラの集落跡がある。ハンタ道はこれらの集落遺跡を南北に縦断するの主要導線であり、今帰仁城跡及び今帰仁城跡周辺遺跡と一体となる道跡として関連付けられる。道そのものの築造年について知ることは困難だが、祭祀の際に利用するルートであること、明治～昭和初期の文献に記載されるとおり今帰仁城跡へ至る登城道である。過去に行われた発掘調査では石灰岩礫を敷設した道が埋没していることが確認されており埋蔵文化財として周知されている。明治から昭和初期の文献記録などを引用し、祭祀に利用される文化的な景観などを含めて、発掘を行わずとも現況登坂できる道そのものが文化財的な価値を有している。このことから、将来的にハンタ道を今帰仁城跡の登城道として史跡として保存されることが期待される。





第124图 今归仁城迹周边地形图 (1/2,000)



第10節 今泊の伝統的集落

所在地：今帰仁村字今泊3117
番地・ほか

小字名：親泊原・今帰仁原
立地(標高)：微高地(約3～5m)
区分：集落

現状：宅地・畑・道路

保存状況：近年道路舗装や排水溝・水道の埋設、フクギ並木の伐木、住宅の新築など景観が変わりつつあるが、街区は良好な状態で保全されている。

大字今泊の親泊原及び今帰仁原は標高3～5mの砂丘地にあつて、北側を海に面している。ここには現今泊集落が立地している。集落の南側は石灰岩小丘陵があつて、散在的な集落となるが、砂丘地は特にフクギ並木が発達し街区が格子状に整然としているのが特徴的である。親泊原の現在(平成18年12月今泊公民館教示)の戸数は134戸、今帰仁原の戸数は74戸

である。第5・6節で紹介したように地下にもその前身の集落遺跡が包蔵されている。このような状況を高橋誠一氏は、現今泊集落は街割りなどを含めた街区と、伝統的な集落景観が良好に残されており、その景観を含めて「生きた遺跡」といっても過言ではないと指摘する(2006年高橋私信)。今後は「地下の遺跡」と「地上の景観」の両者の価値を評価し、またどのような保存方策をとり、その価値再生のための復元的整備を行うのか議論を深めていくことが重要である。しかし当該地域は、住宅密集地域であることから、地元住民の主体的な取り組みによる保護策が最も望まれる形である。

集落内は現在親泊原(1～5・12～16班)、今帰仁原(6～11班)の班によって編制されているが、伝統的にはイリンバーリ、アガリンバーイ、アランジョウバーイなどの「バーリ(バーイ)」の呼称で集落を区分していた。なお、イリは西、アガリは東、アランジョウはアダン(植物の名称)の門(方言でジョー)の意味をもっている。

今帰仁原は西側にあり概ねイリンバーイと呼ばれている。合併以前の公民館(ムラヤー)が今帰仁原124番地にあつて、現在は空屋となっている。拝所として阿応理屋恵御殿があつて屋敷地の一画に小さな祠が所在するのみである。祠内には位牌が安置されており、この位牌そのものも古い形式のもので、貴重な文化財である。神アサギは3134番地の方にあつて親泊原の地域に所在する形となっている。街区と道路を詳細に観察すると親泊原に比較して今帰仁原の集落街区が比較的整然としており、例えば69番地から101番地一帯の土地は一筆の面積が広く



第125図 今泊の伝統的集落位置図

なっているのが特徴である。またその一方で南東側にあたる、145番地から151番地一帯の筆は南北に長い土地で、門扉を南側に有する典型的な横一列型の配置となる事例となっている。

親泊原は、集落全体の東側であって、現今泊公民館の所在する地域を中心に神アサギなどの祭祀施設が点在している。今帰仁ムラとの合併によって地番に3000を付しているため、地番によって若い地番を今帰仁、3000以上の地番を親泊としてその別を確認することが可能である。さて、主な祭祀施設として3313番地の今帰仁ノロ殿内があり、その北側の3311番地が供のフネノロ家の家となる。また、現今泊公民館に隣接する3120番地には獅子屋が所在していたが、現在では移設され3132番地にある。公民館の南側は大道（プウミチ）となっていて旧馬場である。親泊原の集落配置については、坂本（1997）によって詳しい地図が作製されている（第127・128図）。集落全体としては北側の3082番地から3084一帯では田の字型、方格の地割りが優勢になるようであるが、大道を堺にした南側の3141番地から3145番地一帯は縦長の筆が大通りに面して配される。坂本によれば民家の向きは南とその両隣の方位がほとんどで、集落中央の東西大通り（プウミチ）に関しては、東よりの向きが連続するが、これについては、いわゆる背面入り忌避によるものであるとする。また、19戸ある左一番座は集落内の分布状況からほとんどが隣家との関係に基づくものと考えられるとされる。

以上のように、今泊集落の伝統的な集落景観を構成する要素は①街区、②街路、③屋敷林、④建築物、⑤拝所・祭祀施設、⑥井戸等があげられる。このような今泊の集落景観を構成する諸要素は景観復元を行うことで、観光産業につなげられる可能性（国建2003・ほか）があるが、その価値を損耗することなく復元することが肝要である。一方で集落の成因である各戸・各家についてもその詳細を把握することが重要で、旧ムラ跡との関係を考える資料になると考えられる。例えば、①各戸（あるいは門中）の構成、②各戸（あるいは門中）の役割や出自あるいは



第126図 今泊の伝統的集落地形地籍併合図

は個人史、③各門中出自の神人及び神役、④各戸（あるいは門中）における年中祭祀の具体的内容と参拝箇所、墓の所在などを調査することが、集落を理解する上では必要不可欠となる。城下の旧ムラから現集落への移動は集落集団という塊で移動したように表現されているが、個別の門中の出自や本家、取り組む祭祀や参拝箇所、あるいは墓の所在などを調べ各戸各門中の土地との繋がりを重視し、史的復元を行うことで、より具体的な集落移動の実態を掴むことができる可能性を有していると考えられる。また、史跡の復元においては、史跡空間を構築する情景は来訪者にとって史跡の理解を深める上で重要な要素となるが、今泊一帯はこのような情景展示を行うことが可能な文化的な景観や伝統が多く残っており、情景展示を含めた歴史的景観の復元的整備を行うことのできる地域と言える。

《参考文献》

坂本磐雄 1997年『沖縄の集落景観』九州大学出版会
 国建（編） 2003年『沖縄の歴史的集落景観（マーヴィ等）整備に関する調査 報告書』沖縄総合事務局



第127図 今泊の民家構造と屋敷地図（坂本1997）



第128図 今泊の民家の向き、門の位置、左一番座、施設の分布（坂本1997）

第11節 その他

所在地：今帰仁村字今泊地内

区分：拝所・古墓・伝説遺跡、生産跡

現状：宅地・畑・道路

保存状況：個別の資産によって異なるが、いずれも概ね良好な状態で保全されている。

これまで紹介してきた埋蔵文化財を主体とした文化財以外にも、「拝所」や「近世墓」「伝説上登場する土地や石」など、今帰仁城跡周辺には今帰仁城を取りまく、あるいは今泊集落と関わりの深い土地が存在する。

拝所については、先の報告書（宮城2005）で触れたとおりである。集落や各門中によって参拝される主な拝所は第129図のとおりである。また、この参拝施設は、集落やそれぞれの門中によって決まった参拝ルートがある。このためそれぞれ参拝方法や由来、伝承される内容については異なると考えるが、基本的には『今泊誌』（1994）に従って拝所、墓、伝説に登場する土地などについて記していきたい。

（1） 拝所・御嶽

今帰仁城跡周辺には字今泊及び各門中が参拝する拝所が多数存在する。ここでは主要な25の参拝地点を紹介する。

①今帰仁城跡里主の火之神（または今帰仁里主所火の神） 本丸の根所（旧宅地）の火の神として崇められる。今帰仁按司一族のほか城下のシマの神人たちの拝所でもある。

②ティンチヂ・アマチヂ（城内上の御嶽、今帰仁カナヒヤブの御イベ）『琉球国由来記』には神名「テンツギノカナヒヤブノ御イベ」として登場する。正殿跡の北、御内原にある石垣に囲まれた霊石。今帰仁城の守護神として崇められるイビガナシ。

③城跡内のハサギ跡（城アサギ）『琉球国由来記』には「今帰仁城内神アシアゲ」とある。大庭の北側にあったとされるハサギ跡で現在でも重要な祭祀の場となっていて、香炉が設置される。また、当地を訪れた鎌倉芳太郎は「グスクアシアギ」として記している。

④カラウカー むかし魚を飼った池の跡、あるいは城主一族の女性が顔を洗う場所だったという言い伝えのある拝所。

⑤ソイツギの御嶽（城内下の御嶽）『琉球国由来記』に登場する「ソイツギのイシズ御イベ」という名の神を鎮守し、五穀豊穰を祈願する拝所。

⑥サカンケーの拝所 「サカンケー」は「参詣」もしくは「坂迎え」という意味と解され、南西方向にあるクバヌ御嶽を遙拝するための香炉がある。

⑦レコーラウーニ 旧暦七月に行われるウンジャミ（海神祭）で、五穀豊穰や航海の安全を祈願する場所。船をかたどった細長い二つのマウンド（ウーニ）はそれぞれ今帰仁ウーニ、本部ウーニと呼ばれる。

⑧フィドンチ（古宇利殿内） 旧暦八月にフィ（古宇利）の人びとが参拝する場所。古宇利島への御通し（遙拝）をする場所でもある。現在は火の神の石と香炉が三つずつ祀られている。また、現在コンクリート造りであるが、かつては石積み壁で赤瓦の屋根であった。

⑨今帰仁ノ口火の神 城跡正門からおよそ50メートルほど北東の方向に広がる平地の中に建つ祠。この地域一帯は、かつての今帰仁ノロの住居跡であった。祠内には火の神の石と香炉がそれぞれ四つずつ祀られている。祠は現在コンクリートの壁にセメント瓦が葺かれるが、昭和

30年代に撮影された写真には木造柱建ちの板壁、屋根は茅葺きであった。

⑩供のかねノ口火の神（トゥムヌハーニ） 今帰仁ノ口火の神とともに「今帰仁上り」の重要な拝所の一つ。供のかねノ口は今帰仁ノ口の次に位置する役職で、公事の祭祀にはそのお供の役として参加した。祠内には石と香炉が一個ずつ祀られている。祠はコンクリートの壁にセメント瓦が葺かれるが、昭和30年代頃に撮影された写真では柱建ちの茅葺きであった。

⑪阿応理屋恵ノ口火の神（オーレー御殿火の神） 中には香炉十三個と火の神を象徴する石が十三個置かれている。大祖・尚円王生誕地の伊是名島や、国頭宜名真御殿へのお通しも行われ、県内各地からの参拝者が多い。祠は現在セメント瓦が葺かれているが、かつては赤瓦屋根であった。また、祠内には「依?得福」の扁額がかかっていたが、行方不明となっている。

⑫仲原門中の拝所（ハタイ原のガマー） 仲原（ナカバル）門中が拝む拝所で、今泊区のキジローヤー・ナカバルヤー門中（諸喜田、仲原）が中心となって執り行う祭祀のみに登場する拝所である。由来や伝承されている内容については不明な点も多いが、近くで畑をしていた時に洞穴に馬が落ち、その後備瀬崎から馬は出てきたとされる。その馬は後に首里へ献上されたと伝えられる。伝承の真偽は別としても興味深い話である。

⑬クバの御嶽（ウガミー・クボウヌ御嶽、クバヌ御嶽） 今帰仁城南にある雄大な嶺が連なった山をさす。琉球開闢の神々が天降りした尊厳な御嶽で、字今泊では年に二回「ウプウガン」が行われる。頂上には、神が天降りする「イビ」という座があり、男子禁制である。主な斎場はその中腹にあり、上・中・下の三段の座が設けられている。『琉球国由来記』には神名「ワカツカサノ御イベ」として登場する。

⑭プトウキヌイヒヤ クバヌ御嶽の中腹にある洞穴で、プトウキヌイヒヤとは「解きの岩屋」という意と解される。子宝の授かる拝所として現在も中南部・那覇方面からの参拝者も後を絶たない。

⑮ハタイ原（アタイ原）ウーニ 今泊慰霊塔前の旧道を登る途中のはずれにある二つの大きな石で、船型にくぼんでいる。ウンジャミ当日、最初に拝む場所であり、北西の方向に今泊のシバンティナの海岸を望むことができる。

⑯ティラ（パンタのティラー） 今泊区の祭祀の場所で、主に麦稻穂御願（ウマチー）の御願が行われる。洞穴内には石像が安置されているという。

⑰プイヌモー グスク（城）ウイミの際、城の方角に向かって神々に拝みの終了を報告する場所。

⑱ヌドゥルーチ 慶長の役（1609年）後、今帰仁城周辺から親泊村へと移住した今帰仁ノ口殿内。今帰仁ノ口は今帰仁ムラを含む三ヶムラの祭祀を司り、現在行われる祭祀の大半もここを基点とする。

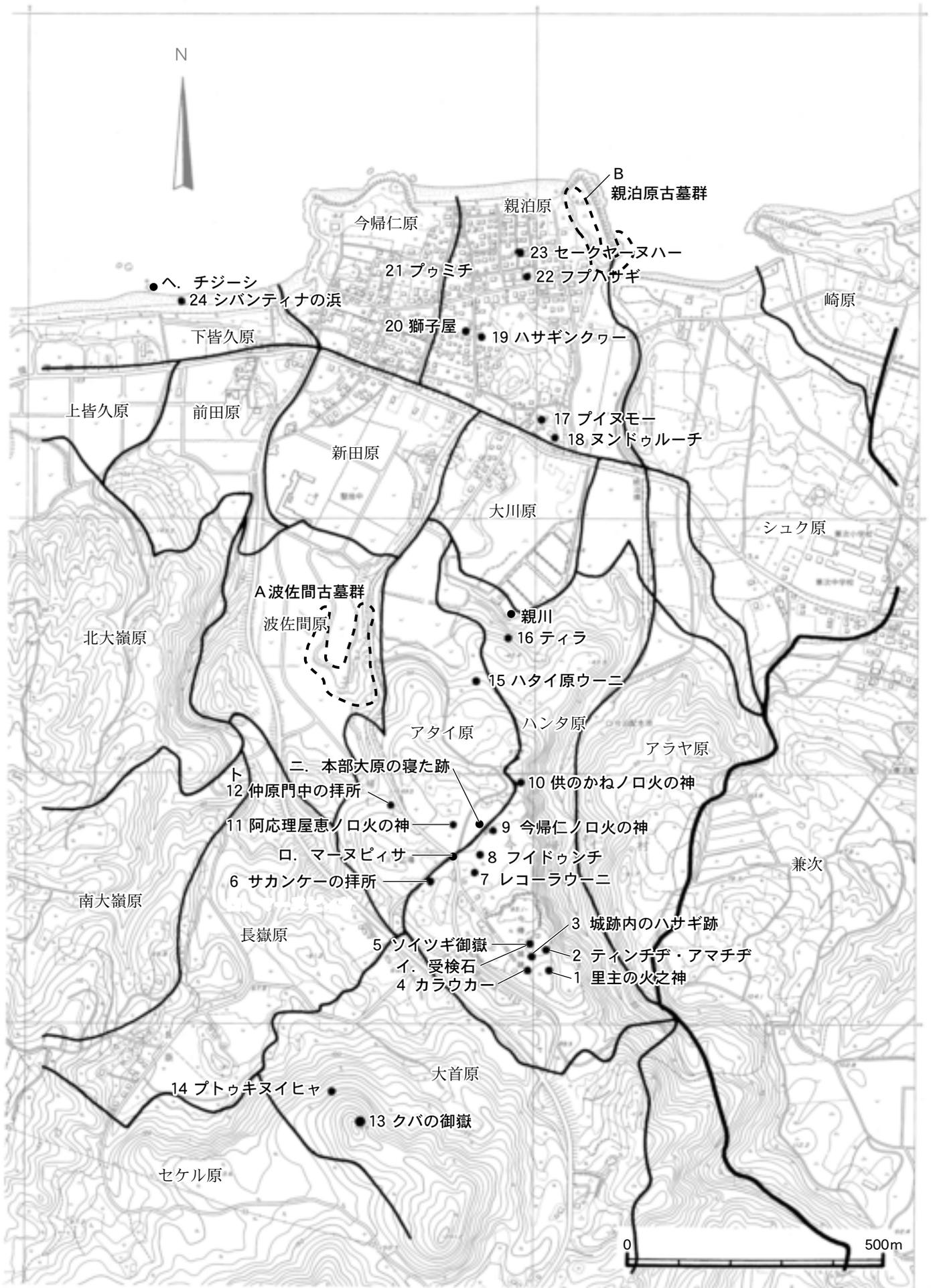
⑲ハサギンクワー（安次嶺ハサギ、今帰仁ハサギ） 現在も今泊における祭祀で利用されている、旧今帰仁ムラの神ハサギ。『琉球国由来記』には「安次嶺神アシアゲ」と記録されている。

⑳獅子屋 豊年祭や8月11日のヨーハビに登場する獅子頭を納めている祠。スクンジャヤーの前庭にあった祠が、数年前にハサギンクワー向かいの広場に移されている。

㉑プウミチ（大道） 今泊集落の中心に位置し、かつては「馬場（マーウイ）」として住民から親しまれてきた場所。中央には字の象徴でもある樹齢300~400年を数える壮大な「コバテイシ」がそびえ、現在でも豊年祭の舞台として字内外の人たちでにぎわう。

㉒フプハサギ（シマハサギ・親泊神アシアゲ） ハサギンクワーと同じく、今泊区内にある神アサギ。旧親泊ムラの神ハサギ。

㉓セークヤーヌハー 公民館近くに小さな窪みがある。ここはかつて井戸であったと伝承されており重要な参拝地となっている。現在は約直径1mの井戸がモルタルによってかたどられ



第129図 今泊区の主な拝所位置図

ている。

④シバンティナの浜 今泊区の西側に広がる浜。ウンジャミ（海神祭）の最後の祈願場所。海に向かって五穀豊穡や航海の安全を祈る。

⑤親川（エーガー） 親川は今泊区以外にも多くの門中によって参拝される湧水地点である。特に旧暦の5月5日のハーウガミ（川拝み）の時期には参拝者が多い。

（2）古墓群

今帰仁城跡周辺には多数の墓が所在している。近年シバンティナ浜に移設された墓も多数あるが、もともとは丘陵沿いの崖下や、山中もしくはクビリ周辺の古墓が利用された。各門中の墓でも移設前はこの一帯にある事例が多い。A・Bの2地点について紹介する。

A. 波佐間原古墓群 今帰仁城跡の立地する丘陵の北側斜面、波佐間原に所在する近世から近代に構築されたと考えられる墓群で、今後の調査によってはその構築年代が今帰仁グスクの機能した時代まで遡る可能性があると考えられる。波佐間原に限らず、今帰仁城跡北側の一帯の崖斜面には同様の墓が連続しているとみられ、アタイ原、ハンタ原を含めて今後詳細な分布調査が望まれる地域である。

B. 親泊原古墓群 親泊原の東側にある丘陵はキヌガンファーイ（ガッコモー）と呼ばれている。この崖にある自然あるいは掘り込まれた窪みには古い墓群が形成されている。その一つはアカン墓と呼ばれている、今帰仁城の監守をつとめた和賢（1591年死去）が葬られている。アカン墓は俗称で墓口には津屋口墓の墳墓記が建立されており、碑によれば1687年に墓の修復をしたことが記されている。なお、現代の新造の墓は、その前面の砂丘地一帯に造られている。

（3）伝説遺跡

今帰仁城跡及びその周辺地域には史実とは別に、伝説、民間伝承として語られている様々な史話が残っている。これらの史話のほとんどは、超人的な物語で非科学的なため事実とは異なると考えられる。しかしその一方で、地元では親しみをもって語られることで、語られた伝説の真実性を高める遺跡として大切にされているのもまた事実である。このためこのような遺跡を「伝説遺跡」として紹介しておきたい。

イ. 受検石 城内下の御嶽と呼ばれる、ソイツギの御嶽には、北山城落城の物語に登場する一刀を浴びた石があり、これを受検石と言って祀られていた。昭和の中頃に何者かによって持ち去られたためか、現在ではそれに代わった石が置かれているとされる。

ロ. マーヌピィサ 伝説によれば、北山王が乗った馬の馬蹄の跡とされ、王の足跡、馬鞭を付いた跡などが石灰岩に刻まれていたとされる。

二. 本部大原の寝た跡 今帰仁ノロ火之神の祠の付近に本部大原の寝た跡と伝えられる巨石がある。ちょうど大男が寝たようにくぼんでいることから、かつては村の若者達がそこに寝て身の丈を比べたりしたとされる。

ホ. 唐船田 地名として残る唐船田は中国貿易の碇泊所の伝承が残る。ここには、高さ三尺（約1m程度）の石灰岩が生えていて、これが唐船を繋ぎ止めた石であると伝わっている。戦前には唐船を繋ぎ止めた穴があったとされるが、畑主がその岩を取り除こうとして割ったため失われたとされる。

ヘ. チジーシ 巨岩が二つ重ねられたもので、伝説によれば本部大原が継いだとされる。

ト. 仲原門中の拝所 前述（1）－⑫仲原門中の拝所参照。

(4) 生産跡

前田原、新田原などの田原地名のある土地は、かつては田んぼであったとされる。宅地開発や農地改良が進みその多くが、住宅地やサトウキビ畑等にかわっている。グスク時代においても、このような旧水田地帯、旧畑地とも伝統的に農地として利用されていた物と推定される。発掘調査などがこの地域で行われていないためその実態については不明であるが、今後当該地域において生産跡の調査事例が増えることを期待したい。図版32-4は大川原一帯の畑の風景である。図版32-5はネクン原一帯に展開していた水田地帯の風景である。このような風景は昭和40年代頃までみられたとされる。

(5) まとめ

以上に示したように拝所や御嶽、あるいは古墓や伝説遺跡、畑などの生産跡について紹介してきた。古墓は近世に構築されたと考えられるが、地点によっては今帰仁グスクの生きた16世紀頃まで遡る可能性も考えられる。また生産跡とした現在も畑として利用される地域についても、発掘調査を行えば、畑跡、水田跡の検出は可能であろう。両者は今後の調査によっては埋蔵文化財包蔵地として確認していくことが課題となる。一方拝所や御嶽、あるいは伝説遺跡は過分に民俗学的要素を含む土地である。今回は土地に絡む事例のみを調査対象としているが、文献記録が少ない地方においては、古層の記憶を民俗情報に依拠する部分も多く、この点においては、遺跡周辺の民俗的環境を掘り下げていくことが必要である。

《参考文献》

新城徳祐 1973年『古代伝統の祭り・本部町具志堅のシニグ』

仲田善明 2000年「具志堅のシニグ」『本部町のシニグ』本部町の文化財第10集 本部町教育委員会

今泊 1994年『今泊誌』今帰仁村今泊

伊波普猷ほか(編) 1940年『琉球国由来記』名取書店

平敷兼仙 1936年『御案内』兼次尋常小学校

図版	No	屋敷	次	遺跡名				計測値(cm※, g) ※はmm				備考			
				地区	グリッド	層	遺構	dot/No	種別	器種時代形式	分類		器：口径他：外径長さ	器高さ厚さ	器：底径重量
12 33 1	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.12	土器	甕	後期系	-	-	6.80	
12 33 2	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.11	瓦質土器	鉢	沖繩産	-	-	-	頸部
12 33 3	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.11	青磁	碗	劃花文	-	-	-	胴部小片
12 33 4	-	0次	今帰仁ムラ跡	東区	4992番地	表採	-	No.30	青磁	碗	無文外反碗	14.80	-	-	
12 33 5	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.3	青磁	碗	無文外反碗	16.80	-	-	
12 33 6	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.12	青磁	碗	雷文帯碗	14.90	-	-	
12 33 7	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.12	青磁	碗	細蓮弁文 c	11.30	-	-	細蓮弁文碗 c
12 33 8	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.5	青磁	碗	直口	11.80	-	-	
12 33 9	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.12	青磁	碗	無文直口	12.30	-	-	
12 33 10	-	0次	今帰仁ムラ跡	東区	不明	表採	-	No.24	青磁	碗	不明	-	-	5.80	雷文or細蓮弁
12 33 11	-	0次	今帰仁ムラ跡	東2区	不明	表採	-	No.25	青磁	碗	不明	-	-	6.20	無文外反碗
13 33 12	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.9	青磁	碗	細蓮弁文	-	-	5.60	
13 33 13	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.7	青磁	碗	細蓮弁文碗	-	-	5.20	
13 33 14	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.11	青磁	碗	細蓮弁文碗	-	-	4.20	
13 33 15	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.11	青磁	碗	無文直口	-	-	4.40	見込み蛇の目 細剥ぎ
13 33 16	-	0次	今帰仁ムラ跡	東14区	不明	表採	-	No.37	青磁	皿	櫛描文	-	-	6.20	
13 33 17	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.12	青磁	皿	蓮弁口折	10.70	-	-	
13 33 18	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.11	青磁	皿	蓮弁口折	11.70	-	-	
13 33 19	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.2	青磁	皿	腰折 c	11.70	4.15	5.40	見込に印花
13 33 20	-	0次	今帰仁ムラ跡	東15区	不明	表採	-	No.29	青磁	皿	腰折 c	-	-	6.20	見込に印花
13 33 21	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.11	青磁	皿	腰折 a	13.50	-	-	内面に蓮弁文
13 33 22	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.11	青磁	皿	腰折 b	13.40	-	-	
13 33 23	-	0次	今帰仁ムラ跡	東区	4993番地	表採	-	No.30	青磁	皿	腰折 c	13.00	-	-	稜花皿
13 33 24	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.11	青磁	皿	腰折皿	-	-	5.20	腰折 c ?
13 33 25	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.11	青磁	皿	蓮弁文	-	-	6.90	龍泉系菊花皿
13 33 26	-	0次	今帰仁ムラ跡	東区	4992番地	表採	-	No.33	青磁	置物	-	-	-	3.70	底部?
13 33 27	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.12	青磁	小碗	粗製	10.40	-	-	
14 34 28	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.12	青磁	碗	粗製	16.30	-	-	直口大振り
14 34 29	-	0次	今帰仁ムラ跡	東区	不明	表採	-	-	青磁	壺	酒会壺	-	-	19.40	耕作中出土
14 34 30	-	0次	今帰仁ムラ跡	東区	不明	表採	-	-	青磁	壺	酒会壺	-	-	20.90	耕作中出土
14 34 31	-	0次	今帰仁ムラ跡	東区	4992番地	表採	-	No.33	白磁	碗	外反	15.70	-	-	森田C群
14 34 32	-	0次	アタイ原遺跡	不明	4989番地	表採	-	No.36	白磁	碗	今帰仁タイプ	15.20	-	-	
14 34 33	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.2	白磁	碗	直口	-	-	5.20	
14 34 34	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.12	白磁	皿	外反皿	-	-	7.90	森田E群
14 34 35	-	0次	今帰仁ムラ跡	東区	4992番地	表採	-	No.33	白磁	杯	筒形杯	9.60	-	-	森田E群
14 34 36	-	0次	アタイ原遺跡	ハンタ原	4989番地	表採	-	No.36	白磁	杯	直口	7.40	3.10	3.30	森田D群
14 34 37	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	no.12	白磁	壺	不明	8.10	-	-	
14 34 38	-	0次	今帰仁ムラ跡	東7区	不明	表採	-	No.28	青白磁	瓶	-	-	-	-	
15 35 39	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.2	元青花	壺	-	-	-	-	頸部小片
15 35 40	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.3	元青花	壺	不明	-	-	-	
15 35 41	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.11	青花	瓶	玉壺春瓶	-	-	-	
15 35 42	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	no.12	青花	碗	直口 a	12.50	-	-	主郭Ⅲ類
15 35 43	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.11	青花	碗	直口 a	-	-	5.10	主郭Ⅲ類
15 35 44	-	0次	今帰仁ムラ跡	東区	4992番地	表採	-	No.33	青花	碗	直口 d	-	-	5.20	主郭Ⅶ類
15 35 45	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.11	青花	碗	直口 d	-	-	4.40	主郭Ⅶ類
15 35 46	-	0次	今帰仁ムラ跡	東15区	不明	表採	-	No.29	青花	皿	外反皿	11.80	-	-	主郭分類Ⅰ類
15 35 47	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.3	青花	皿	大皿	-	-	7.80	主郭分類Ⅰ類
15 35 48	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.11	青花	皿	碁碁底	-	-	3.90	主郭分類Ⅱ類
15 35 49	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	no.12	青花	小杯	-	-	-	2.10	主郭分類Ⅰ類
15 35 50	-	0次	アタイ原遺跡	ハンタ原	4989番地	表採	-	No.36	青花	杯	直口杯 a	8.70	-	-	主郭分類Ⅰ類
16 35 51	-	0次	今帰仁ムラ跡	東14区	不明	表採	-	No.37	褐釉陶器	壺	不明	-	-	13.80	
16 35 52	-	0次	今帰仁ムラ跡	東7区	不明	表採	-	No.34	タイ陶磁 褐釉陶器	壺	大形 a	20.50	-	-	
16 35 53	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.11	タイ陶磁 褐釉陶器	壺	大形 b	18.50	-	-	
16 35 54	-	0次	今帰仁ムラ跡	東区	4992番地	表採	-	No.33	タイ陶磁 褐釉陶器	壺	大形	-	-	19.50	
16 35 55	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.12	タイ陶磁 鉄絵	合子	蓋	-	-	-	
16 35 56	-	0次	今帰仁ムラ跡	東区	4992番地	表採	-	No.30	備前焼 縮陶器	播鉢	不明	-	-	-	
16 35 57	-	0次	アタイ原遺跡	ハンタ原	4989番地	表採	-	No.36	赤絵	碗	不明	-	-	4.35	産地不詳
16 35 58	-	0次	アタイ原遺跡	ハンタ原	4789番地	表採	-	No.36	石器	硯石	提碇	-	-	-	
16 35 59	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.2	石器	硯?	-	-	-	-	
16 35 60	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.12	銭貨	南宋	嘉熙重宝	3.73	2.79	11.56	当三銭 (1237)
16 35 61	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	-	銭貨	南宋	慶元通寶	2.83	0.18	5.33	折二銭背二 (1195)
16 35 62	-	0次	アタイ原遺跡	不明	不明	表採	-	No.2	銭貨	江戸	寛永通宝	2.28	0.10	2.25	新寛永銅銭 (1668~)
21 36 1	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区 a	L-18	遺構内	S49	dot.22	土器	不明	グスク土器	-	-	10.80	底部
21 36 2	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区 a	L-18	Ⅱ	-	No.24	青磁	碗	鎗蓮弁文 a	14.40	-	-	
21 36 3	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区 a	L-18	Ⅰ	-	No.12	青磁	碗	鎗蓮弁文 a	15.50	-	-	
21 36 4	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区 a	L-18	遺構内	S104	dot.27	青磁	碗	無鎗蓮弁文 a	18.00	-	-	
21 36 5	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区 a	L-18	Ⅱ	-	No.14	青磁	碗	雷文帯 a	16.00	-	-	
21 36 6	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区 a	L-18	Ⅱ	-	No.24	青磁	碗	雷文帯 b	19.80	-	-	

付表 出土遺物観察表

遺跡名										計測値(cm※,g) ※はmm							
図版	No	屋敷	次	地区	グリッド	層	遺構	dot/No	種別	器種時代形式	分類	器:口径 他:外径 他:長さ	器高 厚さ	器重 重量	器:底径 重量	備考	
21 36 7	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	Ⅱ	-	No.14	青磁	碗	蓮弁文	12.40	-	-	-	主郭剣先蓮弁文碗	
21 36 8	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	遺構内	S12	dot.24	青磁	碗	細蓮弁文 a	13.70	-	-	-		
21 36 9	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.13	青磁	碗	細蓮弁文 c	13.40	-	-	-		
21 36 10	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	不明	不明	-	No.89	青磁	碗	波状文	14.20	-	-	-	
21 36 11	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	Ⅱ	-	No.19	青磁	碗	無文外反	15.50	-	-	-		
21 36 12	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.12	青磁	碗	無文外反	14.80	-	-	-		
21 36 13	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.11	青磁	碗	無文外反	15.10	-	-	-		
21 36 14	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	Ⅱ	-	No.19	青磁	碗	無文外反	16.40	-	-	-		
21 36 15	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.13	青磁	碗	無文直口	13.10	-	-	-		
21 36 16	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	Ⅱ	試掘トレ	No.32	青磁	碗	青緑釉無文碗	17.70	-	-	-	いわゆる泉州窯系	
21 36 17	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	-	表探	-	No.2	青磁	碗	不明	-	-	5.60	-	雷文帯 a もしくは蓮弁文碗	
22 36 18	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.13	青磁	碗	不明	-	-	4.80	-	無文直口もしくは細蓮弁文	
22 36 19	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.11	青磁	碗	不明	-	-	5.20	-	"	
22 36 20	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.11	青磁	碗	不明	-	-	5.30	-	"	
22 36 21	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	遺構内	S73	dot.21	青磁	碗	不明	-	-	5.60	-	"	
22 36 22	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	遺構内	S128	dot.26	青磁	碗	不明	-	-	4.50	-	"	
22 36 23	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	Ⅱ	試掘トレ	No.4	青磁	皿	櫛描文	-	-	-	-	もしくは同安窯系無文皿口縁部小片	
22 36 24	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	Ⅱ	-	dot.11	青磁	皿	蓮弁口折	10.90	-	-	-	口縁部	
22 36 25	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.11	青磁	皿	蓮弁口折	-	-	5.50	-	底部	
22 36 26	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	Ⅱ	-	No.14	青磁	皿	蓮弁口折	-	-	6.00	-	底部	
22 36 27	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	Ⅱ	-	No.24	青磁	皿	無文外反	12.60	-	-	-		
22 36 28	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.12	青磁	皿	無文直口	10.30	3.00	6.00	-		
22 36 29	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.10	青磁	皿	蓮弁直口 c	8.60	-	-	-		
22 36 30	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	Ⅱ	-	No.14	青磁	皿	腰折皿 c	12.50	-	-	-	稜花口縁	
22 36 31	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.12	青磁	皿	腰折皿	-	-	4.30	-	底部	
22 36 32	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.1	青磁	香炉	-	6.60	-	-	-		
22 36 33	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.1	青磁	杯	碁笥底	-	-	7.50	-		
22 36 34	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	Ⅱ	-	No.14	青磁	盤	鏝縁	21.90	-	-	-		
22 36 35	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	遺構内	S14	No.87	青磁	盤	鏝縁 a	24.60	-	-	-	試掘トレ	
22 36 36	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	遺構内	S47	dot.20	青磁	盤	不明	-	-	10.20	-	底部	
23 36 37	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.13	白磁	碗	今帰仁タイプ	-	-	-	-	口縁部小片	
23 37 38	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.13	白磁	碗	口禿	13.00	-	-	-		
23 37 39	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.12	白磁	碗	ピロースクタイプ類似	18.60	-	-	-	青磁雷文帯碗	
23 37 40	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	Ⅱ	試掘トレ	No.32	白磁	碗	直口	13.10	-	-	-		
23 37 41	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	Ⅱ	-	dot.12	白磁	杯	外反口縁	9.20	-	-	-	森田分類D群	
23 37 42	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	Ⅱ	-	No.14	白磁	皿	直口皿	9.50	-	-	-	森田分類D群	
23 37 43	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.12	白磁	皿	直口皿	-	-	4.60	-	森田分類D群	
23 37 44	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.1	白磁	皿	燈明皿	8.20	-	-	-		
23 37 45	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.13	白磁	皿	外反	-	-	6.40	-	森田分類E群	
23 37 46	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.13	白磁	杯	輪花?	-	-	4.00	-	森田分類E群	
23 37 47	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.11	青花	碗	口折碗	14.50	-	-	-	主部分類IV類	
23 37 48	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	Ⅱ	-	No.19	青花	碗	直口 b	13.10	-	-	-	主部分類V類	
23 37 49	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	Ⅱ	-	No.14	青花	碗	直口 c	-	-	5.40	-	主部分類V類	
23 37 50	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	Ⅱ	-	No.24	青花	皿	外反皿	-	-	7.40	-	主部分類I類	
23 37 51	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.10	青花	皿	外反皿	-	-	9.50	-	主部分類I類	
23 37 52	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	Ⅱ	-	No.14	褐釉陶器	壺	-	9.20	-	-	-		
23 37 53	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.13	褐釉陶器	壺	褐釉壺 d	-	-	14.00	-	底部	
23 37 54	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.34	褐釉陶器	鉢	深鉢 a	15.60	-	-	-		
23 37 55	1b	10次	今帰仁ムラ跡	西Ⅱ区a	L-18	I	-	No.11	褐釉陶器	鉢	-	-	-	8.40	-	底部	
24 56 51	1b	10次	今帰仁ムラ跡	L-18	I	-	-	No.12	鉄給	合子蓋	-	8.40	-	-	-		
24 57 68	1b	10次	今帰仁ムラ跡	L-19	Ⅱ	-	-	No.14	褐釉陶器	壺	-	-	-	13.50	-		
24 58 46	1b	10次	今帰仁ムラ跡	L-20	I	カク乱	No.33	ベトナム白磁	碗	-	-	-	-	-	-	口縁部小片	
24 59 47	1b	10次	今帰仁ムラ跡	L-21	I	-	-	No.12	象嵌青磁	碗?	-	-	-	-	-	胴部小片	
24 60 54	1b	10次	今帰仁ムラ跡	Ⅱ区a	L-22	Ⅱ	-	dot.1	玉	-	8.34	6.08	0.54	-	-	白濁(緑みあり)	
24 61 55	1b	10次	今帰仁ムラ跡	Ⅱ区a	L-23	Ⅱ	-	dot.5	玉	-	5.80	4.51	0.28	-	-	白濁	
24 62 56	1b	10次	今帰仁ムラ跡	Ⅱ区a	L-24	遺構内	S42	dot.16	玉	-	4.33	2.44	0.06	-	-	白濁	
24 63 53	1b	10次	今帰仁ムラ跡	Ⅱ区a	L-25	I	-	No.13	銭貨	-	-	-	-	3.42	-	○率通○	
24 64	1b	10次	今帰仁ムラ跡	Ⅱ区a	L-26	Ⅱ	-	dot.4	銭貨	-	-	-	-	3.34	-		
24 65 52	1b	10次	今帰仁ムラ跡	L-27	I	-	-	No.22	銅製品	-	19.47	1.42	3.20	-	-		
24 66 71	1b	10次	今帰仁ムラ跡	L-28	I	-	-	No.11	貝製品	-	-	-	-	-	-	タカラガイ	
24 67 72	1b	10次	今帰仁ムラ跡	L-29	I	-	-	No.12	貝製品	-	-	-	-	-	-	タカラガイ	
24 68 73	1b	10次	今帰仁ムラ跡	L-30	I	-	-	No.11	貝製品	-	-	-	-	-	-	タカラガイ	
24 69 74	1b	10次	今帰仁ムラ跡	L-31	I	-	-	No.13	貝製品	-	-	-	-	-	-	タカラガイ	
32 38 1	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S6	No.482	土器	甕	-	-	-	11.60	-	石撤去	
32 38 2	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-18	遺構内	S6	No.1356	青磁	碗	雷文帯 b	19.70	-	-	-		
32 38 3	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S6	dot.190	青磁	碗	雷文帯?	-	-	5.50	-	崖上石撤去	
32 38 4	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-18	遺構内	S6	dot.420	青磁	碗	細蓮弁	-	-	4.60	-	蓮弁文	
32 38 5	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S6	dot.551	青磁	碗	無文直口	-	-	4.00	-	もしくは細蓮弁	
32 38 6	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-18	遺構内	S6	dot.415	青磁	皿	不明	-	-	7.00	-		
32 38 7	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S334	No.1381	青磁	皿	不明	-	-	7.70	-		
32 38 8	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S6	No.1241	青磁	皿	腰折 c	11.50	3.00	5.50	-	-	稜花皿
32 38 9	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S6	dot.204	白磁	碗	直口碗	-	-	4.80	-	石撤去崖上	
32 38 10	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-18	遺構内	S6	dot.591	白磁	碗	不明	-	-	3.80	-	森田分類D群	
32 38 11	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S6	dot.587	青花	大皿	外反	-	-	10.80	-		
32 38 12	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S6	No.1451	褐釉陶器	壺	褐釉壺 d	-	-	13.80	-	東側	

図版	No	屋敷	次	遺跡名	地区	グリッド	層	遺構	dot/No	種別	器種時代形式	分類	計測値(cm※, g) ※はmm			備考	
													器：口径 他：外径 他：長さ	器高 厚さ 厚さ	器：底径 器：重量 重量		
32	38	13	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-18 O-20	遺構内	S6 S830	No.438 dot.475	備前焼締陶器	壺	褐釉壺 d	15.60	-	-	
33	38	14	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-18	遺構内	S6	dot.342	備前焼締陶器	挿鉢		31.40	-	-	
33	38	15	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-18	遺構内	S6	dot.564	煙管	雁首	陶器転用	3.12	2.34	14.96	
33	38	16	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-18	遺構内	S6	No.1389	遊具	褐釉	円盤状製品	3.03	0.57	6.38	西側あぜ
33	38	17	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S6	dot.577	石器	砥石		7.99	3.57	126.14	
33	38	18	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S6	dot.535	石器	砥石		9.78	4.82	251.79	
33	38	19	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-18	遺構内	S6	No.1321	石器	砥石		8.33	5.48	650	
33	38	20	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-18	遺構内	S6	No.438	金属製品	鉄製	ノミ状製品	13.67	2.02	42.49	客土除去崖下
35	39	1	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	遺構内	S5	No.967	青磁	碗	有文外反	17.80	-	-	
35	39	2	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	遺構内	S5	dot.449	青磁	碗	雷文帯 b	-	-	6.60	
35	39	3	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	遺構内	S5	dot.537	青磁	碗	細蓮弁 b	-	-	5.00	
35	39	4	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	遺構内	S5	dot.461	青磁	碗	細蓮弁?	-	-	5.80	
35	39	5	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	遺構内	S5	dot.43 dot.45	青磁	皿	無文外反	-	-	7.10	
35	39	6	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	遺構内	S5	No.970	白磁	皿	直口皿	7.30	1.60	4.00	森田分類D群
35	39	7	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	遺構内	S5	dot.98	白磁	皿	小皿	7.00	2.25	3.40	
35	39	8	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	遺構内	S5	No.244	青花	碗	直口	-	-	-	主部分類VII類
35	39	9	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	遺構内	S5	dot.490	青花	碗	直口	14.20	-	-	主部分類VII類
35	39	10	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	遺構内	S5	No.967	褐釉陶器	壺		9.00	-	-	
35	39	11	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	遺構内	S5	dot.486	褐釉陶器	壺		12.40	-	-	
35	39	12	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	遺構内	S5	dot.276	褐釉陶器	壺		-	-	13.20	
35	39	13	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	遺構内	S5	No.399	タイ陶磁 褐釉陶器	壺	大型壺 a	15.80	-	-	
35	39	14	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	遺構内	S5	No.243 dot.37	タイ陶磁 褐釉陶器	壺		-	-	11.00	底部
35	39	15	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	遺構内	S5	dot.277	玉	丸玉	Ⅲb2	8.68	6.43	0.56	黒色
36	39	1	2c	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19 O-20	遺構内	S4	dot.508 No.5	青磁	碗	細蓮弁 b	14.20	-	-	
36	39	2	2c	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	遺構内	S4	dot.53	青花	碗	直口 a	-	-	5.50	主部分類Ⅲ類
36	39	3	2c	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	遺構内	S4	dot.47	青花	碗	口折	-	-	5.80	主部分類Ⅳ類
36	39	4	2c	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	遺構内	S4	dot.58	白磁	皿	口縁部	12.40	-	-	森田分類E群
36	39	5	2c	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19 N-20	遺構内	S4	No.472 No.65	褐釉陶器	壺	口縁部	10.20	-	-	
40	40	1	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.411	青磁	碗	無文外反	15.40	7.35	6.50	
40	40	2	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.248 dot.279	青磁	碗	無文外反	16.20	-	-	
40	40	3	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.230 dot.231 dot.853 dot.360	青磁	碗	無文外反	16.20	-	-	
40	40	4	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.383	青磁	碗	無文外反	-	-	5.70	
40	40	5	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20,19 N-20 N-19 O-19	遺構内	S300	No.1443 No.73 No.144 No.233	青磁	小碗	細蓮弁集	7.70	5.30	3.60	1次今周Ⅱ区 6GPIt落ち込(既 報告村12集13 図-14)接合
40	40	6	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.363	青磁	皿	口折	12.80	-	-	
40	40	7	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.258 dot.245 dot.386	青磁	皿	腰折 d	13.10	4.50	7.60	接合N-19 S300 炭層dot.207)
40	40	8	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.345 dot.314	青磁	皿	無文外反	11.90	3.30	6.90	
40	40	9	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.403	青磁	小杯		-	-	3.40	
40	40	10	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19 N-19	遺構内	S300 S1077	dot.409 dot.594	青磁	盤	鈔縁盤	26.50	-	-	
41	41	11	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.220	白磁	碗	外反碗	-	-	5.50	
41	41	12	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.233	白磁	杯	外反杯	7.80	-	-	
41	41	13	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.232	白磁	杯		-	-	4.10	
41	41	14	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.234	白磁	杯	八角杯	7.80	-	-	
41	41	15	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	No.642 dot.40 dot.246 ほか	無釉陶器	鉢		18.90	17.60	9.40	炭層(Ⅱ層) 出土No.914, dot.263
41	41	16	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	No.483	ベトナム青花	染付碗	胴部	-	-	-	
41	41	17	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.293	玉	勾玉		13.49	5.59	0.84	ガラス製
41	41	18	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	遺構内	S300	dot.352	遊具	石製	円盤状製品	4.31	1.30	38.40	
41	41	19	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	No.335	遊具	石製	円盤状製品	1.24	0.44	0.99	
41	41	20	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.395	金属製品	鉄製	刀子	13.95	0.53	51.54	
41	41	21	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.324	金属製品	鉄製	釘	6.57	1.14	13.55	
42	42	22	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.211	銭貨	北宋	元豊通寶	3.02	0.17	6.29	折二銭(1103)
42	42	23	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.329	銭貨	北宋	元祐通寶	2.96	0.21	7.21	折二銭(1093)
42	42	24	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.252	銭貨	北宋	崇寧重寶	3.51	0.19	8.91	当十銭(1103)
42	42	25	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.410	銭貨	北宋	崇寧通寶	3.49	0.26	9.54	当十銭(1102)
42	42	26	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	No.304	銭貨	南宋	嘉泰通寶	3.50	0.23	8.97	当三銭(1201)
42	42	27	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.209	銭貨		紹定通寶	2.97	0.20	6.76	折二銭(1228) 背文字「三」
42	42	28	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.362	銭貨		元口口口	3.13	0.17	8.09	元豊通寶?
42	42	29	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.374	銭貨	明	洪武通寶	2.14	0.20	3.56	1368年背文 字「一銭」?
42	42	30	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.319	銭貨	明	洪武通寶	2.10	0.22	3.25	1368年背文 字「一銭」?
42	42	31	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.355	銭貨	明	洪武通寶	2.17	0.18	2.97	1368年
42	42	32	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.315	銭貨	明	洪武通寶	2.20	0.19	2.60	1368年
42	42	33	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	No.320	銭貨	明	洪武通寶	2.40	0.14	2.87	1368年
42	42	34	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.327	銭貨	明	洪武通寶	2.37	0.21	3.35	1368年
42	42	35	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	遺構内	Ⅱ	dot.181	銭貨	明	洪武通寶	2.39	0.18	3.50	1368年

遺跡名										計測値(cm※,g) ※はmm							
図版	No	屋敷	次	地区	グリッド	層	遺構	dot/No	種別	器種時代形式	分類	器：口径 他：外径 他：長さ	器高 厚さ	器重量	口径 重量	備考	
48	41	2a	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	遺構内	S2		褐釉陶器	壺	褐釉壺d	19.30	—	—	O-20 S2一括	
48	41	2a	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	遺構内	S2		褐釉陶器	壺	褐釉壺d	—	—	16.50	O-20 S2一括	
52	43	1	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	II	No.363	土器	壺	グスク土器	12.40	—	—	もしくは壺?	
52	43	2	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S765	dot.451	土器	壺	グスク土器	9.40	—	—	
52	43	3	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S572	No.1105	土器	鍋	グスク土器	—	—	もしくは碗	
52	43	4	2c	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	II	dot.244	土器	碗	グスク土器	—	—	—	もしくは鍋	
52	43	5	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	II	dot.555	土器	ミニチュア	グスク土器	—	—	2.00	※注記不明もしくはdot.585	
52	43	6	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-18	II	dot.561	土器	不明	グスク土器	—	—	13.75		
52	43	7	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	II	dot.431	土器	不明	グスク土器	—	—	6.90		
52	43	8	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	遺構内	S783	dot.432	土器	不明	グスク土器	—	—	11.60	
52	43	9	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	II	No.22	土器	不明	グスク土器	—	—	10.90		
52	43	10	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	—	—	No.1329	土器	鉢?	瓦質土器	—	—	—	捨土	
52	43	11	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	遺構内	S392	dot.290	カマイヤキ	不明	胴部	—	—	—	
52	43	12	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S751	dot.470	カマイヤキ	壺	頸胴部	—	—	—	
53	43	13	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	II	No.78	青磁	碗	劃花文	16.00	—	—	—	
53	43	14	2a	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	P-20	I	No.38	青磁	碗	劃花文	—	—	5.95	—	
53	43	15	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-18	II	dot.442	青磁	碗	劃花文	—	—	6.20	—	
53	43	16	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	II	dot.434	青磁	碗	鎗蓮弁文 b	14.80	—	—	—	
					西Ⅲ区b	N-19	I	—	No.69								
					西Ⅲ区b	O-19	II	—	No.96								
53	43	17	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	—	—	No.61	青磁	碗	唐草刻文	12.60	—	—	—	
					西Ⅲ区b	—	—	—	—								
					西Ⅲ区b	—	—	—	—								
					西Ⅲ区b	—	—	—	—								
53	43	18	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	遺構内	S85	dot.104	青磁	碗	無文外反	15.00	—	—	
53	43	19	2a	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	遺構内	S250	dot.203	青磁	碗	無文外反	15.00	—	—	
					西Ⅲ区b	N-20	遺構内	S343	dot.76								
53	43	20	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	I	No.73	青磁	碗	無文直口	14.90	5.22	5.70	—	
					西Ⅲ区b	M-20	I	—	No.642								
53	43	21	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	—	dot.102	青磁	碗	無文直口	13.70	—	—	—	
53	43	22	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S1035	dot.583	青磁	碗	無文直口	13.80	—	—	付着物あり
53	43	23	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	—	dot.9	青磁	碗	雷文帯 a	15.10	—	—	—	
53	43	24	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	II	No.1047	青磁	碗	雷文帯 a	16.00	—	—	ヘラ	
					西Ⅲ区b	O-19	I	—	No.31								
					西Ⅲ区b	O-19	I	—	No.47	青磁	碗	雷文帯 a	15.80	—	—	—	
					西Ⅲ区b	N-19	II	—	No.179								
53	43	26	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S523	dot.303	青磁	碗	雷文帯 b	17.20	—	—	—
54	44	27	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	I	No.23	青磁	碗	—	—	—	5.50	連弁文もしくは雷文帯 a	
54	44	28	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-18	遺構内	S1066	dot.586	青磁	碗	—	—	—	6.00	連弁文もしくは雷文帯 a
					西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S1097	No.1417								
54	44	29	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	遺構内	S593	dot.358	青磁	碗	—	—	—	5.70	連弁文もしくは雷文帯 a
54	44	30	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	—	dot.578	青磁	碗	無文外反?	—	—	—	6.10	北側落ち込み
54	44	31	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	遺構内	S552	dot.154	青磁	碗	無文外反?	—	—	—	6.30
54	44	32	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S563	No.943	青磁	碗	細蓮弁 b	14.60	—	—	—
					西Ⅲ区b	N-19	II	—	dot.376								
54	44	33	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S1053	dot.579	青磁	碗	細蓮弁 b	14.70	—	—	蓮弁文
54	44	34	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	遺構内	S363	No.742	青磁	碗	細蓮弁 b	12.70	—	—	蓮弁文、粗製品
54	44	35	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	遺構内	S2	dot.15 dot.26 dot.25	青磁	碗	細蓮弁 b	14.20	—	—	N-20 II層
54	44	36	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	遺構内	S857	dot.484	青磁	碗	細蓮弁 b	13.00	—	—	—
54	44	37	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	II	dot.86	青磁	碗	細蓮弁	—	—	—	5.00	
54	44	38	2a	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	P-20	I	No.15	青磁	碗	細蓮弁	—	—	—	5.50	
54	44	39	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S908	dot.534	青磁	碗	細蓮弁	—	—	—	5.40
54	44	40	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	II	dot.84	青磁	碗	細蓮弁	—	—	—	5.50	
54	44	41	2a	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	P-20	遺構内	S271	dot.178	青磁	碗	細蓮弁	—	—	—	5.00
55	44	42	2a	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	P-20	遺構内	S28	No.469	青磁	皿	櫛描文	11.40	1.91	7.00	—
					西Ⅲ区b	O-19	II	—	No.83								
55	44	43	2a	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	P-20	遺構内	S824	dot.479	青磁	皿	櫛描文	—	—	—	4.20
55	44	44	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	I	試掘トレ	No.24	青磁	皿	蓮弁口折	—	—	—	6.80	
55	44	45	2a	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	P-20	I	No.41	青磁	皿	蓮弁直口	11.20	—	—	—	
55	44	46	2a	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	遺構内	—	dot.164	青磁	皿	蓮弁直口	8.10	—	—	—
55	44	47	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S1035	No.951	青磁	皿	腰折 d	11.60	3.30	6.30	—
					西Ⅲ区b	O-18	II	—	No.91								
55	44	48	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-18	II	dot.571	青磁	皿	腰折 d	11.40	3.40	6.20	—	
					西Ⅲ区b	—	—	—	No.28								
55	44	49	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S571	dot.346	青磁	皿	腰折 b	12.30	—	—	—
55	44	50	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	I	No.711 No.712	青磁	皿	腰折 c	13.80	3.10	5.90	稜花皿	
55	44	51	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	—	—	No.1076	青磁	皿	腰折 c	11.60	2.80	4.40	捨土 稜花皿	
55	44	52	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	II	dot.81	青磁	皿	腰折 c	10.80	2.50	4.40	稜花皿	
55	44	53	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S1064	dot.593	青磁	盤	鈔縁盤 b	23.80	—	—	—
55	44	54	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	II	dot.501	青磁	盤	鈔縁盤	—	—	—	9.20	
					西Ⅲ区b	N-20	遺構内	S5	dot.33								
					西Ⅲ区b	O-20	I	—	No.11	青磁	盤	鈔縁盤	—	—	—	8.30	
					西Ⅲ区b	N-20	I	—	No.65								
55	44	56	2a	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	I	No.130	青磁	香炉	—	14.60	—	—	口縁部小片	
					西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S523	dot.373								
					西Ⅲ区b	N-19	—	—	dot.127								
55	44	57	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	遺構内	S461	dot.304	青磁	水注	胴から底部	—	—	3.60	10次今周L-18 I層No.11
					西Ⅲ区b	O-19	II	—	No.1041								
56	45	58	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S523	dot.378	白磁	碗	口禿	—	—	4.15	—
56	45	59	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	II	No.84	白磁	碗	今帰仁タイプ	15.40	—	—	—	
56	45	60	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	II	No.103	白磁	碗	今帰仁タイプ	—	—	—	5.80	
56	45	61	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	遺構内	S937	dot.539	白磁	碗	ピロースク b	15.20	—	—	—
56	45	62	2a	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	遺構内	S251								

図版	No.	屋敷	次	遺跡名				計測値(cm※, g) ※はmm					備考		
				地区	グリッド	層	遺構	dot/No	種別	器種時代形式	分類	器：口径他：外径長さ		器高さ厚さ	器重量
56 45 63	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	Ⅱ	—	dot.326	白磁	碗	外反碗	16.20	—	—	
56 45 64	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	Ⅱ	—	No.174	白磁	碗	外反碗	18.40	—	—	
56 45 65	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	Ⅱ	—	dot.329	白磁	碗	外反碗	—	—	5.90	
56 45 66	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	P-20	I	—	No.40	白磁	碗	直口碗	13.80	—	—	
56 45 67	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	遺構内	S886	dot.518	白磁	碗	直口碗	14.90	5.65	5.60	
56 45 68	2	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	Ⅱ	—	No.85	白磁	碗	直口碗	—	—	4.80	
56 45 69	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	遺構内	S400	dot.64	白磁	碗	直口碗	—	—	5.00	旧S260-19.Ⅱ層No84と接合
56 45 70	2	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	—	I	—	—	白磁	皿	直口皿	6.80	1.59	3.00	森田分類D群
56 45 71	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	Ⅱ	—	No.20	白磁	皿	直口皿	11.30	—	—	森田分類D群 試掘トレ
56 45 72	2	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	—	遺構内	—	No.906	白磁	杯	不明	—	—	3.65	森田分類D群 捨土
56 45 73	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	I	—	No.74	白磁	杯	腰折	7.50	—	—	森田分類D群
56 45 74	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	遺構内	S248	No.444	白磁	杯	腰折	8.60	—	—	森田分類D群
56 45 75	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	Ⅱ	S54	No.330	白磁	杯	直口	6.83	3.85	2.90	※同一個体として図化
56 45 76	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	I	—	No.114	白磁	皿	外反皿	10.90	2.10	6.30	※畳付に砂粒付着、畳付以外全面施釉
56 45 77	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	遺構内	S652	dot.937	白磁	皿	外反皿	15.00	—	—	森田分類E群
56 45 78	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	P-20	遺構内	S295	No.1433	白磁	皿	外反皿	14.00	—	—	森田分類E群
56 45 79	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	遺構内	S461	dot.304	白磁	碗	外反皿	14.50	—	—	森田分類E群
56 45 80	2	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	—	I	—	—	白磁	皿	型造り?	8.80	—	—	森田分類E群
56 45 81	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	I	—	No.55	白磁	皿	菊花皿	7.50	—	—	森田分類E群
56 45 82	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	Ⅱ	—	No.124	白磁	杯	—	7.70	—	—	森田分類E群
56 45 83	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19 O-19	遺構内Ⅱ	S468	No.829 No.91	白磁	杯	口縁部	6.80	4.00	3.00	森田分類E群
56 45 84	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N.O-19	遺構内	S461	dot.307	白磁	皿	燈明皿	8.60	2.20	4.60	口唇部にすずが付着
57 45 85	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19 N-20	Ⅱ I	—	No.90 No.74	青花	碗	外反碗	17.30	—	—	主部分類Ⅱ類
57 45 86	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	Ⅱ	—	No.280	青花	碗	外反碗	—	—	—	主部分類Ⅱ類
57 45 87	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O・P-20 P-20	遺構内 遺構内	S141 S221	No.544 dot.151	青花	碗	直口 a	14.80	—	—	主部分類Ⅲ類
57 45 88	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	P-20	Ⅱ	—	dot.227	青花	碗	直口 a	12.80	—	—	主部分類Ⅲ類
57 45 89	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S124	dot.107	青花	碗	直口 a	14.80	—	—	主部分類Ⅲ類
57 45 90	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O・P-20	遺構内	S322	dot.250	青花	碗	直口 a	—	—	5.20	主部分類Ⅲ類
57 45 91	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19 O-19	遺構内 Ⅱ	S799	dot.458 No.94	青花	碗	直口 a	—	—	5.00	主部分類Ⅲ類
57 45 92	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19 P-20	遺構内 —	S824	dot.462 No.592	青花	碗	口折	15.50	—	—	主部分類Ⅳ類
57 45 93	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	I	—	No.24	青花	碗	直口 b	11.70	—	—	主部分類Ⅴ類
57 45 94	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O・P-20	Ⅱ	—	No.436	青花	碗	直口 b	14.70	—	—	主部分類Ⅴ類
57 45 95	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O・P-20 O-19	— I	— —	dot.208 No.48	青花	碗	直口 b	—	—	6.00	主部分類Ⅴ類
57 45 96	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20 N-19	I I	— —	No.23 No.10	青花	碗	直口 b	—	—	5.70	試トレN-19.Ⅱ層No.110も接合
57 45 97	2	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	I	—	No.87	青花	碗	直口 d	—	—	4.75	主部分類Ⅵ類
57 45 98	2	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	I	—	No.123	青花	碗	不明	—	—	5.80	粗製青花
58 46 99	2	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	—	表探	—	No.37	青花	皿	外反皿 a	12.90	3.20	8.10	主部分類Ⅰ類
58 46 100	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O・P-20 P-20	遺構内 遺構内	S323 S322	dot.270 dot.250	青花	皿	外反皿 a	11.40	2.55	6.60	主部分類Ⅰ類
58 46 101	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20 O-19	I Ⅱ	— —	No.24 No.88	青花	皿	外反皿 a	9.30	2.20	5.00	主部分類Ⅰ類 試掘トレ
58 46 102	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	I	—	No.58	青花	皿	外反皿a完形	9.00	2.15	4.20	主部分類Ⅰ類
58 46 103	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19 O-19	Ⅱ Ⅱ	— —	dot.130 No.403 No.91	青花	皿	碁筭底皿 a	11.60	2.60	3.60	主部分類Ⅱ類
58 46 104	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	P-20	遺構内	S319	dot.236	青花	皿	碁筭底皿 a	—	—	2.90	主部分類Ⅱ類
58 46 105	2	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	Ⅱ	—	No.85	青花	皿	碁筭底皿 b	—	—	4.30	主部分類Ⅱ類
58 46 106	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	I	—	No.65	青花	皿	碁筭底皿	7.40	1.70	3.40	端反り
58 46 107	2	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	I	—	No.44	青花	皿	—	9.80	2.40	5.70	主部分類Ⅲ類
58 46 108	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	I	—	No.64	青花	大皿	不明	—	—	10.10	
58 46 109	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	P-19	I	—	No.117	青花	皿?	不明	—	—	—	粗製品 底部
58 46 110	2	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	—	I	—	—	青花	小皿	不明	—	—	—	輪花口縁小片
58 46 111	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	I	—	No.423	青花	杯	直口杯 a	8.40	—	—	主部分類Ⅰ類
58 46 112	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	P-20	I	—	No.38	青花	小杯	—	5.40	—	—	主部分類Ⅱ類
58 46 113	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	—	—	dot.101	青花	小杯	不明	—	—	2.75	
58 46 114	2	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19 —	I I	— —	No.47	青花	杯	高足杯	—	—	—	
58 46 115	2	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	Ⅱ	—	No.95	青花	瓶	—	—	—	6.50	
59 46 116	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	Ⅱ	—	No.624	青花	瓶	—	—	—	7.30	
59 46 117	2	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	Ⅱ 20-30	—	No.8	青花	香炉	三足香炉?	—	—	—	
59 46 118	2	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	Ⅱ	—	No.84	青花	蓋	—	5.90	—	—	
59 46 119	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	I	—	No.65	青花	蓋?	—	4.60	—	—	1次外郭R-25 I層No.104接合
59 46 120	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	遺構内	S2	dot.26/2 5/15	褐釉陶器	壺	褐釉壺d	19.70	—	—	O-20S2一括
59 46 121	2	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	Ⅱ	—	No.83	褐釉陶器	急須	急須 c	17.00	—	—	注ぎ口部分
59 46 122	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	遺構内	S24	dot.228	褐釉陶器	瓶	—	3.65	—	—	
59 46 123	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	I	—	dot.498	不明	鉢	—	17.00	—	—	焼締陶器?
59 46 124	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	I	—	No.68	黒釉	碗	天目	11.00	—	—	
59 46 125	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S300	dot.320	黒釉	碗	天目	—	—	4.50	
59 46 126	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	I	—	No.19	黒釉	碗	天目	—	—	4.30	試トレ
59 46 127	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20 O-19	I 遺構内	— S4	dot.3 dot.546	瑠璃釉	碗	口縁部 底部	16.30	—	5.30	

図版	No.	屋敷	次	遺跡名				計測値(cm※,g) ※はmm										
				地区	グリッド	層	遺構	dot/No	種別	器種時代形式	分類	器：口径 他：外径 他：長さ	器高 厚さ	器重量	口径 重量	備考		
59	46	128	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	I	-	No.5	No.58	瑠璃釉	瓶	口縁部	5.60	-	-	
59	46	129		9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	I	-	No.31		瑠璃釉	瓶	底部	-	-	8.15	試トレ
59	46	130	2a	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	I	-	No.57		五彩	皿	底部 口縁部	14.20	-	6.30	
59	46	131	2	9次 2次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b 西Ⅰ区a	M-20 H-15	I I	-	No.1177 No.274		五彩	皿	底部	-	-	4.60	1次今周Ⅰ区1G (既報告村12集 第19図-8)接合
59	46	132	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-18	II	-	dot.527		三彩	香立て	人型線香立て	-	-	-	
59	46	133	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	II	-	No.84		三彩	袋物	瓶?	-	-	-	もしくは緑釉
59	46	134	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	II	-	No.94		緑釉	瓶	-	-	-	-	
59	46	135	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	II	-	No.182		翡翠釉	袋物	-	-	-	-	
59	46	136	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-18	II	-	No.85		不明	-	-	-	-	-	※コバルト色 の釉、沖縄産 陶器か?
60	47	137	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S1108	dot.598	タイ陶磁 褐釉陶器	大型壺	大型壺 a	20.20	-	-	-	
60	47	138	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	II	-	dot.281	タイ陶磁 褐釉陶器	大型壺	大型壺 a	17.30	-	-	-	
60	47	139	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	-	-	dot.108	タイ陶磁 褐釉陶器	大型壺	-	-	-	16.20	底部資料 N-19.Ⅰ層 No.21と接合	
60	47	140	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-18	遺構内	S577	dot.392	タイ陶磁 褐釉陶器	中型壺	口縁部	11.80	-	-	-	
60	47	141	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	I	-	No.19	タイ陶磁 鉄絵	合子	蓋	-	-	-	-	紐部分 試トレ
60	47	142	2a 2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20 O-20 O-19	遺構内 遺構内 遺構内	S28 S830 S385	dot.66 dot.475 dot.287	タイ陶磁 鉄絵	合子	身	-	-	-	8.70	屋敷地2a・2b 接合
60	47	143	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	遺構内	S967	No.1281	ベトナム白磁	碗	口縁部	13.20	-	-	-	口禿
60	47	144	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	I	-	No.58	ベトナム青花	玉壺春瓶	胴部	-	-	-	-	
60	47	145	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	I	-	No.545	遊具	青磁	主郭分類Ⅱ類	1.55	0.53	1.65		
60	47	146	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	I	-	No.1178	遊具	青磁	Ⅱ類	1.44	0.63	1.74		
60	47	147	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	-	I	-	-	遊具	青磁	Ⅱ類	1.75	0.42	1.53		
60	47	148	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	I	-	No.677	遊具	褐釉	Ⅱ類	1.94	0.64	2.62		
60	47	149	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	II	-	No.94	遊具	褐釉	Ⅱ類	2.38	0.48	3.34		
60	47	150	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	I	-	No.1359	遊具	褐釉	Ⅱ類	2.69	0.55	5.12		
60	47	151	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	II	-	No.94	遊具	褐釉	Ⅱ類	2.17	0.52	3.54		
60	47	152	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	不明	不明	-	No.101	遊具	褐釉	Ⅱ類	3.17	0.86	5.73	捨土	
60	47	153	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	不明	不明	-	No.1244	遊具	タイ褐釉	Ⅱ類	2.38	0.86	6.07		
60	47	154	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S523	No.881	遊具	タイ褐釉	Ⅱ類	2.63	0.85	7.10		
61	47	165	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	II	-	dot.189	玉	勾玉	Ⅲb	18.11	8.02	2.48	Ⅲb	
61	47	166	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	-	-	dot.400	玉	勾玉	Ⅲb	17.86	5.86	1.22	Ⅲb	
61	47	167	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	遺構内	S414	dot.286	玉	勾玉	Ⅲb	13.71	9.04	1.48	Ⅲb	
61	47	168	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	-	-	dot.389	玉	白玉	水晶?	10.83	13.40	2.17	透明	
61	47	169	2a	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	遺構内	S822	dot.464	玉	丸玉	Ⅲb1'	10.20	10.22	1.26	透明	
61	47	170	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	II	-	dot.332	玉	丸玉	Ⅲb1'	8.97	6.54	0.64	透明	
61	47	171	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	II	-	No.103	玉	丸玉	Ⅲb1'	9.01	6.76	0.63	透明	
61	47	172	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	II	-	dot.2	玉	丸玉	Ⅲb1'	8.58	6.53	0.60	透明	
61	47	173	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	II	-	dot.313	玉	丸玉	Ⅲb1'	8.97	5.42	0.53	透明	
61	47	174	2a	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	II	-	No.95	玉	丸玉	Ⅲb2	8.94	6.32	0.55	透明	
61	47	175	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	-	-	No.626	玉	丸玉	Ⅲb3	-	-	0.21	みず色(浅い 緑みの青)	
61	47	176	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	遺構内	S1	dot.24	玉	丸玉	Ⅲb2	8.75	5.75	0.49	透明	
61	47	177	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	II	-	No.83	玉	丸玉	Ⅲb2	8.36	4.84	0.38	明るい青 みず色(浅い 緑みの青)	
61	47	178	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	II	-	dot.441	玉	丸玉	Ⅲb2	8.45	7.54	0.35	みず色(浅い 緑みの青)	
61	47	179	2c	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19・20	遺構内	S883	dot.528	玉	丸玉	Ⅲb2	6.35	5.46	0.31	白濁(色不明) S4直下の遺構 黄色(さえた 黄)	
61	47	180	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	II	-	No.91	玉	丸玉	Ⅲb2	6.15	4.62	0.26	ぐんじょう色 (紫みの青)	
61	47	181	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	II	-	No.91	玉	丸玉	Ⅲb2	5.43	4.95	0.22	白濁(色不明)	
61	47	182	2a	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	P-19	遺構内	S261	dot.191	玉	丸玉	Ⅲb2	5.88	4.42	0.16	白濁(色不明)	
61	47	183	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	II	-	No.94	玉	丸玉	Ⅲb2	7.17	3.07	0.13	透明	
61	47	184	2a	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	遺構内	S24	No.184	玉	丸玉	Ⅲb2	4.88	3.51	0.13	白濁	
61	47	185	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	遺構内	S997	dot.549	玉	丸玉	Ⅲc	4.50	3.00	0.08	白濁	
61	47	186	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	遺構内	S809	No.468	玉	丸玉	Ⅲc	4.09	2.59	0.07	白濁(青みあり)	
61	47	187	2a	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	P-20	遺構内	S948	dot.1128	玉	丸玉	Ⅲc	4.44	2.02	0.06	白濁	
61	47	188	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S563	No.547	玉	丸玉	Ⅲc	4.04	2.87	0.06	白濁(色不明)	
61	47	189	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	II	-	dot.399	玉	丸玉	Ⅲc	3.79	2.69	0.05	白濁	
61	47	190	2a	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	遺構内	S119	dot.14	玉	丸玉	Ⅲc	3.44	2.10	0.03	白濁(青みあり)	
61	47	191	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	遺構内	-	dot.128	玉	丸玉	Ⅲc	3.88	1.94	0.02	白濁(青みあり)	
61	47	193	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	II	-	No.88	玉	丸玉	Ⅲc	2.69	3.03	0.02	みず色(ふかい 緑みの青)	
61	47	192	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	I	-	No.539	玉	丸玉	Ⅲc	3.16	1.83	0.02	緑色(さえた 緑)	
62	48	155	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	遺構内	S553	No.324	銭貨	唐	開元通寶	2.25	0.14	2.37	845年	
62	48	156	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	遺構内	S446	No.319	銭貨	北宋	至和元寶	2.39	0.14	3.11	1054年	
62	48	157	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	遺構内	S859	dot.517	銭貨	北宋	元豐通寶	-	0.19	5.34	折二銭(1078)	
62	48	158	2b	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	遺構内	S867	dot.530	銭貨	南宋	嘉定通寶	2.83	0.14	5.66	折二銭(1208)	
62	48	159	2	9次	今帰仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	I	-	No.44	銭貨	明	洪武通寶	2.02	0.23	2.85	1368年	

図版	No	屋敷	次	遺跡名				計測値(cm※, g) ※はmm				備考					
				地区	グリッド	層	遺構	dot/No	種別	器種時代形式	分類		器：口径他：外径長さ	器高さ厚さ	器：底径重量		
62	48	160	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-18	Ⅱ	-	dot.567	銭貨	明	洪武通寶	2.36	0.18	3.19	1368年
62	48	161	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	遺構内	S7	dot.41	銭貨	明	洪武通寶	2.12	0.18	2.84	1368年
62	48	162	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	Ⅱ	-	dot.135	銭貨	明	永樂通寶	2.48	0.14	3.42	1408年
62	48	163	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-18	Ⅱ	-	dot.566	銭貨		銭種不明	2.29	0.17	2.62	
62	48	164	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	P-19	遺構内	S897	dot.532	銭貨		無文銭	1.76	0.12	0.65	
63	48	194	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	Ⅱ	-	dot.336	金属製品	銅製	飾り金具	3.11	0.11	0.98	
63	48	195	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	Ⅱ	-	No.178	金属製品	銅製	鋌頭	1.80	0.20	2.02	表採資料
63	48	196	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	Ⅱ	-	dot.122	金属製品	銅製	鋌頭	1.43	0.20	2.02	
63	48	197	2	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	-	-	-	No.756	金属製品	銅製	鋌?	1.97	1.54	5.83	捨土※長さ/径
63	48	198	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	Ⅱ	-	No.294	金属製品	銅製	縁金具	3.47	0.14	3.57	
63	48	199	2	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	遺構内	S862	dot.519	金属製品	銅製	貴金物	3.00	0.06	3.30	
63	48	200	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S563	dot.113	金属製品	銅製	簪	7.06	0.40	4.15	
63	48	201	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	遺構内	S349	dot.253	金属製品	銅製	不明	3.75	1.25	7.14	※長さ/径
63	48	202	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S1035	No.1464	金属製品	銅製	針金状製品	5.36	0.09	0.26	
63	48	203	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	Ⅱ	-	dot.129	金属製品	鉄製	釣針	3.97	0.46	2.83	
63	48	204	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	P-20	Ⅱ	-	dot.171	金属製品	鉄製	刀子	10.14	0.58	16.47	
63	48	205	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	I	-	No.644	金属製品	鉄製	刀子	8.14	0.48	14.48	
63	48	206	2	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	Ⅱ	-	dot.183	金属製品	鉄製	鎌	7.32	1.26	12.04	
63	48	207	2	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	-	-	dot.172	金属製品	鉄製	釘	11.67	2.13	44.81	
63	48	208	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	I	-	No.46	金属製品	鉄製	釘	8.10	1.16	25.17	
63	48	209	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	Ⅱ	-	dot.105	金属製品	鉄製	釘	7.74	1.32	14.82	
63	48	210	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	P-20	遺構内	S282	dot.172	金属製品	鉄製	釘	7.15	1.08	19.73	
63	48	211	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	Ⅱ	-	dot.183	金属製品	鉄製	釘	3.21	0.80	3.03	
63	48	212	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	-	-	dot.294	金属製品	鉄製	釘	5.37	0.67	5.02	
63	48	213	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	-	-	dot.416	金属製品	鉄製	釘	4.75	0.92	4.64	
63	48	214	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	P-20	I	-	No.40	金属製品	鉄製	棒状製品	12.26	1.05	35.64	
64	49	215	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S751	dot.455	石器	石斧	7.30	2.04	90.49		
64	49	216	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	遺構内	S808	No.1125	石器	硯	3.37	0.65	10.91		
64	49	217	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	遺構内	S264	dot.175	石器	錘	3.66	1.57	11.69	錘、浮き?	
64	49	218	2c	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	Ⅱ	-	dot.1	石器	不明		9.40	2.70	2.009	幅3.9cm
64	49	219	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	M-20	I	-	No.712	石器	不明		3.36	1.70	6.40	軽石
64	49	220	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	I	-	No.1359	石器	砥石		3.53	1.26	33.55	
64	49	221	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	Ⅱ	-	No.103	石器	砥石		7.34	3.50	66.01	
64	49	222	2	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	表採	Ⅱ	-	No.948	石器	砥石		-	-	113.55	
65	49	223	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S477	No.359	石器	不明		14.21	5.54	1	
65	49	224	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-20	-	-	dot.68	石器	不明		13.80	2.30	359.00	幅2.3cm
65	49	225	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-20	-	-	dot.153	石器	不明		12.34	6.89	1.820	
65	49	226	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	P-19	I	-	dot.295	石器	不明		15.37	6.51	2.430	T.P.6捨土
66	49	227	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-19	遺構内	S1097	No.1413	土製品	土彈		2.05	1.76	6.68	
66	49	228	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	O-19	Ⅱ	-	dot.459	土製品	不明	ハマ?	3.89	0.86	6.57	
66	49	229	2a	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	P-20	遺構内	S240	dot.167	骨製品	ヘラ		3.48	0.29	1.95	
66	49	230	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-18	遺構内	S6	-	貝製品	貝鏝	リュウキョウサルボク	4.10	2.29	14.70	※幅6.48cm
66	49	231	2b	9次	今婦仁ムラ跡	西Ⅲ区b	N-18	遺構内	S6	-	貝製品	貝鏝	リュウキョウサルボク	4.51	2.62	30.10	※幅7.32cm
78	50	1	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	I-26	遺構内	SL207	No.55	カムイヤキ	壺		6.00	-	-	B群
78	50	2	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	I-26	I下	-	No.47	青磁	碗	無文直口	14.90	-	-	
78	50	3	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	I-26	I下	-	dot.14	青磁	碗	無鎚蓮弁文	-	-	7.00	
78	50	4	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	-	表採	-	No.8	青磁	碗	細蓮弁文	-	-	5.20	
78	50	5	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	I-26	I下	-	dot.18	青磁	碗	細蓮弁文	-	-	5.20	
78	50	6	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	-	表採	-	No.6	青磁	碗	無文	-	-	4.90	
78	50	7	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	I-26	I	-	dot.10	青磁	皿	口折皿	-	-	6.25	もしくは外反皿
78	50	8	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	I-26	I下	-	dot.15	青磁	皿	直口皿	-	-	5.70	もしくは外反皿
78	50	9	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	I-26	I	-	No.33	青磁	皿	蓮弁文	-	-	5.60	底部
78	50	10	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	I-26	I	-	No.33	青磁	杯?		7.30	-	-	口縁部
78	50	11	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	I-26	I	-	dot.8	白磁	碗	玉縁碗	12.90	-	-	大宰府分類、類
78	50	12	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	I-26	I下	-	dot.16	白磁	碗	直口皿	-	-	4.80	森田分類D群
78	50	13	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	I-26	I上	-	No.18	白磁	杯	輪花杯	-	-	2.30	森田分類E群
78	50	14	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	I-26	I	-	dot.11	白磁	碗	直口	-	-	4.80	粗製品
78	50	15	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	I-26	I	-	No.36	白磁	壺		7.80	-	-	口縁部小片
79	50	16	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	-	表採	-	No.8	青花	碗	直口d	-	-	5.00	主郭分類V類
79	50	17	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	-	表採	-	No.8	青花	碗	直口d	-	-	4.70	主郭分類IV類
79	50	18	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	I-26	I	-	No.36	青花	皿	外反皿a	9.00	2.80	4.80	主郭分類I類
79	50	19	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	I-26	I上	-	No.38	青花	皿	碁笥底	9.90	-	-	主郭分類II類
79	50	20	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	I-26	I	-	No.18	青花	瓶	蕉葉文	-	-	-	口縁部小片
79	50	21	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	I-26	I上	-	No.28	瑠璃釉	碗		-	-	5.80	底部小片
79	50	22	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	-	表採	-	No.8	褐釉陶器	壺	壺d	16.50	-	-	
79	50	23	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	I-26	I	-	dot.9 dot.12	褐釉陶器	壺	壺d	17.00	-	-	
79	50	24	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	-	表採	-	No.6	タイ陶磁 褐釉陶器	壺	大型c	19.10	-	-	
85	51	1	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	-	表採	-	No.1	土器	甕	後期土器	-	-	6.50	くびれ平底
85	51	2	-	12次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	-	I	SL205	No.6	土器	甕	後期土器	-	-	6.62	くびれ平底
85	51	3	-	12次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	L-25	I	-	No.9	土器	碗?	不明	-	-	4.80	非在地系か?
85	51	4	-	12次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	L-25	I	-	No.15	カムイヤキ	壺	壺	13.00	-	-	B群
85	51	5	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	L-25	-	SL206	No.77	カムイヤキ	不明	底部	-	-	11.80	B群
85	51	6	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	-	表採	-	No.1	青磁	碗	鎚蓮弁文a	16.20	-	-	
85	51	7	-	12次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	K-25	Ⅱ	-	No.43	青磁	碗	無鎚蓮弁	14.50	-	-	
85	51	8	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	L-25	-	SL206	No.62	青磁	碗	無鎚蓮弁	15.80	-	-	
85	51	9	-	12次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	L-25	I	-	No.53	青磁	碗	無鎚蓮弁	13.90	-	-	
85	51	10	-	12次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	K-25	I	-	No.38	青磁	碗	無鎚蓮弁	-	-	6.30	
85	51	11	-	12次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	-	I	SL205	No.11	青磁	碗	雷文帯a	15.90	-	-	
85	51	12	-	12次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	L-25 K-25	I	-	No.20 No.39	青磁	碗	雷文帯a	16.60	-	-	
85	51	13	-	4次	今婦仁ムラ跡	東Ⅰ区	-	表採	-	No.3	青磁	碗	雷文帯a	14.50	-	-	

図版		No. 屋敷		次		遺跡名				計測値(cm※,g) ※はmm							
図	版	No.	屋敷	次	地区	グリッド	層	遺構	dot/No	種別	器種時代形式	分類	器:口径 他:外径 他:長さ	器高 厚さ	器重量	口径 重量	備考
85	51	14	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.6	青磁	碗	雷文帯b	16.40	-	-	
85	51	15	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	I	SL206	No.48	青磁	碗	ラマ式蓮弁文	16.70	-	-	
85	51	16	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.7	青磁	碗	不明	-	-	5.80	雷文帯碗もしくは蓮弁文碗
86	51	17	-	4次 12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25 K-25	I I	-	No.15 No.38	青磁	碗	細蓮弁碗a	12.80	-	-	
86	51	18	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.13	青磁	碗	細蓮弁碗b	14.30	-	-	
86	51	19	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.10	青磁	碗	蓮弁文碗	13.40	-	-	
86	51	20	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.11	青磁	碗	細蓮弁碗b	13.80	-	-	
86	51	21	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	I	-	No.15	青磁	碗	細蓮弁碗b	14.00	-	-	
86	51	22	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	I	-	No.15	青磁	小碗	細蓮弁文	10.20	-	-	
86	51	23	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	III	-	No.46	青磁	碗	細蓮弁文碗	-	-	4.70	
86	51	24	-	4次 12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	表採	-	No.4	青磁	碗	細蓮弁碗a	-	-	5.70	
86	51	25	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25・26	南トレI 下	-	No.19	青磁	碗	細蓮弁碗b	-	-	4.90	
86	51	26	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.11	青磁	碗	細蓮弁碗b	-	-	5.40	
86	51	27	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	III	-	dot.9	青磁	碗	無文外反碗	-	-	5.80	
86	51	28	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.13	青磁	碗	細蓮弁	-	-	5.60	
86	51	29	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.3	青磁	小碗	細蓮弁文	-	-	3.40	
87	52	30	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.15	青磁	碗	無文外反碗	13.40	-	-	
87	52	31	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	I	-	No.11	青磁	碗	無文外反碗	15.30	-	-	
87	52	32	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	II	SL205	No.14	青磁	碗	無文外反碗	18.00	-	-	
87	52	33	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	I	-	No.22	青磁	碗	無文直口碗	16.30	-	-	口縁部 ※文様は見えないが雷文か?
87	52	34	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	I	-	No.15	青磁	碗	無文直口碗	14.80	-	-	口縁部
87	52	35	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	表採	-	No.1	青磁	碗	雷文帯b	15.60	-	-	第87図-36と同一個体か?
87	52	36	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25 J-25	I 表採	-	No.25 No.2	青磁	碗	不明	-	-	6.30	第87図-35と同一個体か?
87	52	37	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.13	青磁	碗	不明	-	-	4.40	
87	52	38	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	I	-	No.30	青磁	碗	不明	-	-	4.20	
87	52	39	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.13	青磁	碗	不明	-	-	6.80	
87	52	40	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	J-25	表採	-	dot.4	青磁	碗	不明	-	-	6.40	
87	52	41	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	J-25	表採	-	dot.1	青磁	碗	雷文帯b	-	-	6.10	
87	52	42	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	J-26	表採	-	dot.3	青磁	碗	不明	-	-	7.00	
88	52	43	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.6	青磁	皿	櫛描文	12.80	-	-	同安窯系
88	52	44	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	II	-	No.26	青磁	皿	口折皿	11.50	-	-	
88	52	45	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	I	-	No.60	青磁	皿	口折皿	13.80	-	-	
88	52	46	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	表採	-	No.1	青磁	皿	口折皿	-	-	5.30	
88	52	47	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.13	青磁	皿	口折皿	-	-	6.00	
88	52	48	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	M-25	II	-	dot.23	青磁	皿	腰折d	11.30	3.70	6.40	
88	52	49	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	I	-	No.30	青磁	皿	腰折c	12.70	-	-	
88	52	50	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	I	-	No.22	青磁	皿	無文直口	6.80	-	-	
88	52	51	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	I	-	No.22	青磁	皿	蓮弁直口a	12.00	-	-	小片のため文様等不明
88	52	52	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	I	-	No.22	青磁	瓶?		3.00	-	-	口縁部小片
88	52	53	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	I	-	No.5	青磁	杯	不明	-	-	8.20	主部分類蓮弁文杯a or b?
88	52	54	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	I	-	No.60	青磁	盤	鏝縁a	-	-	-	
88	52	55	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	I	-	No.15	青磁	盤	鏝縁f	-	-	-	
88	52	56	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	I	SL206	No.68	青磁	盤	鏝縁b	23.30	-	-	
88	52	57	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.15	青磁	盤	鏝縁d	21.10	-	-	
89	53	58	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.8	青磁	盤	直口口縁	18.70	-	-	主部分類直口口縁II類
89	53	59	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.11	青磁	盤	不明	-	-	12.80	
89	53	60	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	M-25	II	-	dot.20	青磁	盤	鏝縁d	-	-	8.50	
89	53	61	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	I	-	No.12	青磁	壺	酒会壺蓋	-	-	-	
89	53	62	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.10	青磁	壺	酒会壺身	-	-	16.50	
89	53	63	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.14	白磁	碗	口禿	-	-	4.70	
89	53	64	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	5092番地	清掃中	-	No.1	白磁	碗	今帰仁タイプ	-	-	-	口縁部小片
89	53	65	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	I	-	No.38	白磁	碗	今帰仁タイプ	-	-	5.80	
89	53	66	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.17	白磁	碗	今帰仁タイプ	-	-	6.20	
89	53	67	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	I	-	No.39	白磁	碗	今帰仁タイプ類似	-	-	8.40	主部分類内底無軸碗d
89	53	68	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	S-25	表採	-	dot.5	白磁	碗	今帰仁タイプ類似	-	-	7.50	主部分類内底無軸碗d
89	53	69	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.10	白磁	碗	ピロースクa	-	-	5.30	
89	53	70	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	表採	-	No.5	白磁	碗	外反碗	-	-	6.10	
89	53	71	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	I	-	No.22	白磁	皿	直口皿	9.80	-	-	森田分類D群
89	53	72	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	I	-	No.22	白磁	皿	直口皿	6.60	-	-	森田分類D群
89	53	73	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	I	-	No.15	白磁	杯	底部	-	-	3.80	森田分類D群
89	53	74	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	I	-	No.41	白磁	皿	灯明皿	6.50	-	-	
90	53	75	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	III	-	dot.7	白磁	皿	E群外反皿	13.30	3.70	7.50	完形(接合) K-25 I 層 I 41・46・39
90	53	76	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	I	-	No.24	白磁	碗	直口口縁	8.10	-	-	
90	53	77	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	No.6	白磁	碗	粗製	-	-	4.70	
90	53	78	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	表採	-	No.5	白磁	碗	粗製	-	-	4.90	

図版		No. 屋敷		次		地区		グリッド		層		遺構		dot/No		種別		器種時代形式		分類		計測値(cm※, g) ※はmm		備考					
																				器：口径 他：外径 長さ		器高 厚さ		器：底径 重量					
90	53	79	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	I	-	-	No.5	元青花	不明	青海波文	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
90	53	80	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	5090番地	表採	-	-	No.42	元青花	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ラマ式蓮弁文			
90	53	81	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	II	-	-	dot.2	青花	碗	III類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	主郭分類III類			
90	53	82	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	-	No.14	青花	碗	V類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	主郭分類V類			
90	53	83	-	-	今帰仁ムラ跡	東7区	不明	不明	-	-	不明	青花	皿	I類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	主郭分類I類			
90	53	84	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	-	-	青花	皿	II類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	主郭分類II類			
90	53	85	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	-	No.14	青花	皿	II類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	主郭分類II類			
90	53	86	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	表採	-	-	No.1	青花	大皿	大皿b	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9.70 主郭分類II類			
90	53	87	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	不明	-	-	-	No.80	青花	小杯	小杯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.80 主郭分類III類			
90	53	88	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	I-25	I	-	-	No.15	青花	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
90	53	89	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	II	-	-	dot.1	青花	合子	身	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
90	53	90	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	I	-	-	-	三彩	壺?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部小片			
90	53	91	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	I	-	-	No.28	三彩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	水注?			
91	54	92	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	I	-	-	No.22	天目茶碗	碗	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
91	54	93	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	I	-	-	No.30	天目茶碗	碗	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3.80			
91	54	94	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	-	No.13	褐釉陶器	壺	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
91	54	95	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	-	No.13	褐釉陶器	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
91	54	96	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	表採	-	-	No.3	褐釉陶器	壺	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	12.00			
91	54	97	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	表採	-	-	No.1	褐釉陶器	壺	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
91	54	98	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	-	No.14	褐釉陶器	壺	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4次、7区表採 No4と接合			
91	54	99	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	-	No.13	褐釉陶器	壺	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
91	54	100	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	I	-	-	No.29	褐釉陶器	すり鉢	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	12.20			
91	54	101	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	表採	SL205	-	No.7	タイ陶磁土器	蓋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	清掃中			
91	54	102	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	I	-	-	No.22	タイ陶磁鉄絵	合子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
91	54	103	-	4次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	I	-	-	No.16	タイ陶磁青磁	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
91	54	104	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	-	No.10	タイ陶磁 褐釉陶器	壺	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
91	54	105	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	-	No.7	タイ陶磁 褐釉陶器	壺	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8.60			
91	54	106	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	-	No.11	ベトナム染付	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6.80			
92	54	107	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	-	S204	-	dot.5	玉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7.20 5.42 0.52			
92	54	108	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	I	-	-	No.27	銭貨	-	水楽通寶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.56 0.15 3.64			
92	54	109	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	I	-	-	No.27	銭貨	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.23 0.13 1.90			
92	54	110	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	I	-	-	No.25	金属製品	銅製	キセル	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4.75 1.08 5.44			
92	54	111	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	-	No.14	金属製品	銅製	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4.97 0.08 11.38			
92	54	112	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	清掃中	-	-	No.1	金属製品	銅製	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4.42 0.16 5.87 5092番地			
92	54	113	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	I	-	-	No.33	金属製品	銅製	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6.94 0.42 16.99			
92	54	114	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	I	-	-	No.33	金属製品	銅製	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4.72 0.05 1.07			
92	54	115	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	L-25	I	-	-	No.16	金属製品	銅製	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	16.20 0.48 14.03			
92	54	116	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	SL205	-	No.6	石器	硯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9.71 1.95 140.16 幅4.86cm			
92	54	117	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	II	-	-	dot.6	石器	砥石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8.66 1.27 63.14 幅2.71cm			
92	54	118	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	III	-	-	dot.10	石器	砥石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7.40 0.92 22.06 幅1.67cm			
92	54	119	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	K-25	I	-	-	No.22	石器	錘	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5.24 1.61 21.93 幅1.89cm			
92	54	120	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	I	-	-	-	貝製品?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
92	54	121	-	12次	今帰仁ムラ跡	東7区	-	-	SL205	-	-	貝製品?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
101	55	-	-	0次	志慶真ムラ	-	-	表採	-	-	No.41	青磁	碗	細蓮弁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
104	55	1	-	補足	大川原遺跡	-	-	表採	-	-	-	青磁	碗	細蓮弁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
104	55	2	-	補足	大川原遺跡	-	-	表採	-	-	-	青磁	碗	細蓮弁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
104	55	3	-	補足	大川原遺跡	-	-	表採	-	-	-	青磁	碗	細蓮弁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4.90		
104	55	4	-	補足	大川原遺跡	-	-	表採	-	-	-	青磁	碗	細蓮弁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5.60 無文直口?		
104	55	5	-	補足	大川原遺跡	-	-	表採	-	-	-	青磁	皿	腰折c	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11.40 - - 稜花口縁		
104	55	6	-	補足	大川原遺跡	-	-	表採	-	-	-	青磁	皿	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5.80 直口皿?		
104	55	7	-	補足	大川原遺跡	-	-	表採	-	-	-	青磁	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部		
104	55	8	-	補足	大川原遺跡	-	-	表採	-	-	-	青花	碗	直口碗	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
104	55	9	-	補足	大川原遺跡	-	-	表採	-	-	-	青花	碗	口折	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5.60 主郭分類IV類		
104	55	10	-	補足	大川原遺跡	-	-	表採	-	-	-	褐釉	壺	褐釉壺d	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
104	55	11	-	補足	大川原遺跡	-	-	表採	-	-	-	備前	摺鉢	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部		
104	55	12	-	補足	大川原遺跡	-	-	表採	-	-	-	煙管	吸口	銅製	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3.75 9.59 4.29		
104	55	13	-	補足	大川原遺跡	-	-	表採	-	-	-	金属製品	鉄製	釘?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6.40 9.51 12.34		
104	55	14	-	補足	大川原遺跡	-	-	表採	-	-	-	石器	硯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3.78 1.46 32.77		
108	56	1	-	0次	アカン墓遺物散布地	-	-	表採	-	-	-	天目茶碗	硯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	12.20 - - 口縁~胴部		
108	56	2	-	0次	親泊原遺跡	3141番地	-	表採	-	-	-	肥前染付	碗	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15.30 7.00 5.40		
108	56	3	-	立会	親泊原遺跡	05年立会	-	IV層	-	-	No.6	青磁	皿	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10.30 - - 口縁部		
108	56	4	-	立会	親泊原遺跡	05年立会	-	IV層	-	-	No.5	青磁	皿	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5.60 底部	
108	56	5	-	立会	親泊原遺跡	05年立会	-	II層	-	-	No.4	肥前	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5.10 底部	
108	56	6	-	立会	親泊原遺跡	05年立会	-	表採	-	-	No.7	石器	磨石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
108	56	7	-	立会	親泊原遺跡	05年立会	-	IV層	-	-	No.6	タイ褐釉	壺	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	頸部	
109	56	8	-	立会	親泊原遺跡	97年立会	-	-	-	-	No.1	白磁	碗	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	17.90 - - 口縁部	
109	56	9	-	立会	親泊原遺跡	97年立会	-	-	-	-	No.1	タイ褐釉	瓶	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7.50 底部 ※袋物
109	56	10	-	立会	親泊原遺跡	97年立会	-	一括	-	-	No.2	本土産	小碗	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8.00 4.10 3.10 完形※型造り	
109	56	11	-	立会	親泊原																								